

この本は横書きでレイアウトされています。

また、ご覧になる機種により、表示の差が認められることがあります。

映画好きなら一度は観ておきたい！

淀川長治総監修 クラシック名画解説全集□、□、□合本版

監修 淀川長治



映画好きなら一度は観ておきたい！

淀川長治
クラシック名画解説全集 I



サスペンス・スリラー／SF・ホラー／西部劇 他

World Classic film Selection



まえがき

この書籍は、『日曜洋画劇場』の解説者として人気を博し、今も人々に愛され続ける映画評論家・淀川長治氏の名画解説を、かの名調子もそのままに書き起こしたものです。

数多ある解説の中から、世代を問わず語りつがれるべきクラシックの名画たちを選びすぐりました。淀川氏しか知らない貴重なエピソードと、氏の映画愛とともに、その概要をお伝えします。

本書をお手にとってくださった、「クラシックの作品は勉強中」のあなた、かたや「名画はもう観尽くした……」とお思いのあなたの映画観も、大きく揺さぶられることでしょう。

本書を読んで観たい映画を探すもよし、誰かに蘊蓄をたれるもよし、愛すべき淀川氏を偲ぶもよし。

「映画は人生の教科書です」と語った氏の宝物を、少しだけ分けていただきましょう。

[まえがき](#)

[サスペンス・スリラー](#)

[・チート](#)

(“The Cheat” 1915年 アメリカ)

[・裁かるゝジャンヌ](#)

(“La Passion de Jeanne d’ Arc” 1928年 フランス)

[・M](#)

(“M” 1931年 ドイツ)

[・暗黒街の顔役](#)

(“Scarface” 1932年 アメリカ)

[・暗殺者の家](#)

(“The Man Who Knew Too Much” 1934年 イギリス)

[・バルカン超特急](#)

(“The Lady Vanishes” 1938年 イギリス)

[・第三の男](#)

(“The Third Man” 1949年 イギリス)

[・黄金の腕](#)

(“The Man with the Golden Arm” 1955年 アメリカ)

[SF・ホラー](#)

[・カリガリ博士](#)

(“Das Cabinet des Dr. Caligari” 1919年 ドイツ)

[・オペラ座の怪人](#)

(“The Phantom of the Opera” 1925年 アメリカ)

[・メトロポリス](#)

(“Metropolis” 1927年 ドイツ)

[・ドン・ファン](#)

(“Don Juan” 1926年 アメリカ)

[・アンダルシアの犬](#)

(“Un Chien Andalou” 1928年 フランス)

[・フランケンシュタイン](#)

(“Frankenstein” 1931年 アメリカ)

[・魔人ドラキュラ](#)

(“Dracula” 1931年 アメリカ)

[・ヴァンパイア](#)

(“Vampyr” 1932年 フランス／ドイツ)

[・ジキル博士とハイド氏](#)

(“Dr. Jekyll and Mr. Hyde” 1932年 アメリカ)

[・キング・コング](#)

(“King Kong” 1933年 アメリカ)

スペクタクル・史劇

・血と砂

(“Blood and Sand” 1922年 アメリカ)

・ベン・ハー

(“Ben Hur” 1925年 アメリカ)

・十誡

(“The Ten Commandments” 1923年 アメリカ)

・クレオパトラ

(“Cleopatra” 1934年 アメリカ)

・アイアン・ホース

(“The Iron Horse” 1924年 アメリカ)

・バグダッドの盗賊

(“The Thief of Bagdad” 1924年 アメリカ)

・つばさ

(“Wings” 1927年 アメリカ)

・類猿人ターザン

(“Tarzan the Ape Man” 1932年 アメリカ)

西部劇

・幌馬車

(“The Covered Wagon” 1923年 アメリカ)

・三悪人

(“Three Bad Men” 1926年 アメリカ)

・カンサス騎兵隊

(“Santa Fe Trail” 1940年 アメリカ)

・ならず者

(“The Outlaw” 1943年 アメリカ)

・拳銃無宿

(“Angel and the Badman” 1947年 アメリカ)

音楽映画（ミュージカル）

・ジャズ・シンガー

(“The Jazz Singer” 1927年 アメリカ)

・ハレルヤ

(“Hallelujah!” 1929年 アメリカ)

・ [會議は踊る](#)

(“Der Kongress tanzt” 1931年 ドイツ)

・ [四十二番街](#)

(“42nd Street” 1933年 アメリカ)

・ [たそがれの維納](#)

(“Maskerade” 1934年 オーストリア)

・ [メリィ・ウイドウ](#)

(“The Merry Widow” 1934年 アメリカ)

・ [恋愛準決勝戦](#)

(“Royal Wedding” 1951年 アメリカ)

[あとがき](#)

「淀川長治の話芸」映像作家 岡田喜一郎

[『!\[\]\(e9474ce1d70442456f8fe9c393ea149c_img.jpg\) ヒューマン・ドラマ／ラブロマンス』へ⇒](#)

[『!\[\]\(e3f255517d37bb309a3a931ec4849e6a_img.jpg\) 喜劇の王様／名作文学／歴史的名作』へ⇒](#)



淀川長治
クラシック名画解説全集 I



サスペンス・スリラー

『チート』『裁かるゝジャンヌ』他(全8話)

World Classic film Selection





チート

The Cheat

(1915・アメリカ)

監督：セシル・B・デミル

出演：ファニー・ウォード／早川雪洲



〈作品データ〉

制作年…1915年

制作国…アメリカ

時間……44分

監督……セシル・B・デミル

脚本……ヘクター・ターンブル／ジャニー・マクファーソン

撮影……アルヴィン・ウィコッフ

出演……ファニー・ウォード／ジャック・ディーン／早川雪洲／ジェームズ・ニール／阿部豊

〈作品解説〉

早川雪洲がハリウッドでスターの座をつかんだ記念すべき作品。上流社会の白人女性エディスは、日本人の富豪鳥居（雪洲）から巨額の借金をするが身を任せなかったために焼きごてを肩にあてられてしまう。その仕打ちに彼女は鳥居をピストルで撃つ。セシル・B・デミル監督の洗練された静的な様式美は高く評価された。当時の女性は雪洲の映画を観に行くとき化粧をして着飾って出かけたという伝説があるが、たしかに美男子だ。

はい、早川雪洲の『チート』、問題の作品ですね、それをお話ししましょうね。

『チート』、早川雪洲の『チート』と言いましたね。実はセシル・B・デミルの『チート』なんですね。

これはもう、活動写真が始まって間もない頃で、ハリウッドがどうにかして偉い人を呼ぼうと思ってセシル・B・デミル、舞台で有名な人呼んだんですね。お母さんは舞台俳優の学校持ってたんですね。

それでデミルも芝居に出てたんですね。そのデミルをうやうやしく招いたんですね。

「何でもいいですから、作ってください」言ったのね。

デミルは活動写真いうものを初めて観たんですね。で、これを作ることになった。

その作品の1つが『チート』。舞台劇ですね、刻印と言うんですね、これ本当は。

これに誰を使うか、早川雪洲を使うと言ったんですね。

早川雪洲はダウントウンで剣劇の俳優やってたんですね。

それをデミルが観て、あれを使おうと言ったんですね。

デミルのその活動写真に対して、早川雪洲は「俺、活動写真に出るなんて嫌だよ」と思って、たとえば10万円出るところを100万円だって言ったんですね。

こんなことで相手が呼べるもんかと思って「俺は100万円だよ」と言ったらデミルの方で「イエス」と言ったんですね。

もう、早川雪洲はびっくりしたんですね。

「え一つ、1本出て100万円」といつべんに映画俳優になったんですね。

早川雪洲はこの映画でいつべんに有名になって、これからどんどんハリウッドで映画作りました。

そしてこの作品はどんな作品か？ 日本人の大金持ちがいました。大金持ちは、焼きごてで作っておりました。刻印ですね、いろんな刻印を馬のしりにあてる、いろんなもの作っておりました。それが趣味で商売の金持ちの男でした。

ところがある女が、有名な金持ちのくせに本人は金が一文もなくなった女が、どうにか主人が帰って来るまでに金貸してくれ言ったんですね。

20万円どうしてもほしいんだ。今この金がなかったら主人が帰って来たら、あたい困っちゃうの。

「何月何日に、返すか」「きつと返します」言って証文とつたんですね。

けど、こんな証文何の役に立たない。「俺に1つ、ここで書いてくれ」って、「何でも書きます」「もしもこの金を返せなかったら私の背中にその刻印、焼きごてをあててください」と書いた。

「おまえ、これ本当にやるぞ」「どうぞ、どうぞ、必ず返しますから」そう言って帰ったんですね。

やがて月日がたって、その日が来た。女は泣きついてきたんですね。

「まだ金ができない、まだ金ができない」「金ができなかつたら、この通りだよ」。

そうして、その白人の女の背中を引きむしって、肌にガーッと焼きごてをあてたんですね。それが裁判になったんですね、そういう話。

これを日本では封切らなかつたの。こんなのは日本の恥だと言ったんですね。

白人の背中に焼きごてをあてるのはいいけど、日本人はそんなことするものか、いうことで、早川雪洲は日本に帰れなくなつたんですね。

国辱者、日本をばかにしてる、こんな俳優は排斥しなくちゃいけない、こんな俳優は駄目だということで、早川雪洲はかわいいそうに『チート』のおかげで日本に帰れなくなったんですね。

けれども、これはファニー・ファニー・ウォードという有名な舞台女優が相手役で、監督がデミルで、早川雪洲にしたらなんとすごい映画に出たかいうことになるんですね。

で、これで早川雪洲はいっぺんにハリウッドの本当に第1号の、有名な美男俳優になったんですね。

その次がウォレス・リード、その次がヴァレンチノぐらいの有名な有名な俳優になって、早川雪洲が映画に出る。観客は女でいっぱい、しかもその女たちは映画館に行く前に、もう化粧して行くんですね。

映画に行ったらって早川雪洲こっち見ないでしょ、いえ、早川雪洲がちらつとにらんだだけで、私はもう化粧しなくてはおれないんだ、いうぐらいに早川雪洲は女に人気あったんですね。

ところで後に早川雪洲が日本に帰って来ました。で、私はお会いしました。早川雪洲はいつでも綺麗な女の人を連れてますね、いかにも精力的ですね。

この人の言葉聴いてると本当にハリウッドの匂いがしますね。トムミックス言いましてね、いかにもハリウッド的な言葉使いますね。

この人が初めて大役で出た映画『火の海』というのがありました。それは大地震で噴火山が燃えて大騒ぎする大トリック映画でした。

その最初の方で、ある島があって、その島に西洋人が1人いました。その西洋人と日本の娘が恋し合って結婚するっていうことになりました。

で、その島に老人の哲学者がいました。哲学者は木の枝のような杖をついて、2人に言いました。「もしも日本人と異国人が結婚したら、この島は爆発するぞ。絶対に結婚したら駄目だぞ。神の怒り、どんなに怖いかわかるか」なんて言うのが雪洲の役でした。

サイレントだから、その言葉は知りませんがそういう役でした。見事な役、しかもその日本人、青木鶴子、自分の奥さんです。片っぱの西洋人はフランク・ボザージ、後に有名な監督になった人でした、その2人の役者の前でそう言いました。

サイレントですから、早川雪洲に会って「あんた、あの時に、わめきましたね。神の怒りは怖いぞ、凄いのって言いましたね。あれサイレントだからわからなかったけど、どういうふうな台詞おっしゃったの？」言ったら、「はっはっはっはっはっ」と笑って、「俺、あの時ね、ちょうど11時20分だった。腹が減ってね、もう飯食いたいから、大きな声で『俺は腹が減ったぞ』と言ったの」。

だれも日本語わからないから、うまいなあと言ってくれたけど、俺はそんなことを言ったんだよ、と言いました。

まあ早川雪洲は非常にふとつばらの、しかし見事な美男子でしたね。



裁かるゝジャンヌ

La Passion de Jeanne d'Arc

(1928・フランス)

監督：カール・テオドア・ドライヤー

出演：ルイズ・ルネ・ファルコネッティ / ウジェーヌ・シルバン
/ アントナン・アルトー



〈作品データ〉

- 制作年…1928年
- 制作国…フランス
- 時間……80分
- 監督……カール・テオドア・ドライヤー
- 脚本……ジョゼフ・デルテューユ／カール・テオドア・ドライヤー
- 撮影……ルドルフ・マテ
- 出演……ルイズ・ルネ・ファルコネッティ／ウジェーヌ・シルバン／アントナン・アルトー

〈作品解説〉

デンマークの名匠カール・ドライヤー監督がフランスで制作。イギリスの侵略からフランスを救ったジャンヌ・ダルクが処刑される長い1日を描いている。ジャンヌの頬を流れる涙、検察官の歪んだ口元、おののき震えながらも信念に殉ずるその表情、群衆の顔などが大胆なクローズアップでとらえられ、迫力ある映像が観客の胸を突き刺す。

『裁かるゝジャンヌ』これもまた、映画の勉強してる人は第1ページに、トップに置く問題作品ですね。

やっぱりこの『裁かるゝジャンヌ』はカール・ドライヤー、デンマークの監督ですね、あの監督だから、普通の映画じゃありませんね。

『裁かるゝジャンヌ』はジャンヌ・ダルクが死刑になる前から映すんですね。ただ普通の女の子なんです。

それを、たとえばその夢に見たから言うのでね、ジャンヌ・ダルクがゆるゆるゆるゆると戦争指導しましたね。

それを坊さんたちが怒って「これは神がかりだ、もう気が違った女だから」そういう訳で、この女を、ジャンヌ・ダルクを火あぶりにしようと思ったんですね。

それで、ジャンヌ・ダルクを説教するところから始まるんですね。

ところがこのジャンヌ・ダルクは、あんな映画に出て来るような、小説に出て来るような英雄じゃないんですね。本当の少女なんです。だからおまえを火あぶりの刑にすると言ったら泣き出したんですね。「怖い怖い怖い怖い」言うて。

そこから始まるんですね。面白いジャンヌ・ダルクですね。

そしてこの女の子に、いよいよその日が来たんですね。

そこからは怖いね、やっぱりこの監督の、カール・ドライヤーの感覚ですね。

女の子が泣くんですね「嫌だ、嫌だ」って。

それをみんなでお説教して、そうして頭の毛を刈るんですね。その刈るとこはすごいね、あのはさみで頭の毛をどんどん切ってくんですね。火あぶりにする時には頭の毛を切っちゃうんですね、坊主みたいに、女の。

そうして、女の膝のところに布あててるから、その白い布にばさばさばさばさばさばさばさ、毛が落ちるんですね。それを映すんですね。そこら見てると怖いなあ、見ていてかわいそうだなあとと思いますね。

で、頭見るとタコ坊主になっちゃってるんですね、でジャンヌ・ダルク泣いてるんですね、それをまたお坊さんがお経言っ、いよいよその死刑台連れて行くんですね、怖いなあ。

石があって材木があつて材木があつて材木があつて、その上に十字架みたいのがあるんですね。そこへ縛られるんですね。

ジャンヌ・ダルクは泣いてるんですね。「神様、神様、神様」言うてるんですね。その足下から火つけるんですね。

そのあたり見ると、こっちが呼吸止まるぐらいに怖くなってくるんですね。足下からずーっと煙が出て来るんですよ、煙ばっかり。じーつとしてるんですけど、煙ばっかり。

それがまたメラメラメラ、火が出て来るんですね。そのあたりから怖くなりますね。

ジャンヌ・ダルクがだんだんだんだん足下から焼かれ出してくる。ジャンヌ・ダルクがもうほんと、失神するんですね。あーつと言って。

そういう映画をなぜこの監督作ったんだろう。

ジャンヌ・ダルクを本当にみんなは英雄、神様、戦の英雄、そういうふうを描いているけど、本当はジャンヌ・ダルクはかわいそうなかかわいそうな、村の娘だったんだよ。

この火あぶり、かわいそうだろう、こんな火あぶりがかわいそうだろうというのと同時に、焼かれることの怖さです。

ね人間が。

こんな残酷な刑があるのか、もう足下からば一つと火が上がって来る。

ジャンヌ・ダルクがもう失神するね、そのあたりの怖さを、この監督はどういうわけか、目に見えるように本当に胸に迫るように描くんですね。

で、この監督の本当のこれがやっぱり、見事な、映画作りの天才ですね。見事なもんですね。



M

M

(1931・ドイツ)

監督：フリッツ・ラング

出演：ピーター・ローレ



〈作品データ〉

制作年…1931年

制作国…ドイツ

時間……99分

原作……エゴン・ヤコブソン

監督……フリッツ・ラング

脚本……テア・フォン・ハルボウ／フリッツ・ラング

撮影……フリッツ・アルノ・ヴァグナー

出演……ピーター・ローレ／オットー・ベルニッケ／グスタフ・グリュントゲンス／エレン・ウィドマン／インゲ・ランドグット／フリッツ・グノス

〈作品解説〉

殺人鬼M（ピーター・ローレ）の口笛が「パール・ギェント」の旋律を奏するとき、小学校の女生徒が次々に殺される事件が起こる。ある日、盲目の風船売りが聞き覚えのある口笛を聞く。その曲は殺された少女と一緒に風船を買いに来た客が吹いていたものだった。“M”という字が事件の鍵を握るフリッツ・ラング監督のサスペンス映画の傑作。

フリッツ・ラング監督の『M』。怖かったなあ。これドイツ映画ですよ。フリッツ・ラングがまだ若かった頃の作品ですね。

で、これはどういう話か言いますとね、なんか知らないけど、町の女の子が殺されるのね。残酷に！それで、みんなが震え上がっているのね。そしたら、目の見えない風船売りのお爺さんがいたのね。そのお爺さんが、どうも犯人らしい男がいつも口笛を吹いて通る、なんて思っていて。

ある時、本当にその口笛を聞いたんですね。「あれだ！あれだ！！」と思って、側にいた青年に、「あれが犯人ですよ！ 犯人ですよ！」と言ったのね。びっくりして、「そうか、あれか！」というので、自分の手に白墨塗って、その男の後ろから、“M” という字をパーンとあてて、その男の後ろにMという字がついたのね。

そのMが犯人であるということで、みんなが探して回って捕まえる。

怖い、怖い映画でしたが、これが『M』のフリッツ・ラングの出世作ですね。ドイツ映画ですね。

それで『M』は何で、“M” という字がついたか？

やっぱり殺人者ね。その頭文字がついた訳ね。で、本人はわからないの。ポーンと背中叩かれたから、「何だろう？」思ってるけど、背中に、“M” という字が出てたね。

で、怖いのは、この犯人が何かというと子どもに風船をやるのね。風船やると子ども喜んで持つのね。その風船が怖いね。

電線の線に風船が引っ掛かってたの。あれ見て、怖いなー！怖いなー！思った時に、その現場の近くで、やっぱり女の子が殺されてるのね。殺されておりました。

この映画の主演が、ピーター・ローレですね。ピーター・ローレ、黙っていても怖い、不思議な顔の男ですね。で、ピーター・ローレは、この『M』で一躍有名になりました。

そういう訳で、『M』というのは、フリッツ・ラングのドイツの代表傑作ですね。怖い、怖い映画。これでフリッツ・ラングは、やがてアメリカに連れて行かれた。けど、この人は『メトロポリス』作ったり、もう大監督ですよ。

で、私は、このアメリカで、このフリッツ・ラングに会いました。会った時に、「フリッツ・ラングさん。あんたの『メトロポリス』『ジークフリート』みんな良かったけど、『M』も良かったですねえ」って言ったら、僕に抱きついて「ここへ上がれ！」と、机の上にポーンと置いて、僕は上からフリッツ・ラングを見るような立場で、物を言っただぐらいに、フリッツ・ラングは、『M』のことを言ったら、喜びましたね。



暗黒街の顔役

Scarface

(1932・アメリカ)

監督：ハワード・ホークス

出演：ポール・ムニ／ジョージ・ラフト



〈作品データ〉

制作年…1932年

制作国…アメリカ

時間……93分

原作……アーミテージ・トレイル

監督……ハワード・ホークス

脚本……ベン・ヘクト

撮影……リー・ガームス／L・W・オコンネル

出演……ボール・ムニ／アン・ドヴォラック／ジョージ・ラフト／ボリス・カーロフ／カレン・モーレイ／ヴィン
ス・パーネット／オズグッド・パーキンス／C・ヘンリー・ゴードン

〈作品解説〉

アメリカのギャング映画史上に燦然と輝く名作。モデルは禁酒法時代に暗躍したアル・カボネ。用心棒のトニー（ボール・ムニ）は親分を暗殺し、押しも押されもせぬ暗黒街の顔役にのし上がっていき、血なまぐさい人間ドラマが展開される。トニーが警察に包囲されるラストシーンは印象的だ。監督は後に西部劇の巨匠として知られたハワード・ホークス。

暗黒街の顔役＝『スカーフェイス（Scarface）』。

これは、ギャング映画。本当のギャング映画の、本当のナンバーワンの作品ですね。凄かった。『スカーフェイス』。

これは、もう有名な、有名なポール・ムニの主演映画ですね。アル・カポネの伝記映画ですね。怖くて、怖くてびつくりしたけれども、私はこれで、ギャングというものの世界を覗きました。で、これは、ハワード・ホークスの監督ですけど、怖い映画でしたね。

親方、親分、もう暗黒街の親分。その親分が自分の妹と情婦と一緒においてるんですね。けれども、自分の情婦にはもちろんサービスしますが、けど、自分の妹にも肉欲を感じるんですね。怖いですね。このいかにも下層階級の、下層階級の、下層階級のいかにも野蛮な怖い肉欲ですね。で、自分の妹にも迫るんですね。

そういう怖い映画ですけど、この男が、「世界は俺の物だ！」自分のホテルの向かい側にね、ネオンサイン、当時イルミネーションですね。それに、“世界は我の物”という電光が出ているんですね。電気広告が。それを見て、「あれは、俺だ！俺だ！」と言っているような人で。もう、あらゆる、いっぱい子分がいるんですね。子分がいるんだけど、この男自身、最初、親方がいても裏切る。何か言っても裏切る。裏切りで、裏切りで、だんだん、だんだん有名になった卑怯！卑劣な男ですね。

この男が、自分の妹にも恋したんですね。妹に。怖いねー。肉体的に。それで、この妹の恋人がいるんですね。それが、ジョージ・ラフトが扮しているんですね。まだ、新人の。それが、ある時、訪ねて行った時に、「チッ！あいつ邪魔になる！」と言ったんですね。ジョージ・ラフトを。ジョージ・ラフトは、その妹の恋人なんですね。それが、表で待っている。妹は出て来る。

その前に、このジョージ・ラフト扮している子分が、コイン持ってて、パツと投げては受けて、パツと投げては受けて。これ、癖なんですね。この男の待っている間のね、投げて受け取る、投げて受け取る。

ところが、「あいつ、殺っちゃえ！！」バーン！！！！と廊下で、撃っちゃったんですね。（コインを）パツと投げた時に撃たれて、「アッアッーッ！」倒れた時に、倒れた手に、コインが落ちたんですね。それが、エライ評判になってね。ジョージ・ラフトは、それで一躍有名になりましたけど。

ギャング映画の、最高ナンバーワンですね。

残酷極まりないこのギャング。このギャングが、一番最後に包囲されて、いろんな、いろんな裏切りがあつて、いろんなことで、とうとうこの親方が、ポリスに包囲されちゃうんですね。そうして、この、細榴弾を撃たれるんですね。逃げ場がなくなって、困って困った時に、この主役の男は大きな声で

「助けてくれーッ！！助けてくれーッ！！！！」「俺を助けてくれーッ！！俺を助けてくれーッ！！！！」って、死ぬんですね。

そこらあたりに、この映画の何とも知れん残酷な、ギャングのボスの、哀れが出て来るんですね。いかにも、いかにも、面白いギャング映画のナンバーワン！でしたね。

スカーフェイスゆうのは、顔に傷があることですね。顔に傷があることですね。『スカーフェイス』は後に、どんどん、どんどん皆に映画化されて、どの監督にも憧れの的、ギャング映画の手本だったんですね。

で、コッボラがこれを本当に好きで。これが好きで、『ゴッド・ファーザー』、あれは、この『スカーフェイス』を元にして作ったもんですね。そのあたり、いかにもこの『スカーフェイス』は、映画の教科書ですね。怖い、怖い映画でしたよ。



暗殺者の家

The Man Who Knew Too Much

(1934・イギリス)

監督：アルフレッド・ヒッチコック

出演：レスリー・バンクス／エドナ・ベスト／

ピーター・ローレ



〈作品データ〉

制作年…1934年

制作国…イギリス

時間……75分

原作……チャールズ・ベネット／D・B・ウィンダム・ルイス

監督……アルフレッド・ヒッチコック

脚本……エドウィン・グリーンウッド／A・R・ローリンソン

撮影……カート・カウラント

音楽……アーサー・ベンジャミン

出演……レスリー・バンクス／エドナ・ベスト／ピーター・ローレ／ヒュー・ウェイクフィールド

〈作品解説〉

イギリス国内だけでなく外国にヒッチコックの名をスリラー作家として決定づけた作品。サン・モリッツにスキーに来ていた家族が殺人事件に巻き込まれ、夫が暗号のメモを探す間に娘が誘拐されてしまう。妻とともに救出に乗り出すが……。スリルとサスペンスを盛り込んだ技法は当時から切れ味抜群。1956年にヒッチコック自身で『知りすぎた男』のタイトルで再映画化している。

アルフレッド・ヒッチコックの『暗殺者の家』これは、英国の作品ですね。

僕らは英国の作品を後から観たんです。初めの方は、輸入してなかったの。英国の映画は面白くないというので、入れなかった。というのは、英国の映画は面白いんだけど、理屈が多いのね。それで、日本でやらなかった。

その時に、その『暗殺者の家』。ヒッチコックファンだから、早く観たい！ 早く観たい。『暗殺者の家』観てやっぱり、ヒッチコックタッチが凄いで、驚きましたね。

このヒッチコック、アメリカ行きました。アメリカ行って、『レベッカ』と、それから、『海外特派員』作りましたね。ここらが、ヒッチコックの名人芸ですね。『レベッカ』というのは、いかにもロマンチックな映画。片っぱの、『海外特派員』は、いかにもアクション物。後の、『北北西に進路を取れ』ああいう感じの映画。つまり、上からカメラぼかして、雨の日、みんな傘さして。観てる時に、その上から撮ってるから、こうも傘がサァーッと揺れて、真ん中が空いていくんですね。ズーッと、逃げて行く男の。

そういうあたりの作り方が、もういかにもうまくって、『海外特派員』は、いかにも、ヒッチコックのアクション物ですね。ヒッチコックのスリラーですね。スリルですね。それで、「ヒッチコックってうまいなあ」と思ったんですけど、もっと凄いのは、『レベッカ』でしたね。『レベッカ』観た時に、ヒッチコックというのは、こんな監督かというのが、わかったんですね。『レベッカ』というのは、つまり、愛されて結婚したけど、女の方は、本当に愛されているのかどうかわからなくて、怖がって、怖がって、怖がついていく疑惑の映画ですね。そして、その大きなお屋敷のお嬢ちゃん亡くなった。それが、レベッカですね。それが、先妻でしたね。そのお家の。そう、その先妻を女中さんが、褒めて、褒めて褒めまくるんですね。「レベッカ様は、立派なお方だった。レベッカ様は立派なお方だった」。だから、新しい嫁さんが、もう怖がって、怖がって、どんどん、どんどん怖がるところが、『レベッカ』の凄いとこででしたね。

『レベッカ』は、いかにもヒッチコックのオリジナルですね。ヒッチコックは、だいたい怖がることが好き。



バルカン超特急

The Lady Vanishes

(1938・イギリス)

監督：アルフレッド・ヒッチコック

出演：マーガレット・ロックウッド／マイケル・レッドグレイヴ



〈作品データ〉

受賞歴…1938年ニューヨーク映画批評家賞最優秀監督賞

制作年…1938年

制作国…イギリス

時間……98分

原作……エセル・リナ・ホワイト

監督……アルフレッド・ヒッチコック

脚本……シドニー・ギリアット／フランク・ローダー

撮影……ジャック・コックス

音楽……ルイス・レヴィ

出演……マーガレット・ロックウッド／マイケル・レッドグレイヴ／ポール・ルーカス／デйм・メイ・ウィッティ／セシル・パーカー／リンデン・トラヴァース

〈作品解説〉

ヒッチコックがイギリス時代に作ったサスペンスの傑作。大陸横断列車に乗った若い女性（マーガレット・ロックウッド）は同じコンパートメントで老婦人（メイ・ウィッティ）と一緒にいるが、老婦人は忽然と姿を消してしまう。乗客にたずねても老婦人は最初からいなかったという。疾走する密室で展開されるヒッチコックお得意のサスペンスは絶品だ。1979年にアンソニー・ペイジ監督が『レディ・バニッシュ』の題名でリメイクしている。

はい、『バルカン超特急』。これヒッチコックですよ。ヒッチコックの英国の映画ですよ。

英国の映画はうつついしいと思って観ない人がたくさんおった。けど、ヒッチコックの、英国の映画が本当の、ヒッチコックのオリジナルですねえ。という訳で、見事でした。

私はヒッチコックを映画の神様と思うくらい好きでした。で、ヒッチコックが日本に来た時に、私は会いました。ヒッチコックのしゃべり方はうまいんですね。

「昔々ねえ、こういう時にねえ」

と言うと、まるで、本当、日本語でおっしゃってるような感じなんですね。

それと、怖い話も聞きました。「えー」つて言うよね、「おわかりですか？」なんて言つて最後に、座つて、椅子がありませんですから、座布団を5枚重ねてそこへ腰かけていたんです。

立ち上がつて、やつとこさ立つて痛くて痛くて、

「ああ痛い」

なんて言つたんですね。足が。

「ヒッチさんどうなさつたの」

「いや膝が痛くてね」

と言わないで「ジャパニーズ、ジャパニーズ」と言つたんですね。ニーズとは膝のことですので、私は面白くつて、

「まあージャパニーズ？ そう、私のジャパニーズ、私のニーズをあげましょ」

言つたら、「サンキューベリマッチ」つて言つたんですね。

そういうことがありまして、この人のしゃべり方のうまいのと、それから、洒落がうまいのでびつくりしました。

それから、3年もたちました。

3年もたつてああいことがあつたなんてことも忘れたころ、私はNHKのテレビを観ました。テレビ、NHKで有名なアナウンサーがいらっしゃつて、その方がロサンゼルスへ行つた時に、ヒッチコックにインタビューなさつたのよね。

その方がヒッチコックにインタビューする時に待ってますと、ヒッチコックがゆつくりドアを開けて、出て来たんですね。

そうして小さな小箱を持つてたんですね。

そうして座るなり、

「君。この小箱に何が入っているかご存知ですか？」

つて言うから、びつくりしたんですその人。

「何が入っているの、わかりません」

つて言つたんですね。

「君は知らないのか、これは淀川の膝の骨だよ」

なんて、私は偶然観とつたからもう飛び上がつちやつたんですね。こんなこと言うと思わなかったから。

「これはミスター淀川の骨だよ、淀川は最近ずっと試写に行く時ずつとびっこひいてたろ、かわいそうだから、これ返してやる」

そんなことをテレビで言つたので、偶然、偶然僕は観て飛び上がつちやつたんですね。

そのくらい、ヒッチコックはよく覚えてくれてましたね。

そう、それからもう1つ、この人は鳥屋の子どもだったんね。かしわ屋、関西でいう鳥屋、鳥屋さんの子だったん

ですね。だから鳥屋さんのうちにたまごがどんどんどんどんどんあるんですね。それでたまごが嫌いになったんですね。

どれ見ても、たまご見たら「うおー」と怒ったんですね。「嫌いだよ嫌いだよ」って。

だから、このヒッチコックの映画観たら、たまごをどんなことに利用するか。たまごは、目玉焼きのたまごが皿に出てきたらたばこをスッと開けたら、そのたばこが、たばこがずっとその、目玉の、たまごの上に突き刺してますね。そんなこと好きですね。その場面。

ところがコックさん同士が喧嘩になった、不安だけどガラスの戸があるんですね。

あっちのガラスの向こうのとこっちのが喧嘩するんですね。で、こっちのがたまごを、投げられたんですね。パチャーンとガラスが当たったんですね。ガラスが当たってたまごが流れたら、向こうの男の顔が血が流れたような感じになるんですね。

たまごの使い方がうまいし、たまごが嫌いだということも、ヒッチコックの面白い癖ですね。

で、この人が日本に来た時に、まあ立派な立派な日本のもう、名、名、立派な料理店でそこへ座らしてごはん食べさせたときに、きれいなきれいな日本の料理が出た時に、

「私はこれらを食べません」って言ったの。憎らしげにね、「私はビフテキが好きです」。

こんなところでビフテキ食べられたらたまったもんじゃないけど、好きですって言うからしょうがないから、帝国ホテルから、初めてビフテキを配達させたんですね。そういう人でした。

で、「あなたの殺し方すごいね。いつでもあんたの殺し方に、私すごいぞっとするんです。あんたのアイデアですか」

って言ったら、

「いやそれは私じゃありません」

「誰がやるんだ」

「これがやるんです」

で、隣に奥さんがじーとごはん食べてるの見て、

「これが作るんです」

って言うの。いかにもヒッチコックらしくって、ヒッチコックがどんなにお客さんを喜ばせるかというのがよくわかりますね。



第三の男

The Third Man

(1949・イギリス)

監督：キャロル・リード

出演：オーソン・ウェルズ／アリダ・ヴァリ



〈作品データ〉

受賞歴…1950年アカデミー賞撮影賞（白黒）1949年カンヌ国際映画祭グランプリ1952年キネマ旬報外国映画ベストテン第2位

制作年…1949年

制作国…イギリス

時間……105分

監督……キャロル・リード

脚本……グレアム・グリーン

撮影……ロバート・クラスカー

音楽……アントン・カラス

出演……ジョセフ・コットン／アリダ・ヴァリ／オーソン・ウェルズ

〈作品解説〉

キャロル・リードが監督したサスペンス映画の傑作。第2次大戦後、ウィーンを訪れたアメリカの作家マーチン（ジョセフ・コットン）は友人ハリー（オーソン・ウェルズ）が死んだと聞かされ疑問を抱くが、彼の死は偽装工作だった。アントン・カラスのチターの主題曲、観覧車の対決、下水道の追跡、並木道のラストシーンなど光と影の映像美が秀逸。第3回カンヌ国際映画祭グランプリ。まさに映画の教科書だ。

『第三の男』、The Third Man、これは見事なキャロル・リードの名作ですね。

で、これは私は観てあまり立派なので驚きました、と同時に少し憎らしくなった。

本当に映画の教科書ですね。脚本もカメラも監督自身も、見事なキャロル・リードの感覚が出てワンカットも無駄でない、見事な映画自身の教科書、そう思いました。

だからこれに私は惚れ込んだけれども、ちょっと嫌いでした。ゆとりがないぐらい奇麗だった、見事だったからですね。

ジョセフ・コットン、アメリカの探偵作家。それがハリー・ライムという、オーソン・ウェルズが扮してます、それに呼ばれたんですね、ウィーンに。

で、行ったんですね、来てくれ言うので。

そっから始まるんですけど、その話がうまいんですね。この脚色がいいんですね。

行くとハリー・ライム、オーソン・ウェルズの扮してる、このハリーという男のお葬式から始まるんですね。でも実は死んでないんですね、死んでなかったんですね。

どうして死んでなかったか、どうして死んだようにしたか、それを誰が見てお葬式したか、いうところからだんだん謎に入っていくんですけど、ハリー・ライムが実は麻薬の売買なんかやってる注目の男だったんですね。

そういうことをこの友達知って、悲しくなりながらも、ずーっと応援したりするんですけど、見どころはこのいかにもキャロル・リードの撮るウィーンの街ですね。

第2次世界大戦いうか、その後の崩れかけたウィーンの街が凄いですね。

カメラがもうあらゆる意味で凄いですね。

暗い中からハリー・ライムが出て来るあたり、オーソン・ウェルズ、凄いですね。

オーソン・ウェルズ、ジョセフ・コットン、監督がキャロル・リード……もう名作とはこれですね。

そういう訳であんまり立派なので、私好きだけど嫌いだったんですね。

あんまり見事だった。けどこれ、最後の最後の方でこの本当にハリー・ライムは死にました、お葬式になりました。

けどずっとずっと、最初から悪人とは知りながら、ずっとずっと愛をささやいていたのが、アリダ・ヴァリですね。アリダ・ヴァリのこの女がまたいいですね、見事ですね。

アリダ・ヴァリが最後まで、オーソン・ウェルズを悪と知りながら愛したんですね。愛し続けたんですね。

ところが、そのハリー・ライムの友達のアメリカの小説家、ジョセフ・コットン、これがやっぱりアリダ・ヴァリの美しさにまいつちゃったんですね。

あの愛の一念の見事さに、そうしてひょっとしたら僕も、あの女と結婚したいなあと思ったんですね。

最後、アリダ・ヴァリがもうハリー・ライムが本当に死んだことを知って、秋の葉、並木の葉がバラバラ、バラバラ、バラバラ散るところで、向こうからまっすぐに来るんですね。

それをすぐ横の方でジープで待っていたのがアメリカの作家ですね。ジョセフ・コットンですね。

ひょっとしたら、こちら向いてくれたら、俺は口説いてアメリカに連れて行くと思って待ってたんですね。

もう1人になったから、未亡人になったから、そう思ってたって、アリダ・ヴァリのこの彼女はずっとずっと、死んでもハリー・ライムを私の心から離しません、というので、まっすぐまっすぐ、こっち来るんですね。まっすぐ来て、横の方に道わきでジョセフ・コットンがいるのも見ないで、無視してまっすぐこっちへ来るところで終わりますね。

見事なキャロル・リードのこのラストシーンに私はあつけにとられたほど、映画の美しさ、本当の映画の美しさ、映画の心をこんなに観せたのに感謝しました。『第三の男』は、そのぐらいの名作でした。

アリダ・ヴァリ、あの名女優がこれに出ていること、ジョセフ・コットンがこれに出ていること、そうしてオーソン・ウェルズ、あの有名な監督がこれに出ていること、しかも監督がキャロル・リード。この作品が本当の映画の教科書だということで、私惚れ込みながらも、あんまりにも隙がない奇麗さに、ちょっと嫌気がさしたぐらいの、これは名作です。

いまでも『第三の男』といいますと、映画の歴史の中で、イギリス映画の歴史の中で、キャロル・リードの歴史の中で、これはナンバーワンになりますね。最高作品ですね。

もしもこれ、今初めてご覧になる方があったら、どんなに驚かれるでしょう。

映画は美しい、映画は心を本当に表現するもんだということがおわかりになると思います。『第三の男』、怖い映画ですよ。



黄金の腕

The Man with the Golden Arm

(1955・アメリカ)

監督：オットー・プレミンジャー

出演：フランク・シナトラ／エリノア・パーカー



〈作品データ〉

受賞歴…1955年アカデミー賞主演男優賞ノミネート／劇・喜劇映画音楽賞ノミネート／美術監督・装置賞ノミネート
1956年英国アカデミー賞作品賞ノミネート／男優賞ノミネート

制作年…1955年

制作国…アメリカ

時間……115分

監督……オットー・プレミンジャー

脚本……ウォルター・ニューマン/ルウィム・メルツァ

撮影……サム・リーヴィット

音楽……エルマー・バーンスタイン

出演……フランク・シナトラ／エリノア・パーカー／キム・ノヴァク／シェリー・マン／ショータ・ロジャース
／ダーレン・マクギャヴィン

〈作品解説〉

麻薬中毒者の陰惨な生活をさめたタッチで描いたオットー・プレミンジャー監督の心理サスペンス。カード賭博のディーラー、フランキー（フランク・シナトラ）は麻薬から足を洗い、車椅子の妻（エリノア・パーカー）とともにドラマーとして再生を図るが、罣にはまり再び賭博と麻薬の世界へ。バーンスタインの強烈な演奏とフランク・シナトラの鬼気迫る演技が光る。

『黄金の腕』懐かしいなあ。いい映画だったなあ。この映画観て、出て来る役者にも、惚れ惚れしましたけれども、まずはタイトル（デザイン）ですね。このタイトルは粋なんですわね。

そうして誰だろうと思ったら、ソウル・バスという人なんですわね。

ソウル・バスのこのタイトルにまず、びつくりしましたけれど、音楽にもびつくりしましたが、やっぱり、オットー・プレミンジャー。この監督のタッチが、いかにも怖いんですね。大人の映画なんですわね。驚きました。

フランク・シナトラが主演しております。

『黄金の腕』というのは、ディーラーですね。トランプでバァーッと、お客にカード撒きますわね。あれの見事な見事な、やっぱりあれも名人、下手があるんですね。きれいに撒くんですね。ディーラーは。そうして、その人の撒き方が見事で、黄金の腕なんですわね。黄金の腕。

そういう訳で、フランク・シナトラのディーラー、このカード撒きが、もう天才的なんですわね。

奥さんが、エリノア・パーカーが扮してる。この奥さんが、いつпен旦那と喧嘩して、足を怪我したんですね。治ってるのにまだずっと車椅子なんですわね。「ずっと私は、いじめられている。ずっとこの通りだ」とずっと旦那をいじめているんですね。

エリノア・パーカーがいいんですね。車椅子に乗って、もう立てるのに車椅子に乗って、旦那の前で、「私はね。あんたのために、こうなったんだよ」いうのを毒づいてる感じが、怖いんですね。もう、もの凄いですわね。

フランク・シナトラは、麻薬中毒になってるんですね。また、それが、凄いですわね。麻薬中毒になって、苦しみますわね。で、家に帰ったら奥さんはいつもいじめるんですね。怖い怖い、話なんですわね。

いかにも下町の何とも知れん、アメリカの感じが、よく出てるんですね。この監督のタッチが、よく出てるんですね。

フランク・シナトラのいろんな映画、ありました中で、これが一番凄いですわね。『黄金の腕』というのは、そのカード撒きですわね。

エリノア・パーカーが毒づいて、毒づいて、毒づいて、旦那をいじめて、いじめて、いじめて、いじめる時の、あの、エリノア・パーカー。最後にこの車椅子に乗ったまま、どうなっていくか？そこが凄いですわねー。

その中で、柔らかない、柔らかない感じの、キム・ノヴァクの酒場女が、怖い話の中で、綺麗な花を咲かせますわねー。

という訳で、この映画は、見事な映画文学ですわね。映画の本当の文学ですわね。それを見事に、オットー・プレミンジャーという監督がやり遂げましたわね。こんな見事な、フランク・シナトラの映画は、ちょっとないですわね。

この映画は、いい意味で、ニューヨーク派、アメリカ派、都会派。その代表作品ですわね。



淀川長治
クラシック名画解説全集 I



SF・ホラー

『カリガリ博士』『オペラ座の怪人』他(全10話)

World Classic film Selection





カリガリ博士

Das Cabinet des Dr. Caligari

(1919・ドイツ)

監督：ロベルト・ヴィーネ

出演：ヴェルナー・クラウス／コンラート・ファイト



〈作品データ〉

制作年…1919年

制作国…ドイツ

時間……67分

監督……ロベルト・ヴィーネ

脚本……カール・マイヤー／ハンス・ヤノヴィッツ

出演……ヴェルナー・クラウス／コンラート・ファイト／リル・ダゴファー／フリードリヒ・フェーヘル

〈作品解説〉

ドイツ表現主義を代表するホラー映画の傑作。北ドイツの田舎町の祭で、カリガリ博士なる催眠術師が見世物小屋を開く。出しものは夢遊病者の予言。その後、次から次へと連続殺人事件が起こる。カリガリ博士とは何者なのか。1人の青年が正体をあばこうとする。狂気と幻想に満ちた物語で意外な結末が待っている。ロベルト・ヴィーネ監督。

『カリガリ博士』、面白い名前ね。『カリガリ博士』、これ、ドイツの表現主義の頃の最も代表的な作品ですよ。

舞台が背景が、全部不思議な感覚の絵ですね。もう全部カキワリですね。けどカキワリと言えませんね、ドイツ美術ですね。ドイツの本当の、この表現主義の、すごい美術の中で事件が起こり、人物が出て来ますね。その人物がその表現形式の絵画の中で見事に収まっていますね。これはヴィーネという監督の見事な名作です。

カリガリ博士という不思議な男がいるんですね。この男がチェザーレとかいうね、眠り男がいるんですね。その男を使ってね、殺人事件を起こすんですね。怖い映画ですね、ちょうど言ったら吸血鬼みたいなもんですね。

この「カリガリ博士」が、次から次へと眠り男を使って殺人事件を起こす。さあ、この「カリガリ博士」は何だろう、何だろう、思ううちに、最後の最後は「カリガリ博士」が精神病院に逃げ込んで行くようなストーリーですね。

ストーリーは、私はかすかに覚えてるんですけど、この表現形式ですね、これは凄い。これはドイツでないとやれない、アメリカじゃとってもこんな大胆なことやれない。フランスでもやれない、ドイツですね、ドイツは、こういう頃、こういう時代に最もモダンだったんですね。最もいわゆるハイカラだったんですね。

『メトロポリス』なんかもありますが、これは本当に絵画がそのまま映画になってるんですね。

その表現形式、不思議な不思議な感覚、これは後にいろんな国が真似しましたが、やっぱりドイツが最初のオリジナルですね。

で、この『カリガリ博士』はそういう意味でも怖いね。

この男が、何とも知れん男なんですね。そうして眠り男を使って人を殺していくのね。話自身も、何とも知れん、怖いですね、吸血鬼ですね、吸血鬼だけれども、もつと何とも知れんリアリズムあるんですね。その背景が絵のくせに、リアリズムあるんですね。

この眠り男を使って人を殺していくところがまた面白くて、眠り男が「カリガリ博士」の言う通りになっていくんですね。

これに有名な俳優が出てるんですね。『カリガリ博士』がヴェルナー・クラウスで、チェザーレがコンラート・ファイトですね。

みんな名優ですね、名優が出てこの映画は生きていきますね。

ドイツ映画、ドイツというものがこの頃どんなに文化的に優れていたか、芸術的に優れていたか、ドイツという国がどんなに立派だったか、そういう時代に、ディートリッヒが生まれて、ディートリッヒは育ったんですね。

だから、ディートリッヒが今でも、アメリカ行っても粹なんですね。何とも知れん、粹な女になったんですね。これはドイツの文化を吸っていたからですね。

ドイツ文化、これは本当に世界で最高の文化を持っていたんですね。モダン文化、表現形式、こういうものを映画に吸い込んで映画に作ったということが驚きですね。

ドイツ映画は『カリガリ博士』でこんな作ったけれども、まだその他に、もうアニメでも見事なハイカラなの、モダンなの作りました。

みなさん『メトロポリス』ご覧になったら、あの人造人間、あれが後に『スター・ウォーズ』で、いろいろと出て

きますが機械人間がえらい違いですね。見事です、ドイツのこの人造人間はもっと凄いですね、美術的です。

で、ドイツがこんな美術あったのに、どうしてドイツがそのすべてをなくしたか？ ヒットラーですね、ヒットラーがその美術を全部消したんですね。

そういう訳で、ドイツは見事な見事な国だったのにヒットラーでつぶされましたね。

今考えたら、この『カリガリ博士』、これ観て驚きましたね。

衣笠貞之助なんかが非常にこれに影響されましたね。『狂った一頁』とか、いろいろ作りましたが、この感覚は、とっても大胆なこの感覚は、もうこのドイツ映画以外作れませんでしたね。

『カリガリ博士』、不思議な、不思議な、見事なドイツ文化ですよ。ドイツ美術ですよ。



オペラ座の怪人

The Phantom of the Opera

(1925・アメリカ)

監督：ルパート・ジュリアン

出演：ロン・チェイニー／メアリー・フィルビン



〈作品データ〉

制作年…1925年

制作国…アメリカ

時間……95分

原作……ガストン・ルルー

監督……ルパート・ジュリアン

脚本……エリオット・クローソン／レイモンド・シャロック

音楽……バージル・ミラー

出演……ロン・チェイニー／メアリー・フィルビン／ノーマン・ケリー／ギブソン・ゴーランド／ヴァージニア・ビアソン／スニッツ・エドワーズ／ジョン・セインポリス

〈作品解説〉

原作はガストン・ルルーの有名ミュージカル。何度も映画化されているが、本作は第1回作品。パリ・オペラ座に出没する怪人は楽団員だったが解雇され、仮面に黒マント姿で地下の下水道に隠れ住んでいて、ひとり娘をプリマドンナにしたい夢を持っている。娘が怪人の仮面を背後から剥ぐシーンは映画史上に残る名場面。ロン・チェイニーが怪人を怪演。この幻想的な愛の悲劇は常に感動的であり、今もミュージカルが上演されている。

『オペラの怪人』『オペラ座の怪人』ね。これサイレントの頃、大正14年の頃、初めて、ユニバーサルで作りました。『オペラの怪人』と当時、言いました。『The Phantom of the Opera』でしたね。作りました。

で、ユニバーサルで、これ作るのに、サイレントの頃ですよ。もう大騒ぎ！ 大変な、大変なね、超大作。ユニバーサル始まって以来の、『愚なる妻』に続く超大作で、びつくりしましたね。『オペラの怪人』って何だろう？ 何だろう？ 思いました。

で、ロン・チェイニーが主演しています。ロン・チェイニーはグロテスクな男専門な役者ですね。ああ、だから『オペラ座の怪人』いうのは、きつとね、怖い映画だろうな思いました。けど、サイレントの頃、何の映画なんだろう？ 何の映画だろう？ 思いました。で、ユニバーサルは、大宣伝しました。で、観に行きました。びつくりしたね。超大作で、見事な映画でね。どこが、見事言いますとね。そのパリの、オペラ座の、その舞台が凄いですね。もう、なんかねえ凄いオペラなんです。凄いバレエなんです。たくさん、たくさんね、200人ぐらいのね、舞台出てるオペラ。そしてまた、15人ぐらいが、この、バレエ踊るんですね。奇麗なんですねー。それが、サイレントの頃だから、びつくりしたの。広い舞台でね、みんなが奇麗に踊ってるの。

ところが、カメラが、ずーっと下降りて行くの。どんどん降りて行くの。床の下、つまり舞台の下へ。どんどん降りてく。そして、細い細いね、岩の間通ってね。行った所に、オペラの怪人がいたのね。これが、この映画の主役で、ロン・チェイニーやりました。

どうしてか、言いますとね、この男は、顔にね、すごい怪我しましてね。顔が半分ね、火事かなんかで、ただれてるんですね。だから、もう表出ない、表出ない。けれども、オペラいうものを、命をかけて、大事にしている男ですから、地下に、地下において、オペラを守ろうとしてるんですね。

それが、当時サイレントの頃ですから、そんなオペラいうものを、知らない頃ですから、びつくりしたのね。で、パリのオペラ座の、床下、地下がこんななつてんのか、いうことをカメラが、ズーッと、下降りて行くのね、降りて行くのね。あー凄いなあ思いましたが、そこにはね、水が流れてるのね。その奥に、怪人がじつというのね。その怪人は、オペラ守ってるのね。

で、オペラのスターの奇麗な女の人、それ、守ってるのね。そういうふうな映画でしたけど、ロン・チェイニー凄かった。それよりも、サイレントの頃、大正14年の頃、私、15・6でこれ観まして、凄いな、オペラ座、つて。オペラゆうのは、こんなに凄いのか思いましたけど、その映画は、どんどん、どんどん私を、引きずりこんでいきました。ノーマン・ケリーとか、そういう人が出まして、もうユニバーサルの超大作でした。

という訳で、これが、後にまたも、映画になり、またも映画になりました。それほど、この『オペラ座の怪人』、今、オペラ座、と言いますね。それは、有名です。みなさんは、ひょっとしたら、これを舞台で、日本でもご覧になってると思います。これはステージで、もう再三、ミュージカルになりましたね。私は、ニューヨークでも観ましたし、日本でも観ましたけど、このオペラの怪人、地下へどんどん入って行くけど、舞台では、そんなんできないから、この大きな大きなシャンデリアが、ザーンと落ちて行く、そういう場面を見せて、この『オペラ座の怪人』をクライマックスを、お客さんに、あの、噂立たせましたけど、本当は、そのシャンデリアが落ちてくことよりも、地下へ、地下へ、地下へ行くところの怖さが、この『オペラ座の怪人』『オペラの怪人』の見どころでしたね。

で、ロン・チェイニーの他に、ハーバート・ロスだとか、いろんな人がやりました。2回も、3回もこれ映画になりました。けれども、またもや、映画になると思います。『オペラ座の怪人』『オペラの怪人』これは、いつべんはクラシックとして勉強する作品ですね。



メトロポリス

Metropolis
(1927・ドイツ)

監督：フリッツ・ラング

出演：ブリギッテ・ヘルム／グスタフ・フレーリッヒ



〈作品データ〉

制作年…1927年

制作国…ドイツ

時間……104分

監督……フリッツ・ラング

脚本……テア・フォン・ハルボウ/フリッツ・ラング

撮影……カール・フロイント/ギュンター・リター

音楽……ゴットフリート・フッペルツ

出演……アルフレート・アーベル／ブリギッテ・ヘルム／グスタフ・フレーリッヒ／フリッツ・ラズプ／ルドルフ・クライン＝ロッゲ

〈作品解説〉

フリッツ・ラング監督がドイツ映画美術を見事に見せたSF映画の名作。仮想未来都市メトロポリス。地上は資本家の楽園、地下の大工場では労働者が重労働にあえぐ。この労働者を抑圧するために資本家は人造人間を作り地下に送り込む。群衆の動き、パントマイム演技の面白さ。ブリギッテ・ヘルムが人造人間とマリアの二役を演じている。

はい、『メトロポリス』ご存知ですか？ 『メトロポリス』これは、フリッツ・ラングの代表的大作ですね。

フリッツ・ラングは、『ジークフリート』、非常にドイツのクラシック、大昔の古典の伝説を映画にして見事だったんですね。

ところがとたんに今度『メトロポリス』、超モダンですね。どんな話か言いますと、つまり富豪たち、金持ちたち、実業家たち、そんなの全部集まって労働者を全部地下へ入れて、上は上だけで生活するような都市を造ったんですね、街を。

そうすると、地下の連中が怒ったんですね。「俺たちが、働いて、働いて、儲かった、儲かった思ったら、地上の富豪が全部それ吸い取る。こんなばかなことあるか！」と言ったら、その富豪たちは、考えて綺麗な人造人間作ったんですね。

労働者が憧れてる女の人の顔を入れて、人造人間作って、それを地下へやって、なだめて、なだめて、ストライキにならないようにする、そんなお話の映画だったの。

それを、『メトロポリス』、もう当時ドイツで、できた時は、びつくりしましたね。フリッツ・ラングが作ったというので。

ところがその人造人間、凄かったんですよ。ドイツがいかに美術的かいうのはね、人造人間、大きな、大きな、ガラスの蓋を開けるとね、人造人間が出て来るんです。

そのデザインが綺麗なこと。その人造人間、見事な人造人間、なんてドイツは綺麗だろうと思いました。

そしてずっと後に、『スター・ウォーズ』とか、ああいう映画観ましたのね。

したら『スター・ウォーズ』に人造人間出て来るの。ロボット、コロコロコロコロ、出て来るんですね。

あれが『メトロポリス』の人造人間のすつかり真似、しかも非常に下手なの。

なんてアメリカは下手だと思いました。

そういう訳で、この人造人間は凄かった。で、フリッツ・ラングのこの『メトロポリス』は、フリッツ・ラング、もう生涯代表の傑作ですね。

で、私がRKOへ行って、フリッツ・ラングに会いましたの。

で、フリッツ・ラングに会って、ちょうどフリッツ・ラングが『夜の衝突』いう映画をやってたんですね、バーバラ・スタンウィック。

そのフリッツ・ラングに会って「フリッツ・ラングさんあんたの『メトロポリス』は凄かったな」と言ったらね、びつくり仰天して、僕に抱きついて僕を抱いて自分の机の上に乗せたんですね。こうして、上からフリッツ・ラングを見たんですね。

「こんな、もったいないことやめてください」言ったら、「いや、あんた、あんたがね、フリッツ・ラングがね、『メトロポリス』作った言ってくれた。このハリウッドだ一れも言ってくれなかったんだよ。あんたはいいこと言ってくれた」言うぐらいにねフリッツ・ラングは喜びましたよ。

で、『メトロポリス』はドイツの美術ですね。ドイツの最高美術、『メトロポリス』。これは本当にフリッツ・ラングの最高です。

で、そのフリッツ・ラング自身に会って、『夜の衝突』や、RKOの映画に、フリッツ・ラングが、ぼそぼそじゃな

いけれども、だ一れもフリッツ・ラングをそういう、『ジークフリート』、あるいは『メトロポリス』の偉い人だいうことをみんなが忘れたように使っているのを僕は怒ったら、フリッツ・ラングがにやにや笑って、「ありがとう、ありがとう」言っておりましたけど、この『夜の衝突』のエキストラの1人に、場面に出て来なかったけれども、そのスタジオにマリリン・モンローがいたんですね。

そんなこと私全然思わなかったよ、なんか女工の1人で出て来たんですね。

そういう訳で、フリッツ・ラングが、私自身に「Thank you.」と言ってくれたことは、私が『メトロポリス』を言っただけからですね。

その人造人間、奇麗ですよ。『スター・ウォーズ』よりずっと、奇麗ですよ。



ドン・ファン

Don Juan

(1932・アメリカ)

監督：アラン・クロスランド

出演：ジョン・バリモア／メアリー・アスター



〈作品データ〉

制作年…1926年

制作国…アメリカ

時間……168分

監督……アラン・クロスランド

脚本……バイロン・ハスキン

撮影……バイロン・ハスキン

音楽……ウィリアム・アクスト

出演……ジョン・バリモア／メアリー・アスター／ウィラード・ルイス／ヘレン・コステロ／ワーナー・オーランド／モンタギュー・ラヴ／マーナ・ロイ

〈作品解説〉

トーキー時代の黎明期にサウンド版で公開され、傾きかけていたワーナー映画を一気に立て直した大ヒット作。中世イタリアを舞台に美男子ドン・ファンが繰り広げる大ロマンである。この一作で主役のジョン・バリモアはダグラス・フェアバンクスに次ぐ新スターとなった。“伝説のプレイボーイ”は1995年にジョニー・デップが主演し再映画化されている。

ジョン・バリモアの『ドン・ファン』。これは、ただの『ドン・ファン』とは言わないのね。ジョン・バリモアの『ドン・ファン』と言ったのね。

そのぐらいに、ジョン・バリモアはもう、一番の美男子、一番の有名な人だったんですね。で、ジョン・バリモアをカメラマンが撮影する時、あるいは、スナップで、撮影者が、新聞記者の写真屋から来た時に、ジョン・バリモアは必ず左側の顔を、見せたんですね。自分の顔で、一番いい所どこか？ちゃんと知ってたんですね。そのぐらい、ジョン・バリモアは、自分というものを、見事に研究してたんですね。そのぐらい、ジョン・バリモアのプロフィールには、横顔というのは、もう有名な、有名な、話題になってたんですね。

で、ジョン・バリモアはもうご存知のように、ライオネル・バリモアそれから、あらゆる兄妹全部、舞台の一級、第一級の役者ですね。で、バリモア家というのは、もう別名、ロイヤルファミリー・オブ・ブロードウェイ。

で、ジョン・バリモア一家のことを、映画にした映画もあるんですね。『名門芸術』っていう映画がそうですけど。これで、バリモアの一家のことを、映画にしたんですね。で、お母さんも、エセル・バリモアも、それから、その他、兄妹全部、役者ですね。だから、舞台、舞台、舞台、ジョン・バリモアというのは、舞台の中の、もう有名な、有名な1人ですね。

だから、ジョン・バリモアの実写、実写と言ったらおかしいけど、伝記の映画観ると、この、お母さんが8時になったら、バツと起き上がっちゃうんですね。「お母さん、何にも用事ないじゃないの」「いや、8時だもの」。8時に舞台が開くんですね。いまだに、おばあちゃんになっても、8時になったら、シャツと身体がまっすぐになるんですね。そういう、バリモアの一家の舞台の、役者の一家がよく出てましたが。

そのジョン・バリモアが出てる、『ドン・ファン』で、このドン・ファンは女たらしですね。女を誘惑するんですね。そういう意味で、ジョン・バリモアにもってこいなんですね。で、ジョン・バリモアの当たり役でね。『ドン・ファン』ていうのは。そういうふうなわけで、ジョン・バリモアの『ドン・ファン』は今、観るのはとっても懐かしいですね。

で、同時に、この『ドン・ファン』は、何度も、何度も、映画にしようとしたんですが、ジョン・バリモアぐらいの綺麗な美男子がいないから、なかなか映画にならなかった。ところが、ダグラス・フェアバンクス。あの立派な、『怪傑ゾロ』ですか？ あの有名なダグラスが、これを映画にしようとしたんですね。でも、映画になるか、ならないかわからない。という、面白いシナリオで、ロンドンフィルムが作りましたけど。

ドン・ファンが亡くなった。そっから始めるんですね。実は生きてるんだけど、亡くなった。で、「俺の葬式は、どんな葬式になるだろう？」というのが、ダグラスの、『ドン・ファン』ですね。そうして、木に登って、お葬式見ると、そろそろ、そろそろ、女がいつぱい泣きながら、そろそろ……もう女が泣きながら、泣きながら、お葬式してるんですね。「おー俺は、こんなに有名だったんだ。女にこんなに、もてたんだ」というのが、ダグラスの『ドン・ファン』でしたね。そうして、やがてお葬式が済んで、3ヵ月目に改めて、「自分が、実は、ドン・ファンだったんだよ」とみんなの女の前で、言いに行くんですね。で、みんなが、ドン・ファンを、この女を、この男やっただということを、気がつかないんですね。もって綺麗な人だったよ。もって美男子よ。あんたみたいな人じゃないよ。とみんなに、ささやかれて。がっかり、がっかり、俺は本当に、ドン・ファンなんだよ。という所で終わる、このダグラスの、『ドン・ファン』も面白かったですね。

けれども、何しろ、ジョン・バリモアの『ドン・ファン』これは、もうひのき舞台。もう、ジョン・バリモア以外

許されなくらいの作品ですよ。それを、今、みなさんがご覧になったら、見事に、ジョン・バリモアという人がどんな人か、わかりますね。後に、ジョン・バリモアはいろんな映画に出ましたけど、『グランド・ホテル』これで、美男子の、美男子のジョン・バリモアが落ちぶれて、宝石泥棒になるんですね。落ちぶれて。それで、グレッタ・ガルボのグルシンスカヤという、バレエのバレリーナ。その部屋に入っていくんですね。ところが、このバリモア、色男。なかなか芝居気たつぷり。というのは、バリモアを、まあ、風刺しているんですね。

そして、このバリモアの宝石泥棒が見事に芝居するんですね。「私は、あんたのファン、あんたのファン、あんたが、オランダが行った時も、あんたが、スウェーデン行った時も、いつでもあんたの舞台を絶対見逃さなかった。あんたの『椿姫』、あんたの『マノン・レスコー』全部、観ました。もう、台詞も覚えています。あんたこそ、私の命！ 私の命！ あんたみたいな人がいなかったら。私はあなたが、生きている間に、私はあなたの、本当の、神様みたいな、あなたに、もう夢中になっているんです。あなた、どうか、長生きしてください」と言った時に、ガルボが、「もういっぺん言ってください」。その相手が、ジョン・バリモアだったんですね。

あの美男子が、そんなことを、言ったこともあるように、もう面白い、シャレ言うのか？　そういうところで、ジョン・バリモアという人を使いましたね。で、バリモア、そんなに有名な美男子。ハンサム、ルドルフ・ヴァレンチノ、あれとは全然、違った意味で、本当の、もうどうなのかしら、鴈治郎ですね。中村鴈治郎です。昔の。あんな人だったんですね。そういう意味で、この『ドン・ファン』、バリモアの『ドン・ファン』は。わざわざ、バリモアの『ドン・ファン』と言ったくらいですね。さあ、みなさん、この十八番、この、バリモアの十八番の、オリジナルの『ドン・ファン』を観てくださいね。



アンダルシアの犬

Un Chien Andalou

(1928・フランス)

監督：ルイス・ブニュエル

脚本：ルイス・ブニュエル／サルバドル・ダリ

出演：シモーヌ・マルイユ／ピエール・パチエフ



〈作品データ〉

制作年…1928年

制作国…フランス

時間……15分

監督……ルイス・ブニュエル

脚本……サルバドール・ダリ／ルイス・ブニュエル

撮影……アルベール・デュベルジャン

出演……シモーヌ・マルイユ／ピエール・バチエフ／ジェーム・ミラヴィル／ルイス・ブニュエル

〈作品解説〉

スペイン出身の巨匠ルイス・ブニュエルの第1作で、画家サルバトール・ダリと組んで作られたアヴァンギャルド映画。剃刀の刃で真二つに切られる若い女性の眼球、路上に切り落とされた手首、痙攣している掌を這い回る蟻の群れ、ピアノの上のロバの死骸など何の脈絡もない映像が断片的に続く。わずか15分の作品だが、その衝撃映像が今も色あせていない。シュールレアリズムの代表作である。

『アンダルシアの犬』 私たちは、これ観て、びっくりしたんですね。

これ、ブニュエルって人のね、監督作品なんですね。この人は、本当のシュールリアリズムの非常に、個性的な作品を出す人なの。

で、「アンダルシア」に、ひっかかったのね。何だろう？

『アンダルシアの犬』いうから、怖い、スペインの怖い映画かと思ったら、感覚映画で、全然思いもしない場面が、どんどん、どんどん、出てきたんですね。ブニュエルという人のこの不思議な感覚。

これを、ダリという絵描きが協力したんですね。だから、ますます、ますます、個性的になって、私たちは、これ観た時に、何だろう？ 思ったのね。こんな映画、何だろう？ 思ったのね。

たとえば、ピアノの上に、死んだ牛か、ロバがドタッと置いてあるのね。それだけのこと。何だろう？ けど、気持ち悪いんだね。そうすると、また、女の人の目が出てきたのね。クローズアップで。それをね、指2本で、広げたのね。女の目がクリクリとむいたのね。そこ安全カミソリで、キヤーッと切ったのね。もうそれ観た時には、ゾーッとしたのね。

そういう所ばかりを集めて、私たちに、目から見る感覚の怖さね。それをどんどん、どんどん、あおらせたのね。『アンダルシアの犬』は、ダリの絵の、この不思議な不思議なグロテスクと、この監督の、何とも知れん、目の感覚ね、目で見て恐怖する。それを合わせてやったのね。

皆、びっくりした。今なら、本当に行列で、並ぶくらいの美術、芸術的な作品ですけど、当時は、『アンダルシアの犬』は、一般にあんまり、歓迎されなかったね。そういう映画ですけど、僕らは、『アンダルシアの犬』を観たということで、ダリという人の感覚と、この監督の何とも知れんシュールな感覚を、うんと勉強しましたね。

そういう訳で、まあこういうふうな映画が、当時、サイレントから、トーキーの頃、よくあったのね。ルネ・クレールなんかもこういう感覚でしたね。

ルネ・クレールもまあパリの、いろんな歩いている人が、パリのタワーの傍で、全部！ ストップして、全部！ 止まっちゃうのね。そしたら、どうなるだろう？ そういう映画を作ったり。いろいろそういうのがあって、それを、シュールリアリズムと言ったんですね。

この監督の作品は、それを、もうどんどん、どんどん、奥深く、奥深い感覚作品で、みんなは、これで、映画というの、こういうこともできるんだな。文学ではできないことをやるんだな。目の感覚のこんな怖さも見せるんだな。いうので、そこが、勉強になりましたよ。



フランケンシュタイン

Frankenstein

(1931・アメリカ)

監督：ジェームズ・ホエール

出演：ボリス・カーロフ／コリン・クライヴ



〈作品データ〉

制作年…1931年

制作国…アメリカ

時間……71分

監督……ジェームズ・ホエール

脚本……ギャレット・フォート／フランシス・エドワード・ファラギー／ロバート・フローリー

撮影……アーサー・エディソン

出演……ボリス・カーロフ／コリン・クライヴ／メイ・クラーク／ジョン・ボールズ／エドワード・ヴァン・スローン／ドワイト・フライ／フレデリック・カー／ライオネル・ベルモア／フランシス・フォード

〈作品解説〉

恐怖映画の古典中の古典。フランケンシュタイン博士は死体を繋ぎ合わせて電気ショックを与え、死人を生き返らせるが誕生したのはまるで怪物。怪物を演じた無名の舞台俳優ボリス・カーロフはこの一作で一躍有名になった。怪物が無邪気な少女と出会う湖のシーンは名場面。1994年にケネス・ブラナーが監督、主演して再映画化されている。

『フランケンシュタイン』。

これ、初めて映画になる時に、ユニバーサルが英国からジェームス・ホエールという監督呼んできたんですね。
で、英国の監督が『フランケンシュタイン』作るというのでみんな、どんな映画かと思ったんですね。なるほど、
始めのシーンからずうっと英国らしいスタイルで、怖かったんですね。

で、後にみんなが、フランケンシュタイン、あの怪物、あのフランケンシュタインと言うけどあれは、フランケン
シュタインは博士で、博士が作った怪物が、あの怪物ですね。

そういう訳で、ジェームス・ホエールの、この英国式の『フランケンシュタイン』。アメリカのユニバーサルです
けど、怖かったなあ。これが、ボリス・カーロフが主役しているんですね。

それでこの、英国のジェームス・ホエールの監督作品に、ユニバーサルは、舞台で有名な役者のボリス・カーロフ
を招いたんですね。で、ボリス・カーロフはこれで、いかにも、見事にフランケンシュタインの化け物、作られた人
造人間を演じましたね。ボリス・カーロフはこれで、一躍、もうフランケンシュタインの化け物でもう肩書が出たく
らいに有名になりましたね。

そのメーキャップがすごいね。もう、額の方にまだ釘の跡があるのね。喉にも釘の跡があるのね。まだできたて
の、まだ科学者が科学のテーブルで、できたての人間が動いてくるのね。あれが、半分人間、半分機械。半分、人
間。

そんな男がそろ、そろ、そろ歩いてくるのね。怖いなあ。その男がしかし、自分がそんなグロテスクな男だと思っ
てないのね。人間の生まれたてみたいなもんね。そろそろそろそろ歩くので、その歩き方が怖い。小川のほとり行
くのね。

で、井戸端で女の子が花集めてたのね。それに

「うーうーうーうー」

と言ったのね。やっぱりかわいいことはわかるのね。で、その子どもがね、

「おじちゃん、花あげる」

と言ったのね。喜んじゃって花持ってね、フランケンシュタインが歩くところが凄かったね。

というわけでジェームス・ホエールの『フランケンシュタイン』。これは見事な、文学映画。見事な、見事な演技
でしたね。演劇映画でしたね。凄かったねえ。

こういうわけで、フランケンシュタイン、ボリス・カーロフは一躍有名になりました。

で、みんなが初めてフランケンシュタインは博士で、フランケンシュタインの作ってる化け物が主役だとわかっ
て、フランケンシュタインが化け物じゃないってことを、よく肝に銘じて、知りましたね。



魔人ドラキュラ

Dracula

(1931・アメリカ)

監督：トッド・ブラウニング

出演：ベラ・ルゴシ／ヘレン・チャンドラー



〈作品データ〉

制作年…1931年

制作国…アメリカ

時間……74分

原作……ブラム・ストーカー

監督……トッド・ブラウニング

脚本……ギャレット・フォート

撮影……カール・フロイント

出演……ベラ・ルゴシ／ヘレン・チャンドラー／デヴィッド・マナーズ／エドワード・ヴァン・スローン／ドワイ
ト・フライ

〈作品解説〉

ドラキュラ映画の元祖はF・W・ムルナウが監督した『吸血鬼ノスフェラトゥ』だが、本作でベラ・ルゴシが演じ、ドラキュラのイメージを確立した。貴族的な夜会服姿で、心の奥まで射抜くような眼光とニヒルな笑い、そして牙をむき女性を失神させてしまうあたり。ベラ・ルゴシの美しき怪物は女性観客の心をつかみ大ヒット。ファンレターが殺到したという。

『魔人ドラキュラ』。

もうドラキュラはご存知ですね。これは、もう昔から映画のご最員の、もう題材ですね。もういつべんはみんなこれやりたがりますね。

で、これはトッド・ブラウニングという非常にグロテスクな映画が好きな監督がベラ・ルゴシで映画にしたのが最初ですね。

で、これは、もう、ご存知のように、もう、ドラキュラ博士、150年前に死んでる、その死んだ伯爵が棺桶から出て来て、女の血を吸うんですね。そういう映画で、まあ、みんなびっくり仰天して観たことはありますけど、銀の十字架を見せたら消えてなくなるとか、いかにも面白いんですね。

ドラキュラとは、それからヴァンパイアと、こんがらがりましたがそういう映画で、ドラキュラは、もうグロテスクの最初の、クラシックの、第1回目の作品くらいに、ドラキュラは活動写真ができたころから有名でしたね。

で、このドラキュラをやったのはいろんな人がやりましたが、やっぱりベラ・ルゴシという人が一番よかったんですね。

で、ドラキュラ役者で有名になりましたね。

そういうわけでこの映画は、いかにも怖い、怖い、このゴーストものとして有名でしたけど映画自身が、この顔が変わって崩れてこわいお化けの顔になったり、それから銀の十字架見せたら、もう、顔が崩れてしまったりか灰になるとかそういうところが昔の、サイレントの頃はとっても面白かったのね。トリックが。それで、昔からあの有名なこのドラキュラです。で、このドラキュラはたとえばあの棺桶に入っている、棺桶に入っているとまだ目が覚めて起き上がってくるのを銀の十字架を、で釘をバーン、バーン、バーンと釘で打つようにして殺す、のようにグロテスクなところの怖いところがよかったんで、西洋の怪談物、西洋の化け物では一番花形ナンバーワンの作品がドラキュラですね。

で、ドラキュラ、これ舞台で観ました、私。ブロードウェイで。いまだにも非常にこの頃モダンなのに、やっぱり『ドラキュラ』いうこのクラシックは、やっぱりいまだにブロードウェイでも芝居やるんですね。そうすると、芝居は舞台が開きますと、サーッと1匹のコウモリが通るんですね。そっからドラキュラが暗いマントで出て来るんですね。

出て来てパッと広げたら、そのマントの裏が真っ赤なんです。それでドラキュラが降りて来るいうところの開幕がすごかったけれども、ドラキュラというこういうものを、バカバカしいものを、アメリカのブロードウェイがもういまだに舞台をやっているところがやっぱりドラキュラいうものの、このひのき舞台の恰幅の、ドラキュラの価値があるんでしょうね。

という訳で、日本で四谷怪談があるように、外国ではドラキュラが有名ですねえ。

で、ドラキュラ。これと吸血鬼と一緒にありますけれども、ドラキュラは、このゴースト作品のナンバーワンですね。



ヴァンパイア

Vampyr

(1932・フランス／ドイツ)

監督：カール・テオドア・ドライヤー

出演：ジュリアン・ウェスト／アンリエット・ジェラール



〈作品データ〉

制作年…1932年

制作国…フランス／ドイツ

時間……71分

監督……カール・テオドア・ドライヤー

脚本……カール・テオドア・ドライヤー／クリステン・ジュル

撮影……ルドルフ・マテ

出演……ジュリアン・ウェスト／アンリエット・ジェラル／モーリス・シュルツ

〈作品解説〉

吸血鬼を扱った作品は今日まで数多く作られているが、このカール・ドライヤー監督の怪奇映画のヴァンパイアはなんと女性。かつてこの世で犯した罪によって墓に入った女性が夜になると墓から出て人間の生き血を吸う。主人公が現実と夢の中で交錯する幻想的なシーンは前衛的な手法で映像化され、ドライヤー監督の才気を感じさせる異色映画になっている。

吸血鬼『ヴァンパイア』これね、デンマークの、カール・ドライヤー。あの監督の作品ですから、一癖も二癖もあるのね。この監督は、非常に、目で見せて、怖がらす作品を作りますね。

『ヴァンパイア』、この時に、初めて私たちは、映画で吸血鬼というのを知りました。

この映画は、人の首にかみついて、血を吸うようなヴァンパイアじゃないの。吸血鬼が、確かにこの村に来た！！みんなで、大騒ぎ。探すんです。吸血鬼が逃げ回るんです。えらい映画ですね。吸血鬼が逃げ回るの。

それで、吸血鬼がね、あの一農夫の、この道具のある、この農具のいつばいある所に、逃げ込むのね。で、じいっと隠れているとね、ランプでね、壁にね、クワとか、それから、車輪とか、いろんなの映ってるのね。その壁に映ってる車輪、あるいは、クワ、なんかそんなもんがね、キラキラキラ動くのね。ヴァンパイア、じいっと隠れてるのに、影だけが動くのね。それだけが何とも知れん怖かったの。この監督の感覚ですね。何とも怖かった。

で、みんなが、向こうにいるぞ！向こうにいるぞ！っていうのわかってきて、ヴァンパイアはまた逃げなくちゃならない。こういうヴァンパイアを観たことがなかった。逃げるの。あちこち逃げるんです。逃げるけどね、しまいに行く所がないからね、材木を切る所に入っちゃったのね。材木の粉がずーっと落ちて行く穴の中へ飛び込んだじゃったのね。その中でじいっとしておったら、粉が上から、上から、上から、かぶさって、かぶさって、かぶさって、吸血鬼の頭まで、粉で隠れちゃったのね。で、その粉がジクジク、ジクジク動くのね。まだ、生きてるのね。生き埋めだね。そのジクジク動くところが、怖いんだね。

みんなが殴り殺しに叩いて、あるいはピストルで殺すんだったらいいけど、生き埋めだ。しかも粉なの。土じゃないのね。材木の粉、カンナくずいつばい、その中にはまって、ジクジク動くの。ずっと上から見てるの。見ている残酷さ。吸血鬼が殺される、死ぬ、怖さ。それが、凄いなー。

死にました。死体になった。みんなで、担ぎ出した。もう完全に死んだ。それで、棺桶に入れた。もう、これでいいわ、これで死んだいうので、みんなでお葬式だ。吸血鬼のお葬式。カメラ上から、撮ってるの。外国のお葬式は、棺桶の上の窓の所がガラスなのね。開いてるのね、棺桶がね。ガラスで。上から撮ってるのね。で、吸血鬼がね、もう死体になって寝てるのね。ずーっと運んでるところ、上からずーっと撮ってくとガラスの中の、吸血鬼の死体の顔の目が、グッと開くのね。おつかないねえ。担いでる人は、まさか吸血鬼が、棺桶の中で、生きてるとは思わないのね。

そういうところが、この監督の何とも知れん、感覚ですね。いかにも怖がるところがね、目で見て、つまり、映画というものが、こんなに力があるんだよ、いうとこ、見せてるんですね。

小説では、こういう名文で書くだろうし、音楽だったら、怖ーくね、やるだろうけど、この監督は、目で見て、目で見て、目で見て、これが怖いだろ！怖いだろ！というところを見せてますね。

そういう訳で、あらゆる吸血鬼映画、ヴァンパイア映画の中で、最高なのがこの監督の映画ですね。カール・ドライヤー。いかにも、いかにも、カール・ドライヤーの感覚、出しましたね。



ジキル博士とハイド氏

Dr. Jekyll and Mr. Hyde

(1932・アメリカ)

監督：ルーベン・マムーリアン

出演：フレデリック・マーチ／ミリアム・ホプキンス



〈作品データ〉

受賞歴…1931～32年アカデミー賞主演男優賞／脚色賞ノミネート／撮影賞（白黒）ノミネート1932年ヴェネチア国際映画祭男優賞／独創的な映画賞

制作年…1932年

制作国…アメリカ

時間……98分

原作……ロバート・ルイス・スティーヴンソン

監督……ルーベン・マムーリアン

脚本……サミュエル・ホッフエンスタイン／パーシー・ヒース

撮影……カール・ストラス

出演……フレデリック・マーチ／ミリアム・ホプキンス／ローズ・ホバート／ホームズ・ハーバート／E・ノートン

〈作品解説〉

ブロードウェイ出身のルーベン・マムーリアンが監督したSF・ホラーの快作。ジキル博士は人間の精神を分ける薬品の開発に成功し、自らを善のジキル博士と悪のハイド氏に分離する。主演のフレドリック・マーチがアカデミー主演男優賞。1996年に『ジキル&ハイド』の題名で再映画化。ジョン・マルコヴィッチとジュリア・ロバーツが共演している。

はい、ロバート・ステイヴンソン原作の、『ジキルとハイド』。これは、もう早くから評判な小説で、もうみんなが愛読しましたね。怖い、怖い、スリル、サスペンスですね。

これを活動写真が、もう初めからこれに食らいつきました。

なぜ食らいついたかと言いますと、ジキルという立派な、立派な、博士、それが自分で作った薬、それ飲んだら、だんだん、だんだん顔が変わってきて悪い、悪い男になるんですね。

そしてその薬をまた飲むと、元の立派な博士になるんですね、そういうアイデアの映画。

けど原作者は、人間の中にはみんなそんなのがある、奇麗な人、たとえば岡田さんとか、小林さんとか、いろんな方があって立派な人でも、時々夜中になったら悪い、悪い男になったりする。人間はみんなそんなもの持つてる。それをうまく利用したんですね。

それで活動写真の初期に、もう『ジキルとハイド』は映画になりました。それからサイレントの時に、ジョン・バリモア、これがジキルとハイドになりまして怖かったなあ。

そして、1人のね、怖いね、怖い目の女がいるんです。酒場の女、それをニタ・ナルディが演ったんですね、これが良かった。

ところが、どんどん、どんどん、後に、映画がトーキーになりました。で、パラマウントは、どうしようか、むづかしいな思った時に、ルーベン・マムーリアンという有名な、有名な監督がいました。『ボギーとベス』、舞台で有名なあの舞台劇をやった人です。

ルーベン・マムーリアン、これと呼んで『ジキルとハイド』を作りました。

さあそれ、良かったなあ。フレデリック・マーチという名優が『ジキルとハイド』になるんですね。そうしてそのハイドにいじめられる、かわいそうな女、それをミリアム・ホブキンスが演るんですね、この役がいいんだねえ。

という訳で、この博士が立派なフレデリック・マーチ、上品な、上品な、男優が薬飲むと、どんどん、どんどん、顔が変わってくるんですね。知らぬ間に、こう顔が、相が崩れてくるんですね。そーっとするんですね。

そしてそういう時に、このハイドは酒場へ行って女探すんですね。どうして探したかいうと、真面目な、真面目な博士が無理に酒場へ連れて行く、いうような時に、むこうの方で博士を誘惑する女がいるんですね。それがミリアム・ホブキンスが演りましたが、このベッドから足をブラーン、ブラーンと振るんですね。

「あんた、おいでよ、おいでよ、おまえ、おいでよ」いう顔をするんですね。それがこの真面目な、真面目な博士の脳裏に入っちゃってるんです。

「怖い女だな、やな女だな、けど奇麗な、奇麗な」。

それがこのハイドになったら、もうどんどん夢中になって、そこへ行って、その女つかまえて来るんですね。その酒場で、そうして「おまえか、おまえか、おまえがあの女か」。女はびっくりするんですね。しかももう背中に、もう、指の跡をいっぱいつけて。もう体中、体中、つねり歩いて傷だらけにするんですね。

ミリアム・ホブキンスのこの酒場の女が、怖くて、怖くて、震え上がってハイドが来たら逃げ回るんですね、あんまりハイドにいじめられるから。

とうとう情けなくて死にそうになったんで、この人、「どうか私を助けてください」と言って、ジキル博士に頼みに行くところ、あるんですね。ジキルがハイドになると思わないんですね。

「ジキルさん、ジキルさん、私の背中見てください。こんなに傷があるんですよ、怖い、怖い男がいて私をいじめるんです」言うところが凄かったなあ。

ジキル博士は、ぞつとするんですねえ。自分が、自分がやったんだから、というふうな場面がルーベン・マムーリアン監督だから、見事なんですわね。

で、ミリアム・ホプキンス、フレデリック・マーチ、この演技がいいんですね。

という訳で、『ジキルとハイド』は有名でした。後にどんどん、どんどん、再映画化、再映画化されて、いまだに上映されますねえ。

最近ではジキル博士、あのジキル博士の女中さんの映画も出て来ましたね。

という訳で、どんどん出て来ますけど、残酷と美とそれを一緒に持って来て、しかも人間の一番弱いところ、人間の持つてる、みんなが持つてる弱いところ、男の弱いところ、それを見事に映画にしてるので、『ジキルとハイド』は、いまだに死なない、名作ですね。



キング・コング

King Kong

(1933・アメリカ)

監督：メリアン・C・クーパー

出演：フェイ・レイ／ロバート・アームストロング



〈作品データ〉

- 制作年…1933年
- 制作国…アメリカ
- 時間……100分
- 原作……エドガー・ウォレス
- 監督……メリアン・C・クーパー
- 撮影……ウィリス・H・オブライエン
- 音楽……マックス・スタイナー
- 出演……フェイ・レイ／ロバート・アームストロング／ブルース・キャボット

〈作品解説〉

1976年にジェシカ・ラング主演で映画化されたが、本作はキング・コング映画の記念すべき第1作。ジャングルで人間どもに捕らえられたキング・コングはニューヨークで大暴れ。摩天楼の頂上でコングが飛行機と渡り合うシーン、有史前の巨獣のトリック撮影などまさにSFX映画の原点。主演の美女はフェイ・レイ。巨大な猿と美女の悲しい愛の物語が泣かせる。メリアン・C・クーパー監督。

『キング・コング』は、一体いつ、生まれたんでしょう。

『キング・コング』、名前がいいね。コングというのは、大きな大きなお猿さんですね。

キング、その王様ですね。『キング・コング』、このタイトルがうまかったね。

で、これはどうして生まれたかといいますと、昔々サイレントの頃に『ロスト・ワールド』、世界の終わり、そういうような映画作ったことがあるんですね。

これが初めての、アメリカの超大作のトリックですね。大きな、大きな、ブロントサウルスとかいう恐竜が出て来て、大きな、大きな恐竜同士が、食いつこするんですね。それを、粘土で作って、うまく、うまく動かして、本当に大きな大きな、そういう恐竜が出て来るような映画作ったんですね、『ロスト・ワールド』。

それ観てお客さんがびつくりしたんですね。凄いなあ、ファースト・ナショナル、いうところが作ったんですね。わーっと思って、あんまり興行が当たったもんで、それではもう1本作ろうか、と考えたのが『キング・コング』ですね。

そして、この『キング・コング』、やっぱりトリックで作ったんですね。私は『キング・コング』があんまり凄かったんで、それを作ったRKOへ行っただけですね。

「『キング・コング』、あれ、良かったね、どんな大きなお猿ですか？」

「いやまだあるんだよ」言うから、

「あらっ、まだあるの？ 猿、あるんですか、どこにどこに？」とスタジオ行ったら、大きな大きな所に、大きなお猿がおるのか思ったら違うんですね。ほんのこんぐらいの、僕の体ぐらいのお猿が3匹、4匹、5匹、6匹いたんですね。

「何なの、これ？」言ったら、

「この一番大きいのが、淀川さんのこの体ぐらいで、あとはみんなちっさいの」

「それがセットの中で、うまいく大きく見えるの」

「で、一番最後に大暴れするのが、淀川さんぐらいの大きさの猿なんです」

だから、みんな小さいの。

ところが見てると、スイッチ入れると指が全部動くの、指の1本1本が。こう、この先まで動くの。で、顔も目も動くの。

という訳で第1回目に作った『キング・コング』、これがえらい評判になったの。お猿がかわいい、かわいい女の人を好きになって、それでびつくりしたんですけど、一番びつくりしたことは、そのフェイ・レイの扮してる女の人のかぶり声。

このかぶり声、「キヤー——」言うのがね、ただごとやないぐらい叫びが凄かったのね、えらい評判になったの。

それでフェイ・レイいう女優は、それから後にかぶり声の映画ばかり出たのね。なんか、ギャングに追われて「キヤー」、そんなんばかり出されて、かぶり声の女優さんになっちゃったんですね。

ということがありましたけれども、フェイ・レイが有名になったのは、この『キング・コング』でしたね。

それから後に『キング・コング』は、みなさんをご存知のように、トーキーにもなりましたし、いろいろできましたけど、なぜこれが面白かったか？ それは、怖い、怖い、怪獣ですね、怖い、怖い、巨猿ですね、大きな、大きな、

怖い、怖い、巨猿が人を食い殺すんじゃないくて、かわいい、奇麗な女の人に、手の上に乗るような女の人に、夢中になって、夢中になって、愛を感じたいところが評判になったんです。

これがこの『キング・コング』の、最も大切なところですね。かわいい、かわいい女の人に、愛を感じたんですね、『キング・コング』が。それでこの『キング・コング』は、有名になったんです。

これがもしも、暴れ回って、暴れ回って、地下鉄も自動車もひっくり返す、それだけで終わったらこんなに命が永くないと思います。

とにかく『キング・コング』は愛のお猿さん。しかもそれが、かわいい、かわいい女の子を愛したのに、最後は無残に殺される。

高い塔に上って行くその猿を飛行機からパンパン撃つ場面、今でもあるんですね。手でつかんで、飛行機をつぶすところ、あるんですね。

そしてまた同じように、『キング・コング』が倒れるところ映してますね。倒れてパターンと倒れるところ。

ああいうふうに、愛の、愛の巨猿が、大きな猿が倒れて死んじゃうところが、いかにもかわいそうですね。

『キング・コング』は、ただ大きいだけじゃなくて、そういう映画なので評判とりましたね。

『キング・コング』、『キング・コング』、このタイトルが良かったんですねえ。



淀川長治
クラシック名画解説全集 I



スペクタクル・史劇

『血と砂』『ベン・ハー』他(全8話)

World Classic film Selection





血と砂

Blood and Sand

(1922・アメリカ)

監督：フレッド・ニブロ

出演：ルドルフ・ヴァレンチノ／ニタ・ナルディ



〈作品データ〉

- 制作年…1922年
- 制作国…アメリカ
- 時間……60分
- 原作……ヴィンセンテ・ブラスコ・イバーニエス
- 監督……フレッド・ニブロ
- 脚本……ジューン・メイシス
- 撮影……アルヴィン・ワイコフ
- 出演……ルドルフ・ヴァレンチノ／ニタ・ナルディ／ライラ・リー

〈作品解説〉

サイレント映画史上最高の美男スター、ルドルフ・ヴァレンチノの代表作。花形闘牛士が貞淑な妻と妖艶な悪女の間で苦悩し、やがて闘牛場で倒れるまでが描かれている。このころヴァレンチノは人気絶頂。公開当時ニタ・ナルディとの長いキスシーンが話題になった。1989年にリメイクされ、悪女役をシャロン・ストーンが演じた。

ルドルフ・ヴァレンチノ、ご存知ですか。

サイレントの最高の美男子ですね。

そして、この『血と砂』。これがヴァレンチノの代表作ですね。

共演がニタ・ナルディ。とっても妖艶ないかにも毒婦タイプの女、それとライラ・リー、優しい女が共演しました。

『血と砂』は闘牛士の話ですね。闘牛士が、もう本当に男の中の男だけど、最後の最後は群集の前で牛に突かれて死んじゃう。いかにもかわいいような映画でしたね。

このルドルフ・ヴァレンチノ、サイレントの大スター。

わずか、31才で亡くなりました。

けれどもヴァレンチノはほんとに、あらゆる世界中の女性に好かれました。

そうして最後に、一番最後に結婚するぎりぎりまで決まった女優が、ポーラ・ネグリでした。

そうして31才で、ニューヨークの病院で死んだ時に、もう泣いて泣いて泣いて、何百人、何千人近い女性が葬列に後ろからどんどん、どんどんついて行って、騎馬隊が整理したけど、その後に残った女の靴が10足あったそうです、散らばって。

もうあんまり慌てて靴が脱げてまで後を追いかけたんですね。

ヴァレンチノは、そんなハンサムでした。

で、ヴァレンチノはイタリアで、お母さんがフランスで、お父さんはロシア。アメリカへ来た時には本当に貧乏人で、公園の植木屋さんだったり、いろんなことして、とうとうジゴロになりまして転職。ダンスして女から金もらう、そういうことやって、どんどん、どんどん有名になろうとあがいたヴァレンチノでしたね。

ヴァレンチノには3人も4人も、たくさんの相手の女がいましたが、ヴァレンチノはいつでも寂しい人でした。

ナターシャ・ランボーという美術家に抱えられて、ずーっと有名になっていったんだけど、この人はホモセクシャル、女嫌いだから余計面白かったんですね。

一度この人はセットで芝居していると、電気屋さんが上からバンジーを投げてきたんです。

そのバンジーというのは、男のお尻の意味なんですね。

それでヴァレンチノはとっても怒って拳闘したことがあるんですね、俺は男だって。

そういうふうなヴァレンチノ、けれどもサイレント、ほんとに一言も言葉を言わないで、サイレントで亡くなりました。

私はロサンゼルスで、この人のレコード聴きました。

それまで声というもの1回も聴いたことない。聴いた時、タンゴ歌いました、2曲。

もうそのタンゴ、聴いた時ぞーっとするほど下手でした、声が悪かった。

けれども、とうとう一言も声を出さないで亡くなったヴァレンチノ、本当に幸せでした。



ベン・ハー

Ben Hur

(1925・アメリカ)

監督：フレッド・ニブロ

出演：ラモン・ノヴァロ／メイ・マカヴォイ



〈作品データ〉

- 受賞歴…1928年キネマ旬報外国映画ベストテン第4位
- 制作年…1925年
- 制作国…アメリカ
- 時間……141分
- 原作……リュウ・ウォーレス
- 監督……フレッド・ニプロ
- 脚本……ジューン・メイシス
- 撮影……ルネ・ガイザート／カール・ストラス／パーシー・ヒルバーン／クライド・デ・ヴィンナ
- 音楽……ウィリアム・アクスト
- 出演……ラモン・ノヴァロ／フランシス・X・ブッシュマン／メイ・マカヴォイ／ベティ・ブロンソン

〈作品解説〉

サイレント時代を代表するスペクタクル史劇の傑作。舞台は古代ローマ。名家出身でありながら奴隷に身を落とし、たベン・ハー（ラモン・ノヴァロ）は誇りと復讐をかけて宿敵メッサラとの戦いに挑む。クライマックスの戦車競走シーンは圧巻。1959年にウィリアム・ワイラー監督で再映画化されたが、本作はそれに匹敵するスケールの大きさと迫力、格調の高さを持っている。

はい、『ベン・ハー』、もうこれは大変な作品ですよ。MGMがこれを2回作つとります。

サイレントの頃はフレッド・ニプロという監督、トーキーになったらウィリアム・ワイラー、ワイラーがこんな映画作つたんですよ。で、サイレントの頃はラモン・ノヴァロいう、かわいらしいヤサ男、それがベン・ハーを演りました。

フランシス・X・ブッシュマン、これは大きな男でねえ。この人は最初の『ロミオとジュリエット』、サイレントのロミオ、すごい当たり役だったんですよ。

美男子で体格が良くて、これがサイレントのメッサラとラモン・ノヴァロのこのベン・ハーの配役でしたね。

トーキーになったら、チャールストン・ヘストンとウィリアム・ボイドですか、チャールズ・ボイドですか、そういう役でしたね。

『ベン・ハー』の見どころ、これは戦車競走ですわね。ベン・ハーと親友だったメッサラ、これが途中で敵と味方になつちやつたんですよ。ベン・ハーはユダヤ人、片方はそうでないような関係もあつたんでしょう。

そして2人が偶然にも戦車競走の選手になつたんですよ。2人が競走するんですよ。その場面が映画史上、今日まで一番凄いカメラ。

『駅馬車』でどんどん、どんどんカメラが動きましたね、あれ以上のカメラだったんですよ。

『ベン・ハー』いいますと、この戦車競走が見どころなんですよ。サイレントの頃、この凄いカメラでびつくりしたんですよ。

映画の歴史に『ベン・ハー』、サイレントの『ベン・ハー』は戦車競走で大きく、大きく、カメラの歴史の第一番に残つたんですよ。

ところがトーキーになった。ワイラーですね。ワイラーがこれやれるのか？思つたら、やっぱりワイラーはこの戦車競走をフレッド・ニプロのサイレントに負けない凄いアクションでやりましたわね。

これがこの『ベン・ハー』の一番の見どころですね。

どういふ競走か言いますとね、あの戦車競走、馬に乗って後ろから馬を操って、スーッと、走りますわね。その時にメッサラの方は、どんどん、どんどん、ベン・ハーの車にぶつけていくんですよ。そしてベン・ハーを倒そうとするんですよ。

その間にムチで馬を叩かないでベン・ハーの方を叩くんですよ、卑怯な男ですね。

それがどんどん寄って来て、そのベン・ハーの車輪に「ドン」とあたっていくんですよ。

そこらあたりが凄いですわね。カメラが凄いですわね。広い、広い、広場をどんどん、どんどん走るのをカメラが、ずーと追っかけてるんですよ。この撮影は見ものですわね。

という訳で、このカメラ、このカメラが最高ですね。けれどもお話がやっぱりベン・ハーがユダヤ人で、片方がそうでなくて、2人が親友だったのが喧嘩して仲悪くなっていくとこあたりに、何かしら当時のバイブル、それを描いてるようなところなんですわね。

ベン・ハーがだんだん、奴隷に売られたり、いろんなことで苦しむんですよ。そして最後の方で非常に苦しむんだけど、イエス・キリスト様がゴルゴダの丘に上がって行く時に十字架をかかえて喘ぎながら、みんな、わーってね、キリストをばかにして叫んでいるんですよ。

そういうバイブルのストーリーも入れて、この『ベン・ハー』は世界中で人気ありましたが、MGMはこの映画でたいへん儲けたんですね。

『ベン・ハー』はMGMの宝ですね。けれども僕らが観るのは、やっぱりカメラ。そのカメラの凄いこと、もうびつくりするぐらいですよ。

そういう訳で、映画の歴史として『ベン・ハー』のカメラ、これは永久に映画の歴史の中でカメラの読本として残るでしょうねえ。

そういう訳で『ベン・ハー』はいろんな意味で、よくもこんだけ撮影できたなあ、さあ、それはどんな撮影したんだろう、それがみなさんの見どころだと思いますねえ。



十誡

The Ten Commandments

(1923・アメリカ)

監督：セシル・B・デミル

出演：テオドラ・ロバーツ / シャルル・ド・ローシュ



〈作品データ〉

製作年…1923年

制作国…アメリカ

時間……146分

監督……セシル・B・デミル

脚本……ジャニー・マクファーソン

撮影……ペパーレル・マーレー／ジェー・S・ウェスターバーグ／アーチャー・スタウト

出演……テオドラ・ロバーツ／シャルル・ド・ローシュ　／エステル・テイラー／リチャード・ディックス／ロッド・ラ・ロック／レアトリス・ジョイ／ニタ・ナルディ／アグネス・エヤーズ／チャールズ・ファレル

〈作品解説〉

スペクタクル映画の巨匠セシル・B・デミル監督の大作。2つの物語で構成され、古代編は「旧約聖書」。モーゼはイスラエルの民を率いてエジプトを脱出、神に祈って紅海を2つに裂きエジプト軍を全滅させる。海が割れるシーンは圧巻。現代編はモーゼの精神を持っている正直な兄と利己主義な弟のドラマ。総製作費147万ドルで記録的大ヒットとなった。デミル監督は1956年に『十戒』というタイトルで再映画化している。

デミルの『十誡』。このお話ししましょうね。私の言いたいデミルの『十誡』は、サイレントの頃のです。

テンコマンドメンツ、これは後にカラーになってもの凄い時代劇になりましたね。デミルは、最もこの『十戒』が好きでした。けど、私が今、お話ししたいのは、サイレントの頃の『十誡』。面白いんですね。現代劇なんですよ。

モーゼがいて、モーゼが戒めたんですね。「汝、欺くなかれ。汝、何々するなかれ」。十の戒めを説いたんですね。そういう映画、そうして、時代劇が始まるんですけど、バビロンの。けれども、これは時代劇と現代劇とを交互に見せる、面白い、デミルの映画だったんですね。

「汝、欺くなかれ」。モーゼのその言葉の後に、現代劇が出て来るんですね。モダンな憎たらしい弟と、かたーいお兄さん、と兄弟がいたんですね。お母さんは、いいお母さん。ところが、弟は、過保護で悪い男の子になったんですね。で、お兄さんは、立派な立派な人で、建築家なんですね。ついに、大きな大きな教会ができたんですね。お兄さんのおかげで。さあ、教会ができたんで、みんなが、喜んで、喜んで、お参りに行って、お母さんは、「私の息子がこんな立派な教会作ったんだな」って喜んで泣いたんですね。そうして、みんなが喜んで開会の式が始まった時に、天井にカーツと地割れがしてきたんですね。サイレントだけど、本当に天井がガラガラガラツと鳴り響くような音がしたんですね。

で、みんなが、ワァーツと言つてると、上から、ザァーツと、落ちて来たんですね。天井が。大きな大きな教会が崩れたんですね。お母さんは下敷きになって、死んじゃったんですね。兄さんは、泣いたんですね。「この教会がつぶれることはない！！」と泣いたんですね。どう考えても、この教会のこのセメントに何か不正があったのに違いない！！ どんどん調べさせたんですね。調べさすと、自分の弟がこのセメントに最も悪い砂を混ぜて、うんと儲けてその金を懐に入れたことがわかってきたんですね。

お母さんを亡くした。弟が許せない！ ということで、弟、追っつけたんですね。弟はもう逃げ場がなくなったんですね。もうこのアメリカにおれない。外国に逃げなくちゃ、おれない。それで、自分は外国に逃げるにも、ちょうど、その時金持っていない。どうしよう！ と思ったんですね。それに、自分の相手になってる悪い女がいたんですね。その悪い女、ニタ・ナルディ。それに少しでも金もらおうと思って、ニタ・ナルディの綺麗な、綺麗な館に行ったんですね。

そこにセクシーな女ニタ・ナルディがいて、「何しに来たの？」と言ったんですね。「俺ね、どうしても、逃げなくちゃならないんだ。おまえ、一緒に逃げよう」「あはは。あなたと一緒に逃げる？ ばかなこと言わないでくださいよ」と言ったんです。「よし、それなら、俺逃げるからおまえのそのネックレス、そのイヤリング、おまえの腕輪、ブレスレット、それ、くれ！ 俺はそれを持ってここから逃げる」って言ったら、「嫌ですよ！ あなた、これ、私にくれたんでしょ。誰が、あげるもんですか！」そこで、首つかみ合いの喧嘩になって、とうとう、そのニタ・ナルディの首を絞めたんですね。キューつと。殺しかけたんですね。で、女が「助けてー！」と言った時に、手を離れた。

で、死にかけた女が顔を上げて、「あんたにあげた物がある」って言ったんですね。「何、くれたんだ？」「いえ、私はあんたにちゃんとあげてるんだよ。今更、私からもぎ取る物は何もないよ！」「何、くれたんだ？」「あんたにあげた物は、私の毒の血だ！」と言ったんですね。「その毒の病気の血を私は持つて。誰にも隠していただ、あんたにそれは移ってるんです」言うたんで、男はびっくりしてゾツとする。そういう話があるんですね。

『十誡』のそれが一場面ですね。『十誡』はそういうふうに関現代劇の怖い怖い場面があったんです。初めは。また、次の場面、次の場面と、現代劇と時代劇が交互に交互に出たんですね。それが後に、カラーになって、時代劇だけの『十戒』になりました。けど、初めの、サイレントの時の、現代とモーゼの時代、それがまたなかなか面白かった。

デミルという人は、そういう人で、面白い、面白い映画作る。そうして、必ず女が奇麗な、奇麗な女が出て来る。その女のイヤリング、女のネックレス、その女の衣装、それは、見事な物で、もう本当最高の最高のモダン、最高の流行の衣装を見せる。けど、それだけでは困るので時代劇を。時代劇、『十誠』あのモーゼの十誠で、航海が真つ二つに割れる。ああいうのを観せて、男にも喜ばせる映画を作る。「映画とは娯楽だ！」「映画は娯楽だ！」「映画とは面白くなくてはいけない！」それがデミルのいつも言っていることでしたね。



クレオパトラ

Cleopatra

(1934・アメリカ)

監督：セシル・B・デミル

出演：クロードット・コルベール／ウォーレン・ウィリアム



〈作品データ〉

受賞歴…1934年アカデミー賞撮影賞

制作年…1934年

制作国…アメリカ

時間……99分

監督……セシル・B・デミル

脚本……バートレット・コーマック

撮影……ヴィクター・ミルナー

音楽……ルドルフ・G・コップ

出演……クローデット・コルベール／ウォーレン・ウィリアム／ヘンリー・ウィルコクソン／ガートルード・マイケル

〈作品解説〉

大作主義のセシル・B・デミル監督が製作したスペクタクル史劇。エジプトの女王クレオパトラは独裁者の夫ジュリアス・シーザーが暗殺されたあと、副官マーク・アントニーと結ばれる。これがもとでエジプトとローマは大海戦へ。クレオパトラを演じたクローデット・コルベールは絢爛豪華でチャarmingな女王。1963年にエリザベス・テラーでリメイクされているが、2人の美人を見比べるのもなんとも楽しい。

はい。『クレオパトラ』これは、有名な話ですね。それを、デミルが演出しました。

セシル・B・デミルが、『クレオパトラ』をやる。もうこれは、もう極めつけだ。『クレオパトラ』は、デミル以外、やれない！というぐらいに、もう、華麗なる題材ですね。

で、この、『クレオパトラ』を誰がやるか？ グロリア・スワンソン、NO! 嫌だ！「そういうふうな、怖いから嫌だ！」言ったね。どんどん、どんどん、みんな頼んだけど、みんな、NO! NO! NO! NO! 「クレオパトラみたいな、立派な役はやれない！女優として嫌だ！」と言ったんですね。

とうとう、クローデッド・コルベール持ってたんですね。で、コルベールはYES! と言ったんですね。コルベールは、アメリカで、有名な、有名な女優になりましたけれども、生まれはフランスなんですね。だから、非常に粋な、女なんですね。

それを、デミルが、「あんた、出なさい！」『十字軍』に出たんですね。デミル映画の『十字軍』に、ちょっと。だから、もう、デミルに言われて、NO! と言えなかったんですね。で、コルベールが、クレオパトラやった。さあ、これが、また、評判になりました。

そうして、後に、リズとバートンで、やりましたね。『クレオパトラ』は、リズ・テラー（エリザベス・テラー）これ、やりましたね。さあ、これが、えらい評判になったんですね。リズ・テラーと、リチャード・バートンが、非常に仲の良い時に、これ映画にしました。この、制作プロデューサーは、ウォルター・ウェンジャーだったんですね。

さあ、これを映画にする。これで、面白い話があるんですね。ウォルター・ウェンジャーという人は、『駅馬車』のプロデューサーですね。それから、あの『歴史は夜作られる』のプロデューサーですね。で、私は、この、ウェンジャーから、銀時計もらったことが、あるんですね。『駅馬車』でね。で、『駅馬車』で、銀時計もらった、ウォルター・ウェンジャー。

だから、アメリカ行った時に、ウェンジャーに会って早速、お礼言いたかったら、NO! NO! と言われたんですね。「何で、会えないの？」言うたら、「今、監獄に入ってる」言われたんです。「え！ ウェンジャーが監獄に！」っていうんで、びっくりしたんですね。

というのは、この人は、綺麗な、綺麗な、ジョーン・ベネットいう奥さんがあったんですね。綺麗な奥さん。この奥さんが、ちょっとある事件があったんですね。ある、男と一緒にあったんですね。それをウェンジャーが、もう我慢できなくなって、相手を撃ち殺しちゃったんですね。殺人事件ですね。それで、牢獄、放り込まれたんですね。

その、ウォルター・ウェンジャー。その、ウェンジャーが、『クレオパトラ』のプロデューサーになったんですね。誰もやれないから、怖い。けど、ウェンジャーは、牢獄入ったから、そういう関係で、頑張って、頑張って、頑張ろう！いうので、あの、この『クレオパトラ』のプロデューサーになったんですね。ところが、また、これが、えらい事件、起こったんですね。というのは……リズ・テラーとバートン、アントニーがバートンですね。クレオパトラが、リズですね。この2人が結婚して、間もない頃ですね。だから、2人は、ちつとも撮影所に、来ないんですね。いつまでたつても、ハネムーンの気持ちで、今日は嫌！明日は嫌！ずっと言うんですね。で、大きな、ローマの大きなセットしてるのに、NO! と言うから、ずいぶん金使っちゃったんですね。ウォルター・ウェンジャー。

とうとう、しまいに、ウォルター・ウェンジャーは、「もう、ダメだ！ もう駄目だ！」遺書、書いたんですね。首

つろうと思って。もう、死ぬつもりだったんですね。ところが、もう、それを、もうパラマウントが止めて、「駄目！待ってくれ！待ってくれ！」えらい事件起こったんですね。

けど、リズとバートンは、そんなこと、平気ですね。もう、「今日は、このローマの撮影、イヤ！」今度は、「この、撮影イヤ！」大きな、大きなセット、大きなセット、使わないから、猫が住んじゃったんですね。で、本番、やろうと思ったら、ニャオヘンと言ったんですね。また、やり直し。

で、『クレオパトラ』は、えらい事件起こして、もう、えらい目に、ウォルター・ウェンジャー遭いましたけど、でも、そういう訳で、リズとバートンの、これは、『クレオパトラ』は、結婚の後の、非常に甘い頃の、名作です。

で、『クレオパトラ』は、何しろデミルの映画ですから、絢爛たるもんですね。見事なもんですね。

で、デミル一番の魅力は、女ですね。それから、もう、その、衣装ですね。それから、その時代の、華麗なる感覚ですね。デミルの、『クレオパトラ』は、やっぱり、デミルでなくては、できない見事な、華麗なる、超大作でしたよ。



アイアン・ホース

The Iron Horse

(1924・アメリカ)

監督：ジョン・フォード

出演：ジョージ・オブライエン／マッジ・ペラミー

／シリル・チャドウィック／フレッド・コーラー



〈作品データ〉

- 制作年…1924年
- 制作国…アメリカ
- 時間……118分
- 監督……ジョン・フォード
- 脚本……チャールズ・キャニオン／ジョン・ラッセル
- 撮影……ジョージ・シュナイダーマン
- 出演……ジョージ・オブライエン／マッジ・ベラミー／シリル・チャドウィック／フレッド・コーラー／J・ファレル・マクドナルド

〈作品解説〉

29才のジョン・フォード監督が大陸横断鉄道建設を題材にして描いた壮大な叙事詩。若い測量技師（ジョージ・オブライエン）の活躍にインディアンの襲撃、中国人労働者の苦闘などが絡む。そしてユニオンパシフィックとセントラルパシフィックの大陸横断鉄道が結ばれアメリカは近代国家として第一歩を踏み出す。破格の製作費45万ドル、興収300万ドルを挙げ、この一作でジョン・フォードの名声は動かぬものになった。

『アイアン・ホース』、このお話ししましょうね。

『アイアン・ホース』？ 何ですか？

これはインディアンが汽車を見て、『アイアン・ホース』、鉄の馬と言ったんですねえ。

で、これはどんな話か。もうこれからご覧になったらおわかりでしょうけれども、ちょうどこの映画の2年前に『幌馬車』という映画をパラマウントが作ったんですねえ。

私はこれ観てびっくりしたんですね。西部劇でこんなの初めてだったんですね。

つまり、東部で暮らせない人が、どうにかして行きたい行きたいと、西部へ西部へ行こう、百姓、農夫さんが……

『怒りの葡萄』ですね。

みんなが、もう家財道具もみんな馬車へ乗せて、西部へ西部へ行く話があったんです。

それ『幌馬車』。その馬車が全部、幌かけてあったんですね。

それを十台、二十台、三十台、百台、百台並んで、ずーつと西部へ、西部へ行くんですね。オレゴンの山の上を越えて行くんですね。

この西部劇を観てびっくりしたんですね。西部劇がオレゴンの上のロッキー山脈通る時に、雪の上を通って行くんですね。西部劇いったら砂漠だとか草原ばかりだと思ってたら、雪が出てきたって当時びっくりしたんですね。

そいで、どんどん、どんどん行くんだけど、途中で断崖絶壁にそのワゴンが落ちちゃうところがあるんですね。もう家財道具乗せて家族みんな乗って行くのに、落ちるんですね。凄いなあ。

そうして西部へ行くんですね。こんな西部劇初めてだ思った時に、これはいわゆる開拓劇なんですね。西部劇というよりもアメリカの歴史なんですね。

凄いなあがあるなあ、『幌馬車』凄いなあ思っていると、フォックスがそれから1年たって「俺とこだって作るよ」って作ったのが『アイアン・ホース』ですね。

パラマウントがああいうの作ったら、俺のとこは西と東の鉄道がずーつとどっちもどっちも、走って走って、真ん中でくつつくやつを作ってやろう。

監督は？ うん、監督は今ちょつと目ばしいのいるけど、これ、いいだろう思う。賭けだけど、いいだろう思う。誰？ ジョン・フォード、そう言ったの、びっくりしたの。

ジョン・フォードは、こんな大作作とは思わなかったの。

当時、それで一生懸命作ったのが、この『アイアン・ホース』ですね。

で、この『アイアン・ホース』は本当に鉄をどんどん、どんどん、敷くんですけど、枕木それからその線路敷くんですけど、そんなに働く人いないの。

でもう困って、困って、チャイナタウンの中国の人と日本人をどんどん使ったんですね。

で、日本人、そこで働いた人と、ぼく会ったことあるんです、もうお爺ちゃんのこと。

そしてその時に言ったのは、もうあれはねえ、ああやって一生懸命やってるうちにね、みんな疲れて喧嘩になるんですって。そうして酒飲んで、喧嘩になって倒れて死んだら、そこ、野っぱらに放っぱらかして続けて働く、そんなことが本当にあったんですって。

『アイアン・ホース』は、そういう労働者の苦しい、苦しい、男ばっかりの話を映画にしてるんですね。

で、ジョン・フォードはこれを作って、一躍ジョン・フォードは大作の監督になったんですね。これはジョン・

フォードの、本当の本格的スタートですね。

という訳で、『アイアン・ホース』はアメリカ映画の1つの歴史ですね。

歴史、大陸横断の汽車がくつついた、東と西がついた、そういう意味でこの映画の汽車と汽車とがくつつく、重なるところが大喝采。アメリカならではの映画ですよ。



バグダッドの盗賊

The Thief of Bagdad

(1924・アメリカ)

監督：ラオール・ウォルシュ

出演：ダグラス・フェアバンクス／ジュラン・ジョンストン



〈作品データ〉

制作年…1924年
制作国…アメリカ
時間……139分
原作……エルトン・トーマス
監督……ラオール・ウォルシュ
脚本……ロッタ・ウッズ
撮影……リチャード・ホーラン／P・H・ホイットマン／ケネス・マクリーン
出演……ダグラス・フェアバンクス／ジュラン・ジョンストン／メイ・ウォング／上山草人／南部邦彦／アンナ・メイ・ウォング／ブランドン・ハースト

〈作品解説〉

アメリカ映画史上最大のビッグスター、ダグラス・フェアバンクスの冒険活劇。バグダッドの町を荒らす盗賊（ダグラス）が美しい姫君に一目惚れ。ペルシャ、インド、蒙古から来た花婿候補を倒し王子様になる。精力的に飛び回るダグラスの軽快な男性美、豪華な宮殿セット、空飛ぶジュータンのシーンなど理屈抜きで楽しめる。敵役に当時アメリカで活躍していた上山草人が扮し怪演。彼は後に『七人の侍』にも出演している。

ダグラス・フェアバンクス、有名な有名な、サイレントの大スターですね。

そのダグラス・フェアバンクスが最高の『バグダッドの盗賊』、この話をしましょうね。

これ面白いんですね。

『バグダッドの盗賊』、ラオール・ウォルシュという監督が見事な成果を挙げました。

ラオール・ウォルシュに私は、ユニバーサルで会いました。

私がハリウッドに行った時に、生まれて初めて監督に生で会ったのはラオール・ウォルシュでした。

ラオール・ウォルシュに会った時に「ウォルシュさん、あなたは『バグダッドの盗賊』の監督でしたね」、それでいつべんに喜んじやったのね。

そんな古い映画言ってくれたから、よく言ってくれたない顔したんですね。

そういう訳で、ラオール・ウォルシュという人の名作ですけど、『バグダッドの盗賊』はユナイトの最高の超大作ですね。

この映画ですけど、そのセットの見事なこと。ピアズリー、あの『サロメ』の撮影者ですね……絵を描く人で、撮影じゃないね、挿し絵描く人ですね。あのスタイルで全部見事なセットなんですね。

見事なセットで、セシル・ビートンという有名な美術家が協力したんですね。

この映画観たら驚く見事さですね。

上山草人、アンナ・メイ・ウォング。

これが出て来るんですね。

蒙古の王様とそのスパイがアンナ・メイ・ウォングという中国の女ですね。

ああ、もうその舞台のきれいなこと。

ところがこの上山草人、この役、初めは違う人だったんですね。

違う人がこれやるはずだったんですね。

この初めやった人はドイツの人だったんですね。

ところが、その人が酔っ払いで出て来なくて上山草人が代わりに出るようになって、上山草人はこの役でいつべんにも有名になりました。この頬骨が立った、何とも知れないオリエンタルな顔してるのでえらい有名になったんですよ。

ところが、この人は本当はこの役じゃなかったんです。

ちょうどダウントウンに町回りの剣劇屋一座が来てたんですね。

その剣劇一座の侍役を、ラオール・ウォルシュは蒙古の王様にしようと言ったんですね。

それが蒙古の王様に決まった時に、上山草人はわざわざスタジオ行って、あの人はあまりにも町回りのお方だから、この大役にはちょっと貧相だと思います。そんなこと言っちゃったんですね。

そこで、ラオール・ウォルシュが上山草人の顔を見て、君出たまえと言ったんですね。

上山草人はそんなつもりでじゃなかった。でもウォルシュが君出たまえと言った、顔がいかにもオリエンタルだったから。

それで草人は主役することになったんです。蒙古の王様役の。

ところがそれを聞いて、この取り替えられた剣劇スターが上山草人を殺すと追っかけ回したこともあるんですね。

そういう事件もありましたけど、この映画はもう本当に美術品ですね。

アメリカ映画でこれだけの美しいセット、美しい感覚を描いた。上山草人を入れた、アンナ・メイ・ウォングを入れた、ジュラン・ジョンストンという女優を入れた、この『バグダッドの盗賊』、最高ですね。

ダグラスはいつも剣劇の俳優で、ゾロとかあんなにばっかりやってましたが、これで一躍ファンタジーの童話の中の主演になりましたね。

このダグラスがお姫様を乗せてカーペットでサーツ、空を走るとこあるんですね、星空を。

それなんか当時びっくり仰天したぐらいに、すばらしい、すばらしい超大作でしたよ。



つばさ

Wings

(1927・アメリカ)

監督：ウィリアム・A・ウェルマン

出演：クララ・ボウ／チャールズ・“バディ”・ロジャース
／リチャード・アーレン



〈作品データ〉

受賞歴…1927～28年アカデミー賞作品賞／技術効果賞1928年キネマ旬報外国映画ベストテン第5位

制作年…1927年

制作国…アメリカ

時間……140分

原作……ジョン・モンク・サウンダース

監督……ウィリアム・A・ウェルマン

脚本……ホープ・ローリング／ルイス・D・ライトン

撮影……ハリー・ベリー

出演……クララ・ボウ／チャールズ・“バディ”・ロジャース／リチャード・アーレン／ゲイリー・クーパー／エ
ル・ブレンデル／ジョヒナ・ラルストン／アルレット・マルシャル

〈作品解説〉

第1次世界大戦、ドイツの空中サーカスと呼ばれた戦闘機集団と戦うアメリカの若い空軍を描いた本格的な航空映画。戦闘と恋が激しく燃える中で、スリルたっぷりの空中戦シーンはまさに見もの。さらに若き日のゲイリー・クーパーが端役で出演しているのも注目。戦死する見習い士官に扮してたった5分間しか出ていないがその存在感は抜群で大スターへの片鱗を見せている。

『つばさ』懐かしいですねあ。

これはパラマウントの、本当の代表的大作ですねえ。ウィリアム・ウェルマンが監督しました。ウィリアム・ウェルマンの『つばさ』、これでウェルマンは一躍有名になりましたけれども、それよりもこの映画はパラマウントが、若手2人を表に出して、若手2人の売り物にしたんですね。

それはどういうわけか言いますと、この『つばさ』は第1次大戦の時の航空兵の話なんですね。

で、2人の若者が、いかにも勇敢にそれは戦う映画なんですね。その2人の若者を、リチャード・アーレン、奇麗な男でしたリチャード・アーレン。それとバディ・ロジャース、チャールズ・ロジャース。この2人を主役にしたんですね。

で、チャールズ・バディ・ロジャースがかわいい顔、リチャード・アーレンはもう最近の、2枚目みたいな顔。いい役者ですね。この2人が航空兵で活躍する話なんです。

『つばさ』というのは、本当にこの第1次大戦の、あのプロペラのある飛行機ですね。あれがどんどんどんどんどん出てきて、もう画面を斜めに切る、横に切る、十字に切る、もうこの翼がどんどんどん画面を飛び回る。

その凄さが、この『つばさ』を一躍有名にし、もうみなさんがご覧になってもサイレントの頃の大進軍、ビッグバレードの『つばさ』、これは凄いなあということになったんですね。

けれども、これで見事なことはこの2人の若者を、パラマウントが売ったこと。リチャード・アーレンと、バディ・ロジャース。

で、バディ・ロジャースはのちにメアリー・ピックフォードの旦那さんになりました。

で、メアリー・ピックフォード死ぬまでずっと仕えて、メアリー・ピックフォードの晩年まで、このバディ・ロジャースは仕えましたけれども、このバディ・ロジャース、坊ちゃん顔。それとリチャード・アーレン、美男。

その2人が、どんなにこの映画で活躍するかいというのがパラマウントの売り物ですね。

けど、これにクララ・ボウというのを入れました。クララ・ボウというのは、マリリン・モンロー、これをいつぱんに野生にしていやらしい女にしたのがクララ・ボウですね。

けどこれがまたパラマウントの売り物になったんですね。そういう訳でこれは、面白い、面白い翼の映画。

で、ウィリアム・ウェルマンは若い頃、本当に航空兵だったんですね。だから見事なんです。けれども、これで私みなさんに、「ああそうか」ということを1つ申しましょうね。

それは、その航空兵がどんどんどんテントの、テントの兵舎から出て行くところで、1人の若者が、「おい、おまえも出るんだよ」

「オー、イエッサー。出ます」

で出て行くときに、その若者がチョコレート食べてたんですね。そのチョコレート半分食べさせよう、置いたまま「はい」

と出て行ったんですね。で、それがしばらくして撃墜されて、亡くなったんですね。

「あの野郎、死んだか」

いうところがあるんですね。

その、まだ机の上にチョコレートが残っているんですね。そのチョコレートを食って出て行った若者が、ゲイリー・クーパーだったんですね。

で、ゲイリー・クーパーはその頃だあれも知らなかった。ところが日本では、この役が非常にお客さんにウケたんですね。

「ああかわいそうに。あの若い兵隊死んだのか」

「あれ誰?」

「ゲイリー・クーパーという役者よ」

「いい顔しとるな」

そういうわけで、この『つばさ』は、ゲイリー・クーパーを偶然にも日本で一番最初に売ったんですね。世界で一番ゲイリー・クーパーを認めたのは日本だったんですね。

そういう訳で、ゲイリー・クーパーがこの映画で本当に初めて出て、いい役で、有名になった役でも、この映画の面白さですけども、ウェルマン。ウェルマンという人がどんなに立派な、立派な監督だったかというのがここで言えないくらい名作をどんどんどん出しています。

で、ウィリアム・ウェルマンの『つばさ』、ゲイリー・クーパー発見の『つばさ』。それにリチャード・アーレン、バディ・ロジャースの『つばさ』、それにクララ・ボウが出てる『つばさ』。

そういうわけでパラマウントのこれは見事な大作です。

で、『つばさ』。これを今ご覧になったら、
「ああ昔こういう映画があったのか」。

もう縦横十字の画面を切るあの翼、プロペラの翼。あれがどんなに当時びっくり仰天か、いうこと。

たとえば今ご覧になって、たとえばスター・ウォーズとかご覧になって、どんなに飛行機とか航空機いうもの空を行くものが自由気ままに大きなワイドスクリーンに映るけれども、それよりもこの『つばさ』の、サイレントの頃の本当に監督、本当にこのプロペラ飛行機に夢中になった頃のこの魂が、『つばさ』には見事に出てるんですね。

そういうところに『つばさ』の愛情、ウェルマン監督の航空への、空への愛情があふれて、このウェルマンの『つばさ』はその後、『空行かば』とかいろいろと空の映画を作りました。

けど何といっても『つばさ』はサイレント映画最高の、空の名作ですね。



類猿人ターザン

Tarzan the Ape Man

(1932・アメリカ)

監督：W・S・ヴァン・ダイク

出演：ジョニー・ワイズミュラー／ニール・ハミルトン



〈作品データ〉

制作年…1932年
制作国…アメリカ
時間……99分
原作……エドガー・ライス・バローズ
監督……W・S・ヴァン・ダイク
脚本……シリル・ヒューム
撮影……ハリー・ベリー
出演……ジョニー・ワイズミュラー／モーリン・オサリヴァン／ニール・ハミルトン／C・オーブリー・スミス／
 ドリス・ロイド

〈作品解説〉

ターザン映画は1918年にエルモ・リンカーンが主演したのが第1作。以来40本以上作られてきたが、本作は歴代のターザン俳優の中で最も有名なジョニー・ワイズミュラーのデビュー作。父に同行してアフリカ探検に来た娘ジェーンはジャングルでターザンと出会い惹かれ、文明を捨てて彼と森にとどまる。極めつけの「アーアアー」という叫び声はこの作品から始まった。

『類猿人ターザン』、ターザン、ターザン、聞いただけで懐かしいなあ。

で、ワイズミュラーのターザンですけど、一番最初、大正7年頃、大昔ですねえ、ターザン、来ました。私が、そうね、10才の頃ですね、もう80年以上前だね、その頃だね。その頃、ターザン来ました。

けど、当時、だれもターザン言うのは、何のことかわからなかった。

で、映画館も類猿人なんて名前知らなかったから、ターザンで封切ろうか、ターザンで封切ったんですね。

とこれがお客さんはターザンって何だべー、知らないから、ターザン、ターザン、ターザンって何だろうと思って行ったんですね。

で、僕もターザンとは何だろう、思って観に行ったんですね。そしたら、最初ファーストシーン、お墓なんですね。

ターザンの、お父さんとお母さんの墓があって、そこに線香が置いてある。アメリカだから線香でなく油のね、入ったものが置いてある。油の入ったものが、煙が、こう、揺れてる。それがファーストシーンなのね。

そうして、お父さんお母さんは死にました。ここにターザンいう子どもは、どうして生まれたか、どうして育ったか、お母さんとお父さん死んだ時には、この子本当に生まれて間もない、子でした。それが今こうなりました、いうところから始まるんですね。

そうしてターザンの、子どもが、7才、8才の子どもがもう森林の中走り回ってるんですね。その猿と一緒に。

その猿、もう10頭、10匹いるんでしょうか、15匹いるんですか、その猿に囲まれて小さい白人の男の子、見るとその猿が全部人間が入った猿ですね。決して本当の猿じゃないですね。当時、大正時代の映画ですから、お猿が全部人間のお猿なんですけど、当時そんなこと構わないの、猿の中に囲まれた子ども、「かわいそうだなー」と思って観ていました。

ところがその子どもが、みんなと一緒に泉行って水飲むところあるんですね。で、みんながペロペロ、ペロペロ舐める時に、ターザンの子どもが、ペロペロ、水舐めた時に自分の顔が白いんですね。何でわしだけ白いんだろう、わしだけ白いんだろう、泣くんですね。

そういうところのターザンを見た時に、ターザンというのはそういう話かってんで、びっくりしたことあるんだけど、そのターザン、エルム・リンカーン、『イントレランス』で、もう巨人、巨大なる体格の男です、それがエルム・リンカーンなって、エルム・リンカーンのターザンはどんどん続きましたが、後に水泳選手のワイズミュラーがターザン演りました。

これがまた、かつこいいんだ。奇麗な体で、もうそのターザンは、もう見事なターザンだったんですね。

で、サイレントの頃は、ターザンはサイレントだから、音が声が出ない。で、胸を叩くんです、ボン、ボン、ボン、ボン、とね。

それが評判で、ターザンいいますとみんな叩くことになったんです。

ぼくら小学校ん時によく運動場でボンボン叩きましたね。真似してね。

そういうことでしたけども、トーキーになってからは、そのワイズミュラーのターザンは映えるんですね、声出してね。「ワーオーワー」このヴァン・ダイクいう監督がうまいですね。

という訳で、ターザン良くなりまして、すばらしき人気で、もうワイズミュラーのターザン、どんどん続きましてね。かつこがいいから体が。

ところがワイズミュラー、この人は、オリンピックの選手で水泳選手なんですね。俳優じゃないんですね。俳優じゃない、俳優じゃない人が、アクターじゃない人が、これを演らされて、ずーっと演って、演って、演って、演り遂げたら疲れきったんですね。

俳優でないのが、演技を続けたから、どーも変になっちゃって、晩年は病院に入ったんですね。病院に入って病院で寝ていて、時々「ワオーッ」とやるのね。ターザンの真似するのね。で、みんなに、あの人はねちよつと変になったね。かわいそうにワイズミュラーの晩年は、そういうふうなターザン狂になっちゃったんですね。ターザン狂いになったんですね。

という、かわいそうな話もありますけど、ターザンはアメリカ映画の、本当のドル箱ですね。で、ターザンといいますと、他にもたくさん、たくさん、ターザン演りましたよ。

けど、ワイズミュラーのターザンと、エルム・リンカーンが一番人気がありましたね。

で、ターザンで一番面白いの、ジェーンというのいますね。で、ジェーンがいつも相手役にターザン、ターザンここへおいで、なんて言うんですけど、僕は子どもの頃に10才の頃にターザンを観て、一番感心したところはジェーンが、バナナとってくるんですね。バナナをむいてターザンに食べさすんですね。

その時のバナナのむき方がとっても綺麗なのね。あんなにむくのね。ちっちゃーいバナナですよ、そういうところが逆に映画の面白さでしたね。

で、ターザン、ターザンと言うんですけど、このサイレントの頃は弁士がターザンと言うんですね。それ、「ターザン、ターザン、ターザン」、ターダン……に聞こえるんですね。甘えて、甘えて、「ターダン、ジェーンだよー」なんて言うのね。そういうのが印象に残ってね。

という訳で、ターザンは、アメリカ映画のやっぱり1つの名物ですね。

で、ターザン役者はエルム・リンカーンとかワイズミュラーの他、もう10人ぐらい演りましたよ、ターザンを。

という訳で、ターザンが人気あるのは、やっぱりジャングルの話だし、それと同時にお婆さんたちがターザンの男の裸、これが魅力があったんですね。

というような訳で、ターザンはアメリカの名物です。



淀川長治
クラシック名画解説全集 I



西部劇

『幌馬車』『三悪人』他(全5話)

World Classic film Selection





幌馬車

The Covered Wagon

(1923・アメリカ)

監督：ジェームス・クルーズ

出演：J・ウォーレン・ケリガン／ロイス・ウィルソン



〈作品データ〉

受賞歴…1924年キネマ旬報ベストテン娯楽的優秀映画第1位
制作年…1923年
制作国…アメリカ
時間……97分
監督……ジェームズ・クルーズ
脚本……ジャック・カニンガム
撮影……カール・ブラウン
出演……J・ウォーレン・ケリガン／ロイス・ウィルソン／ジョニー・フォックス／アーネスト・トレンス／タ
リー・マーシャル

〈作品解説〉

無声映画だがアメリカ映画史上初の本格西部劇。19世紀半ば、東部を出発した幌馬車隊はあらゆる困難を乗り越えてオレゴンを目指す。インディアンの大草原の火攻め、豪壮なバッファロー狩り、インディアンの襲撃などの障害を受けながら旅を続けるさまが壮大なスケールで描かれている。延々と続く幌馬車の隊列をはじめ西部開拓のリアルな描写が感動的だ。

パラマウント映画の『幌馬車』、これをお話ししましょうね。

特に、パラマウント映画と言いましたのは今までの西部劇、フォックスがよく撮ってました。ジョン・フォードで。

それは全部本当に砂漠、岩、そんな西部劇が多かったんですね。

ジョン・フォードは、『シャイアン・ハリー』といいましてね、あのハリー・ケリー主演の西部劇がずーっとシリーズで続いてたんですね。

だからウェスタンといいますとね、砂漠、岩、高原、そういうつもりでおりましたの。

で、ウェスタンは当時西部劇と言ってまして、ウェスタンなんか言わなかったね。西部人情劇、そう言っていました。

たいがい出て来るのは砂漠ですね。そういうので私たちは慣れてましたの。そうするとパラマウントが今度『幌馬車』というのを作ったんですね。

超大作、パラマウントが西部劇作るの。『幌馬車』、何だろう思いましたね。

しかもそれに大きな字で、The Covered Wagonって出たんです。

Covered Wagon、Covered Wagonって何だろう思いましたね。

幌なの、幌馬車なのね、ああそうかと思いました。

どうして幌馬車いうのが出たんだろう。何だろう？

観たらこの映画、その幌馬車が100台ぐらい続くんです、ずーっと続くの。

びつくりしますね。その見事な凄いスケールに。

それがどんどん、どんどん、西部から東部へやって来るんですね。ちょうどあのジョン・フォードの『怒りの葡萄』、あのようにもう東部で暮らせない連中が、全財産をその馬車に積んでどんどんどんどん、オレゴンへ、オレゴンへ、西部へ、西部へ行く映画なんですね。

で、当時これを観てびつくりしたんですね。西部劇がこんなものかと思いましたね。

そうしておまけにオレゴンの行く道、ロッキーの山を通って行くんですね。

そうすると、ロッキーの山が全部雪なんですね。

雪の西部劇、雪の場面が出る西部劇なんて当時びつくりしたんですね。

どんどん、どんどん上がって行くんだけど、この岸壁いうのかしらん、細い道を上がって行くんですね。そうするとその馬車が落ちるんですね。1台2台ぐらいダースと下へ。

それはもう、全財産乗せてる、人も乗せてる、それが落ちて死んじゃうんですね。

そういうようなこととして、西部へ西部へと東部から行ったということが、この映画観たらよくわかるんですね。

この映画観て、西部劇がこんな歴史劇作ったのかと思ってびつくりしたんですね。

その幌馬車いうのもね、インディアンがどんどん矢を投げてくる、下から矢を上げて、上へ上げて、その矢が落ちて来ると馬車にあたるような仕組みで矢をどんどんやってくるから、馬車に幌を着せたんですね。

これ、誰が考えたかいうたら、ドイツの移民が考えたんですね。ドイツ人が考えてこの幌を作ったんですね。

それがどんどん流行というのか、みんな使われて、幌馬車、Covered Wagon、そういう形になったんですね。

それがどんどん来て、西部劇がこんな立派な歴史劇になったのかと思って僕らびつくりしたんですね。

これはジェームズ・クルーズという第一級の監督が作りまして、凄いなあ、パラマウント映画はこんな凄い西部劇作ったのかと思ってびっくりしたんですね。

それでその翌年にフォックスが、何くそパラマウントに負けるもんかと作ったのがジョン・フォード主演の『アイアン・ホース』ですね。

『アイアン・ホース』は、Covered Wagonがそんな時代劇作るんだったら、俺んところは、汽車が西から東から、どんどんやって来て西部と東部が結びつく汽車の映画作ってやろう。

その汽車、インディアンがアイアン・ホースと言ってた、鉄の馬、それを使った『アイアン・ホース』、これをフォックスが作ったんですね。1年後で。

ジェームズ・クルーズが大作品作った後で、ジョン・フォードがフォックスで、『アイアン・ホース』作ったんですね。

そういう訳でこれは『幌馬車』、やがて次に『アイアン・ホース』という訳で、もう西部劇がついに歴史劇になったんですね。

そういう訳で『幌馬車』は、映画の歴史に残る、ウェスタンがこういう大作作ようになったいう、極めつけの名作ですね。



三悪人

Three Bad Men

(1926・アメリカ)

監督：ジョン・フォード

出演：ジョージ・オプライエン／オリヴ・ボーデン
／J・ファレル・マクドナルド／トム・サンチ



〈作品データ〉

- 制作年…1926年
- 制作国…アメリカ
- 時間……95分
- 原作……ハーマン・ホイテカー
- 監督……ジョン・フォード
- 脚本……ジョン・ストーン
- 出演……ジョージ・オブライエン／オリヴァー・ボードン ／J・ファレル・マクドナルド／トム・サンチ

〈作品解説〉

西部劇の巨匠ジョン・フォード監督が無声映画時代に作った傑作。おたずね者のスタンリー（ジョージ・オブライエン）ら3人は幌馬車から馬を奪おうと企てるが、別の悪党に先を越されてあえなく失敗。その上、助けを求めて来た少女を守るハメになってしまう。町にはかつてスタンリーの妹を誘拐したならず者が待ち受けていた。ジョン・フォード監督ならではのヒューマニズムが漂う。

『三悪人』、これはサイレントの頃のジョン・フォードの西部劇ですね。

で、サイレントの頃のジョン・フォードいますとね、ハリー・ケリーでね、たくさんたくさん撮ってるんです。

けど、みんな西部劇というよりも人情劇ですね。当時ウェスタンなんて言わなかったんですね、お客さんは西部人情劇と言ったんですね。

そういうふうに、何かどっかロマンティックな、悲しい恋の話が入っているんですね、ウェスタンの中に。むしろ、アメリカでもそうですけど、日本でもハリー・ケリーの西部人情劇と言ったんですね。

しかもシャイアンが舞台のものが多くて、シャイアン・ハリー、シャイアン・ハリーというので、もうジョン・フォードとハリー・ケリーのコンビは、早くから有名だったんですね。

その頃にジョン・フォードは『三悪人』というの作ったんですね。それがまたとっても良かったんですね。

どんな話か、みなさんもうとっくにご存知のように、3人の悪いやつが金持って、て一つと逃げて行くんですね、で、砂漠を横断しようと思ったら、砂漠の真ん中へんで幌馬車がひっくり返ってるんですね。

あらっと思ったら、赤ちゃんだけ、おぎゃあ、おぎゃあ、おぎゃあと言ってるんですね。

どうして『三悪人』、Three Godfather なのかというと、イエス・キリスト様がお見えになった時に、3人の賢者が「ああ、この人が、世界を救う人だ」そう言ったんですね。

その三人の賢者のことから、Threeという名前が出て来て『三悪人』、Three Godfather、二度目の方は、本当にGodfatherいう名前をつけたんですね。

そういう訳で、『三悪人』は、ジョン・フォードの名作です。

Three Godfatherの三は、イエス・キリスト様を初めて見て、この人は世界を救う人だとか言った、その3人をもじった題名ですね。

という訳で『三悪人』は、ウェスタンの、映画の歴史ですね。

戦後、私は東京に来たジョン・フォードに会ったんですね。

ジョン・フォードに会って、『駄馬車』でウォルター・ウェンジャーというプロデューサーから僕は銀時計をもらった言ったら、「そうか、見せてくれ」って本当につかみだしたね、僕の銀時計を。「Oh, yes.」僕の背中叩いたら、僕はひっくり返りそうになりましたね、力が強いんだね。

そういう訳でジョン・フォードと会いまして、いろんな話したら、このシュナイダーマンというカメラマンが凄く好きだったの私。

ジョン・フォードの映画は、みんなシュナイダーマンですね。

「シュナイダーマン、あの人どうしてますか？」言ったら、「あいつはやめたの、金ができて」。

ところが「いま1人、いいの見つけたよ、いいの見つけたよ」って、もうすごい念を押すんですね。

『黄色いリボン』で新しいカメラマンを見つけたんだ、それを念を押しましたね。

それで、監督にはどんなにカメラが大事だかということがわかったんですね。

けども、ジョン・フォードが僕の『駄馬車』の銀時計を見て、「そうか、そうか」と言ったことを今は懐かしく思いますね。



カンサス騎兵隊

Santa Fe Trail

(1940・アメリカ)

監督：マイケル・カーティス

出演：エロール・フリン／オリヴィア・デ・ハヴィランド



〈作品データ〉

制作年…1940年

制作国…アメリカ

時間……110分

監督……マイケル・カーティス

脚本……ロバート・バックナー

撮影……ソル・ポリト

音楽……マックス・スタイナー

出演……エロール・フリン／ロナルド・レーガン／オリヴィア・デ・ハヴィランド／レイモンド・マッセイ

〈作品解説〉

西部劇スターのエロール・フリンとオリヴィア・デ・ハヴィランドが主演した騎兵隊もの。南北戦争直前、過激な奴隷解放運動家ジョン・ブラウンと、これに反対する士官学校生スチュアート（フリン）たちの戦いを描く。最後はサンタフェ鉄道の開通で終わる。騎兵隊員カスターに扮したのは俳優時代のロナルド・レーガンで、のちにアメリカ大統領になっている。

この『カンサス騎兵隊』、これはただのエロール・フリンのアクション映画かと思ったらそうではないんですね。本当にあった実話、その映画化なんですね。

あの南北戦争の頃に、いろいろいろいろな事件がありまして、奴隷廃止、そういう事件ありまして、そつから起こる騎兵隊の悲しい怖い事件ですけど。

これに1人、ジョン・ブラウンが出て来るんですね。

ジョン・ブラウン、この男頑張って頑張ってやった、その事件も入っているんですね。

ジョン・ブラウン役のレイモンド・マッセイですけども、私たちは学校で勉強した時、「ジョン・ブラウンの死体を越えて」という言葉は、有名な、有名な、アメリカの言葉だということを知ったんですね。「John Brown's body」。

それでレイモンド・マッセイのこのジョン・ブラウン、うまかったんですねー。

だから『カンサス騎兵隊』もそういう意味でたかがアクションものではなかったんですね。

マイケル・カーティスの映画でしたけれどもエロール・フリンはこの大作に主演してたことで感心していたんですけど、エロール・フリンは本当に二枚目ですね。

ヴァレンチノとかクーパーとかいろいろおりますけど、エロール・フリンのこの美しさは、本当の大衆的、あらゆる人の喜ぶ美男子代表の顔ですね。

この人はとってもいい人で面白い人ですけど、酒がちょっと強いんですね。

いつでも人気があるのはちょっと酔っぱらい的なところもあるんですね。

この人が日本に来た時、私はエロール・フリンが日本に来たからいつべん会いたいと思ってホテルに行ったんですね。ハローって出て来たとき、もういっぱい顔でしたね。

私がサインしてくださいって言ったら、

「あんた何て名前ですか？」って僕の名前聞いたから、「私はYODOGAWAだ」って言ったんです。

オーケーなんて言って、サアッてサインしてくれて、僕に見せたら僕の名前書いているんです、サインに。

で、エロール・フリンの名前書いてないんですね。

「あんたのサインほしいんです」「オー、イエス」なんていってまたやり直したんですね。

初めっから調子がいいんですね。

一緒に松竹行って挨拶行っただけですね。

ちょうど三國連太郎がいたので三國連太郎を紹介したら、「オー、ナイスボーイ」なんて言いながら、やっぱり三國連太郎よりもずっと大きいんですね、エロール・フリンの方が。

この人はそういう訳で、面白い人で、アメリカ人の中でも代表的な男も好き、女も好きという俳優なんですね。

エロール・フリン、私は直に見まして、ああ、これがエロール・フリンか、見上げる高さですね。

しかも奇麗ですね顔が、見事に奇麗ですね。

というわけでエロール・フリンは、アメリカではヴァレンチノとかいろいろいますけれども、いわゆる本当の美男子ですね。



ならず者

The Outlaw

(1943・アメリカ)

監督：ハワード・ヒューズ

出演：ジェーン・ラッセル／ウォルター・ヒューストン

／トーマス・ミッチェル



〈作品データ〉

制作年…1943年

制作国…アメリカ

時間……103分

監督……ハワード・ヒューズ

脚本……ジュールス・ファースマン

撮影……グレッグ・トーランド

音楽……ヴィクター・ヤング

出演……ジェーン・ラッセル／ウォルター・ヒューストン／ジャック・ビューテル／トーマス・ミッチェル／ミ
ミ・アガグリア／ジョー・ソーヤー

〈作品解説〉

アメリカの富豪ハワード・ヒューズが監督した西部劇。西部史に登場するドク・ホリデイとビリー・ザ・キッドが火花を散らす。名優ウォルター・ヒューストンがホリデイに扮しているが、この映画の目玉は相手役リオに抜擢されたグラマー女優のジェーン・ラッセルだ。豊満な胸とのびやかな肢体。あまりにも悩ましすぎて公開禁止の憂き目を見たというわくつき。一見の価値はあるかも。

はい、『ならず者』、これはハワード・ヒューズという監督が撮りました。

で、ハワード・ヒューズは、監督というよりも制作ですね。そして大金持ちですね。

ハワード・ヒューズは飛行機の大きな、大きな会社持っていましたから大金持ちですね。

この人の道楽は、どんな役者使うか、新しい役者、自分が注目した役者を使うか、これで評判ですね。

それで、このハワード・ヒューズの『ならず者』はジェーン・ラッセル。

ジェーン・ラッセルがいかにも、おっぱいが立派で、そしていかにもこの映画に貫禄見せましたね。ハワード・ヒューズがかわいがったんですね、ジェーン・ラッセル。

ハワード・ヒューズという道楽者、アメリカの大金持ち、その監督が発見したジェーン・ラッセル。『ならず者』のすべてはジェーン・ラッセルの胸、おっぱい、大きさ、それを見せましたね。

けど、ジェーン・ラッセルはやっぱりそういう女で、映画の演技というのはそんなにうまくなかったんですね。ムードがあって非常に良かったんだけど、なかなか長続きしなかったの。

『紳士は金髪がお好き』というのがありましたね。これで、マリリン・モンローとジェーン・ラッセルが共演しましたね。そして大きな、大きなポスター作ったんですね。ジェーン・ラッセルとマリリン・モンローが後ろ向いてるポスターですね。こっち向いて足がどっちも綺麗ですね。

私はこれをニューヨークで見たんですけど、ニューヨークの劇場の大きな看板に、ジェーン・ラッセルとマリリン・モンローが2人、後ろ向いて立ってるんですね。

ところが通る人がみんな、ジェーン・ラッセルは知ってるけどマリリン・モンローはあんまりまだ知らなかったんですね。

で、みんなが、「おい、どっちが好きだ？」と言う。そういうこと聞こえるんですね。すると、みんなが「マリリン・モンローの方」「Left」、みんなが「この左の女がいいね」と言う。

マリリン・モンローが全然人気があって、ジェーン・ラッセルはすっかり人気をなくしたんですね。

『紳士は金髪がお好き』は、ジェーン・ラッセルの敗北の作品ですね。

ジェーン・ラッセルは怒ったんですね、「私、こんな恥かいたことなかった」。

そして、もの凄く怒って今度はその会社にジェーン・ラッセル主演の『紳士はブルネットがお好き』という映画作らせたんですね。

それぐらいに、ジェーン・ラッセルは権威があったんですね。

という訳で、この『ならず者』は、そのジェーン・ラッセルの胸の厚みを売った、面白い、面白い、ジェーン・ラッセル出世映画ですね。



拳銃無宿

Angel and the Badman

(1947・アメリカ)

監督：ジェームズ・エドワード・グラント

出演：ジョン・ウェイン／ゲイル・ラッセル



〈作品データ〉

- 製作年…1947年
- 制作国…アメリカ
- 時間……100分
- 監督……ジェームズ・エドワード・グラント
- 撮影……アーチャー・J・スタウト
- 音楽……リチャード・ヘイグマン／モリス・W・ストロフ
- 出演……ジョン・ウェイン／ゲイル・ラッセル／ハリー・ケリー／アイリーン・リッチ／ブルース・キャボット

〈作品解説〉

西部劇の王者ジョン・ウェインが主演した異色西部劇。原題は『Angel and the Badman』。荒くれ者の拳銃の名手クウオート（ウェイン）が、信心深い牧場の娘ペニー（ゲイル・ラッセル）と愛し合い優しい心を取り戻していく。決闘シーンが売り物の西部劇の中にあって、きめ細かな描写と抑制のきいたアクションが光り、男の正義、勇気とは何かがさわやかに描き出されている。

『拳銃無宿』、この題名聞いただけで、本当に映画好きで、映画好きで、映画を1週間に3回も4回も観てる人は、「わあ、『拳銃無宿』懐かしいなあ。ゲイル・ラッセル」そう言うんですね。

これ、ジョン・ウェインの映画ですよ。けど、ジョン・ウェインの映画だけど、観る人は、当時観る人はゲイル・ラッセルの顔を見に行くんですね。

というのはゲイル・ラッセルは綺麗な顔なんですね。この、眼が青くってね、なんとも凄い眼なんですね。

で、ゲイル・ラッセルが、もつともファンが多かった時代の作品ですね。

で、ジョン・ウェイン、ジョン・ウェインとゲイル・ラッセル、これはウェスタンの、何とも知れん、春の風のような感じの映画ですね。

私はアメリカ行きまして、二流館、三流館でいつべん映画観ようか思ってね、場末の映画館行っただけですね。

ちょうどジョン・ウェイン週間だったですね。で、ジョン・ウェインの映画やっていると、お客さんに中年のおじさんが多いんですね。

中年のおじさんがいっぱい来て、ジョン・ウェインのタイトル出たら、みんな手を叩くんですね。

「ああ、こんなにジョン・ウェインは人気あるのか」、私はこの映画は、日本の浅草で観る市川右太衛門の映画みたいな感じね、嵐寛寿郎みたいな感じと思いました。

やっぱりジョン・ウェインは、アメリカのおじさんたちの魂だと思ってね、びつくりしたことあるんですね。

そういう訳で、ジョン・ウェイン。びつくりしました。

私は、ジョン・ウェインが日本に来た時に握手しましたら、まるで野球のグローブと握手するみたいに大きな手なんですね。

そうして、「あんたはどんな映画が好きですか?」「イエッサー、イエッサー」ばっかり言ってね、ロクに返事しません、ちょっと一杯、飲んでるんですね。

いかにものんきな、いい男でしたよ。

ジョン・ウェインは、アメリカの国旗みたいな男ですね。

おじいちゃんが、ゲイル・ラッセルは知らないけどジョン・ウェインが出ると、もう本当に立ち上がって、敬礼するぐらいの人氣があったんですね。

ジョン・ウェインはアメリカの魂ですね。

大昔、メアリー・ピックフォードがアメリカの国旗みたいな娘さんだったように、このジョン・ウェインはアメリカの国旗ですね。

というわけで、いかにもアメリカ魂を持ったこのジョン・ウェイン。

アメリカに行って、初めてジョン・ウェインの価値がよくわかりましたよ。



淀川長治
クラシック名画解説全集 I



音楽映画（ミュージカル）

『ジャズ・シンガー』『ハレルヤ』他（全7話）

World Classic film Selection





ジャズ・シンガー

The Jazz Singer

(1927・アメリカ)

監督：アラン・クロスランド

出演：アル・ジョルソン／メイ・マカヴォイ



〈作品データ〉

受賞歴…1927～28年アカデミー賞脚色賞ノミネート／技術効果賞ノミネート

制作年…1927年

制作国…アメリカ

時間……100分

監督……アラン・クロスランド

脚本……アルフレッド・A・コーン

音楽……ルイス・シルヴァース

出演……アル・ジョルソン／メイ・マカヴォイ／ワーナー・オーランド／ユージニー・ベッセラー／オットー・レ
デラー／ウィリアム・デマレスト／ロスコー・カーンズ／マーナ・ロイ

〈作品解説〉

世界初のトーキー映画。主演のアル・ジョルソンはユダヤ系移民で初めてエンターテイナーとして成功を収めたが、映画は彼の自伝に基づいて作られている。父は厳格なユダヤ教の指導者だったが、アルはその地位を継がずショービジネスの世界に飛び込む。初めはサイレントだが途中から「お楽しみはこれからだ」の台詞が入り、「マミー」をアルが見事に歌う。このシーンを観て当時の観客はびっくり仰天したに違いない。

『ジャズ・シンガー』みなさん、ジャズ・シンガーってご存知ですか？ ジャズの歌手ですね。けど、これは、映画の歴史の中で、みんなが勉強して、勉強して、一番最初に勉強するのが『ジャズ・シンガー』。

というのは、トーキーの第1回作品なんですね。映画はサイレントだったの。ずっとサイレントで、トーキーになった時、大正12年頃、トーキーになりましたの。フォノフィルムと言いましてね。それを、僕、観に行つたのね。古川ロッパさんと一緒に並んで、観たのね。

フォノフィルムというのがあったの。そしたらね、最初に映つたの。真つ暗の中でカァッと音がするの。それがね雑音が、ひどい雑音なんで、みんな手叩いたの。音がする一つて喜んで、ばかだから。

それで、バイオリン弾いてる人の、手が映ったら、ピーン、ピーン、ピーンと音がしたの。わあ、凄いなあ。ピアノが映つた。ピアノがピンポン音がしたの。大統領の演説も、ちゃんと出たの。凄いなあつて言つて、観たんですけど、済んだ後でロッパさんが「もう淀川さん、映画はおしまいだな」。僕も、そうだねえなんて言つたことあるのね。

と、やがていろいろあつて、トーキーなつてきました。けど、最初トーキーはワーナーブラザーズがレコード式のトーキー作つたのね。これが、まず最初。で、ワーナーはもう倒れそうになつたのね。経済的に弱つて。ところが、ワーナーは『ジャズ・シンガー』これ、発表して、いつべんに、いつべんに、大成金になつたのね。『ジャズ・シンガー』は、そういうトーキー第1回作品です。

アル・ジョルソンという人が主演でね、見事な、見事な、映画ですけど、オールトーキーというんじゃないんですの。3分の1が音がするの。あとはサイレントだったんですよ。けれども、当時、その3分の1の音に、びっくりしたんですね。

もう、見事な、見事な、アル・ジョルソンの声、歌、それに驚いて、驚いて、みんながびっくりして、『ジャズ・シンガー』は大儲けの大儲けした。見事な、見事な、トーキー記念作品でありますよ。

この映画で、お母さんが、もう本当にね、この息子を大事に、大事にしてたのね。お父さんは、そんな歌手にならない！って怒つたのね。そうして、歌つた最初が、“マイ マミー”（お母さん）って歌だったのね。この“マイ マミー”がえらい評判でね、凄い人気なつてね。アル・ジョルソンもこの作品で、いつべんに有名になりました。

で、アル・ジョルソンは、この映画だと、いろいろ出ましたけど、これで、いつべんに有名になりまして、『ジャズ・シンガー』は、本当にアル・ジョルソンの本当の代表的、生涯の、代表的作品になりましたね。



ハレルヤ

Hallelujah!

(1929・アメリカ)

監督：キング・ヴィダー

出演：ダニエル・ヘインズ／ニナ・メイ・マツキニー
／ウィリアム・ファウンテン



〈作品データ〉

受賞歴…1929～30年アカデミー賞監督賞ノミネート

制作年…1929年

制作国…アメリカ

時間……100分

原作……キング・ヴィダー

監督……キング・ヴィダー

脚本……アルフレッド・A・コーン

撮影……ゴードン・アヴィル

出演……ダニエル・ヘインズ／ニナ・メイ・マッキニー／ウィリアム・ファウンテン／ファニー・ベル・デナイト
／ハリー・グレイ／エベレット・マッガリティ

〈作品解説〉

MGMが名匠キング・ヴィダー監督を起用して作った感動のミュージカル大作。踊り子に誘惑された綿作りの農家の青年が誤って弟を射殺、悔恨の念にかられ一度は信仰生活に入るが、再び踊り子が現れ誘惑に負けて駆け落ちする。ジャズスピリットが全編にあふれ歌い踊る。しかも出演者はオール黒人。当時としては画期的な作品であり、高い評価を受けた。

『ハレルヤ』これを今ご説明するのは、とっても幸せですね。

これはトーキーになった時、昭和4年か3年頃ですね。その頃ね、キング・ヴィダーという監督、あの『ビッグ・パレード』『シナラ』『町の風景』いい監督ですね。

キング・ヴィダーは、映画詩人ですね。

その監督が、初めて、自分で、『ハレルヤ』を考えたんですね。

トーキーになった時に、何を考えたかったっていうと、トーキーになったら一番勉強してみなさんに押せるのは、アメリカが押せるのは、あの、ブラックのメロディー、ブラックの歌、あのブラック、あの黒人の世界、あれが一番いいと思ったんです。キング・ヴィダーが。一番キング・ヴィダーがああ黒人の美しさ、ああ黒人のブルース、かわいそさ、それを見せるのが一番いいので、『ハレルヤ』というのを作ったんですね。

けれど一般の人はハレルヤというのがわからないし、オール全部黒人です。白人は1人も出ないんですね。

だから、日本では公開がなかなかできなくて、東京の有楽町の朝日会館、そこで1日だけ『ハレルヤ』やったんですね。あとはやらなかったのね。商売にならないって言って。端から端まで全部黒人ですね。

キング・ヴィダーはこんな映画を作ったんですね。アメリカでもこんな映画なかったんですね。全部黒人。

で、これを見ますと黒人がもう本当にリズムの、リズムの本当にリズムの人間でわかりますね。何かいうと体が揺れますね。何かいうと足踏みしますね。で、子どもがもう、生まれて間もない子どもが、ちっちゃーい子どもがもう初めからタップダンスやりますね。タップダンスを教えてないのに、勝手に体からタップダンスやりますね。

だからああのアメリカの音楽、アメリカのジャズ、アメリカの音楽は本当は黒人から生まれたということがはっきりわかりますね。どんなにリズムにもきれいに合わせて踊るか、歌うか、それがよくわかりますね。

キング・ヴィダーは、『ハレルヤ』に背伸びしましたね。

でね、これはニナ・メイ・マッキニーという、有名な有名な黒人のスターが出て来るんです。この黒人は、レビューのスターですけど、怖い、きれいな女です。誘惑する女ですね。

それに、ダニエル・ヘインズが出るんです。これはね、小ボートの長をやった人ですね。舞台上。これがやるんですね。

これが真面目な真面目な男で、綿を商売にして、綿をつんで町へ持ってっってお金できたんですね。お金できて持って帰る時はいっぱいなもんですね。

いっぱいになった時はね、みんなね、マッキニーのね、この酒場の女、女が誘惑するんですね。さあその誘惑するところのうまいこと。そうしてそのたびに音楽がどんどんどんどん流れて来るんですね。まあきれいですね。その音楽いいですね。

かたつぼの村ではこの息子が帰って来るので喜んで、喜んでみんなコーラスやってるんですね。その、黒人のコーラスも凄いですねえ。キング・ヴィダーが惚れ込んだんですね、このメロディーに。このブラックの、黒人のこのメロディーにもう本当に夢中になったんですね。

そうやってこの、ダニエル・ヘインズいう人がもう、真面目なのに、このニナ・メイ・マッキニーのこの酒場の女に引掛かっていくんですね。

だんだん騙されていくんですね。どんどん騙されるんですね。その騙されるところのニナ・メイ・マッキニーが誘惑が凄いですねえ。

ダンス、ダンス、ダンス。歌、歌、歌。その間もどんどんどんジャズのメロディーのもとみたいのが出て来ますね。

そうして踊って踊って踊っていくうちにとうとう、金全部巻き上げられるんですね。

巻き上げられた時に、この男は初めて、このニナ・メイ・マッキニーにね、情夫があつて、その情夫とニナ・メイ・マッキニーが共謀して俺の金をとっていくというのがわかつて、その男を探すんですね。その男を探して、探して見つけて追っかけるところは凄いいねえ。

このキング・ヴィダー大得意の移動撮影ですね。

『ビッグパレード』、ビッグ・パレードでキング・ヴィダーはどんなに移動撮影を見事に見せたかはわからない。それと同時に、この男が、その情夫の男、女が情夫の男を追っかけて追っかけて追っかけて男はどんどん逃げる逃げる逃げる。

川の中へ入る。浅い川ですね。そうやってジャブジャブジャブジャブ、ジャブジャブ、そこへ逃げて行く。後ろからジャブジャブジャブジャブ、水の中を追っかけて来る。そう、追っかけて来る。逃げる。追っかける、逃げる、追っかける。ずううううっとカメラは移動しますね。

凄いなあ、このあたりのカメラの移動は凄いいね、というわけでこの男を、殺しちゃうんですね。

というわけで、非常に黒人のこの悲しい悲しいお話なんですけど、中で、『ハレルヤ』のこのメロディー、このお葬式のメロディーとかあるいはいろんなメロディーがどんどんどん流れて、『ハレルヤ』は黒人の、本当のメロディーを、トーキーが初めて紹介した大作ですね、キング・ヴィダーの。キング・ヴィダーみたいな、この『シナラ』の、優しい監督がこんな黒人のメロディーを初めて映画に入れたのは、最高ですね。

で、アメリカで、全部オールブラックいうの、オール黒人の映画いうのは初めてですね。昭和元年頃ですか。こんな映画作った、トーキーの時に作った、しかも、キング・ヴィダーが作った、これが評判でしたね。

で、『ハレルヤ』、このハレルヤの中で、このニナ・メイ・マッキニーが酔っぱらって喜んでる。セントルイスブルースを歌いますね。そのあたりのセントブルース、歌うのが、本当の黒人が歌うのですから見事です。オリジナルですねえ。

このあたりに、この映画の、本当の、黒人の歌い方。黒人のムード、「ハレルヤ、ハレルヤ、ハレルヤ」もう悲しい時の歌。喜びの歌。

それが全部入っているところがある、この映画のキング・ヴィダーが狙っている、黒人の美術、黒人の芸術これがあふれた、『ハレルヤ』。名作ですねえ。



會議は踊る

Der Kongress Tanzt

(1931・ドイツ)

監督：エリック・シャレル

出演：リリアン・ハーヴェイ／ヴィリー・フリッチ



〈作品データ〉

受賞歴…1934年キネマ旬報外国映画ベストテン第2位

制作年…1931年

制作国…ドイツ

時間……84分

監督……エリック・シャレル

脚本……ロベルト・リープマン／ノルベルト・ファルク

撮影……カール・ホフマン

音楽……ヴェルナー・リヒャルト・ハイマン

出演……リリアン・ハーヴェイ／ヴィリー・フリッチ／コンラート・ファイト／リル・ダゴファー

〈作品解説〉

世界中を魅了したドイツオペレッタ映画の名作。1814年ナポレオンが失脚し、諸国の代表が集まりウィーン会議が開かれるが、列席したロシア皇帝は売り子の娘と知り合い、逢びきを楽しむ。しかしナポレオンのエルバ島脱出の報が伝えられ皇帝は帰国。歴史的な事件を背景にロシア皇帝と町娘のロマンスを軽やかなワルツに乗せて描く。娘が「ただ一度だけ」を歌う移動シーンはすばらしく、ドイツ映画の技術の見事さを発揮している。

ドイツ映画、エリック・シャレルの『曾議は踊る』。

懐かしいですねえ、立派ですねえ、驚きましたね、この立派なのに。

エリック・シャレルは舞台の有名な監督です。それで、ドイツ映画です。

ドイツがこの頃いかに立派だったということがね、この映画観たらわかりますね。

で、『曾議は踊る』、この映画の時に私はドイツという国の音楽いうものにびつくりしました。

映画がトーキーになった時に、アメリカ映画がトーキーになった時に、やがて昭和4年頃、ヨーロッパのトーキーがやって来たんですね。

まあ、ヨーロッパのトーキー、びつくりしましたね。

アメリカは、もうみんなタップダンス、ダップダンス、タップダンスみたいな感じで、『四十二番街』みたいな感じで、みんなタップ、タップ、タップ、タップの映画が多かったんですね。

で、ヨーロッパの映画来たんですね。

ヨーロッパの映画、どんなトーキーか、どんな音か、昭和4年頃ですね、来ましたね、来ました時にフランスは『巴里の屋根の下』、ルネ・クレール、これ来たんですね。

この時びつくりしたんですね。タップ、タップ、タップで僕ら喜んでね、みんなタップを打ってたんですね。

その時に『巴里の屋根の下』は、「ラララーン、ラララーン、ララランランランラーン、ラララー、リララー、ララリーラー、ラララーリラー」、ああいうメロディが来たんですね。

フランスって綺麗だなあ、何だろう、シャンソン？　そうか、これがシャンソンか。

綺麗なフランスの、このメロディの流れに、リボンのように流れていくこのメロディにびつくりしたんですね。

ヨーロッパの、フランスの、この音楽に。

トーキーものはそういうことをしてくれますね。

その時にドイツがやって来たんですね。

ドイツ、一番最初にやって来たのは、『嘆きの天使』がやって来ましたね、ディートリッヒの。フランスの柔らかいものに対して、『嘆きの天使』の方は「フォーリン、ラヴァーゲン、ネヴァー、ウォンテッド」。何だかいかにもドイツ語ですね。

うーんすごいなあと思いましたが、これはディートリッヒが出てスタンバーグが監督した作品ですから、どっかまだちょっとアメリカ的な匂いがないことはないんですね。

そうして続いて出て来た、『曾議は踊る』。

これが本格的なドイツの音楽映画だったんですね。

エリック・シャレル、舞台の監督が、いかに映画の中に音楽を盛り込んだかいうところにびつくりした映画でしたね。

で、これはお話が、ナポレオン一世ですか、ナポレオンが負けたんですね。そうしてみんなが喜んだんですね、ヨーロッパ中が。「ああ、もうこれで戦争が終わったよ」。

それでみんなが集まって会議したんですね、ウィーンで。

ところが、その会議がゼーンぶ、踊ったり、しゃべったり、酒飲んだりする会議だったんですね。

そういう時代の、面白い、面白い、『曾議は踊る』。そういう時代を映画にしたんですね。

けど、これで驚くのは、カメラがすごくて綺麗でドイツいうものがどんな立派かということを絢爛と見せたんですね。

1人の若い娘がおりまして、それがロシアの若い皇帝、それがあんまり綺麗なので、馬に乗ってる時に下からばあ一つと花を投げたんですね、

ところがそれが、爆弾を投げたことになったんですね。えらいことになって、それで調べられたんですね。町の娘がひっぱり出されて来たんですね。

リリアン・ハーヴェイ、かわいい女の子です。

それでひっぱり出されて、お尻を24回叩く刑罰受けたんですね。

それを助けたのがロシアの皇帝でしたね、若い皇帝ですね。

やがて話が変わって、そのロシアの皇帝と知らないで、ロシアの兵隊だということになって、そのリリアン・ハーヴェイの若い娘ととっても仲良くなったんですね。

ところが、それがロシアの皇帝だということがわかってびっくりしたんですね。

「あの人、ロシアの偉い人なの」とかいうことになったんですね。

それで、「そうだよ、おまえ、いつべん俺の邸宅に来いよ」という手紙出したんですね。

で、リリアン・ハーヴェイの町娘が、ひっくり返ったんですね。

「えっ、あのお屋敷に行くの？ えっ、私あんな所へ行くの？」というのでびっくりしてね。

馬車に乗って行くところ、そこはカメラの移動がすごくてね、歌がうまくてね、「ただ一度だけ」という歌なんです、もう驚くような音楽ですね。

そうしてカメラは、そのず一つと走って行く馬車と一緒に、その馬車の外側、映るんですね。

野原、畑、ず一つと映りながら、一生懸命「ただ一度だけ」という歌を大きな声で歌っているのに合わせて、そのず一つと続く景色の中の人たちがみんな合唱するんですね。

いかにも面白い、映画のオーケストラですね、映画のシンフォニーですね、それがあふれている『曾議は踊る』。

これはアメリカ、フランス、ドイツがあって、ドイツの本当の音楽映画でしたね。

『曾議は踊る』。これは本当にドイツ映画の代表的名作ですね。

エリック・シャレル監督、リリアン・ハーヴェイ、ヴィリー・フリッチ。

この見事な、見事な、ドイツの最も良かった頃の作品ですね。



四十二番街

42nd Street

(1933・アメリカ)

監督：ロイド・ベーコン

出演：ワーナー・バクスター／ビービー・ダニエルズ

／ジョージ・ブレント／ルビー・キラー



〈作品データ〉

受賞歴…1932～33年アカデミー賞作品賞ノミネート／録音賞ノミネート

制作年…1933年

制作国…アメリカ

時間……86分

原作……ブラッドフォード・ロペス

監督……ロイド・ベーコン

脚本……ライアン・ジェームズ／ジェームズ・シーモア

撮影……ソル・ポリト

音楽……アル・ダビン／ハリー・ウォーレン

振付……バスビー・バークレイ

出演……ワーナー・バクスター／ビービー・ダニエルズ／ジョージ・ブレント／ウナ・マーケル／ルビー・キラー／ガイ・キビー／ネッド・スパークス／ディック・パウエル／ジンジャー・ロジャース／アレン・ジェンキンス

〈作品解説〉

ブロードウェイで大ヒットしたミュージカルをロイド・ベーコン監督が映画化。ニューヨークの劇場で1本のレビューが上演されるまでの舞台裏、演出家や出演者たちの人間模様が描かれている。見どころは劇中劇として展開するレビューシーン。まさにダンス、ダンス、ダンスでオーディションで選んだ150人の群舞のすごいこと。映画史上に今でも輝くミュージカル映画の傑作だ。

『四十二番街』フォーティセカンドストリート。

これ四十二番街というタイトルで出まして、ちょっとおかしいの。ほんととは四十二丁目なのね。それ四十二番街という題だったんで、これ何だろうというふうなところもないこともないのね。

けどこれは、トーキーになって、つまり、ブロードウェイのミュージカルのバックステージ、裏方が全部わかるダンスダンスダンスダンスの映画で、もうダンスの先生がステップステップステップを教えるので、見事な見事な映画で、ワーナー・バクスターが先生。それからベベ・ダニエルズ（ビービー・ダニエルズ）、綺麗な女が出て来るの。それにジンジャー・ロジャースが脇役で出て来るのね。

とにかく最初から終わりまでダンスダンスダンスダンス、ステップステップステップが、何とも知れん、粋なんです。で、ワーナー・バクスターが1 2 3、1 2 3、1 2 3と言うたびに、みんながパンパンパンパンと動くところが観ていて気持ちいいのね。

で、ミュージカルのバックステージはこんなに厳しいんだなってよくわかる映画で、みんな見惚れたタップダンスの作品でしたね。

で、これが四十二丁目、四十二番街、これは後にミュージカルになって、ブロードウェイでこれやりましたね。その時にMGMに2人の兄弟ダンサーがいたんですね。夫婦ダンサーが。ガワー・チャンピオン、マギー・チャンピオン。この夫婦がいたんですね。

これを僕MGMに行った時にこの2人と会ったんですね。ショーボートとかいろいろ出てるこの2人のダンサーに。といろいろ話して、アンナ・パブロワと会ったとかそれからアルヘンティーナ見たとか言ったら、まあ良かったね良かったね、言ってたんです。

その2人が今度『四十二番街』をミュージカルにしたんですね、ガワー・チャンピオンが。さあ、この人がミュージカルにしたんだ。えらい『四十二番街』がこの、ミュージカルにえらい評判になったのね。

で、舞台の演出。これがガワー・チャンピオン。ほお、あいつ偉くなったなあと思ったんですね。で私はこの初日に行ったんですね。四十二丁目、四十二番街、フォーティセカンドストリート。やっぱり幕が開いた時にサアーツと出てくる連中の女が、15人くらい出て来るそのタップの綺麗なことタップの綺麗なこと。

もう始めからタップタップタップタップ。すごいタップが凄いのびつくりしたんですけど。

その時に全部が面白い面白い四十二丁目、四十二番街のミュージカルが終わった後で幕が下がって、支配人が出て来て、

「みなさん、今朝、この舞台演出家のガワー・チャンピオンは亡くなりました」

って言ったのね。だからガワー・チャンピオンが亡くなる時に幕が開いたわけね。で、ガワー・チャンピオンはこの舞台を観ていないのね。そういうふうな悲劇もありましたけど、『四十二番街』、このミュージカルはえらい評判になった。後々に何度も何度もこれ映画になりましたね。という訳で『四十二番街』、この映画は見事な映画。

けどこの映画の方のミュージカル『四十二番街』は、バスビー・パークレイという人がね、振りつけしたんですね。

で、バスビー・パークレイという人は、舞台上でやれないものをやろうと。

舞台は1つの決まったところだけど、ミュージカル、映画のミュージカルは、カメラをずーつと奥に奥に奥に奥

に持って行ってもやれるし、ずーっと右行っても左行っても自由自在に広い広いところでやれるので、バスビー・パークレーのミュージカルというと、見事に見事に花が咲いたように、きれいな花がば一つといつべんに開いたように、見事な見事な体操ダンスですね。いっぱい並んできれいに踊るダンスが多いんですね。

というわけで『四十二番街』はバスビー・パークレーもいつべんに有名になりました。

『四十二番街』、これは本当のミュージカルの生まれる本当の姿を見せましたんで、みんな喜んで喜んで『四十二番街』を見ました。

ベベ・ダニエルズ、きれいな女優が主役ですけど、ジンジャー・ロジャースがもうすでにそのとき早くに出ていたことも面白いですね。



ウィーン
たそがれの維納

Maskerade

(1934・オーストリア)

監督：ヴィリ・フォルスト

出演：パウラ・ヴェセリー／アドルフ・ウォールブリュック

／オルガ・チューホフ／ペーター・ペーターセン

／ワルター・ヤンセン／ヒルデ・フォン・シュトルツ



〈作品データ〉

受賞歴…1934年ヴェネチア国際映画祭最優秀脚本賞

製作年…1934年

制作国…オーストリア

時間……100分

監督……ヴィリ・フォルスト

脚本……ヴァルター・ライシュ／ヴィリ・フォルスト

音楽……ヴィリ・シュミット＝ゲントナー

出演……パウラ・ヴェセリー／アドルフ・ウォールブリュック／オルガ・チェーホワ／ペーター・ペーターセン／
ヒルデ・フォン・シュトルツ

〈作品解説〉

『未完成交響楽』のヴィリ・フォルスト監督がウィーンの上流社会を舞台に恋の駆け引きを描いたミュージカル風なラブコメディ。ダンディな中年画家が社交界のある貴婦人の裸婦画を描くが、それが新聞に公表されてしまい、モデルが誰なのかと大騒動。そんな騒ぎをよそに画家は自分の画風を変えてしまうほど美人メイドに熱を上げる。豪華絢爛の舞踏会の踊りやクラシックコンサートのシーンが楽しく、ウィーンの夜が満喫できる。

『たそがれの維納』これはみなさん、ご覧になったかな。
本当にドイツ映画がどんなに立派だったかいう、黄金時代の作品ですね。
ドイツ映画と言いましたが、これはウィーンの映画なんですね。
ドイツでも違うんですね。ウィーンの映画は本当のハイ・クラスなんですね。

『たそがれの維納』というのは、今みなさんがご覧になって、こんな美術的な、こんな凄い映画を作っていたのかと思われようなハイ・クラスの映画ですよ。

どんな映画か？ ある女が富くじで、凄い、凄い、チンチラの毛皮のコートが当たったんですね。

そのチンチラの毛皮があんまりいいので、その女を全裸にして、真っ裸にして、その毛皮着せて、仮面つけて撮ったんですね。えらい評判になった。

綺麗な、けれどもその画家は有名な色事師。有名な女殺し。

だから世間で「このモデルは誰だろう？」って言ったんですね。
「あの、侯爵夫人にちがいない」って言ったんですね。
全裸の女。毛皮着てるから、前も見えない、おっぱいも見えないけど、全裸はわかっているからこれはただの関係じゃない。

この絵描きとこのモデルとはスキャンダルだ、と思ったんですね。
けど、マスクかけているから誰だかわからない。
このモデルは誰だろう？誰だろう？で、この映画はもの凄く面白い物語になりますね。見事だね。
女というのは次から次出て来て、誰が犯人だろう？というか、誰がモデルだろう？そういう映画で、見事なウィーンの映画。
当時ドイツ映画がいろいろありましたけど、ウィーンの映画というのは、特別の映画なんですね。

という訳で、『たそがれの維納』。
これはウィーンの映画でも、最高の代表作品ですね。
みなさんが、今これご覧になったら、こんな文学的な、しかもこんなに綺麗な女優が出て、こんな綺麗な話がよくあったなあ。面白いなあ。本当に文豪の小説だと思われるでしょう。
この主役の男、アドルフ・ウォールブリュックといいますね。
アドルフ・ウォールブリュックは後に、あの『赤い靴』で演出家になりましたね。

という訳で、品が良くて、立派で、何とも知れない芸術的な香りを画面いっぱい匂わして、しかも話がスキャンダル。
女と男の怖い秘密の裏側。それをのぞかせる不思議な映画。
このウィーンの映画は特別に凄かったですね。
これご覧になったら、こんな凄い映画あったのか、こんな映画をいつか自分の部屋で独りそつと観たいなと、みなさんきつと思われるでしょう。



メリイ・ウィドウ

The Merry Widow

(1934・アメリカ)

監督：エルンスト・ルビッチ

出演：モーリス・シュヴァリエ／ジャネット・マクドナルド
／ウナ・マーケル／エドワード・エヴェレット・ホートン



〈作品データ〉

受賞歴…1934年アカデミー賞美術監督賞

製作年…1934年

制作国…アメリカ

時間……98分

原作……ヴィクター・レオン／レオ・ステイン

監督……エルンスト・ルビッチ

脚本……アーネスト・ヴァホダ／サムソン・ラファエルソン

撮影……オリヴァー・T・マーシュ

音楽……ハーバート・ストサート

出演……モーリス・シュヴァリエ／ジャネット・マクドナルド／ウナ・マーケル／エドワード・エヴェレット・ホートン

〈作品解説〉

フランツ・レハールの有名なオペレッタ 3 回目の映画化。ヨーロッパの仮想王国の大富豪の未亡人と、パリの公使館のプレイボーイ伯爵が恋の駆け引きを展開する。『ラヴ・パレード』でゴールデン・トリオと呼ばれた名匠エルンスト・ルビッチ監督とモーリス・シュヴァリエ、ジャネット・マクドナルドが再び組んだミュージカルの傑作。美男美女が名曲「ヴィリア」を歌い、さらにダンスシーンは観客を陶酔させてしまう。

『メリィ・ウィドウ』みなさん、よくご存知のメリィ・ウィドウワルツは、有名で有名で、子どもまで知ってますね。

『メリィ・ウィドウ』、レハールのオペラですね。有名なオペラですね。これが、映画になりました。最初に映画になった時には、これを、シュトロハイムが、映画にしました。エリッヒ・フォン・シュトロハイム、メイ・マーレー、ジョン・ギルバートが主演しました。

ところが、シュトロハイムは、この作品を映画にした時に、メイ・マーレーという女優、この女優が、非常に綺麗な女優で、ダンスがうまくて見事なダンスなんですね。ダンサーあがりの、有名なスターなんですね。メイ・マーレー。

ところが、メイ・マーレーという人はね、どのプロマイド見ても、どのステージ観ても、絶対に笑わないの。で、「メイ・マーレーさん、あんたどうして笑ったスチール、撮らないのよ」と言ったら、「私、笑ったら、顔にしわができるから嫌だよ」そんなこと言う人だった、メイ・マーレー。それが、この『メリィ・ウィドウ』で、ワルツが綺麗に踊れるから、ジョン・ギルバートと共演しましたね。

で、監督が、エリッヒ・フォン・シュトロハイム、あの『サンセット大通り』の、あの運転手ですね。それがもう有名な有名な、シュトロハイムとは有名な大監督なんですね。それが、『メリィ・ウィドウ』をつかんだんですね。MGMで。

それでやったところが、どうしてもメイ・マーレーが気に入らないの。それで、言いましたね。「あんた、あんた、大根だね」。

つたら、メイ・マーレーが、卒倒しちゃったんですね。その場で。それで、3日間ほど、撮影来なかったんですね。そういうことがあって、大変な事件が多かった『メリィ・ウィドウ』です。

ところが、それを今度は、エルンスト・ルビッチが、映画にしたんですね。ルビッチという人は本当にパラマウントに呼ばれたドイツの名監督ですけど、ルビッチの映画というのは、みんな、女が綺麗くて、女が綺麗くて、映画が流れて、見事な監督なんですね。

だから、このエルンスト・ルビッチの『メリィ・ウィドウ』。これは、見事な映画になりましたね。

ことに、ジャネット・マクドナルド。綺麗な、綺麗な歌う女優。もうトーキーになって入って来た見事な女優ですね。

それと、モーリス・シュヴァリエ。見事な歌い手ですね。この2人を使って、映画にしましたから、ルビッチの『メリィ・ウィドウ』というのは、絢爛たる、名作になりましたね。

しかも、ルビッチという人が、見事な舞台監督もやった人ですから、この『メリィ・ウィドウ』のワルツの綺麗なこと、綺麗なこと。もう、そのワルツの、映画のカットバック、カットバック、カットバック、オーバーラップ、オーバーラップ、このワルツみんなの、群舞の踊りの、この輪が、綺麗くて、綺麗くて、びっくりして、音楽も綺麗くて、「あー『メリィ・ウィドウ』って綺麗だなあ」と思いましたよ。

けれども、やっぱり、ルビッチは、それだけで済まさない人ですね。恋というもの、恋というものが、どんなに綺麗なものか？ということを見せたいので、綺麗な、綺麗な場面出しました。

そして、この未亡人と、それから男爵のダニーロ。これがね、バルコニーの上、女。で、下で、ダニーロ。この2

人が合唱するところがあるんです。その時の、奇麗な、奇麗な音楽。“ヴィリア”ですね。『メリィ・ウィドウ』の恋の歌ですね。それが、見事で、私はガラガラ声で言えませんが。♪ヴィリア～oh ヴィリア～oh♪ oh～ヴィリアー♪ リ～ラ～ラララ～ラ♪

もう、このメロディーの奇麗なこと、奇麗なこと。

この、音楽聴くだけで、ヴィリアの音楽聴くだけで、涙がこぼれるんですね。そのぐらいに、このシーンの見事だったこと。ルビッチがどんなに、このラブシーンで、この音楽を溶けこまして作ったか、ということがわかって、ルビッチの見事な名作ですね。

ところが、このヴィリアの音楽。この音楽の、恋のメロディーが、あんまり奇麗だから、ずっと後に、『ベニスに死す』あの見事な名作で、あのおじさんが、作曲家が、初めて見る少年、あの少年が、初めて見るところで、このヴィリアの音楽を流しましたね。

そういう訳で、『メリィ・ウィドウ』はいろんな意味で、影響ありますけど、ルビッチの『メリィ・ウィドウ』、これは天下一品の作品です。

で、ルビッチという人は、もう女を描いたら、最高。しかも、ドイツから来た人で、パラマウントが本当に、ワーナーブラザーズとパラマウントが両方で、ルビッチを宝石のようにかわいがりましたね。

エルンスト・ルビッチは見事な人で、たとえば、ワンカットでも本当に面白いんですね。好きでもない、好きでもない男と結婚した女がいましたね。金があるから。『メリィ・ウィドウ』では、ありませんよ。その時に、その金持ちが、朝、ハネムーンで、朝出て行った時に、ドアから出て来て、表にあった植木鉢を、パーン！と蹴るんですね。それで、わかりますね。昨晚、何があったか。全然女が、相手にならなかったんですね。そういうワンカットでも、とっても凄いですね。

という訳で、エルンスト・ルビッチのこの『メリィ・ウィドウ』。この人の名作ですよ。



恋愛準決勝戦

Royal Wedding

(1951・アメリカ)

監督：スタンリー・ドーネン

出演：フレッド・アステア／ジェーン・パウエル



〈作品データ〉

受賞歴…1951年アカデミー賞歌曲賞ノミネート

製作年…1951年

制作国…アメリカ

時間……93分

監督……スタンリー・ドーネン

脚本……アラン・ジェイ・ラーナー

撮影……ロバート・ブランク

音楽……アラン・ジェイ・ラーナー／バートン・レイン／ジョニー・グリーン

出演……フレッド・アステア／ジェーン・パウエル／ピーター・ローフォード／サラ・チャーチル／キーナン・ウィン

〈作品解説〉

スタンリー・ドーネンが監督し、エリザベス女王御成婚に引っ掛けて作ったMGMミュージカル。ニューヨークの売れっ子ダンシングチームのフレッド・アステアとジェーン・パウエル兄妹は英国に渡り、兄はコーラスガールに熱を上げ、妹は英国紳士とラブロマンス。アステアが壁から天井へ踊り回るトリックシーンは何回見ても面白い。アステアが結婚する女性を演じたサラ・チャーチルは、あのウィンストン・チャーチルの御令嬢。

『恋愛準決勝戦』。ロイヤル・ウェディングですね。

日本語難しいですね、『恋愛準決勝戦』なんて。

これで面白いのは、フレッド・アステアが部屋を回りますね。天井から下から全部、クルクル、クルクル上へ上がりますね。どう撮影したかと思われますね。

でもちょっと映画好きな人はわかりますね。セットが全部、上も下も横も四角に全部作っただですね。アステアはコロコロ、コロコロ回り歩いたらいいんですね。そうすると逆さまになったように見えるんですね。

『恋愛準決勝戦』は、あのダンスも面白いですけど、フレッド・アステアですね、スタンリー・ドーネンですね。このスタンリー・ドーネンという人がもう見事な人で、監督しますね、『掠奪された七人の花嫁』、あれも見事だし、『雨に唄えば』もみんな凄いいけど、いつもジーン・ケリーと共同で監督しますね。

けど、スタンリー・ドーネンいいますと、ミュージカルの大家ですね。この人の、このアステア見事でしたね。

このアステアですけど、私はMGMに行った時に玄関でパターンとぶつかったんですね。もう見上げたらアステアなんですね。

アステアだ、思って「あんた、アステア？」言うたら、「Of course.」言っただんですね。

「あんたのサインがほしいんです」言うたら、手出してサインしかけたので「あんたは、サインいっても手よりも足のがいい」って言ったら、靴脱ぎだしたんですね。

「やめてください、靴脱がなくていいですよ」、靴脱いで靴下もとりかけたんで、あんまり悪いから、画用紙置いてその上に「靴の形でいいですからとらせてください」言ったら、「Thank you very much.」って、靴をちゃんと形とらせてくれたんですね。そのぐらい親切な人でした。

私は日本でアンナ・パブロワ観たこと、アリエンティーナいうカスターネットの女王の話をしたら驚いちゃって、「あんたは偉いな、パブロワ観たのか。僕、パブロワ観てないんだ」なんていうことを言って大騒ぎしたことあるんですね。

そういうようにしてアステアといっぺんにその場で仲良くなったんですね。

それで、私が日本に帰った時に、アステアが帝国ホテルに泊まってるって聞いたんですね。

で、電話かけたんですね。

「あんたアステアさんでしょ、私、MGMの玄関でばったり会った淀川ですよ」言うたら、「Of course, I remember.」なんて言っただんですね。

「私ね、あんた呼びに行つてね、お話が聞きたいんだ」、言ったら、「あんた、どこにいるんだ」言うから、「泰明小学校の前いうところにいるんだよ」「そこに行く」って言うんですね。

で、「ホテル出てすぐ、もう5分歩いたら泰明小学校なの。その真向かいなの」言ったら「そんなの簡単に行きます」言うから、「いや、迎えに行きます」って言ったら、「迎えに来なくていい、僕行きます」言うから、ほんとにかいと思って2階から見たら、チョコチョコ、チョコチョコ本人歩いて来たんです。もう編集部でみんながキャーッと言っただんですね。歩いて来たんですよ。

そうして、「Hello, Mr. YODOGAWA」なんて言って、2階の僕の編集部へ上がって控室で、「Thank you very much.」。

で、あんたが来てくれてうれしいなあ話した時に、私は意地が悪いから、ここだけの話、フレッド・アステアの頭、じーっと見たんですね。

アステア、髪の毛ないんですよ、つるつるなんですよ。1回もそれ見せてないんですよ。
きれーいにウィッグで、こういうふうにはレースがきれーいについているからわからないんですよ。

で、フレッド・アステアのインタビューする言ったら、1時間待たされるんですよ。ちゃんとかつらつけるんですよ。そういうことを僕にい悪く見たけど、そんなことは一言も言わないで、「あんたのダンスは奇麗、あんたのダンス観てたらびっくり仰天。『ビギン・ザ・ビギン』いいねえ」なんて言ったら、「Oh, yes.」「淀川さん、踊ってあげますよ」、言ったの。びっくりしたね。

「どうやってして踊るの」言ったら、「そこに、ついたらカーテンかけあるでしょ、あの棒貸して」って、棒持って来た。その棒持って、もう完全に1人でダンスしたんですね。
もう驚いた、目の前でアステアが、私の目の前で生なアステアがダンスしたんですね。
『ビギン・ザ・ビギン』、奇麗な音楽、鼻でハミングして、私もう胸がドキドキしましたね。

そういう訳で、フレッド・アステアは本当に私に親切に、親切に見せてくれました。
「これから、銀座へ行く」言うから、「ついてってやる」言うたら、「No, no.」「自分で勝手に行くのが好きなんだよ」、1人で歩いて行きました。
だ一れもアステアなんか見たってわからないから、悠々と歩いて行きましたが、あの人見てますと、あの靴が奇麗だね。きれーいな柔らかい靴ね。
それからベルト、そのベルトが凄いいね。ネクタイみたいな細ーい紐でね、腰の横で結んであるんですよ。粋な人でしたね。

フレッド・アステアはほんとに粋な人でしたよ。私は目の前で彼がダンスをしたのを観て、これお願いして頼んだら、何万、何十万円とられるだろうと思って、びっくり仰天した。
フレッド・アステア、目の前で、手の触れるところでダンスを踊ってくれました。
これは見事でしたよ、その人の映画ですね。この映画はゆっくり観なさいよ。

淀川長治の話芸

映像作家 岡田喜一郎

もしも、“全日本話芸大賞”なるものがあつたら、淀川さんにグランプリを差し上げたいと思う方が大勢いるだろう。あの淀川節と言われる話のテンポ、リズム、切れ味のいい独特な語り口は話術というより話芸だった。しかし、残念ながらもう聞くことができない。

わたしがテレビ東京の深夜番組『淀川長治映画の部屋』の制作を引き受けたのは昭和52年だったと思う。それまで局制作だったが、外部発注することになり、ある広告代理店から依頼されたが、なにぶん制作費が安い。でもこんなチャンスは二度となさそうなので、淀川さんとお会いしてオーケーしてしまった。

実はこのときがはじめての出会いではない。それ以前、わたしはTBSテレビで二谷英明さん司会の『映画サロン』という番組を担当していた。そのとき淀川さんにも何回かゲスト出演してもらっていたので、ざっと30年近くのお付き合いになる。たまたま、収録のとき大雪になり、高速道路が通行不能で鶴見のお宅まで迎えの車が出せないことがあつたが、車をよこさないスタジオに行かないぞと、ダダをこねられたこともあつた。どちらかと言えばわがままでコワイ先生だった。しかし、映画番組を作るからにはその道の第一人者と仕事をしたかったから、妙にワクワクしてしまったことを覚えている。

当時、淀川さんはテレビ朝日『日曜洋画劇場』の名解説者。でも、あの解説は紋付羽織袴のイメージが強い。それならこちらは湯上りの淀川さんが浴衣がけで、もつとのびのびと自由勝手気ままに映画話をするような番組にしたいと考えた。「その企画いいよ。あんたね、『日曜洋画』はいいけれど固苦しいのね。やれネクタイが曲がっていると、か、頭髮が立っていると。そんなことよりも、もっと自由にやりたいね。映画のオモチャ箱を部屋中にひっくり返したような番組にしましょう。あんたなら大丈夫だ」と淀川さん。すっかり意気投合してしまった。こうして番組はスタートし、決して順風満帆ではなかったが淀川さんが亡くなるまで毎週1回、ロードショー前の話題作についておしゃべりをしていただいた。

簡単な打ち合わせのあと、リハーサルなしでいきなり本番。わたしはカメラマンに淀川さんの顔を撮るのではなく、“話を撮れよ”と注文を出す。スタジオ番組のとき、出演者に「3分前」とか書かれているフリップカードを見せるのはF・D（フロアディレクター）の仕事だが、この番組はわたしがカードを出した。たとえば話が終わりに近づいてくると「1分前」のカードを出す。ところが淀川さんのお話がそのあたりから面白くなることがある。ここが勝負みたいところで止めたら負けだ。何くわぬ顔をして、あと1分から延々と3分、4分続けてもらったこともしばしばあつた。もつとしゃべりたいのにストップをかけられたら流れは止まってしまうし、いい話が撮れるわけがない。逆に淀川さんがのつていなかったり、話が堂々めぐりし始めたら、あと1分あつてもすぐにやめてしまった。

このあたりのあうんの呼吸が楽しく、びたりと合ったときは、何とも言えない快感だった。淀川さんの話芸にあるときは感動し、あるときは酔い、その中から淀川流の映画の楽しみ方、味わい方を教えていただいた。本番のときだけではない。試写を見たあと帰りの電車の中で、収録のあと赤坂の小ちゃんまりとしたうなぎ屋で食事をしながら、文楽を観たあとホテルのティールームで、講演旅行の旅先や、万座温泉ホテルの標高1800メートルの露天風呂につかりながら、淀川さんの話芸を堪能することができた。

淀川さんは神戸の置屋のぼんぼん。わたしは株屋の倅で日本橋生まれの下町花柳界育ち。子供のころから歌舞伎、文楽、日本舞踊などを見ていた。だから淀川さんと歌舞伎の話や人の品定めをしていると、「あんたといると、お茶屋の女将さん同士が話している感じなの。どこか悪の血が入っているところが似ているんだ」たまたま、テレビで活躍しているシネマキャスターの国弘よう子さんがそばにいたのを見て、さらに、「この女、美人だからシネマ芸者にして、新橋あたりに売りに行こう。あんたと2人で！」

こんなあぶない会話を淀川さんはいつも楽しんでいたが、その話芸はどうして生まれたのであろう。勝手に推測すると、まず第一は洞察力だ。映画のワンカット、ワンカットを見抜く鋭さ。もちろん映画だけではない。たとえば自

然の美しさを観察しそれに感激する。次が抜群の記憶力。映画評論家の双葉十三郎さんが、「長さん、どうしてそんなカットまで覚えているんだ」と感心するほどで、淀川さんの頭の中に特殊な記憶装置が入っているのではないかと、思ってしまうほどの記憶力は衰えることを知らなかった。3つ目は表現力の豊かさ。しかし、決して難しい言葉は使わない。たとえば「愛が壊れないうちに光に輝いていたいという、まるで結婚の水晶みたいな映画です」（『髪結いの亭主』）。普通の人が言ったらキザに聞こえる言葉だが、その作品の本質をみごとについたあたりのすごさ。

この3つがうまく調和され、視覚的な語りが生まれてくるような気がする。しかもその根底には映画を愛する気持ちがいっぱいあった。さらに心にもないことは言わないで、言いたいことだけをハッキリ言うあたりに話芸の神髄があり、長寿の秘訣があったのではない。

落語家は師匠が弟子に噺を教えるが、淀川さんには話芸の師匠はいないと思う。小学生のころ、神戸の活動写真館に通いつめ、家に帰ってくるなり芸者衆の部屋に入って、映画のあらすじをしゃべりまくった、と話してくれたことがあったが、淀川少年は酸いも甘いもかみわけたお姐さん相手に話術の稽古をしていた。

淀川さんの講演にはテレビなどでは味わえない熱っぽさと迫力があつた。

「今日が4月10日だとしましょう。10日という日は1年に12回しかありません。4月10日は1年に1回だけ。今日を逃したら1年先にしかやってきません。1998年4月10日という日は、わたしの一生の中で今日しかありません。かけがえのない1日です。最初で最後の1日です。だからいい加減に過ごすわけにいきません」

これは淀川さんの大好きな言葉で、講演の定番メニューになっていた。わたしも何回か聴かされていたので、素晴らしい言葉なのにどこか心の中で聞き流していたような節もあった。しかし、米寿を過ぎたあたりから講演に限らず、ことあるごとに「今日は最初で最後の1日だもの。一刻たりとも無駄にできないよ」と、しみじみと語る言葉が、何かわたしに重くのしかかるように伝わってきた。息苦しい感じさえした。

淀川さんが亡くなった年（1998年）の5月、早大の大隈講堂で若者を前に2時間半にわたり、ご自身の映画人生について語った。講演が終わっても、学生たちは帰ろうとせず、講堂の前に停められた淀川さんの車を取り囲んでしまった。まるで若者たちのアイドルだ。そのとき、興奮気味の1人の学生がわたしに声をかけてきた。「淀川さんは死なせたくない人です。お願いします。大切にしてください」

それから半年後、淀川さんは「話芸」という宝物を持って逝ってしまった。

愛用の手帳には細かい字でスケジュールがギッシリ書き込まれていたが、その1日のスケジュールが無事に終わると、赤鉛筆でその日の欄の上に大きくx印の線を引いて消しながら、ため息まじりの笑顔で言った。

「ああ。これで一日が終った」

今でもあの手帳がわたしの目に焼きついてはなれない。

※このあとがきは、DVD『淀川長治クラシック名作映画全集□』（発売元：株式会社アイ・ヴィー・シー）の引用です。



映画好きなら一度は観ておきたい！

淀川長治
クラシック名画解説全集Ⅱ



ヒューマン・ドラマ／ラブロマンス

World Classic film Selection



映画好きなら一度は観ておきたい！

淀川長治総監修 クラシック名画解説全集

ヒューマン・ドラマ／ラブロマンス

監修 淀川長治

まえがき

この書籍は、『日曜洋画劇場』の解説者として人気を博し、今も人々に愛され続ける映画評論家・淀川長治氏の名画解説を、かの名調子もそのままに書き起こしたものです。

数多ある解説の中から、世代を問わず語りつがれるべきクラシックの名画たちを選びすぐりました。淀川氏しか知らない貴重なエピソードと、氏の映画愛とともに、その概要をお伝えします。

本書をお手にとってくださった、「クラシックの作品は勉強中」のあなた、かたや「名画はもう観尽くした……」とお思いのあなたの映画観も、大きく揺さぶられることでしょう。

本書を読んで観たい映画を探すもよし、誰かに蘊蓄をたれるもよし、愛すべき淀川氏を偲ぶもよし。

「映画は人生の教科書です」と語った氏の宝物を、少しだけ分けていただきましょう。

[まえがき](#)

[ヒューマン・ドラマ](#)

[・最後の人](#)

(“Der letzte Mann” 1924年 ドイツ)

[・ビッグ・パレード](#)

(“The Big Parade” 1925年 アメリカ)

[・キング・オブ・キングス](#)

(“The King of Kings” 1927年 アメリカ)

[・チャンプ](#)

(“The Champ” 1931年 アメリカ)

[・ステラ・ダラス](#)

(“Stella Dallas” 1937年 アメリカ)

[・制服の処女](#)

(“Mädchen in Uniform” 1931年 ドイツ)

[・一日だけの淑女](#)

(“Lady for a Day” 1933年 アメリカ)

[・群衆](#)

(“Meet John Doe” 1941年 アメリカ)

[・素晴らしき哉、人生！](#)

(“It’s a Wonderful Life” 1946年 アメリカ)

[・我等の町](#)

(“Our Town” 1940年 アメリカ)

[・南部の人](#)

(“The Southerner” 1945年 アメリカ)

[・河](#)

(“The River” 1951年 アメリカ)

[・大地のうた](#)

(“Pather Panchali” 1955年 インド)

[・大河のうた](#)

(“Aparajito” 1956年 インド)

[・大樹のうた](#)

(“Apur Sansar” 1958年 インド)

[・汚れなき悪戯](#)

(“Marcelino Pan y Vino” 1955年 スペイン)

[ラブロマンス](#)

[・ノートルダムのせむし男](#)

(“The Hunchback of Notre Dame” 1923年 アメリカ)

・[ウィンドミア夫人の扇](#)

(“Lady Windermere's Fan” 1925年 アメリカ)

・[ヴァリエテ](#)

(“Variet□” 1925年 ドイツ)

・[雀](#)

(“Sparrows” 1926年 アメリカ)

・[第七天国](#)

(“Seventh Heaven” 1927年 アメリカ)

・[サンライズ](#)

(“Sunrise” 1927年 アメリカ)

・[肉体と悪魔](#)

(“Flesh and the Devil” 1926年 アメリカ)

・[アンナ・クリスティ](#)

(“Anna Christie” 1930年 アメリカ)

・[嘆きの天使](#)

(“Der Blaue Engel” 1930年 ドイツ)

・[モロッコ](#)

(“Morocco” 1930年 アメリカ)

・[上海特急](#)

(“Shanghai Express” 1932年 アメリカ)

・[春の調べ](#)

(“Ecstasy” 1933年 チェコスロヴァキア)

・[シナラ](#)

(“Cynara” 1932年 アメリカ)

・[雨](#)

(“Rain” 1932年 アメリカ)

・[或る夜の出来事](#)

(“It Happened One Night” 1934年 アメリカ)

・[痴人の愛](#)

(“Of Human Bondage” 1934年 アメリカ)

・[邂逅（めぐりあい）](#)

(“Love Affair” 1939年 アメリカ)

・[情婦マノン](#)

(“Manon” 1949年 フランス)

・[終着駅](#)

(“Stazione Termini” 1953年 アメリカ／イタリア)

・[雨の朝巴里に死す](#)

(“The Last Time I Saw Paris” 1954年 アメリカ)

・[道](#)

(“La Strada” 1954年 イタリア)

[あとがき](#)

「淀川流、映画の観方、味わい方」映像作家 岡田喜一郎

『[□ サスペンス・スリラー／SF・ホラー／西部劇 他](#)』へ⇒

『[□ 喜劇の王様／名作文学／歴史的名作](#)』へ⇒



淀川長治

クラシック名画解説全集Ⅱ



ヒューマン・ドラマ

『最後の人』『ビッグ・パレード』他(全16話)

World Classic film Selection



最後の人

Der letzte Man

(1924・ドイツ)

監督：F・W・ムルナウ

出演：エミール・ヤニングス／マリー・デルシャフト



〈作品データ〉

受賞歴…1926年キネマ旬報外国映画ベストテン第2位

制作年…1924年

制作国…ドイツ

時間……72分

監督……F・W・ムルナウ

脚本……カール・マイヤー

撮影……カール・フロイント

出演……エミール・ヤニングス／マリー・デルシャフト／マックス・ヒラー／エミリー・クルツ／ハンス・ウンターキルヒエン

〈作品解説〉

ドイツ映画の大スター、エミール・ヤニングスが主演し、名匠F・W・ムルナウが監督。一流ホテルの老ドアマンは金モールの制服に誇りを持って働いていたが、ある日仕事をドジリ、便所の掃除夫に回される。娘には内緒にしていたがバレてしまう。サイレント映画であるが台詞の字幕はラストの1枚だけという大胆な試みが成功。無字幕形式の無声映画を確立したドイツ表現主義の名作。

『最後の人』、これは、見事な見事なじっくりじっくり本当に身に沁み込んで観る名作でしたね。

で、F・W・ムルナウが監督しているんです。ムルナウは映画詩人です。見事な映画を作る人です。その監督のエミール・ヤニングス主演の作品です。エミール・ヤニングスは、ドイツで有名な有名な俳優ですね。で、アメリカにも呼ばれましたね。で、このエミール・ヤニングスは『嘆きの天使』から、ずーとみなさんご覧になっていると思いますけど、本当のドイツきっての名優でした。

ドイツきっての名優だけに、戦争でこの人は消されました。そうして戦争が済んだ後には、どっかに消えてなくなったかわいそうな名優でした。エミール・ヤニングスは、パラマウント映画にも出ました。この人の『最後の人』、これがまたいいんですね。

どんな話か、皆さんご覧になったら「ああっ」と思われるでしょう。ポーター、大きなホテルのドアボーイですね。そうして車が着きますね。車呼びますね。ピリピリーツと笛吹いて、車呼びますね。そして、「旦那さん、車が参りました」そういう役ですね。ホテルのボーイですね。ドアボーイですね。そうして、みなを乗せたり、迎えたりしますね。そのボーイがお爺さん、少しお爺さん、それが金モールの軍服みたいな着ているんですね。ピカピカした、房つけた。そうして、それを自分で喜んでいるんですね。で、ピリピリーツと笛吹いて、タクシーが来たら、「ハイ、旦那様、車が参りました」。それがうれしいんですね。みんな乗せるでしょ、それがうれしくてしょうがないんですね。なんか、チップもらうんですね。それがあつ時、車が来た時、「どうぞ、いらつしやい、いらつしやい」って荷物持って中に入る時に、額から汗が出たんですね。そしたら、支配人が見たんですね。「もう、あいつは年寄りだから、これはもう無理だ」と思ったんですね、この役は。

で、荷物持って入るのは無理だな、と思って、「おい、おまえ、おいで」と言ってそうして、役を替えたんですね。今度の役は便所の掃除人になったんですね。金モールのこの、奇麗な奇麗な軍服みたいな金モールの着物はとられちゃって、今度は白い作業服になったんですね。そうして、床をふいている時に泣きそうになったんですね。「俺はな、もうこんなことするのか、年とったら、こんな役かな」と思ってがっかりするんですね。

そのヤニングスがいいですね。金モールを本当に愛していた、ヤニングスの名、名演技がすごいんですね。ところが、自分の娘が結婚する、さあ、結婚する時に、自分が行く時に、こんな作業服ではとても行けない。あの、前の金モールの制服で行きたい、行きたい。それで、盗んで結婚式に行くんですね。そういう、ポーターのホテルのボーイさんの悲しい年とった男の話ですね。けれども、何とも悲愴な、軍服のような金モールの制服を着た男が、今度は床を掃除している。その姿がかわいそうなんです。

そういう意味で、この映画は面白いというより、悲しいんですけど、何しろ、この男が最後に、やっぱり元の作業服着たあの掃除人に帰っていくんですね。で、映画はそれで、終わるんです。これでは、あんまりかわいそう。あんまりだ。というので、この映画のラストシーンは実は2種類作ったんですね。1つはもうそれで、なき別れ、なき終わり、いかにも辛い。で、もう1つはアメリカの知り合いのところから、遺産が流れ込んできて、このお爺さんは、たくさんのお金もらったんですね。それで、今度改めて、今度は立派な立派な車に乗って、そのホテルの前をずっと豪華な馬車ですか、車で通っていくところで終わるんですね。2つのシーンを入れなくちゃこの映画のラストシーンは終われない。あの残酷な床ふいているだけでは、あんまりかわいそう。つてのが評判になったんですね。そのくらい、エミール・ヤニングスのこの演技は凄かったんですね。

で、エミール・ヤニングスの『最後の人』、これはやっぱりこの俳優の最高の名作ですね。で、私はその最後2つ観ました。どちらも好きでした。どちらも好きでしたけど、やっぱり救われなくて、床をふいているところで終わるところが、やっぱり怖かったですね。ということで、この映画はドイツの本当の見事な作品ですね。ムルナウという映画詩人が作った、本当の映画の詩ですね。悲しい悲しい老人の詩ですね。



ビッグ・パレード

The Big Parade

(1925・アメリカ)

監督：キング・ヴィダー

出演：ジョン・ギルバート／ルネ・アドレー



〈作品データ〉

制作年…1925年

制作国…アメリカ

時間……120分

監督……キング・ヴィダー

脚本……ハリー・ベーン

撮影……ジョン・アーノルド

出演……ジョン・ギルバート／ルネ・アドレー／トム・オブライエン／カール・デイン／ホバート・ボズワース／
クレイル・マクドウェル

〈作品解説〉

第1次世界大戦のフランスを舞台に、冒険と悲しい恋と友情、そして勝利の後の平和の喜びを描いた戦争映画の傑作。フランスに上陸した米兵（ジョン・ギルバート）は豊満な村娘（ルネ・アドレー）と恋に落ちる。男に進撃命令が下り軍用トラックに乗るが、彼女は胸も露わにして追う。名シーンだがさらに圧巻なのは、進軍を流れるようなカメラワークでとらえた移動シーン。キング・ヴィダーはこの一作でハリウッドの大物監督になった。

『ビッグ・パレード』、これはサイレントの映画ですよ。もうサイレントで戦争映画のナンバーワンが『ビッグ・パレード』。

誰でも戦争映画というと『ビッグ・パレード』、と昔はそう評判の超大作なんですね。で、キング・ヴィダーが監督しています。で、キング・ヴィダーというのはね、叙情派、優しい映画撮る人なのね。それが『ビッグ・パレード』、この大進軍撮るというので評判になりました。『ビッグ・パレード』、『大進軍』とも言いました。大いに進む軍。

で、『ビッグ・パレード』の一番キング・ヴィダーらしいところはどこか言いますとね、もう見渡す限りに兵隊がどンドンどンドンどンドンどンドン進軍するんですね。ずーっと移動するんです。カメラを、その移動が凄かったのね。それが『大進軍』、まさにその通りのカメラタッチで、すばらしかった。

で、『ビッグ・パレード』はサイレントの代表作で、MGMは大いに売りました。これは、ルネ・アドレーとか、それからいい役者が並んでたくさん出て、ジョン・ギルバートと並んで出たんですけど、これを観てフォックスが「何くそ、俺のところも撮ってやる」と言って撮ったのがラウル・ウォルシュの『栄光』だったんですね。これはもうおふざけの、兵隊がみんな、みんなおふざけの男性映画だったんですね。『ビッグ・パレード』は第1次大戦でアメリカの兵隊さんと、フランスの娘さんが仲良くなって、仲良くなって、仲良くなる映画なのね。この、フランスの娘さんが別れるのを泣いて泣いて、泣くのね。けれどもアメリカ兵隊は行かねばならない。移動、どンドンどンアメリカに帰るトラック、その一番後ろのトラックに腰かけているのがアメリカ兵隊ね。それをフランスの娘が追っかけて追っかけて、「あんた、行くの、あんた、行くの、あんた、行くの」と追っかけるところがクライマックスのまた、良さね。これはキング・ヴィダーのタッチね。で、大進軍は非常にすばらしい戦争ものだけど、印象はそういうものだね。それで、キング・ヴィダーらしい映画でしたよ。

という訳で、キング・ヴィダーの『ビッグ・パレード』は、もう代表作、戦争ものの代表作、これに対抗したのが、ラウル・ウォルシュの『栄光』でしたね。で、『栄光』の方は、もう暴れん坊で、暴れん坊で兵隊も兵隊も全部好色人種で、みんなが勝手なことばかりしている、無茶苦茶に暴れん坊の、兵隊何くそ馬鹿野郎、というような映画だね。で、『大進軍』に対抗したのがこれですね。

『大進軍』はもうサイレント映画、今日までのサイレント映画、全部のサイレント映画、今日までと言えませんが、サイレント時代の今日までの映画で一番代表的な戦争映画ですよ。第1次大戦ですよ。というわけで、この映画観ますと、本当に兵隊の辛さと面白さがあふれていました。で、『ビッグ・パレード』、これは本当に戦争映画、あらゆる戦争映画でナンバーワンの代表作ですよ。



キング・オブ・キングス

The King of Kings

(1927・アメリカ)

監督：セシル・B・デミル

出演：H・B・ワーナー /アーネスト・トレンス



〈作品データ〉

制作年…1927年

制作国…アメリカ

時間……111分

監督……セシル・B・デミル

脚本……ジャニー・マクファーソン

撮影……ベヴァレル・マーレイ

出演……H・B・ワーナー／アーネスト・トレンス／ジャクリン・ローガン／ジョセフ・シルドクラウト／ウィクター・ヴァルコニ／ロバート・エディソン／ウィリアム・ボイド／ドロシー・カミング／ジェームズ・ニール

〈作品解説〉

巨匠セシル・B・デミル監督が“王の中の王”であるキリストの生涯を壮大なスケールのスペクタクル描写で綴ったサイレントの超大作。キリスト役にH・B・ワーナー、ユダ役にJ・シルドクラウトなど当時の名優たちが熱演。聖書の物語がみごとに映像化されている。『十誡』と並んでデミル監督全盛期の代表作。1961年にニコラス・レイ監督、ジェフリー・ハンター主演でリメイクされている。

『キング・オブ・キングス』、セシル・B・デミルの『キング・オブ・キングス』、これは、もうあまりにも有名ですし、そうしてアメリカでは、ニューイヤーイブ、あるいはサマータイムの最終に必ず『キング・オブ・キングス』を放映します。テレビで。そうすると、みんな、田舎の人は全部この『キング・オブ・キングス』を手を合わせて観ます。そのくらいに『キング・オブ・キングス』、デミルの『キング・オブ・キングス』は、アメリカで宗教的にもはやされている面白い映画なんですね。

それで、デミルはこれを作って一躍有名になりました。これまででも有名ですけど、世界的に有名になったのは、『キング・オブ・キングス』ですね。

けれども、『キング・オブ・キングス』で、そのキリストになる人、誰だ？ H・B・ワーナーって人がキリストになったんですね。

それで、後に、ずっと後に『サンセット大通り』がありましたね。その時にダンスするところがあるんですね。ウィリアム・ホールデンとその、ノーマ・デスモンド、グロリア・スワンソンが。その隅にね、4人がポーカーやっているんですね。ポーカーやっているのを、バスター・キートンとH・B・ワーナーだったんですね。

それで、ニューヨーク行きまして、その話をして、「H・B・ワーナーもトランプしましたね」って言ったら、「あの、キリストもね」と言って口、手で押さえて、「失礼しました」って言ったんですね。アメリカでは、キリストもトランプやっていたなんていうシャレはいけないんですね。もうキリストはもつともつと大事でないといけないんですね。そのぐらいにキリストいうものを、アメリカで、外国で大事にしたことがよくわかりましたけど。

デミルという人、この人は昔から、皆さんはご存知かどうか、どんなに偉い人だったか、『男性と女性』、もうその他『愚か者の楽園』、どれもこれもみんな見事ですけれど。デミルの見事なことをちょつと申しますと、デミルの映画観に行く時には、いつも下からキャストがずっと上がって行くんです。そのキャストが上がって行くのは、グロリア・スワンソン、トーマス・ミーアン、ずっとずっと名優が全部下から上がって行く、オールスターキャストですね。それが上がっていくところが見事なんですね。デミルの映画の楽しみは、まずはタイトルですね。その時の伴奏、サイレントですよ。それが、4人ぐらいのバイオリニストが、ビッチカートで『ランランラン』いうのでやるのね。それでカメラが、ずっとタイトル上がって行くから、みんな胸ドキドキするんですね。

そういう訳で、デミルの映画は豪華。豪華だけではなくて、女が観るように作ってあるんですね。全部、どの女もこの女も奇麗なんですね。それで、みんながお風呂入るんですね。その裸になって入るところがすごいんですね。『クレオパトラ』もそれから『男性と女性』も全部お風呂場が奇麗ですね。それから、女の衣装が奇麗ですね。女の靴が奇麗ですね。という訳で、デミルの映画は女が観る映画、女がビックリさせる映画ですね。

デミルに聞いた。「どうしてあんな映画作るんですか？」
「映画は女が観に行くものですよ。男じゃないですよ。で、女は観に行つた時にみんなにね、感激した時に電話かけるんですよ。『良かったよ。あの役は良かったよ』。男は観に行つても、感激しても電話なんかかけませんよ。女ですよ、女ですよ。だから私は女の映画作るんですよ」と言ったのね。

けれども、女の映画作るけれども、やっぱり女の人は、必ず彼氏連れて行く、男連れて行くから、やっぱり男にサービスしなくちゃいけないから、何でも男の場面が出て来るんです。そんなことを、まあ言っていましたけれども、『キング・オブ・キングス』はそんなことも抜けて、ストレートにキリストの伝記作りましたね。

で、デミルはとにかくアメリカでヒッチコックと共に、ポスターに大きく「デミルの『クレオパトラ』」「デミルの『キング・オブ・キングス』」と大きく出るんですね。ヒッチコックも「ヒッチコックの『ダイヤルMを回せ』」

とかタイトル出るんですね。監督で大きくポスターに出るのは、ヒッチコックとデミルだけですね。

という訳で、デミルという人は見事でした。で、デミルのお父さん、お母さんは、俳優学校持っていました。ブロードウェイで。それで学校からはたくさんの俳優が出ましたが、デミル自身も映画で、芝居で舞台上で役者で出たんですね。ところが、お兄さんのウィリアム・デミル、これが立派なんですね。それも映画監督になりました。ウィリアム・デミル、この人の方がずっと立派な映画作っていましたけど、地味な映画作るから、弟のセシル・B・デミルに負けてしまいましたけど、お兄さんのウィリアム・デミルはもともと立派な映画作りましたよ。という訳で、デミルの映画は凄かった。デミルの映画は笑わせて、豪華で女が好きな映画、これがデミルの映画ですね。で、『キング・オブ・キングス』はそういう意味のけて、襟を正して、真面目な映画ですね。『キング・オブ・キングス』、やっぱりデミルですね。



チャンプ

The Champ

(1931・アメリカ)

監督：キング・ヴィダー

出演：ウォーレス・ビアリー / ジャッキー・クーパー



〈作品データ〉

受賞歴…1931～32年アカデミー賞主演男優賞／脚本賞／作品賞ノミネート／監督賞ノミネート

制作年…1931年

制作国…アメリカ

時間……87分

監督……キング・ヴィダー

脚本……フランセス・マリオン

撮影……ゴードン・アヴィル

出演……ウォーレス・ビアリー／ジャッキー・クーパー／アイリーン・リッチ／ロスコー・エイツ／エドワード・
ブロフィ／ヘイル・ハミルトン

〈作品解説〉

元重量級ボクシングチャンピオン（ウォーレス・ビアリー）と、その彼を「チャンプ」と呼び敬愛する息子（ジャッキー・クーパー）の強い親子の絆を描いた感動作。落ちぶれても子どもに虚勢を張る大人の悲哀をビアリーが名演技で見せ、アカデミー主演男優賞を受賞。子役のジャッキー・クーパーが大人顔負けの演技で泣かせる。1979年にジョン・ヴォイト主演で再映画化されたが、ぜひとも見比べてほしい。

『チャンプ』、チャンピオンですね。この映画、キング・ヴィダー。

キング・ヴィダーという人は非常にね、柔らかくて優しく、人情あふれた映画を作る名監督ですね。キング・ヴィダーという人はみんな、当時の映画評価する人は襟を正して観に行っただけですね。そういう訳でキング・ヴィダーが『チャンプ』を作る、はあーと、みんながね、どういふ映画作るんだろう思っただけですね。「チャンプ」というのはチャンピオンのことですね。チャンピオンのことを「チャンプ」と言う。これは下町の言葉なのね。何とも知れないね、「うん、あいつ花形だなあ」とかね、「花だな」とかそういう感じなのね。

『チャンプ』で、どんな話か、ウォーレス・ビアリーとジャッキー・クーパーですか、ジャッキー・クーパーが出るんですね。この飲んだくれのチャンピオンですね。かつては有名だったチャンピオン、今はもう崩れているんですね。酒飲んで、酒飲んで、酒飲んで、それをジャッキー・クーパーのこの子どもが、「おとつあん、おとつあん、私の誇りのおとつあん、頑張り、頑張り、頑張り」そういう親子の話。それがいいんですね。けど、これにはアイリーン・リッチという綺麗な綺麗な中年のおばさんの役者、これ有名ですね。それが脇から、このウォーレス・ビアリーの『チャンプ』を愛して、温かく守っているような映画なんですけど、これはキング・ヴィダーの名作でした。で、私たちはその『チャンプ』いう、おとつあんが飲んだくれで、子どもが「おとつあんは誇り、おとつあんはもう本当に世界一偉い人」と思っているのが崩れていく所が、すごく悲しかったね。『チャンプ』は、そういう映画でしたね。

で、キング・ヴィダーは本当に下町のそういう親子の感じをよく出しました。

ところが、これがもういつべん、フランコ・ゼフィレリが映画にしましたね。フランコ・ゼフィレリ、あの『ロミオとジュリエット』の監督ですね。あれが映画にしました。その時には、そうですね、このジョン・ヴォイトがこれが『チャンプ』演ったんですね。それからね、なんかもう1人子どもが相手役演りましたけど、これは甘ったらしくて、甘ったらしくて、フランコ・ゼフィレリというのは本当に甘い人なのね。『ロミオとジュリエット』はいいけどね、なんか甘く、甘くね、子どもがね「お父ちゃん、頑張り」なんて泣くところなんかオーバーアクトなんですね。

もうちょっとね、頑張んのをね、もう少しさっぱりやればいゝなんて思いました。けれども、きつとみなさんが、フランコ・ゼフィレリの『チャンプ』と思います。フランコ・ゼフィレリの『チャンプ』もストーリーはいいからご覧になったら涙が出るでしょう。

けれども本当はキング・ヴィダーのウォーレス・ビアリーとジャッキー・クーパーの『チャンプ』ご覧になったら、「はあ、アメリカ映画がこんな良い映画を作ったんだなあ」とお思いになるでしょう。ところが酔っぱらって、昨日から二日酔いの男が試合のところで、観ていてね、目を伏せた。かわいそうで。子どもがね、おとつあんが無様に倒れるところ見てね、「おとつあん、おとつあん」言うところがすごいですね。「バパー、バパー」言うところがね。という訳で、あらくれの、あらくれの何とも知れんもう酒飲みの、飲んだくれと、かわいい子どもの映画なんですね。

で、おつかさんいないのね、そういう訳で、アイリーン・リッチのお母さんは離れちゃっているのね、もう。そういう訳で、いかにも親子の感じ、下町の感じ、チャンピオンは「チャンプ」と言うふうに、やくざ言葉で言うふうに、いかにも下町の感じが見事でした。で、フランコ・ゼフィレリは、これももういつべん映画にしました。やっぱりフランコ・ゼフィレリは『ロミオとジュリエット』の監督ですから一生懸命作りましたね、見事でしたね。見事でしたけどキング・ヴィダーのあの名作を頭に入れていると、甘いなあと思いましたけれども、『チャンプ』この映画自身はいいストーリーだから、どの映画、どつちもご覧になっても負けないうくらいお泣きになるでしょう。



ステラ・ダラス

Stella Dallas

(1937・アメリカ)

監督：キング・ヴィダー

出演：バーバラ・スタンウィック / ジョン・ボーolz



〈作品データ〉

受賞歴…1937年アカデミー賞主演女優賞ノミネート／助演女優賞ノミネート

制作年…1937年

制作国…アメリカ

時間……106分

監督……キング・ヴィダー

脚本……サラ・Y・メイソン／ヴィクター・ヒアマン

撮影……アーサー・エディソン

出演……バーバラ・スタンウィック／ジョン・ボールズ／アン・シャーリー／バーバラ・オニール／アラン・ヘイル／ティム・ホルト／マージョリー・メイン／ラレイン・デイ

〈作品解説〉

1925年にヘンリー・キングが監督した母性愛映画の名作をキング・ヴィダー監督が再映画化した。無知だが気のいい女ステラ・ダラス（バーバラ・スタンウィック）は建築技師との間に女の子を作るが、娘の将来を思い自分の夢を犠牲にして身を引く。娘の結婚式を雨に濡れながらステラが窓越しに見るラストは映画史上に残る名シーン。1990年にベット・ミドラーが主演してまたリメイクされている。

『ステラ・ダラス』、もう名前聞いただけで、僕は、ああと思うんですね。これはご覧になったら、キング・ヴィダーのバーバラ・スタンウィック主演の『ステラ・ダラス』でございます。

けれどもこの『ステラ・ダラス』は昔ずっと前、サイレントの時に映画になっているんですね。ヘンリー・キング監督、あの有名な監督でベル・ベネット、ロナルド・コールマン、ロイス・モラン、ジーン・ハーショルト、そういう俳優で見事な映画になったんですね。僕の16くらいの時ですね。僕はこれ観まして、サイレントですよ、あんまり見事なんでね、涙があふれたんですね。そうしてあくる日学校行った時に、「淀川、お前は映画ばかり観てちつとも勉強せん。算数もつと勉強しろ」と言われたんですね。で、僕はその時「それは無理だ」言ったんですね。「無理だなんて、生意気言うな」って言った時に、「先生、そんなこと言うけど、いつべん今やっている『ステラ・ダラス』ご覧さいよ」って言ったんですね。そうしたら本当に3人の先生、若かったんだね、中学の先生、3人揃ってその晩に『ステラ・ダラス』を観に行ったんですね。かわいらしいね、先生の気持ちがね。

で、あくる日教室行ったら、ワーワーワー言っているの。「どうしたの」言ったら、「良い映画だ、すごいなあ。あの子役のロイス・モラン始めから、ずっと終わりまであの子が代わらないで演ったの？ 15、6くらいであの女の子が20歳になるまで演ったの？ 1人で演ったの？」「当たり前ですよ、女優だもの」と言っただけど「いいなあ」って言ったから、「そんなんなら、先生、こんなにいい映画をみんなが帽子隠して、怖がって映画館に入るのは大間違いで、堂々と行かしてくださいよ」と言ったら、それから三中は毎月1回、堂々と映画館借りて、午前中に映画を観に行くようになりました。『ステラ・ダラス』が元でした。

という訳で、これは一部始終よく覚えております。この『ステラ・ダラス』がその自分の子どもだけど、こんな田舎で育ったらどんな子になるかわからん言うので立派な教育者がアメリカのニューヨーク連れて行く、子どもはニューヨークで勉強した方がずっと幸せになるんだから。ところが田舎者のステラ・ダラスは「本当かいな」。そのために娘を立派にこなさいって、とうとう説得してそうしてステラ・ダラスの娘はニューヨーク行くことになったんですね。

お母さんは自分の子どもだからさ、「わあ、辛いな」と思いながらも子どものためならと思うので、汽車で送るところあるんですね。そこが凄いですね。それで、汽車に乗った、乗った、さあもうじき汽車が出発するいうところで涙が出て止まらないの、両方とも、親子が。それで自分のハンカチ貸してやって泣くな泣くな言っ、シュシュシュシュ汽車が走り出したの。ワーワー涙が出て止まらないの。ハンカチがないの。娘にやったから。泣きながらこの停車場に来たの。

で、最後にもう本当に自分の子どもだけども、もう自分が出て行って、会おうと思ったら子どもが逃げたの、あんなお母さんに会ったらみんなに笑われるというので。

で、ステラ・ダラスは泣きながらもう娘に会わない方がいいんだ、いいんだ、と娘に会わないで、最後の最後は娘の結婚だけを新聞で見てソロツと見に行くのね、窓から中のぞくのね。娘が綺麗な娘になって旦那さんと結婚する、それ見て良かった良かった言うところがあるのね。雨が降っている中で見ていたんですね。そしたらおまわりが来て「こら出て行け馬鹿、おまえはのぞいたらいかんぞ」そう言われてへーへーと行くところで終わるんですけど、これが後にチャップリンの『街の灯』のラストシーンになりましたね。という訳で『ステラ・ダラス』は名作でしたね。



制服の処女

Mädchen in Uniform

(1931・ドイツ)

監督：レオンティーネ・ザガン

出演：ヘレタ・ティーレ／ドロテア・ウィーク



〈作品データ〉

制作年…1931年

制作国…ドイツ

時間……87分

原作……クリスタ・ウインスロー

監督……レオンティーネ・ザガン

脚本……クリスタ・ウインスロー／F・D・アダム

撮影……ライマール・クンツェ／フランツ・ワイマール

出演……ヘレタ・ティーレ／ドロテア・ウィーク／ヘドヴィツヒ・シュリヒター／エミリア・ウンタ／エレン・シュヴァンネケ／イルゼ・ヴィンター

〈作品解説〉

ドイツの女流作家クリスタ・ウインスローの原作を女流監督レオンティーネ・ザガンが演出した名作。厳格な全寮制の女学校で封建的な規則に縛られる女生徒たちと、聡明な女教師との交流を描き、学園紛争にまで発展する。女教師役のドロテア・ウィークの端麗な美しさが人気を呼んだ。原作、監督、主演すべて女性によって製作され、あの時代に同性愛をテーマにしているあたり、一見の価値がある作品だ。

ドイツ映画の『制服の処女』懐かしいねー。ご覧になった人は今もうお爺さんだね。もうお亡くなりになっているかもわかんないね。そのぐらいの映画だけどこれはいろんな想い出のある映画。『制服の処女』、『Mädchen in Uniform』とか言いましてね。もうみんながね、憧れて大好きな映画で、ドロテア・ウィークという奇麗な奇麗なドイツの女優と、ヘルタ・ティーレというかわいいかわいい女優、2人の名作ですね。で、これはレズビアンなんですね。すごく当時珍しい映画でしたね。

学校の先生、校長さんがとっても怖い先生だったの。けど、このドロテア・ウィークの先生が優しい優しい先生なの。生徒にみんな好かれているのね。ところがその先生をこの校長さんは、あんまり優しくしすぎるから生徒が怠けて困るというので追い出そうとするんですね。さあ、生徒がみんな、みんなストライキしちゃったのね。「あの先生を辞めさせるなら私も辞めます」って騒動が起こったのね。そういうふうに先生と生徒のとっても親しい愛情のあふれた映画だったんですね。その中でもドロテア・ウィークのこの先生とヘルタ・ティーレの生徒がだんだんだんだん仲良しになって、しまいにはレズビアンみたいに、あの先生がいなかったら私死んじゃう、あの子がいなかったら私死ぬ、という感じの奇麗な映画だったんです。で、この2人の女優がすごく奇麗だったの。

で、この原作がレオンティーネ・サガンで、監督自身も、もうこの女の人のね。全部女なの。そういう訳でこの映画は非常に女の感覚があふれた映画なの。

で、これを東和商事、東和映画ですね。あの最初のできたての東和映画、その人が奥さんと、川喜多かしこさんと一緒に新婚旅行に行ったのね。そうしてドイツ行った時に、いろんなの見てあれも買いましょう、これも買いましょうと言った時に、かしこさん、奥さん、もう新婚旅行中ですよ、「私はあの映画とっても好きなのよ」と言ったのね。「でもあれは女だけでね、名女優、名優出てないんだよ。あれレズビアンだよ」「あの映画、奇麗奇麗、あんな奇麗な映画、あれ買わないと嫌々」と言ったんですね。で、もう困っちゃったのね。川喜多さん、あんな映画買ったってドロテア・ウィーク誰も知らないし、ヘルタ・ティーレ誰も知らないんだよ。女ばっかり出て来るんだよ。男いないんだよ。あんな映画駄目だよ」「あれ買ってよ、あれ買って。あんな奇麗な女優いないよ。2人ともかわいいかわいい」

もうしょうがないからってハネムーンのお土産に買って帰ったのね。そうしてこれを『制服の処女』という題名でやった時に日本で大あたりしたのね。東和商事、今の東和映画はこの作品で一躍儲かって、一躍、東和商事、東和映画の名前が一躍日本中に広まったのは『制服の処女』ですね。そういうふうに、これが名作なんです。ところが当時この映画観た時に、もう女の人が列を並べて、並んで映画館に駆け込んだのね。女の感覚が、女のうれしさが、女の優しさがこんなに出的映画なかったのね。奇麗な奇麗な映画。けど『若草物語』のような優しい映画じゃないのね。厳しいものがあるのね。女の愛情に厳しさ、怖さ、それでいかにもドイツ映画らしいのね。そういう意味で『制服の処女』これはもうあらゆる意味で一生忘れない映画ですね。

ところがドロテア・ウィーク、これがあんまり奇麗なのでアメリカに迎えられてハリウッドに行きましたけれど、ドロテア・ウィークはアメリカでは成功しなかった。やっぱりドイツの女優ですね。ヘルタ・ティーレも奇麗だった。これもドイツの女優ですね。ドイツの映画でこんな奇麗な映画があったという意味で『制服の処女』は今ご覧になったら皆さん、「ああ、こんな奇麗な映画」そう思いますね。で、みんなが校長さんにボイコットするの。あの校長さんは嫌いだ嫌いだ言って、もう生徒中が全部でねストライキするあたり、当時そんな映画なかったから日本の映画ファンの、ことに女の方はびつくりして拍手したんですね。もう『制服の処女』は問題の作品ですよ。



一日だけの淑女

Lady for a Day

(1933・アメリカ)

監督：フランク・キャプラ

出演：ウォーレン・ウィリアム / メイ・ロブソン



〈作品データ〉

制作年…1933年

制作国…アメリカ

時間……88分

監督……フランク・キャブラ

脚本……ロバート・リスキン

撮影……ジョセフ・ウォーカー

出演……ウォーレン・ウィリアム／メイ・ロブソン／ガイ・キビー／グレンダ・ファレル／ジーン・パーカー／
ウォルター・コノリー／ネッド・スパークス／ナット・ペンドルトン

〈作品解説〉

笑わせホロリとさせるフランク・キャブラ監督の人情喜劇。ニューヨークで暮らすリンゴ売りの貧しい中年女は、爪に火をともしようにして娘を留学させるが、スペインの伯爵と結婚した娘は一時帰国するという。慌てた彼女は粹な仲間たちの協力で1日だけ上流社会の淑女を装うことになる。最愛のひとり娘の幸福を願う母親役を名女優メイ・ロブソンが見事に演じ、心地のいいキャブラ映画になっている。

『一日だけの淑女』（Lady for a Day）、これはフランク・キャブラの名作でした。

見事な映画でした。どんな映画と言いますと、ホテルでギャングがちょっと暇ができてポケットにいっぱい金があって、「どこで遊ぶかな」そう5、6人のギャングの群れがそう思ったりしました。ところがお婆さんが手紙を書いておりまして、泣きながら書いておりました。で、「ばあちゃんおまえ何しているんだ？」と言ったら、「私は掃除やっているババアだけれども、修道院に行っている娘にいつもこのホテルの便せんで手紙出している。で、娘が私をホテルに泊まっている貴婦人と思っただろう。私がホテルに泊まっている金のある未亡人と思っているから、私はそのつもりで話合まして、私はね今日はね、なんて言っちゃってちょっと金のあるふうで手紙書いた。ところがまあ5年ぶりに帰って来るってきたんです。で、帰られたらどうしようと思ったんです」

そうするとそのギャングが、「たまにはいいことで人を泣かすのもいいな。俺たちはいつも拳銃で人を泣かせるけど、たまには心温かい泣かせ方もしようかな」と5、6人が相談しました。「うん、そうしよう」「婆さんおいで、おまえね、ここのレディにしてやるから、貴婦人にしてやる」「えっ私を？」「うん、衣装買ってきてやるから綺麗なレースの着物着ろ。ドレス着ろ。で、みんなそれぞれ役持ってね、おまえを1日だけ綺麗な貴婦人にしてやる」って言ったら婆さん泣いて「そんなことしてくれますか？」と泣いたの。そうしてその娘が来た時に本当に淑女になってみせた映画ですね。

これは涙がいっぱいあふれるくらい心の映画になりました。ギャング、拳銃で人を殺して泣かすよりも心で泣かす。温かい心で泣かす、いかに良いことかギャングが目覚めた映画ですね。いかにもこの映画はそういう感じのキャブラの本当のキャブラらしいタッチの映画でしたね。

ところがキャブラはこれが忘れられなくて、もういつぺん作ったんですね。『ポケットいっぱいの幸福』という題で。という訳でキャブラがいかにこのストーリーが好きだったか、で、この話が好きだったか、1日だけでもいいから貴婦人にしてやるというこの話にフランク・キャブラが参って、自分で二度も映画にしたところで、この作品は注目作品ですね。



群衆

Meet John Doe

(1941・アメリカ)

監督：フランク・キャプラ

出演：ゲイリー・クーパー／バーバラ・スタンウィック



〈作品データ〉

制作年…1941年

制作国…アメリカ

時間……124分

監督……フランク・キャブラ

脚本……ロバート・リスキン

撮影……ジョージ・バーンズ

出演……ゲイリー・クーパー／バーバラ・スタンウィック／エドワード・アーノルド／ウォルター・ブレナン／
ジーン・ロックハート

〈作品解説〉

女性記者がジョン・ドーという失業者の架空の名前を使って、市庁の屋上から投身自殺するという投書記事を夕刊に出したことが大反響。困った彼女は失業中の野球選手をジョンに仕立てる。マスコミによって偶像になってしまった男の苦悩と再起する姿を通して、民衆の恐ろしさとデモクラシーの不屈の強さをフランク・キャブラ監督が軽妙なタッチで描いた名作。ジョン役のゲイリー・クーパーがかっこいい。

フランク・キャブラの『群衆』。

ゲイリー・クーパー、バーバラ・スタンウィック、面白かったね。

ところが面白かったねというのは私で、みなさんは初めてご覧になる方が多いと思います。

これ面白かった。

で、この話はもうご覧になったらわかるけども、働いているバーバラ・スタンウィック、そこに上からボーイがやってきて言うんですね。

「あらどうしたの」

「お前クビだよ」

急に今クビ？ よくもそんなことぬかすな、というんでバタバタバタとタイプライターで、正義とは何だ、こんなばかなことはない、なぜ私をクビにするんだ、正義というものは世の中にあるのか、と書いて輪転機に放り込んで、その時に“ジョン・ドー”と書いたんですね。

全然いない人、つまり“井上太郎”みたいな名前を書いたんですね。

さあそれで、ここの社長怒ったのね。「誰だこれ印刷したの！ 新聞に出たやないか、こんな原稿誰が書いたの！」と大騒ぎしたら、えらい評判になって、みんながジョン・ドーという人偉いわ、偉いわということで逆に探してきて、もっと書けて。

バーバラ・スタンウィックはもっと月給くれたら書きますよ、言うたんですね。

それで月給上げて、毎日毎日書いた。

えらい人気になって、ジョン・ドー、ジョン・ドーいいな、いいなって、ジョン・ドーの写真見せてくれ言うたんですね。

ゲイリー・クーパー出てった時に、あんたいいですよ、あんた使いますよと言ったんです。

ゲイリー・クーパーがいかにも自分が望んでいるタイプの男だったから。

そうして、

「これからさ、写真撮るから、そこに座んなさい、で、怒った顔してください」

「俺ちつとも腹が立たないよ、今働く仕事が見つかったところで、おまけに、こんな昼飯なんか並んだから、俺はうれしくてにこにこしているんだよ」

「けどあんた怒る役しなさいよ」

「怒れないよ」

「でもあんた野球選手だったんだろ」

「うん」

「そうしたら、野球でセーフの時、もしもアウト言うたらどうする」

「そんなばかなこと」

って、パッとそこんこ撮ったのね。

で、怒っているところ撮って、新聞にジョン・ドーって男が出てきて、正義はこれこれこれこれって言うところから始まっていくんですね。

そうしたらこの人のファン・クラブしようってえらいことになってきて、ジョン・ドーはみんなの前で演説しないといけない。

ジョン・ドーはそんなことぜんぜんできない。

それをバーバラ・スタンウィックが原稿書いて、ジョン・ドーが読むんですね。

正義とはこういうものだ、これこれだ。

みんなはそれで、ジョン・ドーさんは偉い人だなあ。

だからそれがサンフランシスコでもニューヨークでも、ロサンゼルスでもどんどん呼び出してきて、ジョン・ドーは各地に行っただんですね。各地でその原稿読んだんですね。

読むうちに自分でしゃべれるようになったんですね。

正義とはこういうもんだ、ああいうもんだ、つてえらいことになって、ジョン・ドーは本当のジョン・ドーになったんですね。

さあそういう話だけど、ここでジョン・ドー自身が実は俺は違うんだ、俺はジョン・ドーでないんだと言わないと、俺、生きていけないと言い出したんですね。

バーバラ・スタンウィックが

「あんたいいじゃないの、これだけ有名になったらそうなたらいいじゃないの、自分で原稿書かなくてもしゃべれるんだから、本当のジョン・ドーになったらいいじゃないの」

「俺はジョン・ドーじゃないんだから、嘘のジョン・ドーになっているのはいやだ」

それで、みんなの前で俺は死ぬんだってところがラストになるんです。

屋上に上がって「俺は死ぬよ」、バーバラ・スタンウィックが「だめよ一つ」ていう、このラストがまたいいんですね。

という訳で、この『群衆』、これはフランク・キャブラ、ゲイリー・クーパー、バーバラ・スタンウィックの名作ですよ。



素晴らしき哉、人生！

It's a Wonderful Life

(1946・アメリカ)

監督：フランク・キャプラ

出演：ジェームズ・ステュワート／ドナ・リード



〈作品データ〉

制作年…1946年

制作国…アメリカ

時間……130分

監督……フランク・キャブラ

脚本……フランク・キャブラ／フランセス・グッドリッチ／アルバート・ハケット

撮影……ジョゼフ・ウォーカー／ジョゼフ・バイロック

出演……ジェームズ・スチュワート／ドナ・リード／ライオネル・バリモア／ヘンリー・トラヴァース／トーマス・ミッチェル

〈作品解説〉

フランク・キャブラ監督が人生のすばらしさを現代の心温まるファンタジーとして描いた名作。大金を失くして絶望し自殺を図ろうとした中年男（ジェームズ・スチュワート）の前に、年老いて200歳になっても翼をもらえない2級天使（ヘンリー・トラヴァース）が現れた。そしてクリスマスの夜に奇跡が起こる！ キャブラ映画の代弁者と言われるスチュワートが、この作品でも“アメリカの良心”を見事に演じきっている。

フランク・キャブラの『素晴らしき哉、人生！』。
これ、ドナ・リードとジェームズ・スチュアートですね。

キャブラの話しましょね。キャブラと言いますと『或る夜の出来事』。
もうあれでいつぱいに有名になりましたね。

面白い人でね、この人と帝国ホテルで私会ったんです。会った時に済んで終わりに、私が冗談言ったんですね。
「East is east, west is west, never the twin shall meet.」、東は東、西は西、絶対両者あい会わず、言ったんですね。すると
キャブラが、「Yes, yes.」言ったんです。
そして別れてドア開けて出て、別々の部屋へ向かったんですね。

ところが帝国ホテルはややこしいホテルで、廊下が入り交じっているんですね。
で、さよならってはっきり言ったのに、また会っちゃったんですね。
「わ、また会っちゃったね。絶対会わないだろう言ったら、また会いましたね。East is east, west is west. あれ、うそだね」
なんて言って2人で笑ったことあるんですけど、そのぐらいにキャブラは面白い人でした。

この人の映画は、どれもこれもアメリカ、アメリカ、アメリカで見事に面白い人ですけど、私は『毒薬と老嬢』、
あれ、いかにもキャブラの中で違う意味で面白かったですね。

お婆さん2人が宿作ったんですね。宿屋を。そしてお婆ちゃん2人、非常にいいお婆ちゃんで、「あのねえ、お見えになる人みんな、もう年寄りの方でいろいろねえ。お年寄りの方は、もうそう長いこと生きない方がいいわね、優しく殺しましょうか」つて、お婆ちゃんとお婆ちゃんが本気で言ってたんですね。
「そうそう、お見えになる人がみんなワイン飲んで眠るようにお亡くなりになったら、本当に幸せね」。本気で2人が
がそう言って、来る人、来る人、みんな殺していくんですね。

で、死体を床の下に入れるんだけど、床の下もいつぱいになっちゃったのね。
「お婆ちゃん、お婆ちゃん、ちょっと床の下いつぱいになつたね」
「そのソファの下へ入れましょうか？」
それでみんなソファの下へ入れたんですね。

そこへボルシカーノかなんか、人相の悪いのがやって来たんですね。
で、「この人も殺しましょうか」言う前に、腰掛けた時に、ちょっとねじった時に、ほんと下見たら下の蓋開けた
んですね。
そこへ死体が入ってたんで、「わーっ！」と怖がる場所があつて、お婆ちゃん2人は「あの仏様は静かにお休み
ですよ」言ったのに、驚いちゃって逃げようとしたんですね。

という訳で、この『毒薬と老嬢』も、面白い映画でしたけれども、お会いした時もなかなか面白い人で、私、フ
ランク・キャブラが『或る夜の出来事』で、アメリカいうものをこんなに面白く見せたか、ゲイブルをこんなに発見し
たか、コルベールをこんなに面白く使ったかいうので、このキャブラ、好きですね。

そのキャブラはいろいろ、いろいろ作りました。
『群衆』、それもゲイリー・クーパーが面白かった。

本当に名作の監督でしたね。



我等の町

Our Town

(1940・アメリカ)

監督：サム・ウッド

出演：ウィリアム・ホールデン／マーサ・スコット



〈作品データ〉

制作年…1940年

制作国…アメリカ

時間……90分

原作……ソーントン・ワイルダー

監督……サム・ウッド

脚本……フランク・クレイヴン／ハリー・チャンドリー

撮影……バート・グレノン

出演……ウィリアム・ホールデン／マーサ・スコット／フランク・クレイヴン／フェイ・ベインター／ボラ・ボ
ンディ／トーマス・ミッチェル

〈作品解説〉

ピュリッツァー賞を受賞したソーントン・ワイルダーの名戯曲をサム・ウッド監督が映画化。アメリカの地方の小さな町。隣り合わせに住む医師の長男ジョージ（ウィリアム・ホールデン）と町の新聞社の長女エミリー（マーサ・スコット）は幼なじみ。2人はごく自然に愛し合い、やがて子どもを授かるが、エミリーは難産で生死をさまよい過去から未来へ飛ぶ。地味だが男女の青春が淡々と描かれている。

『我等の町』、これ僕大好きなの。ソーントン・ワイルダーの舞台劇で、『Our Town』、これは良かったんだ。ところがこのソーントン・ワイルダーの舞台劇、これを当時東京でも大学生が大学祭のお祭りに必ず舞台でやったものですね。

どうしてこれを必ずやるか言うのと、これは舞台では何にもセットなし、2つの椅子を並べて、そこへ男の子と女の子が腰掛けたまま語る話、あの時ね、あの時そうね、あれからこうなった、2人の会話で舞台が終わる、面白いデザインの芝居で、その前に1人だけ先生が出てくるの、お爺ちゃんが、「ここが、何とかの街ですよ」と言うのね、「今ね、夜明けのね、6時ですよ」と、「まだ、みんな静かに寝てるんですよ」、そこから始まるのね。

向こうの方に、早くから電気がついてるとこ、あるでしょ、どうして電気ついてるの、今日お葬式なんですよ。だからもう、お通夜なんですよ。で、この街のみなさん、話を聞いてください、1人の男と1人の女がいたんですよ。この名前がこれとこれと……そっから始まるんですよ、映画も面白い映画でしたよ。

で、これは、つまり坊ちゃんとお嬢ちゃんが同じ学校行ってるのね。で、坊ちゃんが宿題ができない時には窓開けて、隣に「おい、メリーさん、あの宿題の3番目わかるかい」言ったら、「あ、わかるわよ」言って、書いてね、ぱっと送ってやるのね。「あ、そうか、答えわかったか、ありがとう」なんていうね、メリーさんとジャックが仲がいいのね。

それが、小さい時から仲が良くて、中学校も仲が良くて、上の学校へ行く時、2人がLOVE、恋したのね、2人が一緒にソーダ水を、1つのソーダ水を2人で飲む、とっても仲のいい恋仲になったのね。

その男の方のお父さん、お母さんも「いいねえ、あのお嬢ちゃんと結婚できたらいいのになあ」と言っただんですね。

で、この娘の方のお父さん、お母さんも「お宅の坊ちゃんと結婚したらいいなあ、いいなあ」と言っただんですね。もう最高のパーフェクト・ストーリーですねえ、ラブ・ストーリーですね。

そうしていよいよ結婚式、「よかったなあ、お宅のぼんぼんと結婚して」「お宅のね、お嬢ちゃんと結婚できて良かったなあ」。

何にもないの、この人生には、何の変わったことないの。そうしてこのOur Town、街で、この夫婦は結婚した。さあ楽しく、楽しく生きた、仲良く、きょうだい仲良かった。

これをウィリアム・ホールデンと、マーサ・スコットが演ってるんですね。ホールデンはこれが最初ですね、映画でね。まだ若い、若い、若僧ですね。

そうして、いいお話が奇麗にいつてるのに、2人目の赤ちゃんの時にこの花嫁さんが、死にかけたんですね。

「うう、死ぬ、うう」とこから、本題へ入って行くんですね。「おい、しっかりしろ、しっかりしろ、おまえ、生きてるんだよ、死なないで、死なないで」「うう、あたい死ぬ、あたい死ぬ、あたい死ぬ、あたい死ぬ」言うところから、過去が出て来るんですね。

その過去がいいんですね、過去が画面に出て来るんですね。その死ぬ、死ぬ、死ぬ言うお母さん、嫁さんの傍に、若い子どもが出て来るんですね、それが過去ですね。

あたいは何のために生きてたんだろう。あたいは何もかも感謝しなかったな、あたいは何だろう、何だろう。今死ぬんだ、今死ぬんだ。

そうして舞台劇は、丘の上のお墓場に、お爺ちゃんお婆ちゃんの墓があつて、そこに1つ空いてるのね。そこへその娘さんが、あの花嫁さんが死んで、座つて下のお葬式見て幕が下がるんですけど、映画の方は「しっかりしろ、しっかりしろ」言ったら、「おぎゃあ、おぎゃあ」言つて、赤ちゃんが泣いて、「はあ、おまえ、生き返ったか」言うところで終るのね。

いかにも『Our Town』は、見事な舞台劇でした。見事な映画になってましたよ。



南部の人

The Southerner

(1945・アメリカ)

監督：ジャン・ルノワール

出演：ザカリー・スコット／ベティ・フィールド



〈作品データ〉

制作年…1945年

制作国…アメリカ

時間……91分

監督……ジャン・ルノワール

脚本……ヒューゴ・バトラー

撮影……ルシアン・アンドリオ

出演……ザカリー・スコット／ベティ・フィールド／J・キャロル・ネイシュ／エステル・テイラー

〈作品解説〉

フランスの巨匠ジャン・ルノワール監督がアメリカに渡って撮った名作。アメリカ南部の農園で働く移民労働者サムは念願になって独立。豪雨や人間関係のトラブルなど、さまざまな苦難と闘いながら一家の助けを借りて土を愛し土に生きる農民になっていく。ルノワールは大地の人々を人間味豊かに描き、ザカリー・スコットをはじめ名優揃いで、息の合った演技は見ごたえがある。

『南部の人』(The Southerner)、これはアメリカ映画ですけど監督はジャン・ルノワールなんですね。あの『どん底』『大いなる幻影』のあのジャン・ルノワールがアメリカで『南部の人』という作品を映画にしたんですね。面白いですね。

どうしてアメリカ行ったの？　と言いますのはフランスで革命があつたりしていろいろファシスト的になってきたので、アメリカ逃げて行つたんですね。で、ジャン・ルノワールはアメリカでまず『南部の人』を作つたんですね。私はアメリカのロサンゼルスで喜んで飛んでこれ観に行きましたら、いいんだねえ。ジョン・フォードが『怒りの葡萄』あれは凄いで非常に貧しい農夫、貧しい農夫を厳しい厳しい感じで映画にしていました。ところがジャン・ルノワールは『南部の人』田舎の本当の農家ですね、貧しい姿に柔らかい柔らかい愛情を持って映画にしているんですね。それがとっても面白かつたですね。

で、ザカリー・スコットとかエステル・テイラーとかそれから、そういうの出ていますけど、それよりも一軒の家があつてそこに井戸水がないので隣の、隣と言つても南部のその田舎ですから少し離れているの。そこへ水借りに行つたら何くれるか？　と言うのね。ただではやらないと。そういうなんか知らないけどケチくさいケチくさいね、南部の田舎の話がユーモアのある描き方で描いています。といってニコニコ笑う形じゃないの。ほんのりとおかしいなあと言う形で。

そうしてこの『南部の人』はどういう家庭かというと、貧しい貧しいお百姓さんで、そうして若い女と結婚しているんですけど、おばあちゃんも一緒に暮らしているの。そうすると小さな部屋だから一間を2つに分けているのね。田舎だから。そうして2人が寝ているのをおばあさんがいつも覗くのね。じーつと。と、2人は一緒におるけどセックスができないのね。おばあさんがずっと見ているの。で、おばあちゃん寝なさいと言うと、ハイハイと寝るんだけどのぞきに来るのね。

というふうな面白い面白い田舎の話だけど、おばあさんはいつも表出て野葡萄をあつちの葡萄、こつちの葡萄、そういうの採ってきてはプチプチ食べているのね。そういう話ですけど隣のすぐ隣の家庭、家庭でなく農家がケチでケチで、そのオヤジがケチでいじめるのね。そういう話を柔らかい感じで出しているんですね。

で、隣のオヤジをJ・キャロル・ネイシュが演つてるのね。これがまたうまいんだね。J・キャロル・ネイシュを私はハリウッドのスタジオで、フリッツ・ラングの作品の『クラッシュ・バイ・ナイト』(夜の衝突)、これで観たんですね。で、J・キャロル・ネイシュが出てるんです。「あつ！『南部の人』のあの人だ！」って観てましたの。そうしたらこの人が「俺はなー、あの時いなかったら……」と言う長い台詞をつまづくのね。いつもつまづくの、間違うのね。「あつしまった！」もういつぱんやり直し。監督がフリッツ・ラングいう有名な監督ですね。じーつと見て何回も何回も何回もやり直すのね。で、しまいにはそのJ・キャロル・ネイシュ『南部の人』に出てたこの男、この男が「ああ辛い辛い辛い、お母さん助けて、お母さん助けて」と手を合わせているのね。それなのに監督は横向いてんのね。慰めないのね。ああ辛い！　8回目にやつとバツと通つた。みんなが手を叩いた。J・キャロル・ネイシュが喜んでサンキュー、サンキューと言つた。で、僕はそのフリッツ・ラング監督に言つたのね。「あんなに苦しんでいるんだから、1回ぐらい頑張れよとか、いいからやれよと言ってあげたらどう？」とフリッツ・ラングに言つたら「それを言つたらこれはなんぼたつても駄目なの。甘えちゃつて。言わないで黙っているからやれたの」そう言つて監督そう申しましたが、監督がそう言うようになかなか映画の監督いうのも難しいんですね。

というような訳で話が飛びましたが、『南部の人』はルノワールのアメリカの最も見事な映画で、ジョン・フォードが厳しい厳しい南部の、南部じゃない西部の貧しい百姓を映画にしたのにこの人は温かい農家を寂しい田舎、貧しい家庭、それを柔らかい感じで出しました。ルノワールは立派な人でしたね。



河

The River

(1951・アメリカ)

監督：ジャン・ルノワール

出演：パトリシア・ウォルターズ／エイドリアン・コリノ

トーマス・グリーン／アーサー・シールズ



〈作品データ〉

受賞歴…1951年ヴェネチア国際映画祭国際賞

制作年…1951年

制作国…アメリカ

時間……105分

監督……ジャン・ルノワール

脚本……ルーマー・ゴッデン／ジャン・ルノワール

撮影……クロード・ルノワール

出演……パトリシア・ウォルターズ／エイドリアン・コリ／トーマス・グリーン／アーサー・シールズ

〈作品解説〉

巨匠ジャン・ルノワール監督が悠久のインドに挑んだ初のカラー作品。ガンジス河のほとりで育った3人の英国娘と、戦争で片足を失ったアメリカ青年将校との淡い交流を描く。インドの大自然を背景に、喜びと悲しみを舞踏のリズムに乗せて綴る画面はまさに陶酔の映像美。このあたり、印象派の大画家である父の美的感覚を受け継いでいるのかもしれない。

僕の最も好きな監督、ジャン・ルノアール。

この人の『河』。

これやりましようね。

これは、面白いお話なんですよ。

このジャン・ルノアールが、ちょっとアメリカ行っただすね。

アメリカで『南部の人』とかいろいろ撮っただすね。

ロサンゼルスの人がみんな、ジャン・ルノアールのファンだったんですね。

「ジャン・ルノアールさんの映画は奇麗だなあ。奇麗だなあ」ということになって、ロサンゼルスのハリウッドの花屋さんがジャン・ルノアールに会いに行っただすね。

「どうかルノアールさん。奇麗な、奇麗な映画を撮ってくださいませんか？　ここに資金がありますから」

ちゃんとお金集めてきたんですね、花屋さんが。

ルノアールは感激したんですね。

「それじゃ僕は、あなたたちが好きなような映画ができるかわからないけれども、ひとつインドの映画を撮りましよう」と、言っただすね。

インドが一番カラーが奇麗だからインドの映画撮りましよう、と言っただすね。

みんな喜んだんです。

そうして、『河』は生まれたんですね。

『河』は奇麗な映画でしたね。見事に奇麗でしたね。

インドのにおいがぶんぶんしましたね。

インドというのは、砂で模様を描くんです。赤い砂、青い砂、黄色い砂で、奇麗に、カーベットのようになで砂で絵を描く美術家がたくさんいるんです。

そのインドで、早春、若い、若い女の子が、初恋のような、愛に対して憧れてるようなお話なんです。

奇麗な、奇麗なお話だけど、その中に何があるか？　花祭りがあるんです。

色祭りがあるんです。みんなが手にいろんな色、持つんです。

赤い色、黄色い色持って、お互いそれ投げ合うんです。それが奇麗なんです。

その中の3人か4人の早春の女の子の1人がインドの女の子なんです。あとはイギリスの女の子、アメリカの女の子。

そのインドの女の子が、お祭りのためにダンスを勉強するんです。

ダンスを踊るんです。

そのダンスの奇麗なこと、奇麗なこと。

しかも、その女の子がカタカリかカタハリか知らないけど、パツ、パツ、パツと踊る。

握った手が、パツと開くと中が真っ赤なんです。

いいんです。その踊りがいいにもいいんです。

そして、この映画のインドの音楽が奇麗なんです。

やっぱりルノアール、やっぱりルノアールと思いました。

それを映画館で、グローマンズ・チャイニーズ・シアターで私は友達と観に行っただす。

まあーきれい！ いいなあ！ 本当にルノアールはいいなあ！、と言ったら、隣の男の子が、いっしょにいた男の子がガーッと寝てるんですね。

それ見てから、その男の子には一生僕もの言わなかった。

キライになった。絶交しましたね。

という訳で、この映画良かった。で、音楽も良かった。

日本に帰って来て、「ああ、いい映画だったよ！」って野口久光に言ったら、野口久光が「どんな映画？ どんな音楽？ レコード持ってんの？」

レコード渡したら、とうとうとられて、野口久光、亡くなりまして、あのレコードは返してくれなかったね。

そのくらい、この『The river』は、『河』はルノアールの名作。

ルノアールはこれを撮ってから、アメリカでいろいろ撮って最後にこの映画を撮ってから、フランスに帰りましたね。何年ぶりかで帰りましたね。

で、フランスで『フレンチ・カンカン』、あの最高の音楽作りましたね。

という訳で、ルノアールという人は、お父さんも立派だったけど、ルノアールの作品も立派でしたね。



大地のうた

Pather Panchali

(1955・インド)

監督：サタジット・レイ

出演：サビル・バナルジー／カヌ・バナルジー



〈作品データ〉

受賞歴…1956年カンヌ国際映画祭国際カトリック事務局映画賞／人間的ドキュメント賞
制作年…1955年
制作国…インド
時間……125分
監督……サタジット・レイ
脚本……サタジット・レイ
撮影……スブラタ・ミットラ
出演……サビル・バナルジー／カヌ・バナルジー／コルナ・バナルジー／チュニバラ・デヴィ／ウマ・ダス・グブ
タ

〈作品解説〉

この一作で世界的な監督となったサタジット・レイの記念すべき処女作。インドの平原の寒村に住むハリ（カヌ・バナルジー）は妻に助けられ、息子と娘の成長を楽しみにしていたが、生活力がなく先祖伝来の畑も失ってしまう。インドの階級制の空しさと人間の生と死の厳粛な展開を輪廻の中で描いているが、息子オブーの汚れなき魂の遍歴を透徹なリアリズムで描写して胸を打つ。

サタジット・レイ、インドの監督ですね、カルカッタ生まれのね。

このサタジット・レイの『大地のうた』、これを最初観た時にびっくりしましたね、奇麗なので。映画の詩人ですね、これだけの作品作る人いませんね。日本と似てますけど非常にインド的ですね。

オプーという子どもがいたんですね。お父さんは教育家でお金あんまりないんですね。お母さんもお父さんもお金がない、貧乏なんですね。

で、オプーにはお姉さんがいたんですね。お姉さんと夏に蓮池のあるところ行って遊ぶんですね。その蓮池が奇麗ですねえ。広い大きな蓮池に蓮の葉がいっぱいあるんですね。

そこを商人が走って行くんですね。どうして走って行くんだろかと思ったら、ポタッ、ポタッ、ポタッと雨が降ってきたんですね。それで傘をさしたんですね。で、全部の蓮の葉が、さ一つと裏返ったんですね。あのあたり凄いですね、奇麗なんですね、カメラがね。

そうして、ザーッと雨になった、その景色の奇麗なこと。

お姉さんは雨が好きだから、表へ出て行って雨の中でダンスを踊ったんですね、インドのダンスを。そこらがいいんですね、長い首をくりくりと動かして、踊ったんですね。

「さあ、お姉さん、風邪ひくよ」そう言って一緒に帰ったんですけど、お姉さん、それが元で風邪ひいて死んじゃうんですね。

そのあたりの姉弟のもつれ合いが、とってもいいんですね。しょっちゅうお姉さんと、もつれ合ってるんですね。

お姉さんと2人ですすきの野原、そこをずうっと歩くところも凄いですね。もうすすきがね、その姉弟を隠すぐらいに長く伸びてるんですね、もう銀の海ですね。

そのすすきの中を、ずうっと2人行くと、むこうから汽車が来て、2人が「汽車だよ、汽車だよ」と言って、向こうから黒い汽車がす一つと走るあたり、もう銀の海のようなすすきと、子ども2人と機関車、それがいいんですね。

見事な映画の感覚ですね。汽車が走って行く、喜ぶ子どもたち。

そういうふうにしてその姉弟が、とっても仲良かった。お姉さんが死んじゃう、その死んじゃったところが、いいねえ。お姉さんが死んでしまった。お姉さんもういない、ベッドからもいなくなった。もうお姉さんいないんだねえ、と思ったと。

お姉さんはあんまり金持ちでないから、お金持ちのうちの首飾りを盗んでたんですね、それをずっと隠してたんですね。

弟はそれ、ちょっと知ってたんですね。お姉さんが首飾りを盗つたいうことを。

家の者、誰も知らなかったですね。事件が起こっても、弟はそれを隠してたんですね。

ところがお姉さんが亡くなった。ひょっとしたらお姉さん、あれどこかに置いてるだろうか、そう思ってたうちこっち探したら、お碗の1つの中に首飾りあったんですね。

「お姉さん、やっぱり盗んどったねえ、けど言わないよ」言ってその首飾り、どこかに捨てちゃうのね、それ黙ってるのね。

ところがあくる日見たらお碗の中から、蜘蛛が1匹すう一つと走って行ったのね。もうちゃんと代わりが入ってるなと思って、そういうところがいかにもインドらしいんですね。

そうしてこの一家が、お姉さん亡くなって、お父さんとお母さんとオプーだけになった。オプー連れて「もうここじゃ暮らせないな、カルカッタのどこかに行こうかな、ガンジスの川の方へ行こうかな」言って、みんなが荷物を丸めて出て行くところで、第1部終わりますね。

その第1部が終わるところ、お父さんお母さんと、そのお爺ちゃんお婆ちゃんも、みんな住んでた家を空けて行くところ、大きな家じゃないんですね、小さな家、それを空けて行くところ、荷物を積んで、ずーっと出て行くところの最後は凄いいえ。

一家がもう何年も、何年も、何年も、住んでいた家を空けてずーっと行くところ、オプーも一緒に行くところ、家が空くんですね。で、カメラ引くんですね。

あ、これで終わったなと思ってると、その空き家に手元の草むらから1匹の蛇がによろによろ、によろによろ出て来て蛇がそのオプーの部屋の中に入って行くんですね。

それ見た時に「ああ、良かったなあ、インドの映画だなあ」思いましたね。

生きとし生ける者、お父さん、お母さん、オプーがいなくなったその空き家に「今度は私がそこへ住みますよ」って蛇が入って行く感じね。そのあたりのラストシーンなんか凄かったね。



大河のうた

Aparajito
(1956・インド)

監督：サタジット・レイ

出演：ピナキ・セン・グプタ／カヌ・バナルジー



〈作品データ〉

受賞歴…1957年ヴェネチア国際映画祭金獅子賞

制作年…1956年

制作国…インド

時間……102分

監督……サタジット・レイ

脚本……サタジット・レイ

撮影……スブラタ・ミットラ

出演……ビナキ・セン・グプタ／スマラン・ゴーシャル／コルナ・バナルジー／カヌ・バナルジー

〈作品解説〉

サタジット・レイ監督の『大地のうた』に続く第2部。ベナレスという大都会に移ったものの、ハリの家の生活は相変わらず貧しい。オプー少年は成長し、苦学の末に大学に進学。父の死、母の死を乗り越えて未来に向かう生きざまが、生死の流転を思わせる大河の流れを背景に描かれている。

『大河のうた』、これね、ガンジス河の傍へ行きますね、そのインドの風景の凄いこと。

みんなガンジス河に体入れて水浴びますね、そのあたりインドの信仰というのが見事に出て良かったですね。

で、この後が『大樹のうた』ですね。木がだんだん、だんだん、大きな木になってるところでオバーが大きくなったところを表します。

という訳で、この『大河のうた』、『大樹のうた』、だんだん、だんだん、オバーが大きくなっていくところ、やがてオバーが花嫁さんもうあたりまでが凄いなあ、見事な映画でしたね。

で、この監督が日本に来た時に、私はサタジット・レイに、「あんたは凄い人ねえ」と言ったら、「いえ、淀川さん、私よりもっと凄い人がいます」って言うから、「誰ですか？」言うたら「Mr. Kurosawa」と言いましたね。

黒沢さんに非常に尊敬心持ってましたね。この人はカルカッタの人ですから、僕はインドが大好きで、インドの舞踊が大好きですから、カルカッタのダンスの物真似したんですね。

したら、「淀川さん、よく知ってますね、インドへいらつしゃい」なんて言ってたんです。

ところがこの人、70才で亡くなりました。このサタジット・レイはインド映画の中でもハイクラス、トップですね。世界的なトップですね。

そういう意味で、サタジット・レイは凄い監督ですね。

私は『大河のうた』でこの風格、サタジット・レイの風格に酔いましたね。いい監督だなあ、と思いました。

インドでこんな監督が生まれた、ということは映画の歴史で本当に大きく、大きく残すべきことですね。

で、この人が黒沢明が大好きということと、それからこの人がカルカッタの生まれで、カルカッタのいろんなこと勉強してることも教えてくれました。

けれども、日本に来た時に非常におとなしい人でした。大きな体で、黒沢さんそっくりの体でしたけど、静かな静かな人で、「淀川さん、淀川さん」言って、「歌舞伎、好きですよ」なんて言っていましたけれども、ちつとも威張ってなかったね。本当におとなしかったね。

そういうところに、この人の品格と同時に映画自身の、豊かな、豊かな品格も感じましたね。



大樹のうた

Apur Sansar

(1958・インド)

監督：サタジット・レイ

出演：ショウミットロ・チャテルジー／シャルミラ・タゴール



〈作品データ〉

制作年…1958年

制作国…インド

時間……98分

監督……サタジット・レイ

脚本……サタジット・レイ

撮影……スプラタ・ミットラ

出演……ショウミットロ・チャテルジー／シャルミラ・タゴール／スワパン・ムカージ／アロク・チャクラバルティ

〈作品解説〉

サタジット・レイ監督3部作の完結編。大学を卒業した作家志望のオプー（ショウミットロ・チャテルジー）は、北カルカッタで友人の妹と結婚。だが妻は子どもを残して死んでしまう。絶望した彼は放浪の旅へ。時は流れ、オプーは亡き妻の残した幼い息子と出会う。人間の成長過程の中でインドの家族制度を見つめた完結編だが、父子の絆に目覚めるラストシーンはまさに感動的だ。

サタジット・レイ、インドの監督ですね、カルカッタ生まれのね。

このサタジット・レイの『大樹のうた』ですね。オプーはだんだん大きくなりましたね。大きくなって、やがて彼女を迎えることになりましたね、このあたりがいいんですね、お金持ちじゃないんですよ。

オプーは教育家ですね。小さな家におるんですね。花嫁さんとオプーの仲のいいとこがとってもよかったなあ。金持ちじゃないんですね。きょうだい、夫婦と一緒に寝てるんですね。そして奥さんの方が、新嫁の方が早く起きるんですね。

オプーが寝てる間に、「起きるよ」って言うんだけど起きられないんですね。どうしたんだって見たらね、オプーが寝てる間に花嫁さんと自分の寝巻の紐を結んでたんですね。

「まあ、やらしい、こんなことしてたの」なんて言って嫁さんが笑うところあるんですね。まあ、日本の歌舞伎と同じですね。「恥ずかしいわ」って。

そこで紐をはずして庭へ出て、コンロに火入れてごはん作るところがいいんですね。そういうあたりの2人の仲のいいところ、だんだんオプーが大きくなるところが見事ですなえ。

この映画『大樹のうた』、だんだん木が大きくなって太くなって立派になるあたりが面白い。

どこがどうと言えませんが、この人の、サタジット・レイの映画、ちょうど日本の内田吐夢の作品とそっくりですね。見事にどんどん時代が変わっていくところがいいですね。

このサタジット・レイという人、私好きですけど、アメリカに行った時にこの人の映画1本やってたんですね。

それ観たときに、ず一つとお客が並んでたんですね。僕も並んだんですね、ニューヨークで。そうすると、前から10番目の人が僕の方を見て「おいでおいで、ここへ入れてやる」なんて言って。そんふうに映画ファンがいっぱい並んでるところを見たら、どんなにニューヨークでサタジット・レイが大事に尊敬されてるかわかりますね。

そういう訳で、サタジット・レイという人はみんなに愛された人ですね。

この人の作品で、どれもこれもいいですけど、私は『チェスをする人』、これを観た時になんていい監督だろうと思いましたね。

2人の太った人がね、チェスをやってるんですね。もう何にも考えないで2人がじーつと将棋盤見て将棋やってるころの風景がいいんですね。

どっちも太ったおっさんで、ヒゲはやしたおっさんが、じーつと将棋をやっている。その着物が絹で綺麗ですね。嫁さんが、ちつともかまってくれない、将棋ばかりやってと文句言ってるところを、2人の男が将棋している品格がすごくいいんですね。

「インドの映画いうのはみんな大衆的で、メロドラマで、もうほんと仕方がない」いうふうな評判でしたけど、このサタジット・レイは、インド映画といってもハイクラス、トップですね、世界的なトップですね。

そういう意味でサタジット・レイは、本当に凄い監督ですね。

私は、『チェスをする人』を観て、この風格、サタジット・レイの風格に酔いましたね、いい監督だなあと思いました。

インドでこんな監督が生まれたということは、映画の歴史で本当に大きく、大きく、残すべきことですな。



汚れなき悪戯

Marcelino Pan y Vino

(1955・スペイン)

監督：ラディスラオ・バホダ

出演：パブリート・カルボ／ラファエル・リベリエス／

フェルナンド・レイ



〈作品データ〉

制作年…1955年

制作国…スペイン

時間……87分

監督……ラディスラオ・ヴァホダ

脚本……ラディスラオ・ヴァホダ／ホセ・マリア・サンチェス・シルヴァ

撮影……エンリケ・ゲルネル

出演……パブリート・カルボ／ラファエル・リベリエス／フェルナンド・レイ

〈作品解説〉

戦禍に荒れた僧院の老僧たちは、門前に捨てられていた子を育てる。5才になったその子マルセリーノ（パブリート・カルボ）は無垢ないたずらっ子になって、僧院中のアイドルになる。この坊やと老僧たちとのコミカルな交流、坊やがキリスト像にパンを持って行ってキリストがしゃべり出すシーン、死んだ坊やが神の使いだったと暗示させるラストシーンなどが印象的。坊やの愛くるしさと奇跡の美しさにあふれた名作だ。

『汚れなき悪戯』この話しましょうね。

僕大好きなの、この映画。スペインの映画。スペインの映画いうのはね、非常に面白いの。宗教的な非常に感覚持った映画。それと反対にもう女が暴れて暴れてしょうがない、もう赤いショールが舞台上で振り回されるような映画、その2つが有るんですね。何とも知れんセクシーな、もう派手な映画があると思うと、奇麗な奇麗な宗教的な映画があるんですね。『汚れなき悪戯』はいかにもスペインの宗教的な非常に奇麗な奇麗な映画です。音楽がまた良かったなあ。あの音楽が大変な評判でしたね。

で、ここに12人のお坊さんがいたんですね。そのお坊さんがみんないい人なんですね。ある日、表に赤ちゃんが捨てられていたんですね。「誰がこんな赤ちゃん捨てたんだろ」言いながら12人のお坊さんは赤ちゃんをまあかわいいかわいい、もう大事に大事にしましょうと言うので、みんなでその赤ん坊を大事に大事にしたらその赤ん坊が5才、6才になってきたんですね。赤ん坊がまたかわいいですね。その坊やがものすごくいいの。その坊やがね、みんなの名前つけちゃうんです。あの人はニンジンだとか、あの人は玉ねぎだとか、あの人は誰々さんだとか、みんな名前つけたんですね。それでみんなが自分に名前つけられたから喜んで喜んで、そのお坊さんがかわいがるんですね。

で、12人のお坊さんがその赤ちゃんを大事に大事にして、自分たちは結婚してません。みんな独身ですね。それが母親がないけれども父親の気持ちになってその子をかわいがるのね。で、12人のお坊さんがその子をかわいがっていったらその子が秘かに秘かに教会の誰も行かない所に行くんですね。そこにイエス・キリストの木像があつたんですね。そこにまあイエスさんがこんなところにいるわというのでね、みんなが食べているパン盗んだり、葡萄酒盗んだりそうっと持って行くんです。かわいいかわいいね。そうしてそのキリスト像にあげるんですね。「おあがり、おあがり、さあこの葡萄酒をおあがり」という訳でこの坊やが悪戯と一緒に非常にかわいい子でとってもいいんですね。

で、みなさんはそれ知ったんですね。「あの坊やは何をしに行くんだろう」とうとうわかつちゃったんです。そうしてそろ一つとついて行ったらある日行ったら、坊やがそのキリスト像の下で寝ていたんですね。「あら坊やがあんな所に寝てる」。そろ一つと行ったら坊やはそこで眠ったまま死んでいたんですね。考えたらこれはイエス様が私たちに与えてくれたプレゼント、あの坊やはイエス様の弟子だ、イエス様の身内の人だ。まあ、というところで映画は終わると思うんですけど、そこに光線が当たって坊やがいかに神の弟子だということがわかる映画で、奇麗な奇麗なスペインの宗教的な映画でしたね。

この映画観た時に、なんて奇麗なんだろう、あの音楽なんていいんだろう、あの坊やなんてかわいいんだろう、と思いがらずと観て最後のところで坊やが眠っている、実は眠っているんじゃない、死んじゃったんだ、そういうとこ観た時にやっぱりスペインはすごい映画作るなあ、奇麗だなあ、っていつて感心しましたよ。



淀川長治
クラシック名画解説全集Ⅱ



ラブロマンス

『ノートルダムのせむし男』『道』他(全21話)

World Classic film Selection





ノートルダムのせむし男

The Hunchback of Notre Dame

(1923・アメリカ)

監督：ウォーレス・ワースリー

出演：ロン・チェイニー／パッツィ・ルース・ミラー



〈作品データ〉

制作年…1923年

制作国…アメリカ

時間……108分

原作……ヴィクトル・ユーゴー

監督……ウォーレス・ワースリー

出演……ロン・チェイニー／パッツィ・ルース・ミラー／アーネスト・トレンス／ノーマン・ケリー／ブランドン・ハース／レイモンド・ハルトン／チャールズ・ファレル

〈作品解説〉

ヴィクトル・ユーゴーの有名小説を映画化。ルイ11世統治下のパリを舞台に、美しいジプシー娘に恋したノートルダム寺院の鐘つき男の純情を描いた感動作。サイレント時代に恐怖映画のスターとして人気を誇ったロン・チェイニーが怪演している。1956年に同名のタイトルでアンソニー・クインが鐘つき男に扮して五度目の映画化。また1996年に『ノートルダムの鐘』でアニメ化されている。

『ノートルダムの鐘』もうこれは有名ですね。みんなお読みになったりお話ご存知ですね。

『ノートルダムのせむし男』けど、この間アニメでありましたね。ディズニーで、あの時は日本だけ「せむし男」いう名前がいけなかったんだね。『ノートルダムの鐘』になりましたね。そういうところ、日本はデリケートですね。という訳で面白いです。これはロン・チェイニーの当たり役なんですね。ロン・チェイニーという人がこれをやっ
てね、いつべんに有名になったんですね。

で、ロン・チェイニーのこの『ノートルダムのせむし男』これはね妻かつたねメーキャップが。目の色もね、怖い怖い役しましたけど良かった。ところがジブシーの女が踊るんですね。それをパッツィ・ルース・ミラーがやってね、奇麗なダンスしましたね。で、『ノートルダムのせむし男』はロン・チェイニーの代表作ですけど、この人は『オペラ座の怪人』もやりましたし、もう昔からメーキャップ、顔を変えるのもう有名なんですね。この人は自分で顎をはずせるんですね。自分で腕の骨はずせるんですね。凄い人なんですね。そういう訳でこの人は本当にロン・チェイニーはね、47才で亡くなりましたけど、亡くなる時にロン・チェイニーはあらゆる顔やりたいので、もう顎をはずすだけでなく、あれもこれも顔を変える、顔を変える、顔を変えるで、その顔を変えることで死んじゃったの。そんなロン・チェイニー、それが『せむし男』では見事な見事な怖い怖い顔になりましたね。で、「千の顔を持つ男」という名前つきました、この人のこと。だからこの千の顔を持つ男いうので、後にジェームズ・ギャグニーがロン・チェイニーの真似してやりましたね。

というぐらい有名なロン・チェイニーの代表作品が『ノートルダムのせむし男』ですね。で、この映画で見事に出了ましたけど、この人はいろんなもう『オペラ座の怪人』もやりましたし、いろんなことやりましたけれども『ミラクルマン』っていうのあるんですね、“奇跡の人”。これがまたロン・チェイニーのなかなかの当たり役でね、これはね、もういい役者がどんどん出てベティー・カンパソンとかいろんないい役者が出るんですけど、これはそのちょっと、どうい
うのかしら世間を騙す連中がおりましてね、そしてロン・チェイニー連れて行きまして、神さんのこの薬飲んで、神さんのお祈りしたら、この通りこの男のこの崩れた顎、崩れた腕、いざりのこの足が立つんですよ。で、ロン・チェイニーがそれをいちいち本当の本気で「うーん」と言って顎の骨を治すんですね。自分で、それで腕の骨治すんですね。そうして、いざりが立ち上がるんですね。そこら本当に骨をね取って合わすんですね。そういう訳で世間でびつくりして、この一座のロン・チェイニーのこと『ミラクルマン』と言ったんですね。そういう訳でロン・チェイニーはそういうふうな役をどんどんやって有名になりました。この人の映画で『The Black Bird』というのがあるんですね。女のね怖いお婆さんになるんですね。そのお婆さんがなかなかうまいんだね。メーキャップがいかにもお婆さんでね。これに衣装着けているんですね。そのお婆さんの顔がとつてもいいんですね。ところが後に、ヒッチコックが『サイコ』で、その通りの扮装でその通りの感じでラストシーンにあの主演の男をそのロン・チェイニーそつくりのお婆さんにしたんですね。

という訳で、ロン・チェイニーはメーキャップのもう最高ですね。かわいそうにその人が47才で亡くなったなんて言うのは、どんどん顔を変える、顔を変える、顔を変える、その苦心したんですね。その顔を変えることで一生をこの人台なし、と言ったらおかしいけど、捧げたんですね。で、ロン・チェイニーのその『ノートルダムのせむし男』は今日ご覧になったら、どんな顔で出てくるか、どんな扮装か、もうそれは呆れるほど見事です、メーキャップが。で、ロン・チェイニーはそういう人です。で、今ロン・チェイニーを知らない人は、いつべんこの『ノートルダムのせむし男』これご覧になったら「はあそうか、こんな顔か」いうことがおわかりになりますし、この時のジブシーのダンサーもなかなか良かったですよ。



ウィンダミア夫人の扇

Lady Windermere's Fan

(1925・アメリカ)

監督：エルンスト・ルビッチ

出演：メイ・マカヴォイ／バート・ライテル



〈作品データ〉

制作年…1925年

制作国…アメリカ

時間……72分

原作……オスカー・ワイルド

監督……エルンスト・ルビッチ

脚本……ジュリアン・ジョセフソン

撮影……チャールズ・ヴァン・エンジャー

出演……メイ・マカヴォイ／バート・ライテル／アイリーン・リッチ／ロナルド・コールマン／エドワード・マーティンデル

〈作品解説〉

オスカー・ワイルドの戯曲を、エルンスト・ルビッチ監督が洗練された映像表現を駆使して作ったサイレント映画のコスチュームプレイ。ロンドン社交界の華ウィンダミア夫人の誕生パーティーに、スキャンダルで悪名高いアーリン夫人が姿を現わし彼女の幸福に水をさす。いったい夫人の正体は？ 無声映画にもかかわらず、説明としての字幕が一切なくても十分に楽しめる。このあたりの表現力とセンスはルビッチの独擅場で彼の代表作。

『ウィンダミア夫人の扇』、いいですなあ、『ウィンダミア夫人の扇』。扇というのがいいなあ。いかにもこの題名が気に入ったね。これはもうみなさんご存知のオスカー・ワイルドの名小説ですね。

オスカー・ワイルドは『サロメ』を作りましたね。まだ名作ありますね。けどこのオスカー・ワイルドは男性が好きで、美少年が好きでそのために牢獄、放り込まれ、そうしてやがてフランス追出されましたね。かわいそうに、今なら何でもないので。オスカー・ワイルドは晩年、かわいそうな晩年を過ごして亡くなりましたね。この『ウィンダミア夫人の扇』をドイツのエルンスト・ルビッチを迎えて映画にしましたね。ルビッチいう人は本当の芸術家ですね。それをワーナーブラザーズが呼んだんですね。そうして『ウィンダミア夫人の扇』を頼んだんですね。私たちはルビッチを見てびっくりしたんですね。で、ルビッチいう人は女を描いたら最高ですね。このルビッチの『ウィンダミア夫人の扇』は本当にアイリーン・リッチという女優を一躍有名にしましたね。アイリーン・リッチが、訳のわからない女なんです。金持ちで、綺麗な衣装着けて。それが堂々と競馬場に來たんですね。で、みんなが「あれはこの女だ？ 誰だ？」みんなが騒いだんですね。「あれ、どこの女、ウィンダミア？ どこの女？」けど彼女はみんなが珍しそうに珍しそうに見る目を無視して堂々と自分の席に着いたんですね。社交界の女王になったんですね。どこの女かわからないんです。でも綺麗な綺麗な衣装でもって大金持ちなんです。どこに旦那がいるのか？ わからないんですね。で、片一方ではメイ・マカヴォイ、かわいいかわいいお嬢ちゃんのような奥さん、その旦那さんと2人で仲良かったんだけど、ちょっとこのメイ・マカヴォイの綺麗な嫁さんが、ちょっと浮気したんですね。浮気してロナルド・コールマンの家に行ったんですね。「ああ夫がわからなかった。夫に知られなかった、良かった」いうので帰って來たんですね。帰って來てハッとしたんですね。「しまった、扇忘れてきた！ あの扇、あの扇を夫が見たらいつべに自分だということがばれる！ どうしよう、どうしよう、どうしよう！」と思ったんですね。

そうしていろいろみんなが社交界に集まって、夫も、それから浮気している彼氏も、バート・ライテル、ロナルド・コールマンみんな集まっちゃったんですね。その中で、いつも持っている扇の話が出たんですね。さあそれで、メイ・マカヴォイの嫁さんは、もうばれた！ わかった！ 自分は破滅だ！ と思った時に、「あたいが、あなたのところに扇忘れたわね」それで嫁さんは救われたんですね。あの疑問のみんなが見事な夫人だな、と見たあの夫人が実はあの若妻のウィンダミアのお母さんだったんですね。エルンスト・ルビッチはどんなに女を描いて見事か、「ああ、ルビッチという人はこんなに見事に作るのか」ということがわかったんですけど、この映画の一番いいのはこの社交界ですね。このウィンダミア夫人が入って來るこの社交界、この社交界が見事なんです、英国の社交界が。何とも知れん綺麗なんですね。競馬場、すべてが立派なんです。そういうものをアメリカ映画は持つてなかったんですね。それを『ウィンダミア夫人の扇』の中でルビッチが見事に出したんですね。そのあたりのね、いかにも英国の金持ちのエリートのその見事な上品さがあふれる映画でした。ルビッチはなかなか立派なものでしたね。



ヴァリエテ

Variété

(1925・ドイツ)

監督：E・A・デュボン

出演：エミール・ヤニングス



〈作品データ〉

制作年…1925年

制作国…ドイツ

時間……57分

監督……E・A・デュボン

脚本……E・A・デュボン／レオ・ピリンスキー

撮影……カール・フロイント

出演……エミール・ヤニングス／マリー・デルシャフト／リア・デ・ブッティ／ウォーウィック・ウォード

〈作品解説〉

中年のサーカス団の団長は、入団してきた若い娘を空中ブランコ乗りに起用しているうちに惚れてしまい、古女房を捨てて結婚。しかしその娘が若い団員と関係したため嫉妬に狂い殺してしまう。ドイツ映画界の名優エミール・ヤニングスが『嘆きの天使』同様に中年男の苦悩を好演。娘との官能描写、さらに空中高く揺れるブランコのスリルといったシーンなど見どころが多く、E・A・デュボン監督はこの一作だけでドイツ映画史に名を残した。

はい、ドイツ映画の『ヴァリエテ』、このお話しましょうね。

曲芸なんですね、サーカスなんですね。これはエミール・ヤニングス主演で、とっても凄い見事な映画だったですよ。

この映画で面白いのは貧乏な本当に、サーカスがあんまり大好きじゃない旅回りの芸人がいたんですね。ところがなかなか入らないの。客が少ないの、ブランコ乗りやつとってもね。「こら困ったな」、と言ったら1人、宿なしの女が流れ込んできたんですね。それ、リア・デ・ブッティというので、当時これで一躍有名になった女優ですけど、リア・デ・ブッティがやって来た。「何か使ってくれよ」これどうして使おうかと思って、そうして使うことになった。そのリア・デ・ブッティが美人でもなく、不美人でもなく奇麗でもなく、汚くでもなくという女でね、ちょっと小太りの若い女でね。いかにも女の匂い持っているんですね。それにこのおっさん、サーカスの親方エミール・ヤニングスがだんだんだんだん参っていく話ですね。

参っていく、参っていく、だんだん参っていく。別にそのリア・デ・ブッティの女は誘惑する訳ではないんですけど、だんだん親方が参っていくところが怖かったね。凄いですね。で、このリア・デ・ブッティが決して粹にマリリン・モンローみたいにポーズとらないで、ボソツとしとって非常にセックスアピールがあるんですね。いかにも女のおいがするんですね。それでこのリア・デ・ブッティはアメリカに呼ばれて一躍有名なスターになりましたけれども、曲芸団はそういう意味で非常に面白くて。

『ヴァリエテ』が「あつ、曲芸団か」とわかって、この曲芸団はエミール・ヤニングスの代表的傑作。どういうところが代表傑作かと言いますと、どんな時にもそのエミール・ヤニングスのやぼったい態度がいいんですね。たとえばお昼でも、ゆで卵が5つくらいあつたら、そのゆで卵をとって頭でポンポンと割って自分で食べるんです。頭でポンポンと割るんですね。何でもないけどそういうところのやぼったさ、いかにも男のオヤジらしいところがよく出て、エミール・ヤニングスが名優であることがよくわかったんですね。

このエミール・ヤニングスは『ヴァリエテ』、もう代表的な作品です。で、リア・デ・ブッティがこれで成功したことも有名です。見事な映画でしたね。



雀

Sparrows

(1926・アメリカ)

監督：ウィリアム・ボーダイン

出演：メアリー・ピックフォード／

グスタフ・フォン・セイファースティッツ



〈作品データ〉

制作年…1926年

制作国…アメリカ

時間……81分

監督……ウィリアム・ボーダイン

脚本……C・ガードナー・サリヴァン

撮影……チャールズ・ロシヤー

出演……メアリー・ピックフォード／グスタフ・フォン・セイファースティッツ／ロイ・スチュアート／メアリー・ルイス・ミラー

〈作品解説〉

アメリカのサイレント時代のスーパースター、メアリー・ピックフォードが主演した感動ドラマ。悪魔のような冷血な農場主が、底なし沼に囲まれた小屋に子どもたちを監禁して過酷な労働を強いる。メアリー・ピックフォードが囚われた子供たちを命がけで救う娘を熱演している。小柄でかわいらしくしかも快活なピックフォードの魅力がいっぱい、恐怖物語なのにユーモアと温かさがあふれている。

『雀』、このお話しましょうね。

『雀』（Sparrows）。なんでしょう？ これはメアリー・ピックフォード、この人が本当に人気トップワンの頃に映画になった問題の作品ですね。

メアリー・ピックフォードの映画というと、この『Sparrows』ですね。
この『雀』が非常に評判になりましたね。

メアリー・ピックフォードというのは、かわいい、かわいい少女。
かわいい少女だけど……負け惜しみが強い。誰にも負けないの。
その負けない、非常にガンバリの強い、本当に元気な少女。

これがアメリカで大うけ。優しい小娘のくせに誰にも負けない勇気。
アメリカでメアリー・ピックフォードはすごく評判良くて、アメリカのハート、アメリカの本当の代表的少女というのでメアリー・ピックフォードは有名なんです。
その頃の、この『雀』は代表作です。
で、『雀』。一体何でしょうね？
フロリダの方で悪い男がいてね、悪い女がいてね。その夫婦が子どもをさらっていくんです。どこの街でも小っちゃな2才、3才くらいの子供をどんどん集めてね。
それをね、金持ちで養子がほしいと言う人に売ります。
だから、あちらでも、こちらでも子どもがとられちゃって、みんなが困る。

そこに売れ残りの少女がいるんですね。みんな、2才、3才、4才くらい、5才くらいの子どもばっかりなのに、この子は15才くらいなんです。
それがメアリー・ピックフォード。

ところが、その売れ残りのメアリー・ピックフォードがみんなを助けようとするんですね。その、悪い悪いオヤジ、悪い悪いオバサンの目をかすめて逃げて行こうとするんですね。
そこが、この『雀』のもの凄いシーンなんです。

どういうシーンかと言いますと、みんな集めて、十何人が忘れましたが、その子ども集めて、ズーッと逃げて行くんです。
どんどん、どんどん逃げるんですね。
泳げない、渡れない所は木の枝から枝へ飛んで行くんですね。
その木の枝、またがって、またがって行く下にはワニがいるんですね。

ワニがいっぱいいるところを、子どもを十何人連れて渡るところが凄いですね、そのもの凄さ！
メアリー・ピックフォードが「あんた、お行きっ！ さあ、お行きっ！」、小さい子どもを抱いて行く、そのシーン。

そのシーンが、ずっと後にウォルト・ディズニーに伝わりましたね。
ディズニーがこのシーンこそ本当の映画のサスペンス、スリラーだったというので、ディズニーはこの『雀』からずいぶん勉強しましたね。

『雀』の面白いところは、どんどん、どんどん逃げる。

下にワニが大きな口開けて、ワーッと飛びつこうとする。

そこを子どもを連れてどんどん逃げる時に……メアリー・ピックフォードの前の男の子のパンツがずれてオシリが出るんですね。「あんた、ダメよ！ そんなところでオシリ出しちゃ」。

そのあたりのスリルとサスペンス、しかもコメディ。

それがすごく良くて、メアリー・ピックフォードはこの映画で一躍有名になりましたね。

『雀』はディズニーの教科書ですね。

ディズニーがまだいない頃、どんどん、どんどん、スリル、スリル、逃げて、逃げて、とうとう逃げおおせて。

やがて立派な、立派なお方が、メアリー・ピックフォードを養女にもらったんですね。

ハッピーエンドですね。

いかにもメアリー・ピックフォードらしい代表作品ですね。



第七天国

Seventh Heaven

(1927・アメリカ)

監督：フランク・ボーゼージ

出演：ジャネット・ゲイナー／チャールズ・ファレル



〈作品データ〉

受賞歴…1927～28年アカデミー賞監督賞／主演女優賞／脚色賞／作品賞ノミネート／美術賞ノミネート

制作年…1927年

制作国…アメリカ

時間……119分

原作……オースティン・ストロング

監督……フランク・ボーゼージ

脚本……ベンジャミン・ 그레이ザー

撮影……アーネスト・パーマー／J・A・ヴァレンティン

出演……ジャネット・ゲイナー／チャールズ・ファレル／ベン・バード

〈作品解説〉

オースティン・ストロングの舞台劇をフランク・ボーゼージ監督が映画化。パリの若い掃除夫チコと薄幸な娘ディアンは結婚して裏町のアパートの7階に住む。「第七天国」とは最も天国に近い場所という意味。2人は幸福だったがチコが召集。毎朝11時にお互いの名前を呼び合う。戦争をはさんで若者の純愛を歌い上げた恋愛映画の古典的名作。

『第七天国』 フランク・ボーゼージ、ジャネット・ゲイナー、チャールズ・ファレル、この名作の話しましょうね。

『第七天国』、セブン。セブンというのは非常にね、縁起がいいんですね。どうしてセブンが縁起が良いの？ セブンどうして縁起がいいの？ ハイ、これは東西2つ、南北4つ、それに土5つ、海で6つ、空で7つ。という訳で人間はこの7つで守られている。7つがあつて人間は幸せだというような大昔のことわざがあるんですね。だから『第七の封印』なんていうのは初めから死ぬことですね。

そういう訳で『第七天国』これはそういう意味の「第七」なんです。ところがこの話は、地下の工夫（こうふ）がいたんですね。この男、この男が地下で働いているのが辛い、嫌だ、俺は上で働きたい働きたい思うんですね。チコというイタリアの工夫ですね。それが、せめて俺は自分の働いている所は地下だけど、住む所は上の方で住みたい。それで7階の一番高い所に安下宿、もう歩いて上がる所、1階、2階、3階、4階、けど歩いても構わないから第7階の所、せめて天国に近い、「わしはここで暮らすんだ」と言うチコという男がいたんですね。イタリアの青年が。

ある日、自分の家に帰ろうと思ったらかわいらしい女の子が泣いて逃げていたんです。それを誰か女の人が追っかけて鞭で叩いていたんですね。「こら、馬鹿野郎、何か悪いことするんだ！」女を追いついたんですね。後で残っている女を「お前どうしてあんなに叩かれるんだよ？」「あれは私の義理のお姉さんで、私は働きに酒場に行ったら、お姉さんが男の人と一緒にいなさい、なんて言うので私は絶対嫌だ、嫌だ言つて逃げた。するとお前は言うことを聞かないと言って、ああして叩かれるんですよ」「そんなら、お前帰るな」と言つたんですね。それで「俺の所の部屋で泊まれ。俺はお前に手をつけないから」と言つたけど、怖がつて怖がつたけど、一緒に上がって行つた1階、また、1階。「まだ、上がるの？」「もっと上がるんだよ」2階、3階、「もっと上がるんだよ」4階、5階、7階。「まあ」と言う。そこで2人は一緒になつたけど、そのディアンという女の子だけをベッドに寝かして、チコは床の上で寝たんですね。で、2人は清らかな清らかな友達になつたんですね。

ところがだんだんだんだんチコがディアン好きになつたんですね。でもアイ・ラブ・ユーなんて絶対言えない男なんです。恥ずかしがつて。どういつてアイ・ラブ・ユー言おうかと思つても言えないんですね。ディアンは言ってもらいたいんですね。言ってもらいたいけど言わないから、チコはどう言つたかという「チコ、ディアン、Heaven、天国」そう言つたんですね。チコとディアンと天国、これがアイ・ラブ・ユーの代わりだつたんですね。ところが彼女喜んで、「もういつべん言つて、もういつべん言つて」「チコ、ディアン、天国」「チコ、ディアン、天国」そんなラブシーンがあるんですね。かわいいかわいいラブシーンですね。そういう話なんですね。ところが、戦争でこのチコが行っちゃつたんですね、兵隊に。その前に2人は祝言したんですね。さあ、それでがつかりした。ところがお爺ちゃんやお婆ちゃんが慰めて、「ディアンおいで、こつちへおいで、さあこの橋渡りなさい。板渡りなさい」「おつかない、おつかない、私怖くて、下向いたらもう怖い」お爺ちゃんがお婆ちゃんが言つたの。「チコがいつも言つたろ、上を向いて歩きなさい、言つたろ。あんた上向いて歩いたらいいんだよ。チコがそう言っているよ」。ディアンは「チコ、私上を向いて歩くわ、上を向いて歩くわ、上を向いて歩くわ」と言つたらとうとう渡れたんです。「そうら渡れたでしょ」というのが『第七天国』ですね。

チコはやがて帰つて来ましたが、目を失つて帰つて来たのね。ディアンが一生目の代わり。あんたの目の代わりになります、というようなオチがありますけど、この映画を私、友の会、ずっと昔40年ほど前に友の会でしゃべつたんですね。「『第七天国』いいいいいい」みんなよく聞いてくれたんです。その時に永六輔というのが子どもでいたんですね。かわいい子がいたんですね。それに「こういう映画良かったよ、良かったよ」言つたら「そう、良かったですね」つて言つたら、いつのまにか上を向いて歩こう、上を向いて歩こう、というのがどうも頭に入れたらしい。後に永六輔は“上を向いて歩こう”なんて歌を作つちやつたんですね。どうもあやしい、『第七天国』のこれから来てるんだと思ひましたけれども、『第七天国』は日本でも芝居にもなつたし、もう見事な見事な愛の映画でしたね。



サンライズ

Sunrise

(1927・アメリカ)

監督：F・W・ムルナウ

出演：ジャネット・ゲイナー／ジョージ・オブライエン



〈作品データ〉

受賞歴…1027～28年アカデミー賞主演女優賞／芸術作品賞／撮影賞

1928年キネマ旬報外国映画ベストテン第1位

制作年…1927年

制作国…アメリカ

時間……90分

原作……ヘルマン・ズーデルマン

監督……F・W・ムルナウ

脚本……カール・マイヤー

撮影……チャールズ・ロッシャー／カール・ストラス

出演……ジャネット・ゲイナー／ジョージ・オブライエン／マーガレット・リヴィングストン／ボディル・ロージ
ング／J・ファレル・マクドナルド／ジェーン・ウィントン

〈作品解説〉

ドイツ映画界からアメリカに招かれたF・W・ムルナウ監督がヘルマン・ズーデルマンの原作を映画化。湖畔の農村に仲のいい若い夫婦が住んでいるが、そこへ避暑に来た都会の女が夫を誘惑する。その女にそそのかされた夫はボートに妻を乗せて湖に沈めようとする。詩情豊かな映像で夫婦の揺るぎない愛を描いた名作。

『サンライズ』これは、もう有名な有名なムルナウという監督。このF・W・ムルナウという監督の代表傑作ですね。で、これズーデルマン、有名な小説ですね。その映画化ですね。で、これを私が観た時に本当に映画というものの美しさいうものをこんなに表現できるものか、とびつくりしたんですね。

最初は俯瞰撮影で大都会の停車場が映るんですね。上からですね。上から映るといっぱいの人が停車場にいるんですね。汽車があるんですね。汽車がやがてスタートするんですね。その時スタートする汽車、人を乗せて行く汽車、都会を離れる汽車、そこから始まった時にカメラが凄いな。と思いましたね。

で、やがて汽車が田舎に行くんですね。田舎へ、その都会の女が入って行くんですね。マーガレット・リヴィングストンという女優ですね。この女優がいかにも都会の女で田舎をばかにして、「こんな所に行くのかね」言うて入って行ったところから、ここの田舎の農家の夫婦がいますね。ジョージ・オブライエンですか、ジョージ・オブライエンというね、非常に若者の筋肉的な田舎の男と、ジャネット・ゲイナー、優しい優しい嫁さん。夫婦がまだ結婚して間もない夫婦。そこへカメラが持って行ってこのジョージ・オブライエンを都会の女、マーガレット・リヴィングストンが、ちょっと面白い男だとなぶるんですね。

男の方はなぶられるよりも都会の女の香水、その着物、それにびつくりするんですね。都会の女は綺麗なんだな、綺麗だなー。と思うとそれを利用してマーガレット・リヴィングストンのこの女は、どんどんどんどん誘惑して、「あんたみたいに好きな人ないわ、あんたみたいにいい人ないわ、あんたみたいに好きな人ないわ」って冗談でどんどん誘惑するんですね。田舎の男ジョージ・オブライエンは本気で惚れるんですね。本当に惚れたな、と思うんですね。本当に好きだと思うので、自分の嫁さんのことをだんだん忘れていくんですね。

嫁さんは優しい優しいあのジャネット・ゲイナー。あの優しい女優の扮している嫁さんですね。それをどうにかして邪魔になってきたんですね。邪魔になってきて、そうして殺してやろうと思うんですね、その嫁さんを。まあかわいそうに。その都会の女はそこまで、ちょっと誘惑するんですね。「あんたの奥さんが邪魔よ」なんて言うんですね。それを本気にしてとうとう嫁さん船乗せるんですね。このあたりが怖いなあ。ボート乗せて「向こうの島までちょっと行こうか」なんて言うんですね。「お父さん、どうしてそんなこと言い出すの？」と言った。「いや、面白いからね」と言うので嫁さんも「まあそうかしら、そんなこと言ってくれたのかしら」まあ初め喜んでボートに乗るんですね。そこからが怖いね。どんどん漕いで行くんですね。漕いで行くうちに嫁さんがそのお父さん、主人の顔見えていくうちに怖くなってくるんですね。お父さんの顔が変わってくるんですね。人相が。殺す顔になってくるんですね。びつくりするんですね。「キャー」って泣くんですね。そのあたりの湖水、2人きり乗っているボート。それ怖いな。びつくりするんですね。

この映画でびつくりするところは、ただしーんとする湖水でいよいよ殺すいうところでバーツと風が吹いてくるんですね。ところが後にこのシーンを真似たアメリカの作品では、バーと鴨がいっぱい飛び立ったところ映るんですね。みんなこの湖水真似しましたね。ムルナウのこの湖水は最高でしたね。

『サンライズ』はそういうふうな訳で、いかにもムルナウの名作ですけど、ムルナウの名作と同時に、この映画のヘルマン・ズーデルマンですか、この人の小説の凄い凄い文学が、美術の名文の姿がそのまま映画の中に出てくるんですね。そういう訳でこの映画は『サンライズ』これはムルナウの本当の代表的作品です。

で、ムルナウは『タブウ』だとかたくさん、たくさん、作品作りました。ムルナウが『サンライズ』作ったということは幸せでした。ムルナウだからこの『サンライズ』は綺麗な映画になりました。

都会、大都会のその大都会を嫁さん連れて行くところ、ところが嫁さんはいつべん自分殺そうとしたから、とつても旦那さんを信用しない。旦那さんをうかがっている。それを嫁さんに詫げるためにメリーゴーランド乗せたり、い

ろいろ乗せる。だんだんだんだん嫁さんは本当に主人は自分を愛しているのか？ 本当なのか？ だんだん疑うところ、凄いですよ。この映画、いかにも若い夫婦の美しさと怖さがあふれたムルナウの名作ですね。



肉体と悪魔

Flesh and the Devil

(1926・アメリカ)

監督：クラレンス・ブラウン

出演：グreta・ガルボ／ジョン・ギルバート／ラルス・ハンソン



〈作品データ〉

制作年…1926年

制作国…アメリカ

時間……111分

原作……ヘルマン・ズーデルマン

監督……クラレンス・ブラウン

脚本……ベンジャミン・F・グレーザー

撮影……ウィリアム・ダニエルズ

出演……グレタ・ガルボ／ジョン・ギルバート／ラルス・ハンソン

〈作品解説〉

“北欧のモナリザ” “北欧のスフィンクス”と言われたグレタ・ガルボが美男スターのジョン・ギルバートと初共演した話題作。クラレンス・ブラウン監督に起用されたことでガルボは注目され評価を高めた。美しい令嬢をめぐつて幼なじみの2人の男が激しく争い、運命を大きく狂わせていくが、やがて女の不実を知り友情を取り戻す。原作はドイツの作家ヘルマン・ズーデルマンの小説『消えぬ過去』。

はい、『肉体と悪魔』、これはまたMGMの記念作品ですね。こういう記念作品は、やっぱり観ていただく価値がありますね。映画の歴史の中で大事ですね。

といいますのは、グレタ・ガルボが初めてこれで一躍注目されたんですね。

ガルボは、スエーデンからやって来ました。その時に英語知らなかったんですね。それで、「あんたなんちゅう名前か」聞いたら、「グレタ・グスタフソン」と言ったんですね。

「そんな発音されたら困るなあ」、どうにかして綺麗な女を撮りたいので、モンタ・ベルという、女の柔らかさを見事に出す監督呼んで来て、グレタ・ガルボ主演の作品を2本作りました。妖艶な綺麗なイブニング着で、いかにも妖艶な女を作りました。

でもガルボ、似合わないのね。全然そんな映画合わないのね。MGM困ったのね。

そして今度考えたのは、クラレンス・ブラウンといいまして、一流の監督でガルボを活かそうとしたんです。

クラレンス・ブラウンは、ガルボはやっぱりヨーロッパ的な女だから、そういうヨーロッパ風の映画がいいなと考えて、『肉体と悪魔』というのをジョン・ギルバートとガルボでやりましたですね。

これがガルボを活かしました。ガルボというのがとうとう、これで登場しました。

不思議な、不思議な女、何かわからない女、毛皮のコート着てる、下に何も着てないかもわからない、けれどもいかにも高貴なのね、いかにも神秘的な女なのね。

それで2人の男がその女について争ったんですね。でもこの女は不幸をまくんですね。男を無知にさして捨てていくような役なんですね、神秘的な女なんですね。

それが最後に逃げて行くんですね。2人の男に追放されて、「何だっていいよ、あたい、まだまだ男いっぱいいるよ」言いながら逃げて行く時に、ファーコート着たまま沼の上を通った。

沼の上に氷があるから「ザブザブザブッ」と体中が水の中に入って、頭も全部水の中に入ってしまふ。この映画が『肉体と悪魔』ですね。

これのガルボがいいんですね。いかにもガルボが神秘的な女なんですね。クラレンス・ブラウンが一躍ガルボを活かしたんですね。

クラレンス・ブラウン、この人スタジオに家があるんです。スタジオにバンガローがあつて、そこに家があるですね。そして私は10日間、毎日毎日クラレンス・ブラウンに会ったんですね。

どういう訳か言いますとね、私が初めてハリウッドに行く時に、昔ですよ、私が30の頃、今88だからわかるでしょう、その頃に水さかずきね、アメリカへ行くのにも、嫌だねえ、アメリカに行くのに水さかずき。

それで羽田には、木下恵介、笠置シズ子、まだたくさん、見送りに来たんですね、水さかずき、もう永久に帰って来ないみたいな感じ、それでいっぱいの人が送ってくれて、飛行機に乗った。

その飛行機はウェーク島で10時間、ウェーク島からハワイで10時間、ハワイからロサンゼルスで10時間、そんなブローバ機で行ったんですけど、その時に飛行機の中でクラレンス・ブラウンに会ったんですね。

で、「あんた、クラレンス・ブラウンですか」と、思わず僕言っちゃったのね。そうすると、「Yes.」、どうして僕をそう知ってるの、言うから、「雑誌でいつも顔見えますよ」言ったら、そうか、そうか言った。

それで飛行機の中で、奥さんもいるのに、あとで10分ぐらい会ってやる言うから「Thank you very much.」。

その時は飛行機の腹に休憩室があったんですね。マージャンしたり、トランプしたりあるいはちょっと一杯飲む所あったんですね。

そこへ2人が入って話したら、僕がクラレンス・ブラウンの本当の初めの頃の映画から全部知ってるから、それから、それからって、どんどんどんどん、僕が何百人のスターの名前言ったら、みんな覚えとって、そうか、俺はそのスターは初めから好きだった、とか言いながら夜を明かしたんですね。

そして朝になって、奥さんはもうとっくに寝てるんですね。そうして、またMGMで会おうな、言って別れた。そのクラレンス・ブラウン、私を非常に大事にしてくれたクラレンス・ブラウンの一番の恩人が、ガルボでしたね。

『肉体と悪魔』でガルボを活かしたクラレンス・ブラウン。それと私は本当に親子のように話したことを思い出します。



アンナ・クリステイ

Anna Christie

(1930・アメリカ)

監督：クラレンス・ブラウン

出演：グreta・ガルボ／チャールズ・ビックフォード／

ジョージ・F・マリオン



〈作品データ〉

制作年…1930年

制作国…アメリカ

時間……89分

原作……ユージン・オニール

監督……クラレンス・ブラウン

脚本……フランシス・マリオン

撮影……ウィリアム・H・ダニエルズ

出演……グレタ・ガルボ／チャールズ・ビックフォード／ジョージ・F・マリオン／マリー・ドレスラー

〈作品解説〉

サイレントの女王だった北欧の美女、グレタ・ガルボが初めてトーキーに主演した第1作。ニューヨークの荷船の老船頭のところに、疲れきった娘アンナ（ガルボ）が戻ってくる。若い船員に求婚されるが、娼婦の過去を持つ彼女は素直に応じられず苦悩する。ガルボの最初の台詞は「ウィスキーをちょうだい」。初めて聞いた声はなんとハスキーボイス。クラレンス・ブラウン監督は崩れた女の感じが出ているのでオーケーしたという。

ガルボのトーキーなんですね。

スウェーデンのなまりのきついガルボ。

トーキーになったらガルボの命とりだ、もうガルボはこれでダメだ。世間でそう言ってたんですね。

MGMはガルボトーク、ガルボが本当にしゃべるんだというので宣伝に大きく出したんですね。

で、ガルボはこの映画『アンナ・クリスティ』に主演したんですね。

この映画、面白いことにガルボの役が、早くから家出して、船の船長、小さな船の船長の家、お父っちゃんのところから家出して、5年6年たってから帰ってきたのね。

そこから始まるの。

いかにもあばずれ女になって、入ってくるなり「あたい、ウイスキー飲みたいわ」。それが第一声なのね。

「あたい、ウイスキー飲みたい」って言ってきたのね。その言葉が「ヴァイ・ヴォント・ヴィスキー」って言ったのね。もうね、びっくりしたね。

でもちょうどそれが、ちょうどぴったり合ったのね。

すっかり疲れて疲れて、夜飲んで疲れて故郷に帰ってきたのね。

そういう時に彼女のスウェーデンのなまりが、「アイ・ウォント・ウイスキー」と言えないのね。

「ヴァイ・ヴォント・ヴィスキー」だったのね。大変なミスイクだ。

だけどそれがうまいくぴったり合ったのね。

という訳でガルボのトーキーは本当にまぐれあたりだったけれども、『アンナ・クリスティ』でパス。

これで良くなった。

それからは、どんどんどんどんトーキーでガルボは有名になりましたね。

グレタ・ガルボとディートリッヒ、よく対立しますね。

ディートリッヒは粋な人、ガルボは粋と言えないのね。

ガルボ帝国なんていう名前つけられて、スフィンクスの女王みたいな評判とったんですね。

で、ガルボは本当にアメリカの映画の歴史の中で不思議なガルボ帝国の女王なのね。

というような感じの女でガルボは見事な見事な女優ですね。

「アイ・ウォント・ウイスキー」というふうに女くさいところが駄目なのね。

でガルボにインタビューした時に、あんたの一番辛い映画は何でしたかと言うと、『椿姫』ですと言ったのね。

あの巴里の淫売、そういう役は絶対に駄目なの。私嫌いなもの。

そう言ったくらい、ガルボは女のにやけた、柔らかいのは絶対に駄目なのね。

そういう訳で、ガルボは『アンナ・クリスティ』に選ばれたことは1つの幸いでしたね。

ガルボは面白い性格の女で、とうとう一生ひとりもんでしたね。

『西部戦線異状なし』のあの若い兵隊になったリユー・エアーズ、あれをちょつと愛しました。愛しましたけれどもかわいがったほうですね。

でもどんな男が求婚してもノーノーノーで誰とも結婚しなかったというのが、ガルボの不思議な生涯でしたね。



嘆きの天使

Der Blaue Engel

(1930・ドイツ)

監督：ジョセフ・フォン・スタンバーグ

出演：マレーネ・ディートリッヒ／エミール・ヤニングス



〈作品データ〉

制作年…1930年

制作国…ドイツ

時間……103分

原作……ハインリヒ・マン

監督……ジョセフ・フォン・スタンバーグ

脚本……ロバート・リーブマン

撮影……ギュンター・リター

出演……マレーネ・ディートリッヒ／エミール・ヤニングス／ローザ・ヴァレッティ／ハンス・アルベルス

〈作品解説〉

無名の踊り子だったマレーネ・ディートリッヒがジョセフ・フォン・スタンバーグ監督に抜擢され、この一作で一躍スターの座をつかんだ。謹厳で世間知らずの高校教師（エミール・ヤニングス）はキャバレーの踊り子（ディートリッヒ）に恋をして、すべてを捨てて彼女を追う。妖艶なディートリッヒの脚線美と歌声が世界中の目と耳を釘づけにしたが、男の痛ましさを好演したヤニングスも忘れられない。

これから『嘆きの天使』のお話をしましょうね。

『嘆きの天使』これはジョセフ・フォン・スタンバーグ、あの『モロッコ』の監督とディートリッヒ、この初めての顔合わせ作品ですね。

スタンバーグという人はアメリカで2、3本撮りました。

そうしてチャップリンの推薦受けました。

『The Salvation Hunters』という映画をアメリカで撮ろうとしましたが、うまくいかない。それで、ドイツで何かいい映画を撮ろうとしました。

そこに、舞台上マレーネ・ディートリッヒというのが芝居演ってましてね。

それを観て、これで1本撮ろうと思いましてディートリッヒに「あんた、こういう映画に出てくれませんか」言ったら、「いいですよ」と言っただです。

それが『嘆きの天使』、“ブルー・エンジェル”。

どんな映画か。

ローラ・ローラという悪い女がいるんですね。

それが大学の教授を誘惑して、さんざん、さんざんいじめる話なんですね。

ローラいう、いかにも悪い女ですね、その役を「あんたやってくれませんか」と言った。

ディートリッヒは「やりますよ」と言ったのね。

スタンバーグは、その『嘆きの天使』に、ローラいう役どころでディートリッヒを使った。

ディートリッヒは奇麗な足なんですね。寂しい舞台、汚い舞台が、その足で見事に晴れ晴れしくなったんですね。

高校の生徒、男の子がみんな大騒ぎするんですね、このローラいうのに。

そうしてブロマイド持ってるんですね。そのブロマイド、もうみんなが持ち歩いてるんですね。

で、学校の先生、エミール・ヤニングスが扮してる先生が、「何持ってるんだ」言った時、ブロマイド見たんですね。

女の姿なんですね。で、前のスカートが羽根なんですね。

それでふーっと吹いたらバァッと前がめくれるんですね。

「こんないやらしいもの、よくもおまえら持ってるな」と怒って、「自分もいつべん、ローラ見てやる」言って、密かにその舞台を観に行くんですね。

そこが面白いんですけどね。

その時にローラが、奇麗な足で出て来て、そうして椅子をずっと手前に置いて、椅子のもたれる所を前に置いて、両足を前ひっぱって、「フォーリン、ラヴァーゲン、ネヴァ、ウォンテッド……」と歌うんですね。

さあ、その奇麗なこと、両足の奇麗なこと、先生はいつべんに参っちゃったんですね。

この映画は、一躍マレーネ・ディートリッヒを有名にしました。

それと同時に、「この監督は誰ですか?」「スタンバーグ」「ん、これイケるな」。

ハリウッドが2人と呼んだんですね。

で、アメリカから呼ばれた。ちょうどディートリッヒがドイツにいた頃は、最もドイツがモダン文化の時代だった

から、非常に粋だったんですね。

それがアメリカに来たら、ハリウッドの女優がみんなびつくりしたんですね。

マレーネ・ディートリヒ、あのハンドバッグ、あのハイヒール、あのコート、凄いねえ、言つて。

で、マレーネ・ディートリヒの部屋に行つたんですね、みんなが。

そうすると大きな壁、部屋の壁が全部鏡なんですね。

びつくりしたんですね。モダン・スタイル。

『嘆きの天使』ではローラで、なんとも性の悪いくすぶつた女役だったディートリヒが、アメリカに来た時には、『モロッコ』ですね。いつべんに有名になつたんですね、『モロッコ』で。

ディートリヒは男装で歌、歌つたんですね。

きれいな男のスタイルで、シルクハット持って、白いイブニング着て、そして歩きながら、あの『モロッコ』の歌を歌つて、そうしてお客の中の女の客に接吻したんですね。

えらい評判になって、ディートリヒは一躍有名になりました。

それで監督はスタンバーグです。

スタンバーグ、アメリカに来てすっかりアメリカ流になりまして、『ブロンド・ヴィナス』、これなんかはもう見事な映画ね。

最初出て来るのは、いかにもアフリカの音楽で、ドン、ドン、ドン、ドン、ドン、いう音楽で大きなゴリラが出て来たんですね。

金の毛をいっぱいつけたゴリラが出て来て踊るんですね。

わあ思つてると、そのゴリラが腕の毛をとっちゃうんですね。

綺麗な手ですね。腕の毛をとつたら、綺麗な手なんですね。

ゴリラの両手が綺麗な女の手、ブレスレットつけてる。

今度は足をとつたんですね、足の毛をとつたんですね。

それがディートリヒの登場の見事なスタイルで、『ブロンド・ヴィナス』も凄かった。

それから『間諜X27』とか、ディートリヒはどんどんどんどん有名になりました。

と同時にスタンバーグも一躍有名になりました。



モロッコ

Morocco

(1930・アメリカ)

監督：ジョセフ・フォン・スタンバーグ

出演：ゲイリー・クーパー／マレーネ・ディートリッヒ



〈作品データ〉

受賞歴…1930～31年アカデミー賞監督賞ノミネート／主演女優賞ノミネート／美術監督賞ノミネート／撮影賞ノミネート

制作年…1930年

制作国…アメリカ

時間……91分

監督……ジョセフ・フォン・スタンバーグ

脚本……ジュールス・ファースマン

撮影……リー・ガームス

出演……ゲイリー・クーパー／マレーネ・ディートリッヒ／アドルフ・マンジュー／ウルリッヒ・ハウプト

〈作品解説〉

「100万ドルの脚」と言われたディートリッヒがアメリカ映画に初登場し、ゲイリー・クーパーと共演したメロドラマ。外人部隊の兵士トムは酒場の女アミーに恋し彼女も一目惚れ。ところが土地の富豪が彼女に求婚。トムは前線に出発するが、彼を忘れきれないアミーは結婚をふり捨てトムを追う。ヒールを脱ぎ捨て砂漠に行く場面は映画史に残る感動的なラストシーン。また、黒のタキシードにシルクハットをあみだにかぶって歌うシーンも絶品だ。

ディートリッヒ、スタンバーグ、このコンビの最も代表的な作品『モロッコ』、この話しましょうね。『嘆きの天使』、"ブルー・エンジェル"、これで一躍、ディートリッヒは有名になりました。

そしてスタンバーグも有名になりました。このスタンバーグですけど、面白いことにスタンバーグはアメリカで色々なところで映画学生で映画作っていたんですね。そして何か『The Salvation Hunters』とかいう映画を自分で作って、ジョージ・K・アーサーとか他、全然知らん女優と子ども使って1本作ったんですね。それをチャップリンに観てもらいたためにチャップリンに「観てください」と言いに行ったんですね。チャップリンの所には他にもいろんなの来るから、もちろんいつべんに断られた。あくる日も、あくる日も、またあくる日もチャップリンの所に「どうぞ観てください」と来たんですね。

そして玄関で対応するのが高野虎市さんだったんですね。で、この人が「駄目ですよ、チャップリンはいろんなの来ても観ないんですよ。観る間がないんですよ」と断った。ところが6日間も来たから、高野さんがちょっと気の毒になってきたんですね、この人の。で、「あなた、なんて人ですか?」「ジョセフ・フォン・スタンバーグ」「ドイツの人ですね?」「はい」「それではいらつしやい」。黙ってチャップリンの家の試写室にそれかけて、「チャップリンさん、ご主人、ちょっとだけちょっとだけ、1本5分間観てください」言ったんですね。そうして映してやった。チャップリンは観ているうちに全部観てしまった。「すごい!! 凄い! これは名作だ!」そう言ってスタンバーグの『The Salvation Hunters』をチャップリンが喜んで引き受けて、自分が宣伝してやる、この費用も出してやる、と言ったんですね。

もうスタンバーグはびつくり仰天したんですね。けれども喜んだスタンバーグはあと2本作った。全部駄目、もう1本作った、駄目。チャップリンはその費用出しながらスタンバーグに「駄目だよ」と怒ったことがあるんですね。けど、まず最初にスタンバーグを拾ったのは高野虎市さんですね、番頭さん。という訳で、スタンバーグは流れ流れてついにドイツ帰って『嘆きの天使』、"ブルー・エンジェル"で一躍有名になって改めてパラマウントを迎えたのが『モロッコ』ですね。さあこの『モロッコ』いかにも面白い、奇麗。何が奇麗かと、カメラが奇麗でそしてムードが良い。一番最初モロッコに流れて来る女がいるんですね。そうすると金持ちの男が遊び半分にモロッコに来るんですね。そして、金持ちの男が、そのスタンバーグの初めて発見したこのディートリッヒを見て一目惚れをして「君、もしも困ったことがあったら俺の所に来い」と名刺渡したんですね。そこから始まるんですね。

ディートリッヒは「ああ、ありがとう」と言いながら喜びもしない、悲しみもしないのね。そういう女なつてんの。そしてそのアドルフ・マンジュの金持ちが行った後で、それをビリッと破ってボイと捨てちゃうのね。そこから始まる、いきなりスタートですね。そしてマレーネ・ディートリッヒがどんな役やったか? 見事な映画で、これで一躍アメリカのディートリッヒが生まれたんですね。粋な粋な映画、しかもこれはトーキーですからもう、アーミー・ジョリーがトム・ブラウンというその兵隊が好きになって、トム・ブラウンがゲイリー・クーパーですね。そしてその金持ちが、囲われている金持ちがアドルフ・マンジュですね。ところが好きになっているから別れようと思っても別れられない。それで、外人部隊に入ったクーパー、それがいいよスタートする。出て行く。

「いいわ、もう別れたんだからいいわ、もうあの男のことはあきらめちゃうわ。私は金持ちの方がいいから」すましている。ところがドンドンドンドン太鼓が聞こえてくるんですね。もういてもたってもいられなくなってくるんですね。主人が「何しているんだ」言いながら見ていると、もうどうしても駄目だ、会いたい、会いたいと思ってキャッとやったら首飾りのネックレスの真珠の珠がパーツと散って落ちたんですね。パラパラッと。そして彼女はそのまま飛んで行って、トム・ブラウンが外人部隊になってずっと砂漠の彼方へ行くのを後からずーつとついて行って終わりになる。その外人部隊の旗がパタパタパタパタ音がしてる。そこで終わっていくのね。いかにもスタンバーグらしい映画、ディートリッヒらしい映画で、この『モロッコ』でアメリカのディートリッヒ、アメリカのスタ

ンバーグが一躍有名になりましたよ。



上海特急

Shanghai Express

(1932・アメリカ)

監督：ジョセフ・フォン・スタンバーグ

出演：マレーネ・ディートリッヒ



〈作品データ〉

受賞歴…1931～32年アカデミー賞撮影賞／作品賞ノミネート／監督賞ノミネート

制作年…1932年

制作国…アメリカ

時間……82分

監督……ジョセフ・フォン・スタンバーグ

脚本……ジュールス・ファースマン

撮影……リー・ガームス

出演……マレーネ・ディートリッヒ／クライヴ・ブルック／アンナ・メイ・ウォング／ワーナー・オーランド／
ユージン・パレット

〈作品解説〉

スタンバーグ監督とディートリッヒのコンビはエキゾチズムの世界を求める。本作は動乱絶えない中国が舞台。北京を発って上海へ向かう特急列車に乗り合わせた「上海リリー」の異名をとる謎の女とアメリカ軍将校との、かりそめの恋。賭博師、混血商人、アメリカ帰りの中国娘など不安におののく人々を描いたサスペンス・ラブロマン。スタンバーグがディートリッヒの妖艶な美しさに惹かれていたことがよくわかる作品だ。

『上海特急』、(Shanghai Express)ですね。これは有名なスタンバーグ監督、ディートリッヒの主演ですね。もうこのコンビは見事でしたね。

ドイツで『嘆きの天使』2人でやりましたね。スタンバーグとディートリッヒで。それからアメリカ行って『モロッコ』やりましたね。『モロッコ』でえらい評判とりましたね。それから『間諜X27』やりましたね。『間諜X27』がまた良かったんですね。スタンバーグとディートリッヒが。その次が『上海特急』でしたね。で、これがまた、いかにも映画的呢なんですね。カメラが凄いいですね。そういう意味でスタンバーグとディートリッヒのコンビの盛り上がった時ですね、『上海特急』は。

何かこの、革命が起こって北京から上海に逃げて行く話ですね。そういうストーリーはどうでもいいのね。いかにもね、この女が、その汽車に乗っているそのムードが凄いいですね。そうしてこの町の真ん中の狭い所を汽車がトットトットと行くとこが凄いいですね、カメラがね。スタンバーグのこれは見事な感覚ですね。

という訳で、この映画、スタンバーグとディートリッヒの盛り上がった最中ですね。で、スタンバーグとディートリッヒは、『嘆きの天使』『モロッコ』『間諜X27』『上海特急』『ブロード・ヴィナス』『恋のページェント』『西班牙協奏曲』こだけやりましたね。こだけやっているから世間でも評判になりましたね。そうしてスタンバーグの奥さんが怒りましたね。「あたしの夫、返してちょうだい」と言ったんですね。そうするとディートリッヒが「あら、そうですか。私いつでも最初からお返しいたしますよ。そんなことおっしゃっても私、何の関係もないのですから」と鼻で笑ったんですね。という訳で、この2人のコンビはスタンバーグの奥さんが頭に來たんですね。ところがディートリッヒは、あんなスタンバーグみたいな人、私嫌いだよ、という顔していたんですね。そこらあたりが凄かった。

そうして長い長い長い、このスタンバーグの時代が終わって、ずっと後にスタンバーグが『アナタハン』日本來て作ったり、ずっと後にもう人気なくなった頃、私RKOでスタンバーグに会ったんですよ。で、「ハロー、スタンバーグ」と言ったら「Oh」、そういう訳で目の前でハロー、スタンバーグと言えたんですね。ていうのはRKOではスタンバーグなんてもうどうでもいい感じなんですね。だからRKOのスタジオの洗濯場所から洗濯物を肩に担いでスタンバーグ自身が持つて行くような道を歩いているんですね。まあかわいそうになと思ってベンチ腰かけて、スタンバーグさん、あなたにディートリッヒのことは一言も言えない。もうディートリッヒと別れているから。だから、「スタンバーグさん、お元気ですか?」「イエス、サンキューベリーマッチ」そう言っただけで、何にも言えなかった。スタンバーグに、ディートリッヒのことをあんたどう思いますか? なんてことを一言も言えなかった。

けれどもスタンバーグがまあ、成れの果てなんて言ったら悪いですけど人気を失ってRKOで自分で洗濯物を持って帰るところを見た。ああ、あのスタンバーグがな、と思いましたけれども、その『上海特急』は最も凄いいスタンバーグの頃ですね。最も凄いいディートリッヒの頃ですね。で、『間諜X27』ですか、これも凄かったね。これご覧になった人わかりますけど、スタンバーグの描き方がいかに立派だったかね。

たとえば『間諜X27』ではディートリッヒがスパイなんですね。「あいつを殺せ」言うんですね。そうして銃殺することになったんですね。それ殺る時にスタンバーグの演出が見事でしたね。ディートリッヒが「ちょっと待って」と言ったんですね。「あんた、すまないけどそのナイフ、そのサーベルちょっと貸してください」と言ったんですね。そしたら、その若い兵隊が、「何ですか? このサーベルいるんですか?」「あつ、ちよつといるのよ」持つて來たんですね。今殺されるディートリッヒですよ。そのサーベルの光を見て自分の顔を映して口紅で直したんです。口紅をね。凄いいだね、そのシーンが。そうしてちゃんとしてからバーンと殺されるんですね。そういうふうなことをする。ディートリッヒがいかに女の見事な感じ。そうしてこの映画の中でいかにセンチメンタルか、映画自

身が。そういうのを見せていかにもオリエンタルな中のディートリッヒの美しさ、これ見事に見せましたね。



春の調べ

Ecstasy

(1932・チェコスロヴァキア)

監督：グスタフ・マハティ

出演：ヘディ・キースラー／ズボニミール・ロゴス



〈作品データ〉

制作年…1933年

制作国…チェコスロヴァキア

時間……67分

監督……グスタフ・マハティ

脚本……フランティシェク・ホルキ／グスタフ・マハティ

撮影……ヤン・スタリヒ

出演……ヘディ・キースラー／ズボニミール・ロゴス／アリベルト・モーゲ

〈作品解説〉

公開当時ヘディ・キースラーの全裸シーンが話題になり物議をかもした。若く美しいエヴァ（ヘディ）は初老の男と結婚するが、性的不満を感じ離婚。湖に泳ぎに行った彼女は若い青年と出会い、その肉体の虜になってしまい、性の快楽にふける。性の解放を生命の賛歌にまで高めた問題作。アメリカ映画界はヘディに注目し、ヘディ・ラマールと改名させグラマーガールとして売り出した。日本公開は昭和10年だが、検閲で大幅にカットされた。

『春の調べ』ご覧になったかな。これ問題映画なのね。えらい問題になったのね。これチェコスロバキアの映画なのね。で、ヘディ・キースラーという綺麗な綺麗な新人女優が出るんですね。で、この『春の調べ』、何が問題になったか？

これは若い奥さんが夫に不満で、夫がちっとも魅力的じゃないので毎日裸で、真っ裸で裸馬に乗って走り回っているのね。そういう映画なんですね。それをチェコスロヴァキアの映画、ヘディ・キースラー、観に行ったんですね。これそうですね。1932年その頃の映画です。その頃裸の女、前のおっぱいもまる見え、そういうのはとっても許されなかったんですね。けどこれは自然な映画だからカットしたらいかん、カットしたらいかん、というので全裸の姿見せて大変な評判になって、とにかく映画自身はどうでもいい。この裸観に行くんだって飛んでったんですね。裸になるんだ、ヘディ・キースラーが裸になるんだってえらい評判になった。ヘディ・キースラーの役がいいんですね。その不毛みたいな夫に飽き足らないんですね。それで真っ裸になって裸馬に乗って走り回るのがせめてもの慰めなんですね。そういうところに非常にエロティックなものがありますね。で、チェコスロヴァキアの映画はこんなの作ったのかとえらい評判になったです。で、ヘディ・キースラーはいつべんに有名になったんですね。ところがアメリカはこの女優見逃しませんね。すぐ呼んで来たんですね、すぐアメリカは契約したんですね。それで、ヘディ・キースラーはヘディ・ラマールに名前変えたんですね。ラマール、ラマールなんていかにもな名前ですね。みんなが列作って並んだんですよ。



シナラ

Cynara

(1932・アメリカ)

監督：キング・ヴィダー

出演：ロナルド・コールマン／ケイ・フランシス



〈作品データ〉

制作年…1932年

制作国…アメリカ

時間……78分

監督……キング・ヴィダー

脚本……フランセス・マリオン／リン・スターリング

撮影……レイ・ジューン

出演……ロナルド・コールマン／ケイ・フランシス／ヘンリー・ステイーヴンソン／フィリス・バリー

〈作品解説〉

キング・ヴィダー監督が上流階級の夫婦の危機を描いたメロドラマ。妻（ケイ・フランシス）のある紳士（ロナルド・コールマン）を愛した下町娘（フィリス・バリー）は自殺してしまう。この事件が会社に知られ、紳士は南アフリカに左遷される。三人三様の善人性が美しくムーディにセンチメンタルに描かれている。主演のコールマンは当時の人気スター。髭のコールマンと言われた。

『シナラ』、面白い名前ですね。キング・ヴィダーの代表的名作です。これはロナルド・コールマン、ケイ・フランシスの、フィリス・バリー、この3人の見事な作品です。

私は映画会社の宣伝部にありました時に『シナラ』いうのを電報で1行だけ書いてきたんですね。何だろう？『シナラ』、キング・ヴィダー何だろう？ わからなかったのね、このね『シナラ』の意味が。どんな映画なんだろう？『Cynara』なんですね。どうもこの映画『Cynara』おかしいな、ひょっとしたらこれは“サイナラ”かもわからない。と思って、ああ日本の映画かもわからない。そんなこと考えたんですね。

そうしてやがてひと月半、ふた月くらいたってから、これ完成して日本に送って来て試写で観た時にびっくりしたんですね。『シナラ』とはこんなのか、『シナラ』はギリシャの古典の神様で、『シナラ』いう神様は女の神様、非常に悪い神様なんですね。悪い神様かどうか知らないけど、結婚したての、あるいは恋愛中のその男女の間にスーッと入って来て2人を喧嘩させるんですね。そうしてまた、最後におさめて逃げて行く神様なんです、『シナラ』いうのは。

そういう映画だ、そういう神様の題名なのかってだんだんわかってきたんですね。で、これはロンドンの話なんですね。キング・ヴィダー、あの有名な『涙の舟唄』それから『ビッグ・バレード』、もうたくさんたくさん、『街の風景』などキング・ヴィダーの名品がありますが、『シナラ』は最高ですね。これはロンドンの話で、アメリカで作りましたけれども非常に上品な映画で、あのロナウド・コールマンが、奥さんのケイ・フランシスが1週間休暇で里へ帰る。で、1人で喫茶店行ったんですね。で、おりますと女の子がキャットと言って嬉しそうなんですね。はあ、あんな若い時もあるんだなと思っていると1人がこっちを向いたから、「ねえ、あんたがた何を喜んでいるの？」「あたいたちチャップリン観に行くんだよ」と言っているのね。「そんなに嬉しいの？ そしたら、おじさんが切符買ってあげる」と言ったらキャットと喜んだんですね。それからその中の一人の女の子と中年のロナルド・コールマンとが、毎日、毎日、毎日会うようになったんですね。「おじさん、おじさん、会ってね、会ってね、おじさんとお話するのが好きなんだよ」それだけで毎日会わされたんですね。毎日会わされている間にだんだん好きになっていったらどうなるか？ これは最後何とも知れんラストシーン、凄いですね。

という訳で、ケイ・フランシスの上品なのとコールマンの上品なのと、フィリス・バリー綺麗な綺麗な女の子、この女の子とこの作品が名作になりましたね。『シナラ』は見事な恋の映画ですね。という訳でキング・ヴィダーの代表作です。キング・ヴィダーはいろいろ『街の風景』だとか、それから『ハレルヤ』とかいろいろありますが、『シナラ』は代表作です。で私はこの『シナラ』をサイナラと呼んだことを今思い出して笑いましたが、でも、『シナラ』は笑う映画ではありません、そう見事な情緒たっぷりと言うのか、本当の恋の愛の映画でしたよ。



雨

Rain

(1932・アメリカ)

監督：ルイス・マイルストン

出演：ジョン・クロフォード／ウォルター・ヒューストン



〈作品データ〉

制作年…1932年

制作国…アメリカ

時間……94分

原作……サマセット・モーム

監督……ルイス・マイルストーン

脚本……マクスウェル・アンダーソン

撮影……オリヴァー・マーシュ

出演……ジョーン・クロフォード／ウォルター・ヒューストン／ウィリアム・ガーガン／マット・ムーア

〈作品解説〉

サマセット・モームの同名小説の映画化。タヒチの小島の一軒宿、娼婦サディ・トンブソン（ジョーン・クロフォード）は同宿の牧師（ウォルター・ヒューストン）から神の道を説かれるが鼻であしらう。牧師の献身的な説教で優しい女になっていくが、土砂降りの夜、牧師は彼女の魅力に負けて獣と化す。名優ヒューストンと妖艶クロフォードの共演は見ごたえ十分。ルイス・マイルストーンの名作だ。

はい、ジョーン・クロフォード主演、ルイス・マイルストーン監督の『雨』、この話をしましょうね。

この話は大事なんですよ。これはサマセット・モームの有名な小説で舞台劇になって、もうあらゆる女優がこれをやったんです。サディ・トンプソン、そういう主役の女の映画ですね。グロリア・スワンソンも昔やりましたよ。もういろんな人がこれやりました。もう名作。

この『雨』をジョーン・クロフォードやったんですね。当時ジョーン・クロフォードは『雨』のサディをやるような女優じゃなかったんですね。もともとモダンなダンスをやる女だったんですね。女優だったんですね。それが『雨』で一躍サディをやるというので、ええ一つとみんなびつくりしたぐらいの大役なんです。

で、みなさんご存知と思いますが、『グランド・ホテル』でガルボと喧嘩したんですね。それで泣いてサミュエル・ゴールドウィンのところ行きまして、有名なプロデューサーの。「私ね、どうしても立派な役やりたいんです。お願いします」「それでは、サディ・トンプソンをやろう」ジョーン・クロフォード泣いて喜んだんですね。それが『雨』ですね。

だからジョーン・クロフォードの今日までの最も代表的な映画が『雨』ですね。だから、ジョーン・クロフォードの似顔絵を描く漫画家は、みんなサディ・トンプソンのスタイルの絵を描きますね。もう原色の派手な派手上着着ている女ね。ストッキングの黒のね。

というふうな訳で『雨』の面白さは見事でしたけど、ここでちょっと言いますと『雨』はタイトルから見事だったんですね。一番最初タイトルは、入道雲、次はヤシの葉っぱ、次は海、全部南の島の凄い凄い景色。そうしてそこに「RAIN」というタイトルが出るんですね。その時に大きな大きな芋の葉っぱにボツンボツンと雨の足跡が出るんですね。雨の一粒一粒が。そうしてカメラがどんどんどん、もう雨の中入って入って一軒の家の中に入って行くところから始まるんですけど、そのスタイルの凄かったこと。見事なんですけど、やがてカメラが中に入ってカメラが上へ上がって、上からず一つと3人か4人がトランプしている所を上から撮るんですね。その時に牧師のおばさんおがって、

「昨日、変な人が来ましたね。あの夫人は何ですか？」と言うとその宿の主人が「あれはな、サディと言ってね、ハワイで悪い悪い女でな、追放されたんだよ。今ほいでこっちやって来たんだよ」「あら、その人お金持っているの？」「うん、靴下の中にね、100ドル札いっぱい持ってるの、あいつ。そんなんだから泊めたんだ」「そう？　その他、荷物ないの？」「うん、何もなし。レコード1つ持ってるの」「レコードと、そうそう片っぱいウイスキー持ってるの」「へえ、で、どうしているの？」「今、寝ているんだよ。あれ、起きたらね、一杯飲んですぐにね、そのレコードかけるの」「どんなレコード？」「『セント・ルイス・ブルース』、あれかけるの」「へえ、嫌な女だね」

と言っているとセント・ルイス・ブルースの音がかすかにかすかに聞こえてくるのね。ず一つとカメラがそっち行って、そうしてだんだんだんだん音が大きくなるの。だんだんだんだん音が大きくなって、ドアの前でセント・ルイス・ブルースの大きな大きなメロディが聞こえたところで、バーッとドアが開いて片一方の手、凄い手、プレスレットいっぱいつけてる。また片一方の手、それも凄い。今度脚が映る、ハイヒールの。首にも鎖ついている。それがバーッと全身出て来たらサディ・トンプソン、ジョーン・クロフォード。

という訳で、これは有名な有名な見事な映画テクニック。けどこのラストシーンも良かった。みなさん、ご覧になったらサディ・トンプソン、この『雨』がどんな立派な映画か、サディという女がどんないい役か、実は怖い女だけど、どんないい役かがおわかりになるとと思いますよ。



或る夜の出来事

It Happened One Night

(1934・アメリカ)

監督：フランク・キャブラ

出演：クラーク・ゲイブル／クロードット・コルベール



〈作品データ〉

受賞歴…1934年アカデミー賞作品賞／監督賞／主演男優賞／主演女優賞／脚色賞

制作年…1934年

制作国…アメリカ

時間……105分

監督……フランク・キャブラ

脚本……ロバート・リスキン

撮影……ジョセフ・ウォーカー

出演……クラーク・ゲイブル／クローデット・コルベール／ウォルター・コノリー／ロスコー・カーンズ／アラン・ヘイル／ウォード・ボンド

〈作品解説〉

アカデミー作品賞をはじめ6部門受賞したフランク・キャブラ監督のロードムービーコメディの傑作。結婚に反対され家出した大銀行家の娘（クローデット・コルベール）が、長距離バスの中で失業中の新聞記者（クラーク・ゲイブル）と知り合い恋が芽生えていく。スカートをつまみ上げて車を止めるヒッチハイクのシーン、モーターで毛布“ジェリコの壁”で間仕切りして眠るシーンなどコミカルな名場面が楽しい。

『或る夜の出来事』(It Happened One Night)、これはフランク・キャブラの監督です。

もうアメリカの最もアメリカらしい作品です。そうして出ているのがクラーク・ゲイブルとクローデット・コルベールですね。まあ今でこそ、どちらもよくオールドファンの方ご存知でしょうけど、クラーク・ゲイブルという人はそれまでずっと悪漢役、ギャングの役、そういう役やっていたんですね。

今度初めてコメディをやると言うので、ゲイブルがこれでコメディやるのかと評判になった作品であります。これはフランク・キャブラというアメリカのムードあふれさせる監督が作っておりまして、話はまあお金持ちのお嬢ちゃんがわがままでわがままで。そういうお嬢ちゃんがまあお父さんがこの人と結婚しろと言うので嫌で家出して。そのお金持ちのお嬢ちゃんが家出したという事件が、まあ新聞記者が評判になってみんな追っかける、追っかける、追っかける中でゲイブルが新聞記者で、追っかけて行くようなそういう確かストーリーですね。

ゲイブルとおてんばのコルベール、どっちも好きで嫌いで、嫌いで好きという感じでずっと行くうちに途中で困っちゃったんですね。どこへ行こうかわからなくなって、向こうから来る車にヒッチハイクの合図したんですね。「オイ、乗せろ」。ところがゲイブルの顔は怖いから誰も止まらないんですね。何度も止まらないのね。コルベールのお嬢ちゃん笑っちゃったんですね。「あんた、ばかだね」と言ったのね。「あたい、いつべんで止めてやるわよ」って言ったら「なんだ、おまえ止められるか！」って言って、スカートサツとめくったらバツと止まったんですね。びっくりしたんですね。

という訳で、2人がじつと一晩のうちにその毛布が落ちてしまうというところが面白くて、キャブラの見事な名作ですね。コルベールもゲイブルもみんなこれでアカデミー賞とりましたね。



痴人の愛

Of Human Bondage

(1934・アメリカ)

監督：ジョン・クロムウェル

出演：ベティ・デイヴィス／レスリー・ハワード



〈作品データ〉

制作年…1934年

制作国…アメリカ

時間……83分

原作……サマセット・モーム

監督……ジョン・クロムウェル

脚本……レスター・コーエン

撮影……ヘンリー・ジェラルド

出演……ベティ・デイヴィス／レスリー・ハワード／フランシス・ディー

〈作品解説〉

サマセット・モームの自伝的小説『人間の絆』を映画化。上流階級の若い医学生は奔放なウェイトレスに恋するが、彼女に翻弄される。一方の彼女は他の男と失踪して妊娠するが、また彼のもとに転がり込む。悪女役を演じたら右に出るものがないといわれたベティ・デイヴィスの原点。堕ちる女を熟演し、呪縛の愛を見事に表現している。

ベティ・デイヴィスの『痴人の愛』。

『痴人の愛』、愚かな人の愛ですね。

これはサマセット・モームの有名な小説ですね。これをベティ・デイヴィスが主演しました。

ジョン・クロムウェルという立派な監督が映画にしました。

ところが、この『痴人の愛』これは初めベティ・デイヴィスじゃなかったんですね。

いろんなスターがいて、それにジョン・クロムウェルが「あんた出てみなさい」「あんた出てみなさい」。みんな「ノー」「ノー」「ノー」。

女優はみんなこの主役を嫌ったんですね。なぜ嫌ったんだろう。

レストランのウェイトレス、きれいな女。その女が学生に評判がいいんですね。

学生がみんな「今晚映画一緒に観に行こか」と言ったら「どっちだっていいよ」、そういう女なのね。

若い真面目な真面目な男、映画ではレスリー・ハワードですね、真面目な男がこの女に夢中になって、とうとうこの女をものにしたんですね。

で、よかったのに、この女またブイッと家出しちゃったんですね。

落ち着かないの。1人の男じゃ気に入らないのね。

で、この真面目な男、立派なお医者さんになった人は、もうあきらめて何年かたった。

何年かたったときに、この女が帰って来たんですね。

「ちょっとあんた、お医者でしょ。あたい診てよ」と言ったんですね。

「どうしたんだ」顔見たらね、顔がむくれて、何かいっぱいおできができてるんですね。

もう手遅れなんですね。顔がくずれそうになってるんですね。

びっくりして、一生懸命手当てしたんですね。

手当てしたけど「あたい、だめね。あたい、もうだめね」と言って死んでゆく映画なんですね。

こんなの、みんな嫌がるんですね。

最後は顔がくずれる役なんですね、誰もやらない。

ところがベティ・デイヴィス、それまでは脇役。

こんな映画があったんですね。

田舎に都会の女学生がピクニックで行くんですね。

そして雑貨屋へ行行って、「ちょっとチョコレートちょうだい」と言うのかと思ったら、この女学生は「ちょいとタバコください」と言ったのね。

“Have you a Cigarette?”と言ったのね。その“Cigarette”の言い方がすごく粋だったんですね。

それがベティ・デイヴィスだったんですね。ベティ・デイヴィスはいつもそんな役やるんですね。

それが「あたい、やります」と言ったんですね。

とうとうベティ・デイヴィスがやることになって、みんなびっくりしたんですね。

そういうわけで『痴人の愛』はベティ・デイヴィスを一躍有名にしたんですね。

その後もキム・ノヴァクだとかいろんな人がやりましたが、やっぱりベティ・デイヴィスのあくの強い、この女にはかなわなかったのね。

『痴人の愛』は、ほんとに“Of Human Bondage”は、サマセット・モームの立派な立派な、面白い面白い小説ですけど、映画でもベティ・デイヴィスを出世させた、ベティ・デイヴィスのスターの入口の問題作品ですね。



邂逅（めぐりあい）

Love Affair

(1939・アメリカ)

監督：レオ・マッケリー

出演：アイリーン・ダン／シャルル・ボワイエ



〈作品データ〉

制作年…1939年

制作国…アメリカ

時間……87分

監督……レオ・マッケリー

脚本……デルマー・デイヴィス／Donald・Ogden・Stewart

出演……アイリーン・ダン／シャルル・ボワイエ／Maria・O'Svensson／アストリッド・オルウィン

〈作品解説〉

ヨーロッパ行きの豪華客船で出会った画家（シャルル・ボワイエ）と歌手（アイリーン・ダン）は恋に落ち、帰国後に再会を約束するが女は事故に遭ってしまう。運命的な出会いと劇的再会のメロドラマの名作。美男ボワイエと気品のある美しさのダンの息はぴったり。レオ・マッケリー監督は1957年に自らの手で再映画化。また、1994年にもグレン・ゴードン・キャロン監督でリメイクされている。

レオ・マッケリー監督の名作の『邂逅』、この話をしましょうね。

この映画、後にまた映画化されましたね。私はこの映画観て、本当に鬼の目にも涙、もう思わず涙が落ちました。というのは、奇麗な奇麗なお話なんですね。

一番最初は、シャルル・ボワイエとアイリーン・ダン、これ演りまして、レオ・マッケリー、奇麗なお話。二度目はケーリー・グラントとデボラ・カーでしたね、見事な映画。これはね、お船の中でね、全然知らない同士が「こんにちは」「こんにちは」、昔は船は3日も4日も5日も航行しますね、そして知り合いになっちゃった。そうして話してるうちに、1人は画家だったの、で、片っぱが「また、あんたとお会いしたいですねえ」と言ったの。

そういう訳で、まあ非常に仲良くなったの。

けれども、右と左に別れて上陸しました。でも約束したの、2人がね、「いつペン会いましょうね、あのエンパイアステートビルの上で会いましょうね」と言ったの。

そうして男は喜んで、その時間に行ったのね、12時15分に。女の方も喜んで、12時15分にそこへ行くんだいうんで飛んで行ったんですけど、そのエンパイアステートの足元で自動車がぶつかっちゃって、この女の人は足悪くして、上へ上がって行けない、病院へ行っちゃったのね。

「あたい、向こうへ行きたいの、あの屋上へどうしても行きたいんだ」言うんだけど、「だめです、あんただめです」と言うので行けなかった。

上では1時間、2時間、3時間、4時間、5時間、待ったのね、とうとう来ないから、がっかりして帰って「ああ、とうとう来なかったなあ、あの人は口先だけだったなあ」いうようなとこ、あったんですね。

そういうふうな映画、最後はまた再会するんです。二度目の方のデボラ・カーとあのケーリー・グラント。これもその通りの映画だけれど、同じ監督ですから、奇麗な、奇麗な映画になったのね。これも涙出ましたよね、これも良かった。

みなさんもうご存知でしょうけど、2人が会わない、男の方はがっかりした。女の方は「会いたい、会いたい」思うのに会えない、足が悪くなっちゃった。男は「やっぱりあの人、来なかったなあ、がっかりだなあ」と思って、そしてそれが最後の最後に再会するところ、雪の日に、凄かったなあ。

という訳で、この映画は見事な愛の映画。けれどもメロドラマというには、あまりにも上等な映画でしたね。それでみなさん、この『邂逅』をご覧になったと思いますけど、これまたきつと映画になるでしょう。そのくらい美しい映画でした。

最後の方で、奇麗なあ女の人はどうしてるだろうか思っていました。そうすると、この絵描きが絵の展覧会で絵を出したの。その時に女の人が絵を買って帰った。「あら、ありがたいな」と思いました。

それからしばらくして、その彼女に会った時に、彼女は足が悪くって椅子に座っていました。「そうか、あんたやっぱり足が悪かったなあ」思って、ずーっと上見たら自分の描いた絵が飾ってあったの。「あの時来たんだね、あの時来て買ってくれたんだね」というようなラストシーンが確かあったと思います。あれが凄かったな、いいラストシーンでしたね。

という訳で、『邂逅』は、みなさん何度観ても涙があふれますよ。

ところでアイリーン・ダンのことを、一言言っておきましょうね。

この人は上品で非常に綺麗な女の人、けれどもいつも何か哀れを、どっかに匂わせる女の役が良かったんですね。

で、アイリーン・ダンの最もの代表作品は『裏町』、これが良かったんですね。

これは大事にしてもらった旦那さんに、二号さんですね、大事に、大事にもらったけど、旦那が死んじゃたんですねえ、だからお葬式行けないんですねえ、二号さんだから。

それで、陰に隠れてお葬式拝んだんですね。そういうかわいそうな役演ったんですね。

ところがその息子、その金持ちの息子が、二号さんがいたことが良かったんですね。

調べてアイリーン・ダンの扮してるその女の所に訪ねて行ったんですね。

「あんたですか」と言ったの。

「はい、私が、あなたのお父さんに、とってもかわいがられたんですよ」、「そうですか。ところであんたは、いくらもらったんですか」、直接に冷たいこと言ったんですね。

「あんたは、お父さんから毎月いくらもらったんですか」「これだけなんですよ」、見せたの、それが安い値段なんですね。

「毎月たったこんだけなのか、あんた、こんだけしかもらわなかったのか」言うところが、その息子とそのアイリーン・ダンが、いかにも哀れな顔が、2人の顔が良かったですね。

アイリーン・ダンというのは、そういう役で、非常に優しく綺麗くて、しかもコケットな役を演ったんですよ。



情婦マノン

Manon

(1949・フランス)

監督：アンリ＝ジョルジュ・クルーザー

出演：セシル・オーブリ／ミシェル・オークレール／
セルジュ・レジアニ



〈作品データ〉

受賞歴…1949年ヴェネチア国際映画祭金獅子賞

1950年キネマ旬報外国映画ベストテン第2位

制作年…1948年

制作国…フランス

時間……100分

原作……アベ・ブレヴォー

監督……アンリ＝ジョルジュ・クルーゾー

脚本……ミシェル・フェリ／アンリ＝ジョルジュ・クルーゾー

撮影……アルマン・ティラール

出演……セシル・オーブリ／ミシェル・オークレール／セルジュ・レジャーニ／ガブリエル・ドルジア

〈作品解説〉

18世紀のアベ・ブレヴォーの小説『マノン・レスコー』を現代化した恋愛悲劇。レジスタンスの運動家ロベール（ミシェル・オークレール）は、魔性の女（セシル・オーブリ）の魅力の虜になり破滅していく。宿命的な愛の行方をセンセーショナルに描き、愛する女を逆さにかつぎ上げロベールが砂漠をよろめき歩くラストはあまりにも鮮烈。アンリ＝ジョルジュ・クルーゾー監督はこの一作で世界的名声を得た。

『情婦マノン』のお話をしましょうね。アンリ＝ジョルジュ・クルーゾー、好きだなあ、この監督大好きですね。みなさんこの監督の作品ご覧になったでしょう？ いろいろと。みんないいですね。みんないいですけど、この『情婦マノン』これも凄かったなあ。

『情婦マノン』、これは1人の男がマノンに夢中になったんですね。マノンというのは何とも知れんやぐざの女なんです。戦争中に敵のドイツの兵隊に売春したんですね。それでつかまえられて戦争が終わってつかまえられてみんなでリンチしてやる。この女の子の頭の毛切って、そして首切ってやるなんていうところへ1人の男が来て助けてやるんですね、マノンを。で、マノンは綺麗な綺麗な女だからその男はマノンの言う通りになっていくんですね。

で、これは原作は『マノン・レスコー』ですね。それをモダンにしてやったんですが、そのマノンがとっても綺麗な子で生意気な子で、マノンの親戚、兄さんか弟かそれがまた闇屋の何とも知れん男なんです。そういう訳でマノンは泥だらけの悪い女なんです。それに夢中になって夢中になってマノン、マノン、マノンと言うので2人は逃げて逃げて行こうということになった、ユダヤ人に化けて。で、ユダヤ人ばかりのお船にうまく入れてもらってどんどん逃げて行きます。ところが、途中で2人は逃げられなくなって、ある砂漠へ降りて行っただけなんです。2人はその砂漠を逃げている時に砂漠の中で土民の戦いがあって、土民の戦いの弾でマノンは死んじゃったんですね。マノン死んじゃったんですね。弾があたって。ところがその相手の男がもうマノンが死んだということで夢中になっちゃったんですね。もうとっても離せない。マノンを離して逃げて行けない。で、マノンを抱いて逃げて行く。けど砂漠の中でマノンを抱いて逃げて行くのはとってもたまらなくなって、マノンの両足を自分の肩に乗せてマノンを逆さまにして逃げて行きます。そのあたり、そのクルーゾーの監督のカメラもいいね。

それで、どんどん逃げて行く。けど、だんだんマノンは腐ってきたんですね。死体になって、怖いなあ。もう持つて歩けなくなっただけなんです。仕方ないからこのマノンを抱いて下ろして泣きながら接吻して砂掘って、砂掘って、その中にマノン入れたんですね。「マノンよ、マノンよ、ここで眠れよ」と入れたんですね。で、上からずっと砂かけただけなんです。かけたけれども全部砂かけたらとってもたまらなくなって顔だけ、顔だけ砂の中から出したんですね。全部隠して、で、顔だけが出ているんですね。マノンは死んでいるんですね。その顔を見て「マノンよ、マノンよ、マノンよ」と言ってるうちにだんだん腐ってくるんですね。だんだん腐ってきてマノンの顔に蠅がたかってくるんですね。そういう映画が『情婦マノン』ですね。クルーゾーは怖い映画作りますね。

クルーゾーの映画どれ観ても怖いですね。もうあのトラックの荷台、ニトログリセリン運ぶ映画ありましたね。あれも怖かったね、あれも凄く怖かった。ニトログリセリンを運んでいくあの怖い怖い映画。けどあの映画ご覧になってみなさんお気づきになったでしょうか？ 後の1台、上の1台、何で、いがみ合っているか？ よくわかりになりましたか？ ホモセクシャルですよ。前の1台、後ろの1台、それぞれ嫉妬、喧嘩いろいろあって上に上がる道、上がる道、上がる道、ニトログリセリンの怖さと一緒に嫉妬の怖さがあるんですね。

という訳で、この監督クルーゾー監督は本当にフランスでも最高の監督ですね。あの怖い映画ありましたね。何か『悪魔のような女』あれでも男と女が共謀して学校盗む。とるためにそこの女の校長いじめるために相手の男を1、2、3、4、5の約束で風呂場の中に入れて目の中に白い玉を入れて、そうして1、2、3、ちょうどその時間にその女の校長を連れて来るんですね。悪い女が。それで、1、2、3でその風呂場に沈んでる男がふっと起き上がるんですね。目玉は何か白い玉入れているんですね。そうするとその女校長がキャーッと死んじゃったんですね。「うまくいったね」というのが『悪魔のような女』ですね。そういう訳でクルーゾーの作品は本当に凄いスリル、サスペンス、本当の毒のような映画作りますね。



終着駅

Stazione Termini

(1953・アメリカ／イタリア)

監督：ヴィットリオ・デ・シーカ

出演：ジェニファー・ジョーンズ／モンゴメリー・クリフト／

リチャード・ベイマー



〈作品データ〉

受賞歴…1953年キネマ旬報外国映画ベストテン第5位

制作年…1953年

制作国…アメリカ/イタリア

時間……89分

監督……ヴィットリオ・デ・シーカ

脚本……チェザーレ・ザヴァッティーニ／トルーマン・カポーティ

撮影……G・R・アルド

出演……ジェニファー・ジョーンズ／モンゴメリー・クリフト／リチャード・ベイマー／ジーン・チェルヴィ

〈作品解説〉

ローマの駅を舞台にヴィットリオ・デ・シーカ監督がきめ細やかな恋愛の描写を見せる。ドラマの進行時間と上映時間を一致させ、オールロケで作られた。アメリカの女性（ジェニファー・ジョーンズ）とイタリア青年（モンゴメリー・クリフト）の報われぬ恋をメインに、駅に集うさまざまな人々が描かれている。主演2人の演技が圧巻。戦後映画史を飾る恋愛映画の代表作。

はい、『終着駅』、これイタリア映画です。ヴィットリオ・デ・シーカの監督です。

それでジェニファー・ジョーンズ、アメリカの女優ね。それからもう1人、モンゴメリー・クリフト、これもアメリカの男優ですね。この2人が出るんですね。

けど、監督はデ・シーカなんですね。

なんで、デ・シーカでこの映画やっただろう？ セルズニックが制作してるんですね、アメリカのセルズニックですね。

これは、アメリカの女がイタリアの青年と仲良くなったの、けどアメリカの女はちょっとした火遊びね、やっぱりアメリカへ帰って行こうとしたのね。

そうするとこのイタリアの青年が、モンゴメリー・クリフトが、「おまえ、薄情だな、帰るのか、帰るのか」。それでローマのステーションでその女を引きずり降ろして、パーンと殴るのね。凄い映画なの。

つまり、イタリアの気質とアメリカの、どう言ったらいいのか、計算的な女の感覚とがぶつかるわけね。

この映画の一番いいところは、そのステーションの場面ね、それが凄かったのね。

デ・シーカの見事な代表作ですね。これを撮ったのがセルズニックなんですね。

デヴィッド・O・セルズニックは、何でイタリアで、こんな監督で、こんな映画撮ったのか？

何でジェニファー・ジョーンズでこんな撮ったのか？

セルズニックは前からジェニファー・ジョーンズに結婚申し込まれてたのね。

で、セルズニックも自分の嫁さんなんかどうでもいい、このジェニファー・ジョーンズの何とも知れん誘惑的な感覚に乗っちゃったのね。

すっかりジェニファー・ジョーンズに参っちゃったのね。

そういうセルズニックは、あんたの好きな映画撮ってやる、それならこういう映画撮ってください、それが『終着駅』だったのね。

見事にジェニファー・ジョーンズは、これで一躍名女優になったのね。

で、セルズニックは儲かったのね。

という訳で問題の作品ですけど、ジェニファー・ジョーンズいう人は、セルズニックをどんどん、どんどん食い込んで言ったのね。

ジェニファー・ジョーンズは、かわいい夫があつたんですね。その夫を蹴ってセルズニックと一緒になつたんですね。

そうして、「あんたは、私との結婚のお祝いに何くれるの？」言ったら、セルズニックは「何でもあげる」と答えた。

そしたらジェニファーは、「『風と共に去りぬ』以上のもの作ってください」言つたのね。

「おまえ、そんなものほしいの？」「そうよ、そうよ」と言つたのね。

それで作つたのが、ジェニファーの最高の作品でしたね。

というような訳で、ジェニファー・ジョーンズは怖い女優ですよ。

けれどもセルズニックが死んだら、とたんに人気なくなつたの。あんなに有名な女優が。

それでセルズニックの、この夫人、ジェニファー・ジョーンズはパーティーに行ってもみんなに総スカン。それで酒ばっかり飲んで、表出て酔っ払って街頭で倒れちゃつたのね、この女優が。

それをトラックが引っかけて、「おっ、誰か倒れとるぞ」って見たらジェニファー・ジョーンズだったのね。

そういうね、かわいそうな過去を持ってるんですけど、私は帝国ホテルでこのジェニファー・ジョーンズに会ったんですね。

それはセルズニックと結婚して間もないころのジェニファーに会ったの。

綺麗な女優でね、もう頭から足先まで綺麗くてね、その衣服のグリーンの衣装がとっても綺麗なのね。それで「How are you ?」と、私と握手したのね。

その匂いのいいこと、綺麗な香水の匂い。

私は家へ帰っても手を洗わなかったね、あんまりいい匂いがするんで。

そのぐらいジェニファーは綺麗でしたよ、やっぱりセルズニックが参るだけの女でしたね。

という訳で、この『終着駅』は彼女の、本当にほしかった、デ・シーカで名女優として演りたかった作品ですね。ジェニファーの野心があふれた作品ですね。



雨の朝巴里に死す

The Last Time I Saw Paris

(1954・アメリカ)

監督：リチャード・ブルックス

出演：エリザベス・テイラー／ヴァン・ジョンソン



〈作品データ〉

制作年…1954年

制作国…アメリカ

時間……116分

原作……F・S・フィッツジェラルド

監督……リチャード・ブルックス

脚本……リチャード・ブルックス／ジュリアス・J・エプスタイン／フィリップ・G・エプスタイン

撮影……ジョゼフ・ルッテンバーグ

出演……エリザベス・テイラー／ヴァン・ジョンソン／ドナ・リード／ロジャー・ムーア

〈作品解説〉

F・S・フィッツジェラルドの短編小説『バビロンの再訪』の映画化。新進作家（ヴァン・ジョンソン）と結婚して華やかな生活に明け暮れる女ヘレン（エリザベス・テイラー）の日々と悲劇的な最期を描いたメロドラマ。当時22才のテイラーの美しさに圧倒される。ブレイボーイ役で後に『007』のボンドを演じたロジャー・ムーアが出演しているのも注目だ。

『雨の朝巴里に死す』、私、この題名が好きなんです、いかにもいい題名ですね。

第2次大戦中の、いかにもデカダンス、なんだかしら希望がなくて相当常識外れが多かった時代ですね。

で、アメリカもそれに染まりましたね、そういう時代ですね。

で、この映画はそういう時代の、つまり生活に疲れて、生活に飽き飽きするような時代、もうそういう生活に希望はない、そういう頃の何とも知れん、荒れた人生、荒れた感覚持ってる時代の怖い話ですね。

で、リチャード・ブルックスが監督ですね。

リチャード・ブルックスは、もう『熱いトタン屋根の猫』ですか、あれ、いろんな難しい、難しい映画、どんどん撮ってる監督がこれ監督しました。

だから、これご覧になったら、本当にこの監督の感覚が見事に出てることと、リズ・テイラーがこんな映画に出たのかいうのでみなさん驚かれると思います。

どういう映画かといいますと、片っぱの旦那の方は、ヴァン・ジョンソン、これは、小説作家なんです。作家で原稿書いてるんだけど、嫁さんのリズ・テイラーの方は綺麗な綺麗な着物着て、赤い着物着て、もういつもパーティー行つてね、キャーッと遊んで朝帰りなんです。

旦那はそれ許してるけど、考えたら随分勝手な話なんです。もう、遊び回ってるんですね奥さんは。けどそういう時代なんです。

そういう時代の、デカダンスのそういう荒っぽい感覚の時代なんです。

それをリズ・テイラーが、その嫁さんになって演ってるんです。

そうして、いつも原稿書いているのにいなくなる、そして朝になって帰って来たりする。

で、あんまりだいうのである時、帰って来ても戸を開けなかったんですね、勝手にしたらいいわと思って……静かになったんですね。

その日、雨が降ってたんですね。雪まじりの雨ですね、寒い日ですね。

でこの映画でリズ・テイラーと、ヴァン・ジョンソン、この2人のいかにも合わない感覚ですね、リズ・テイラーと、ヴァン・ジョンソン。

ヴァン・ジョンソン、野暮つたらしい感覚ですね。リズ・テイラー、いかにも遊び女の感じですね、綺麗な服を着て綺麗な顔してますね。それが合わないんですね。

けれども、このもつさりした感じのヴァン・ジョンソンの作家もやっぱり心から、心から愛してるんですね。

で、2人が抱き合つて接吻するところで、僕はびっくりしたんですね。今までの映画で初めて観た接吻ですね。

今までの映画は全部唇をチュッと合わすだけだったのに、この映画観てますと、ヴァン・ジョンソンは口開けたんですね。口開けて接吻したんですね。

映画の歴史で初めての接吻、ですね。

こんな映画の中の接吻は生まれて初めてですね。よくもこんな場面作りましたね、やっぱりこの監督ですね、リチャード・ブルックスですね。

この監督の、いかにも生々しい監督の感じが、リズ・テイラーとヴァン・ジョンソンにも出ているんですね。

そういうところも面白かったんですけど、なにしろ巴りの『雨の朝巴里に死す』、その感傷、悲しい感傷がこの2人の、派手な女ともつさりした男の対照でよく出てるんですね。

という訳で、この映画は今ご覧になっても、この時代の第2次大戦時代の頃の人間の生き方、もう何とも知れん放埒な人間が、たくさんたくさん出てきた頃、モダン、モダンと言えないモダン、その時代の感覚がよく出てるんですね。

で、リズ・テイラーがやっぱりただの美人じゃないんですね。

こういう役に出て、ちゃんと演技してるんですね。見事な女の感覚出してるんですね。

そういう意味でリズ・テイラーが、例えば『熱いトタン屋根の猫』にしろ、あるいは『バージニア・ウルフなんかこわくない』、こういう映画でも、リズ・テイラーはただの美人女優じゃないんですね、演技派なんですね。それがこの『雨の朝巴里に死す』でも、ちゃんと出てるんですね。

そういう意味でリズ・テイラーは、私はただの美人女優と言えないですね。やっぱりひとつ考え方を持っていて、映画女優として立派だな、という感じがしますね。

で、この映画はそういう意味でも、若き日のリズ・テイラー、これを私は認めますね。

この映画は今ご覧になったら、こんな映画をアメリカが作ったのか思うぐらいしみじみした小説的映画ですよ。



道

La Strada

(1954・イタリア)

監督：フェデリコ・フェリーニ

出演：ジュリエッタ・マシーナ／アンソニー・クイン



〈作品データ〉

制作年…1954年

制作国…イタリア

時間……104分

監督……フェデリコ・フェリーニ

脚本……トゥリオ・ピネッリ／フェデリコ・フェリーニ

撮影……オテッロ・マルテッリ

音楽……ニーノ・ロータ

出演……ジュリエッタ・マシーナ／アンソニー・クイン／リチャード・ベイスハート

〈作品解説〉

ニーノ・ロータのテーマ曲とともに世界中を感動させたフェデリコ・フェリーニ監督の傑作。大道芸人（アンソニー・クイン）は粗野で獣のような欲望しか持ち合わせない男。ジェルソミーナ（ジュリエッタ・マシーナ）を1万リラで買い、ボロきれのように扱い捨てる。人間のエゴと純粋な魂を男女のしがらみを通して描く。女が死んで男が人間愛を知るラストシーンは忘れられない。

私の本当に愛した映画、フェリーニの『道』、この話しましょうね。

『La Strada』、これはイタリア映画のとても代表的な作品ですね。で、日本でイタリア映画祭で、まず戦争が済んだ後でこれが入って来ました。で、みんなは『道』とは何もわからない。何だろうと思って観に行きました。この映画観てびっくりしたんですね。こんな静かなこんな怖いこんな映画か。絢爛と華やかな映画ではなくてこんな映画かと思ってびっくりしたのが『道』でしたね。

『道』が戦争後日本で一番最初のイタリア映画でしたね。という訳で、この映画はフェリーニの代表作ですけど、人間の作品として人間というものを映画にしてこれほど立派なものありませんでしたね。ジェルソミーナ、ザンパノ、この面白さ、どう言っていいのか。ジェルソミーナ、この女の子はちょっと頭が変なんですね。で、お姉さんが売られてザンパノいう人に売られたんだけど、お姉さんが死んだので、今度その妹のジェルソミーナがザンパノに仕えることになったんですね。お金で買われて。ジェルソミーナはお金で買われているから何でも言う通りに言う通りに言う通りに、やらねばならないと思っていたんですね。そのジェルソミーナが初めて家から出る時にじっと海を見たんですね。海をじっと。海を見たんですね。ちょっと変な女の子です。それからやがてザンパノの、どういったらいいのかしら、嫁さんだね、身代わり嫁さんになってついて行くんだけど、そのザンパノは道で女ができればその移動する馬車からジェルソミーナを放り出して「おまえ、外で寝ろ！」と言って、中でザンパノは女と寝るんですね。そういう時でもジェルソミーナは怒るところか、それが当たり前だと思ってじっと待っている時に、その目の前に薪を燃やすんですね。一番最初、海をじーつと見ていたジェルソミーナが今度じーつと薪見るんですね。この子は水と火が好きなんですね。本当の原種の子なんですね。そうしてこの2人のジェルソミーナとザンパノのこの旅が続くんですね。

で、もうジェルソミーナは何でも何でも言うことを聞くんですね。で、ザンパノのやってる力の仕事、力持ちの仕事の助手になってつまり巡演するんですね。ところがそのジェルソミーナ何をやっても怒られるんですね。

ある日町にサーカスが来たんですね。

それをばかな顔して見てたんですね。そうしてその綱渡りの男が降りて来た時に羽ついているんですね、その綱渡りの男が。「あたいね、主人いるんだけどね、いつもばかにされて何の役にも立たないの。あたいはね、本当に役に立たないな」と言った時に、その綱渡りの男が背中に羽ついているんですね。それがね、「誰だって誰だって役に立つんだよ」。傍の石ころ取って来て「この石ころだって役に立つんだよ」。そうして自分の持っているラッパでジェルソミーナに歌を教えたんですね。メロディを。それでジェルソミーナは喜んでそのラッパを吹いたんです。

この綱渡りの男がキ印いう名前なんですね。ちょっといかれてる男という名前なんです。けれども考えたらザンパノは男でジェルソミーナは女で、このキ印いうのは神さんなんですね。そういう訳でこのジェルソミーナはその教えられた歌をいつも歌うんですね。で、ザンパノ馬鹿野郎と言ってるんですね。ザンパノが悪いことばかりする。それをジェルソミーナが止める、止める、止めてもザンパノは悪いことするんですね。そういううちにだんだんだんだんジェルソミーナが弱ってくるんですね、身体が。ザンパノは「こんなもう女は俺、邪魔だ！」って置きっぱなしで行ったんですね。

そうしてジェルソミーナは死んじやったんですね。それから、何年かたつた。何年かたつて初めてザンパノはジェルソミーナはどんなに自分に役に立ったかわかってきて、ジェルソミーナは死んだのか、あいつ死んだのかと思ってある時、港の海辺行った時にジェルソミーナの歌が聞こえたんですね。「あつ、生きてたか、生きてたか」思ってその村の洗濯している女に聞いたんですね。「あの歌やってる女いますか?」「ああ、あの歌か、女のね、物もらいが歌ってたけど野たれ死にして死んだよ。あれは誰か違う人が歌っているんだよ」それでザンパノは死んだのか、死ん

だのかと言って海岸の海辺行って砂に両手を突っ込んでジェルソミーナ、ジェルソミーナと言って泣くところで終わるんですけど。

これに男のわがまま、女の忠実、そうして人間の本当の男と女のオリジナル。これが出て、この『道』は凄い映画でしたね。

淀川流映画の観方、味わい方

映像作家 岡田喜一郎

「映画は人生の教科書です」

淀川さんのこの言葉は、明治、大賞、昭和、平成の4代にわたり、映画一筋に生きた淀川さんを知るためのキーワードであり、淀川流映画の観方の原点である。

大方の人は映画を娯楽であるにとらえ、テレビや雑誌の情報で、キムタクがいいとか、SEFXがすごいとかを知って、大して構えることなく、軽いノリで映画館に足を運ぶ。若い恋人たちにとってはデートの場所だったりする。

これがふつうであるが、淀川さんの場合は明らかに違う。映画は単なる娯楽だとは思っていない。映画は人間修行の道場、現代の教室なのである。だからどちらかと言えば、構えて映画を見る。とはいえ気負っているわけではない。自然体なのだ。

人生にはわからないことや、自分で気づかないことがたくさんある。男とは何だろう、女はどんな感覚を持っているのだろう、子供は何を考えているのだろう、愛とは何か、誠実とは何か、勇気とは何か。ユーモア、苦勞、悲しみなど、感情というありとあらゆる材料がいつばい詰まっていて、人間について勉強できるのが映画であるということなのだ。

さて、具体的にどんな映画の観方、味わい方をしてきたのだろうか。淀川さんはこう言っている。

「いい映画を選んで何回も何回も観ることが大切なね」

私のまわりにも年間何百本の映画を観たと自慢気に話す人がたくさんいる。しかし、そんなことよりも名作を何回も観たほうがいい。量よりも質を選びなさいということである。たしかに名作と言われる作品は何回観ても飽きないし、いつまでも記憶に残っているはずだ。いい映画を見つけるにはどうしたらいいのか。

「映画は監督中心で、観てほしいのね」

つまり、監督を選んで観なさいということなのだ。作品の出来、不出来は脚本と監督の腕にかかっていると言っていい。脚本をいかにうまく映像化していくのが監督の力量であり、その腕前を信頼して観ることが第一であるというのが淀川さんの姿勢である。それにはある程度、その監督が時代と共にどんな作品を作ってきたのか、どんな作風なのかなどを知らないとは判断がつかない。そのためには映画を実際に観て学び、常にチェックしておく必要があるだろう。

淀川さんが尊敬した監督は、チャップリン、ヒッチコック、ジョン・フォード、ルキノ・ヴィスコンティ、フェリーニなど数え上げたらきりが無い。日本映画では溝口健二、黒澤明、山口洋次を高く評価していたが、晩年に急上昇したのが北野武監督だった。淀川さんは北野監督と会ったとき、「あんたの映画感覚、どの映画観ても男の孤独だ。それを孤独らしく言わないで、笑って笑ってお作りになるところがすごいよ。いま日本でベストワンの監督だ」と本人を目の前にしてベタ誉めした。

淀川映画の観方は、監督第一主義で、いい映画を何回も観ることが基本だが、観方の真髄は、「映画をアタマで観たら、つまらないのね。絶対にダメですよ。感覚でみてほしいの」ということなのだ。これがすべてといていい。淀川さんは、映画を理屈っぽく観て、あそこがおかしい、ここがおかしいなどとやたらにけなす人、また、わけのわからない理屈をこねまわして難しく表現する人を軽蔑した。そんな理屈よりも、もつと感覚的に観て、味わってほしいということなのである。とは言っても、感覚を磨くにはどうしたらいいのか、わからない人もいるはずだ。あえて淀川さんに聞いたことがあった。

「簡単なことだよ。素直にびっくりしたり、感激して涙を流したり。そのシーンの美しさに酔ったりしてごらんさない。それが感覚を磨く第一歩なの。いい映画をたくさん観ているうちにだんだん感覚がわかってきます」。さらに映画だけでなく、歌舞伎、文楽、オペラ、絵画など一流のものも観なさいと説く。これらの中から心の血、美の栄養分を吸収することが感覚を磨くコツだという。

私は淀川さんと一緒に仕事をして、映画を観てきたが、そのたびに鋭い映画感覚を思い知らされた。たとえば『ボセイドン・アドベンチャー』（1972）で巨大客船が転覆し、1人の少年が勇気を出して船室のクリスマスツリーを登っていくシーン。「あの少年が天使に見えましたねぇ。少年の背に天使の羽がハッキリ見えたんです」。残念ながら私には見えなかったが、これが淀川さんの映画感覚。こうした例はたくさんあるが紙幅が限られているので省略させていただきます。

さて、淀川さんはたくさんの名言、語録を残しているが、その中で映画の観方についてふれているものがいくつかあるので挙げておこう。まず、「まあ、まあ、あの映画、怖いですね」。

淀川さんがよく使う言葉だが、オカルト怪奇映画で怖がらせたりすることではない。人間の生き方や愛を厳しく描いた作品とか、心の機微を鋭く突いたシーンを観たとき、深みのある怖さ、特に愛の怖さを感じたときに使った。たとえば『ピアノ・レッスン』（1993）という映画。「この女、男が欲しいくせにピアノでイライラをごまかしているのね。でも、はじめて本心をさらけ出して男に抱かれ女の幸せをつかみます。その全裸シーン。怖いなあ。このあたり。愛って怖いものです」といった具合に表現する。淀川流の含みのある言葉である。この「愛の怖さ」を見抜くのも淀川流映画の味わい方である。もう1つ、「まあ、あの映画、すごい映画美術だ」これは淀川さんが作り出した言葉かもしれない。映画美術というと、何十億もかけた豪華な美術セットのことを指すように思われるかもしれないが、そうではない。

淀川さんがいう映画美術とは、小説、絵画、舞台では描くことのできない表現、つまり、カメラの優れた動きによって生み出された表現のことなのだ。映像でしか描くことのできない美しさである。たとえば、ジョン・フォード監督『駅馬車』（1939）のインディアンと駅馬車の追走シーン。カメラが追われる恐怖をみごとに表現していた。また、ジャン・コクトー監督の『美女と野獣』（1946）。半円を描いて闇の中から真珠がひとつふたつとスッと現れて手に乗るカメラ美術、娘の涙がポロリと落ちると、それがきれいなダイヤモンドになるあたり。こうした映画美術の素晴らしさを味わうことも淀川さんの映画の観方である。というわけで、淀川流映画の観方、味わい方のいくつかを挙げたが、それらは映画に始まって映画に戻ってくる。つまり、1つの輪になって、その輪が廻り続けていくということなのだ。

この解説全集には、淀川流映画の観方、味わい方がいっぱい詰まっている。それもあの名調子で語り、淀川さんしか知らないエピソードを紹介してくれている。まさに映画ファンにとって宝物ともいうべき貴重なDVDである。

※このあとがきは、DVD『淀川長治クラシック名作映画全集□』（発売元：株式会社アイ・ヴィー・シー）の引用です。



映画好きなら一度は観ておきたい！

淀川長治
クラシック名画解説全集Ⅲ



喜劇の王様 / 名作文学 / 歴史的名作

World Classic film Selection



映画好きなら一度は観ておきたい！

淀川長治総監修 クラシック名画解説全集

喜劇の王様／名作文学／歴史的名作

監修 淀川長治

まえがき

この書籍は、『日曜洋画劇場』の解説者として人気を博し、今も人々に愛され続ける映画評論家・淀川長治氏の名画解説を、かの名調子もそのままに書き起こしたものです。

数多ある解説の中から、世代を問わず語りつがれるべきクラシックの名画たちを選びすぐりました。淀川氏しか知らない貴重なエピソードと、氏の映画愛とともに、その概要をお伝えします。

本書をお手にとってくださった、「クラシックの作品は勉強中」のあなた、かたや「名画はもう観尽くした……」とお思いのあなたの映画観も、大きく揺さぶられることでしょう。

本書を読んで観たい映画を探すもよし、誰かに蘊蓄をたれるもよし、愛すべき淀川氏を偲ぶもよし。

「映画は人生の教科書です」と語った氏の宝物を、少しだけ分けていただきましょう。

【チャップリン】

[・成功争ひ](#)

(“Making a Living” 1914年 アメリカ)

[・ヴェニスにおける子供自動車競走](#)

(“Kid Auto Races at Venice” 1914年 アメリカ)

[・ノックアウト](#)

(“The Knockout” 1914年 アメリカ)

[・メーベルの結婚生活](#)

(“Mabel’s Married Life” 1914年 アメリカ)

[・笑ひのガス](#)

(“Laughing Gas” 1914年 アメリカ)

[・チャップリンの醜女の深情](#)

(“Tillie’s Punctured Romance” 1914年 アメリカ)

[・チャップリンの拳闘](#)

(“The Champion” 1915年 アメリカ)

[・チャップリンの失恋](#)

(“The Tramp” 1915年 アメリカ)

[・チャップリンの改悟](#)

(“The Police” 1916年 アメリカ)

[・チャップリンの消防夫](#)

(“The Fireman” 1916年 アメリカ)

[・チャップリンの番頭](#)

(“The Pawnshop” 1916年 アメリカ)

[・チャップリンのスケート](#)

(“The Rink” 1916年 アメリカ)

[・チャップリンの勇敢](#)

(“Easy Street” 1917年 アメリカ)

[・チャップリンの霊泉](#)

(“The Cure” 1917年 アメリカ)

[・チャップリンの移民](#)

(“The Immigrant” 1917年 アメリカ)

[・チャップリンの冒険](#)

(“The Adventurer” 1917年 アメリカ)

[・犬の生活](#)

(“A Dog’s Life” 1918年 アメリカ)

[・サニーサイド](#)

(“Sunny Side” 1919年 アメリカ)

[・キッド](#)

(“The Kid” 1921年 アメリカ)

[・偽牧師](#)

(“The Pilgrim” 1923年 アメリカ)
・ [チャップリンの黄金狂時代](#)
(“The Gold Rush” 1925年 アメリカ)

【ハロルド・ロイド】

・ [豪勇ロイド](#)
(“Grandma’s Boy” 1922年 アメリカ)
・ [ロイドの要心無用](#)
(“Safety Last!” 1923年 アメリカ)

【バスター・キートン】

・ [キートンの恋愛三代記](#)
(“The Three Ages” 1923年 アメリカ)
・ [キートンの探偵学入門](#)
(“Sherlock Jr.” 1924年 アメリカ)
・ [キートンのセブン・チャンス](#)
(“Seven Chances” 1925年 アメリカ)

【マルクス兄弟】

・ [我輩はカモである](#)
(“Duck Soup” 1933年 アメリカ)

【ローレル&ハーディ】

・ [ローレル&ハーディの天国二人道中](#)
(“The Flying Deuces” 1939年 アメリカ)

【パール・ホワイト】

・ [ポーリンの冒険](#)
(“The Perils of Pauline” 1947年 アメリカ)

[名作文学](#)

・ [じゃじゃ馬馴らし](#)
(“The Taming of the Shrew” 1929年 アメリカ)
・ [武器よさらば](#)
(“A Farewell to Arms” 1932年 アメリカ)
・ [若草物語](#)
(“Little Women” 1933年 アメリカ)
・ [ガリバー旅行記](#)
(“Gulliver’s Travels” 1939年 アメリカ)
・ [アンナ・カレニナ](#)
(“Anna Karenina” 1948年 イギリス)

[歴史的名作](#)

・[国民の創生](#)

(“The Birth of a Nation” 1915年 アメリカ)

・[イントレランス](#)

(“Intolerance” 1916年 アメリカ)

・[散り行く花](#)

(“Broken Blossoms” 1919年 アメリカ)

・[東への道](#)

(“Way Down East” 1920年 アメリカ)

・[男性と女性](#)

(“Male and Female” 1919年 アメリカ)

・[愚なる妻](#)

(“Foolish Wives” 1922年 アメリカ)

・[グリード](#)

(“Greed” 1924年 アメリカ)

・[鉄路の白薔薇](#)

(“La Roue” 1922年 フランス)

・[戦艦ポチョムキン](#)

(“Броненосец 《Потёмкин》” 1925年 ソ連)

・[西部戦線異状なし](#)

(“All Quiet on the Western Front” 1930年 アメリカ)

・[グランド・ホテル](#)

(“Grand Hotel” 1932年 アメリカ)

・[民族の祭典](#)

(“Olympia□□-Fest Der Volkler” 1938年 ドイツ)

・[美の祭典](#)

(“Olympia□□-Fest Der Schönheit” 1938年 ドイツ)

[あとがき](#)

「淀川長治とチャップリン映画」映像作家 岡田喜一郎

『□□ サスペンス・スリラー／SF・ホラー／西部劇 他』へ⇒

『□□ ヒューマン・ドラマ／ラブロマンス』へ⇒



淀川長治
クラシック名画解説全集Ⅲ



喜劇の王様

『チャップリンの失恋』『豪勇ロイド』他(全29話)

World Classic film Selection





【チャップリン】

成功争ひ／
ヴェニスにおける子供自動車競走／
ノックアウト／
メーベルの結婚生活／笑ひのガス

Making a Living / Kid Auto Races at Venice
The Knockout / Mabel's Married Life / Laughing Gas

(1914・アメリカ)

出演：チャールズ・チャップリン



成功争ひ

〈作品データ〉

制作年…1914年

制作国…アメリカ

時間……11分

監督……ヘンリー・レアマン

出演……チャールズ・チャップリン／ミンタ・ダーフィー

〈作品解説〉

チャールズ・チャップリンがキーストン映画に入り、初めてスクリーンに登場した作品。1914年2月2日、アメリカで封切られた。ドジョウ髭にステッキ。母と娘を手玉にとって誘惑するニセ紳士に扮装してドタバタのアクションの連続。11分の短編だがすべての映画ファンにとって必見。

ヴェニスにおける子供自動車競走

〈作品データ〉

制作年…1914年

制作国…アメリカ

時間……5分

監督……ヘンリー・レアマン

出演……チャールズ・チャップリン／ヘンリー・レアマン

〈作品解説〉

チャップリン2本目の作品。ロス海岸のリゾートで行われた自動車競走にやって来たチャップリンは、撮影隊のカメラの前でチョロチョロしたりポーズをとったり勝手気ままな行動に出る。チャップリンのトレードマークになったチョビ髭、だぶだぶのズボンとドタ靴、山高帽の浮浪者スタイルはこの作品から生まれた。チャップリンの原点ここにある。

ノックアウト

〈作品データ〉

制作年…1914年

制作国…アメリカ

時間……23分

監督……チャールズ・エイヴリー／ロスコー・アーバックル

出演……チャールズ・チャップリン／メーベル・ノーマンド／マック・スウェイン

〈作品解説〉

チャップリン17本目の作品だが、実際はマック・セネットの制作。デブ君ことロスコー・アーバックルが監督主演したキーストンコメディの傑作。デブ君の持ち味がいかんなく発揮され、彼は恋人のために賞金を稼ごうとして拳闘大会のリングに上がる。そのレフリーを務めるのが小柄なチャップリン。助演だがリング上でギャグを連発。3分間しか出演していないのに計算された動きで主役を食ってしまったが、ここが本作の見どころ。

メーベルの結婚生活

〈作品データ〉

制作年…1914年

制作国…アメリカ

時間……12分

監督……チャールズ・チャップリン

出演……チャールズ・チャップリン／メーベル・ノーマンド／マック・スウェイン

〈作品解説〉

チャップリンのキーストン社における19本目の作品。メーベル・ノーマンド主演としては7本目。彼女は眼と唇の美しい魅惑的な喜劇女優で、この作品でチャップリンと共同監督をしている。そのメーベルの夫役にチャップリンは扮して、酔っぱらって妻が買ってきた等身大の人形を人形と思わず絡む。そのしつこい演技が抜群に面白い。

笑いのガス

〈作品データ〉

制作年…1914年

制作国…アメリカ

時間……9分

監督……チャールズ・チャップリン

出演……チャールズ・チャップリン／フリッツ・シェード

〈作品解説〉

チャップリンのキーストン社の20本目の作品。歯科医の小間使いとして働くチャップリンが、歯医者留守中に患者を勝手に診察して笑いを誘う。しかしこの時期のチャップリンの芸風は、同時期の陽気で楽しいアーバックルのギャグと比べて、しつこく、ややもすれば残酷ですらある。

チャップリンの『ヴェニスにおける子供自動車競走』『成功争ひ』、そういうふうな作品を今ご覧になるのは本当に珍しいことですよ。

チャップリンが映画界に入って初めての映画ですよ。

チャップリンは舞台の人、カルノー座の人。だから映画に出るのは本当に初めてなんです。

けど、チャップリンという人は非常に小策いうのか、自分というものを売りたいくて売りたいくて、人を押しのけても自分はやりたいような根性があったんですね、早くから。

イギリス人ですけど、アメリカへ来て『成功争ひ』とかやりました。

『ヴェニスにおける子供自動車競走』やりました。

ヴェニスいうからどういうヴェニスかと思うけど、これはロサンゼルスハリウッドの近くにヴェニスという名前の海岸があったんですね、そこでの自動車競走なんですね。

で、『自動車競走』は主役でドタバタなんですけど、チャップリンはそれに出たんですね。

出た時にチャップリンはドジョウ髭生やしてました、長い髭。そうしてカッコ悪かったのね。

チャップリンは「これではイカン」思って、自分の楽屋で人の髭とっちゃったんですね。つけるやつを。で、人の靴履いたんですね、人のステッキとったんですね、全部。

それでチャップリンの様子がすっかり変わったんですね、監督びつくりしたんですね。「なんだ、おまえ」と言いましたけど、チャップリンが面白いから許したんですね。

チャップリンは、勝手に人の靴履いて、勝手に人の髭つけて、勝手に人のズボンみたいな着て有名になったんですね。

チャップリンは本当に、この自分というものを売りたがる人なんですね。

チャップリンはあのステッキ持ってますね。あのステッキも実はカルノ一座におった時には、ずっとこうもり傘だったんですね。こうもり傘の柄で人をひきずったり、自分がこうもり傘を持てると、滑ってひっくり返ったりする。それを今度はハリウッドに来てやろうと思ったら怒られたんですね。

ハリウッドは雨降らないからこうもり傘なんか困りますよ、言われたんで、困ったな、困ったな思った。それでステッキ持ったんですね。

そういうふうに、いつでも何か自分というものを認めてもらいたい、自分を注意してもらいたいと苦心する人ですね。

で、そのステッキも、なるべくしなるやつ、なんか、まあくしなるやつ、バネのあるやつを使いたいの、それがアメリカにないので困ったんですね。

それが日本にあるので、日本にたくさんたくさん注文したんですね。

というようなことがあって、チャップリンの、あのステッキも、実はこうもり傘から変わってきたんですね。

ということも、ちょっと今日ご覧になったらおわかりになると思います。



【チャップリン】

チャップリンの醜女の深情

Tillie's Punctured Romance

(1914・アメリカ)

監督：マック・セネット

出演：チャールズ・チャップリン／マリー・ドレスラー／

メーベル・ノーマンド／マック・スウェイン



〈作品データ〉

制作年…1914年

制作国…アメリカ

時間……79分

監督……マック・セネット

出演……チャールズ・チャップリン／マリー・ドレスラー／メーベル・ノーマンド／マック・スウェイン

〈作品解説〉

チャップリンがキーストン社で出演した33本目の作品。有名な舞台女優マリー・ドレスラーが主演して大当たりした舞台劇の映画化。監督はマック・セネットで、アメリカ初の長編喜劇。チャップリンは都会育ちのベテニ師に扮し、莫大な遺産を相続した純情な田舎娘（映画でもドレスラーが出演）を情婦（メーベル・ノーマンド）とぐるになって騙す。上流社会のパーティでの大騒動やラストの海岸でのドタバタなど見どころはいっぱいだ。チャップリンが悪党を演じたのが面白い。

チャップリンの『醜女の深情』、『醜女の深情』言いますね。

これはおもしろい事に、当時チャップリンの映画はみんな、1巻物、1巻物、1巻物、すーつと並んでいるんですね。

それでこれは6巻だったんですね、大長作ですね。

どうしてかいいますと、これはマリー・ドレスラーが主役するんですね。

マリー・ドレスラーという面白い太った女の人もいるんですね。これが主役するんですね。

で、チャップリンとメーベル・ノーマンドは助演なんですね。

監督はチャップリンじゃないんですね。ええつ、そんなこともあったのか、と思われるでしょうけれど、この『醜女の深情』、これは実はマリー・ドレスラーというあの太った女の人の有名な舞台の当たり役だったんですね。

有名な舞台、これをどうしても映画にしたいというので、マック・セネットが買い込んだんですね。

主役は絶対にマリー・ドレスラーじゃないとやれないっていうんでね、それで本人自身が主役する映画でマリー・ドレスラーの『醜女の深情』だったんですね。助演しているのがチャップリンとメーベル・ノーマンドで、こういう時代があったんですね。

どんな話か言いますとね、田舎のね、金持ちの娘いたんですね。それを都会の悪い男と悪い女、悪い男はチャップリン、悪い女はメーベル・ノーマンド、それがその2人の考えで、あの女の金盗ってやろういうので、その太った女の人を一生懸命チャップリンが誘惑したんですね。口説いたんですね。で、女の方は喜んで、喜んでその太った田舎の娘さんはチャップリンに全部お金渡しちゃって一緒に駆け落ちしたんですね。でもそれは表向きで、都会に來たらチャップリンとそのメーベル・ノーマンドはボーイと放り出したんですね、その女の人を。

そういうので、この女はもうほんとにね、都会の男には驚いたという話があるんですね。

で、2人はまんまと金を盗って、舌出して喜んだんですね。そして2人は喜んで、いい気になってると、マリー・ドレスラーが都会へやって來たんですね。そうして2人見つけたんですね。「このやろう」って、2人をやつつけるところがまた凄いですね。

太った女がチャップリンをつかまえて、タンゴダンス踊るところなんか凄いですね。

で、このマリー・ドレスラーが2人をやつつけて終わりになりますけど、これはこの時代で初めてチャップリン映

画6巻もの。今まで全部1巻もの、だからびっくり仰天。

何だろこれは、『醜女の深情』どういう映画なんだろう思ったけれども、これでチャップリンはこういう役が当たり役になって、いつでもチャップリンは何か女を誘惑しては金盗るような、そういう役がだんだん増えてきて、チャップリン自身困ったんですね。



【チャップリン】

チャップリンの拳闘／
チャップリンの失恋／
チャップリンの改悟

The Champion / The Tramp / The Police

(1915 / 1916・アメリカ)

監督：チャールズ・チャップリン

出演：チャールズ・チャップリン／

エドナ・パーヴィアンス



拳闘

〈作品データ〉

制作年…1915年

制作国…アメリカ

時間……18分

監督……チャールズ・チャップリン

出演……チャールズ・チャップリン／エドナ・パーヴィアンス／バド・ジャミソン

〈作品解説〉

チャップリンはキーストン社で35本の短編喜劇に、監督（全部ではない）・出演し、その後エッサネイ社に移る。キーストン時代はアメリカの活動写真の喜劇スターになるためにガムシヤラに動いた時代だったが、これを契機に自らの喜劇を模索し始める。本作は通算38本目。ドタバタから味わいのある喜劇への脱皮が見られラストのボクシングシーンが面白い。相手役はチャップリンが見出したエドナ・パーヴィアンス。

失恋

〈作品データ〉

制作年…1915年

制作国…アメリカ

時間……19分

監督……チャールズ・チャップリン

出演……チャールズ・チャップリン／エドナ・パーヴィアンス／フレッド・グッドウィンズ

〈作品解説〉

チャップリンはエッサネイ社時代、すべての作品を監督・主演しているが、本作は通算41本目。浮浪者のチャップリンが強盗に襲われそうになった農場の娘を救い、その娘に恋心を抱く。ほろ苦い余韻を残すあたりがこれまでの作品とちよつと違う。相手役はエドナ・パーヴィアンスでエッサネイ時代以降はほとんど共演し、チャップリンの良き協力者。彼女はチャップリンに生涯を捧げつくした、アメリカには珍しい古風な心温かい女優であった。

改悟

〈作品データ〉

制作年…1916年

制作国…アメリカ

時間……19分

監督……チャールズ・チャップリン

出演……チャールズ・チャップリン／エドナ・パーヴィアンス／ウェズリー・ラッグルス

〈作品解説〉

チャップリンの通算49作目（エッサネイ社）。チャップリン扮する刑務所を出所したばかりの泥棒が、なんと人の良さそうな宣教師に働いた金を盗まれてしまつて無一文。そこで昔の仲間に誘われるまま、ある屋敷に押し入るが、その家の美しい娘（エドナ・パーヴィアンス）の優しさと機知に助けられ、罪を深く恥じながら一本道を去つていく。このあたりからチャップリンは人間の機微と皮肉をうまく取り入れるようになってきた。

チャップリンの『改悟』『失恋』『拳闘』ですね。

もうこれは、本当にチャップリンを知るのは見事な作品ですね。

で、『拳闘』はもう、ご覧になったらわかるように、拳闘自身が面白いんですね。

もう拳闘が何とも知れん、面白いんですね。

で、これは当時のオールスターキャストなんです。

コメディの連中の顔ぶれの花形が、みんな出ているんですね。大騒ぎ。

けど、チャップリンの演技が凄いですね。

『失恋』は、チャップリンの映画の代表作品ですね。

この作品がチャップリンを知るには最もいいんですね。

で、この映画、チャップリンの『改悟』。この頃私は、チャップリンの映画好きじゃなかったんですね。みんな、なんか怖かったんですね。なんか変だった、変だいうのおかしいですけどね、ただ笑えなかったんですね。

というのは、チャップリンがもうこの頃すでに社会の皮肉なこと、風刺、それをうんと入れてたんですね、コメディの中に。

で、この映画もそのチャップリンの怖いドラマ、シナリオが入ってるんですね。

チャップリンが牢獄から出て来たんですね、放免されて。

「ああ、もうこれで自由だ。わしはもう自由になったんだ」喜んだんですね。で、喜んで深呼吸したんですね。そこへ向こうから牧師が来たんですね。

「あつ、向こうから牧師が来た」と思っていると、牧師が側に寄ってきてバイブルを広げて、チャップリンの頭に手をやって、「おまえは、もうこれから幸せになるんだよ。改悟したんだから、おまえは本当に悟りを開いたんだから。これからおまえの世界は広がって行くよ。おまえは真人間になったんだよ」そういうことを言ったんで、チャップリンはね、もう涙がポロポロ出て来たんです。ありがたくて、ありがたくて。

けど、ハンカチがないから、牧師さんの髭で目をふいたりするんですね。

チャップリン喜んで、「ああ良かったなあ。ああいうふうに諭しを受けたから、良かったなあ」

改めて、喜んで歩いて歩いていく道で、1人の酔っ払いが、なんか電柱にぶら下って懐中時計をぶらんぶらんしとったんですね。で、チャップリンまた盗ろうと思ったんですね。

けど、さっき諭し聞いたところだから、もう盗ったらイカン、盗ったらイカンよと盗らないで、ぶらんぶらんしてるの。

手出したら盗れるのに盗らないで、八百屋行って、あのリングくれ、あのバナナくれといつてかじつては「これはまずい、あれはまずい」ってやってたから、その八百屋さんが怒る。「おまえ、なんだ。金持ってるのか」言うのと、チャップリン、「うん、持ってるよ」。

牢獄で働いて働いて、少し貯金ができたんですね、牢獄の中で。

それを出そうと思ったら、全然なかったんですね。

「えっ!? 金がない、金がない」「馬鹿野郎、おまえはただでかじりやがって、出てけ」って怒られて、表に出て元の方へ帰って来たら、途中であのぶらんぶらん、ぶらんぶらん時計が揺れてった時計がなくなってるんですね。

「あ、泥棒だったんだ。これも泥棒だったんだ。あつ、あの牧師さんが泥棒か。うーん」というような映画なんですね。

怖かった。

子どもながら観て、映画の中で今まで観た映画の中で、牧師が泥棒だというのは1本もなかった。この映画1本だけ。

チャップリンはいかに凄い鋭い眼で映画観てたか、そしてよく検閲がこれ通したな、というふうな『改悟』は、見事なチャップリンの、何とも知れん社会への針ですね。針を突き刺した映画でしたね。



【チャップリン】

チャップリンの消防夫／
チャップリンの番頭

The Fireman／The Pawnshop

(1916・アメリカ)

監督：チャールズ・チャップリン

出演：チャールズ・チャップリン／

エドナ・パーヴィアンス



消防夫

〈作品データ〉

制作年…1916年

制作国…アメリカ

時間……22分

監督……チャールズ・チャップリン

出演……チャールズ・チャップリン／エドナ・パーヴィアンス／エリック・キャンベル

〈作品解説〉

その後、チャップリンはエッサネイ社からミューチュアル映画に移り、本作が通算52作目。ある男が保険金目当てに自分の家に火をつける。ところが家の中に一人娘（エドナ・パーヴィアンス）が取り残されてしまったからさあ大変！ チャップリン扮する消防夫の活躍で無事に娘は救出される。消防署の中で繰り広げられるギャグは大爆笑だが、火事だというのに慌てない連中を見せるあたり皮肉たっぷりの喜劇だ。

番頭

〈作品データ〉

制作年…1916年

制作国…アメリカ

時間……22分

監督……チャールズ・チャップリン

出演……チャールズ・チャップリン／エドナ・パーヴィアンス／ヘンリー・バーグマン

〈作品解説〉

通算56本目。ミューチュアル喜劇の中でも特筆すべき作品で、公開当初から秀作の評判が高かった。チャップリン扮する質屋の新米店員は、主人にはベコベコして娘には流し目を送り客には不親切で、質入れの目覚まし時計をバラバラに分解してしまう。さまざまな小道具をギャグの材料に使って独創的なアイデアに満ちて大いに笑わせるが、どこか残酷喜劇の匂いがする。今で言えばブラックユーモアである。

チャップリンの『消防夫』と『番頭』。

これはいいですよ。

『消防夫』、これ観た時に「チャップリンという人はこういうコメディを作る人か」言いながら、私はチャップリンがいやらしい人だなと思ったんですね。

それはあんまりにも皮肉だったんですね。

消防自動車がおって、その消防夫が5、6人、上でたむろしてると、カランカラン、カランカラン、火事なんですね。

さあ火事だ、行こう行こう、いう時にチャップリンとその連中は、「まざお紅茶を飲みます」、お紅茶飲んで、「爪磨きます」、爪磨いて、「さあ、これから行きます」つて、みんなゆつくり出ていくところが『消防夫』の最初のシーンですね。

あれ観てね、なんちゅう皮肉なことだろう、笑えないなと思ってチャップリン映画はあんまり好きじゃなかったんですね。

そういう訳で、この映画はあまり好きじゃなかった。
ところが、だんだんだんだん、チャップリンがわかってきたんですね。

そうした時に、チャップリンの『ボーンショップ』、質屋ですね、それが来たんですね。

その頃、子どもの頃、私は質屋というのがあんまりよくわからなかったけれど、入り口に3つの球がぶら下がっているんですね、球がね。ああ、3つの球がぶら下がってる。あの3つの球というのが、あの質屋のマークだというのがわかった。それも、チャップリンの映画でわかったんですね。『番頭』ですね。

この番頭というのが、そこの娘には色目使って、主人にはベコベコ言って、仲間には、もう冷たい冷たい態度をとる、嫌な、嫌な番頭なんですね。

それが番台でおりますと貧しい貧しい人がやって来て、この金魚、この金魚で少し飯代をください言うのね。

で、チャップリンは、黙ってその金魚をつまむんですね。

金魚鉢に入った金魚をつまんで、ブラシでこうやるんですね。「こんなもの駄目だ。さあ、持って帰れ」、かわいそうにね。金魚をブラシで触って、こんなもの駄目だ。

次にね、目覚まし時計を持って来た、目覚まし時計。

「これでね、いくらかくださいね」、みんな1日のパン代もないんですね。

それ見て、チャップリンは「この時計動くのか」言って、カチカチッ、カチカチッ、あらゆるところ調べ回って、とうとう「中まで見ないと」ってバネまで出しちゃって、バラバラになったんですね。

で、「こんなものいらない」と返したんですね。

もう何とも知れん、怖いチャップリンですね。

で、私はこの『番頭』を怖いなと思ったのは、チャップリンが子どもの頃、どんなに辛い思いをしたか、どんなに辛い、貧乏生活したか、その時にチャップリンが言った、「こういう質屋があったんだよ。それがオーバーに描かれてるんだよ、冷たいんだよ、番頭は」というようなことも思い出しました。この質屋の番頭、これが後々後々まで頭の中にあった時に、チャップリンと私、神戸で会いました。

「チャップリンが3分間だけ、あんたと会ってやる、甲板で」船長がそう言ってくれて、私はチャップリンに会いました。

「あんたの『移民』『サニーサイド』『担え銃』みんな観ましたよ」

「イエス、サンキュー、サンキュー、サンキュー」

けど、このサンキューはただのサンキューだと思ったんですね。

「本当に観てるんだから、私は本当に観てる。『サニーサイド』も『イージー・ストリート』もみんな観てるんだ」と言ったんですね。

チャップリンは「そうか、そりゃいいな」。

僕は我慢できなくなって、『ボーンショップ』、今日のこの番頭の真似したんですね。

手振って、時計をつぶすところやったんですね。

チャップリン、目の前でやったんですね。

世界中でチャップリンの目の前でチャップリンの真似したの、僕だけだと思いますね。

僕は27才ですか、チャップリンは41才ですか、そのチャップリンに夢中になって夢中になって、チャップリンの目の前でチャップリンの真似したんですね。

チャップリン、じっと見てたんですね。

見た後で、「カム、カム」、僕を船室に入れたんですね。

というぐらい、本当にチャップリンの映画観てるな、この人は観てるな、ということがわかってくれたんですね。それがこの『番頭』でしたね。



【チャップリン】

チャップリンのスケート／ チャップリンの勇敢

The Rink / Easy Street

(1916 / 1917・アメリカ)

監督：チャールズ・チャップリン

出演：チャールズ・チャップリン／

エドナ・パーヴィアンス



スケート

〈作品データ〉

制作年…1916年

制作国…アメリカ

時間……22分

監督……チャールズ・チャップリン

出演……チャールズ・チャップリン／エドナ・パーヴィアンスエリック・キャンベル

〈作品解説〉

通算58作目のこの作品は、ストーリー展開よりもさまざまなギャグがいつばいで面白い。中でもチャップリンの妙技を堪能できるスケートシーンは絶品。後のチャップリン喜劇に登場する数々のギャグは本作の中に詰め込まれていると言ってい。20年後『モダン・タイムス』の中の名場面、デパートでのスケートシーンで、チャップリンは再びその見事な至芸を披露することになる。

勇敢

〈作品データ〉

制作年…1917年

制作国…アメリカ

時間……21分

監督……チャールズ・チャップリン

出演……チャールズ・チャップリン／エドナ・パーヴィアンス／アルバート・オースティン

〈作品解説〉

ミューチュアル喜劇（通算59作目）の中でも最も有名な作品。チャップリンがドタバタ喜劇の憎まれ役の警官に扮し巨漢の悪党を退治する。悪党と警察の追いつ追われつのシーンも見事だが、貧困、飢え、暴力といったテーマを取り上げている。これまでのチャップリンの皮肉とか残酷風刺は影をひそめ、ストレートな勇気が悪を叩きのめすというアメリカ好みのチャップリン映画が登場した。

チャップリンの『スケート』と『勇敢』。

これ、どっちもね、さすがに立派ですね、面白いですね。

『スケート』。これ観てるとチャップリンは本当にうまいです、スケート。

で、そのスケートが生まれるダンスですね、見事に踊りますね。何とも知れん、うまいですね。チャップリンがどうしてこんなにスケートうまいのか、斜めの走るとこんなかうまいですね。

チャップリンどうしてこんなにうまいのか。これはチャップリンが子供の頃から働いて働いて、当時のカルノー座に入った時、その一座でいろんな芸やったんですね。その時にこのスケートの芸を舞台でやってきたんですね。

それがここで見事に活動写真の中で、もういつぺん花開いたんですね。

スケーター立派でした。

チャップリンがどんなに芸人かということよくわかりました。

それと同時にもう一方の作品、これが凄かったんですね。

チャップリンの『勇敢』。

これは、ちょっとみなさんに言っておきたいのは、この頃ドタバタ喜劇はほとんど、おまわりさんは悪党なんです
ね。おまわりさんは悪い役ばかりやるんですね。だから、おまわりさんをコメディにした映画たくさんあったんで
すね。おまわりさんをばかにした映画多かったんですね。それで、キーストン時代におまわりさんが5人、いつも
出てくるんですけど、その5人のおまわりさんをキーストン・コップと言ったんですね。

そのぐらいにおまわりさんをばかにした映画多かったのは、当時、ハリウッドの若い頃、その頃はおまわりさんが
嫌われていたんですね。

「あっおまわりさん来たぞ」言っ、博打やめたりするんですね。

で、おまわりさんを憎んじやったから、おまわりさんをコメディにしたんですね。

という訳で、そのおまわりさんをばかにした中で、チャップリンは、この『勇敢』でおまわりさんを見事な華にし
たんですね。

これはまたチャップリンなんですね。チャップリンがね、何とも知れん、弱々しい、小さな、小さな男のポリスマ
ンなんですね。

こんな男がね、どうしておまわりさんなつたような男なんですね、それが非常に人類愛に燃える。

1人の女が物盗んだんですね、市場で。

それ、チャップリン見たんですね。「こら、おまえ、そんなもの盗んでいいのか」言った時に「妊娠してるから堪
忍してください」言ったんですね。

「妊娠してるのか、おまえ」、パツとめくつたら、実はキャベツなんですね。妊娠じゃないんですね。

けど、それ見てチャップリンは、「そうか、こいつはこんなに苦しんでいるのか」思っ、そのエプロンを隠して
やっ、それ、持って帰れ、持って帰れ」っ、チャップリンは許してやったんですね。

チャップリンが、ちょこちょこちょこ町歩いていると、この町一番の悪い男、大きな男がやって来て、もうチャッ
プリンなんかひねりつぶすような男なんですね。それがチャップリンがどんなに見事にやつつけちゃうかいうところ
が面白いのね。

いろいろチャップリンのその演技の凄さがあっ、最後はチャップリンが男に「おまえはつええな、つええな、は
あ、つええな」っ、男は「俺はつええんだよ」言っ、街灯、大きな街灯ギューツと曲げたんですね。

曲げた時に、その街灯の口の中に、チャップリンはその大きな男の顔を突っ込んだじゃうんですね。

それでスコッてひねったんです、ガスを。

で、男はひっくり返っ、うーうーと苦しんで終わりですね。

見事なチャップリンのポリス。

チャップリンがどんなに勇敢に警官の姿を見せたか、たいがい警官をばかにした映画多かったのに、チャップリン
は警官万歳という映画作っ、えらい評判になったんですね。



【チャップリン】

チャップリンの霊泉／
チャップリンの移民／
チャップリンの冒険

The Cure / The Immigrant / The Adventurer

(1917・アメリカ)

監督：チャールズ・チャップリン

出演：チャールズ・チャップリン／

エドナ・パーヴィアンス



『靈泉』

〈作品データ〉

制作年…1917年

制作国…アメリカ

時間……21分

監督……チャールズ・チャップリン

出演……チャールズ・チャップリン／エドナ・パーヴィアンス／アルバート・オースティン

〈作品解説〉

ミューチュアル映画の10作目。チャップリンはこの当時、労働者階級の間で深刻な問題であった泥酔を喜劇にしている。チャップリン扮するアルコール中毒の金持ちが健康に良い靈泉の湧く保養地にやってくるが、いつこうに酒はやめられない。美しい娘（エドナ・パーヴィアンス）の力によってやっと酒を断つことができる。チャップリンの酔っぱらいぶりが絶品で見ものだ。

『移民』

〈作品データ〉

制作年…1917年

制作国…アメリカ

時間……22分

監督……チャールズ・チャップリン

出演……チャールズ・チャップリン／エドナ・パーヴィアンス／ジェームズ・T・ケリー

〈作品解説〉

ミューチュアル映画の11作目で、チャップリンは本格的な愛の映画を誕生させた。アメリカへ渡航する移民船の貧しい人々をとらえ、自由の国への上陸目前でも少しの自由も許されない哀れな移民の姿を独特の厳しい皮肉で描いている。飢えと貧苦の母と娘（エドナ・パーヴィアンス）をチャップリンが助けてやるあたり、深い愛情と物語性に満ちあふれている。4日間の不眠不休の編集の末に完成させ、見事な傑作に仕上がっている。

『冒険』

〈作品データ〉

制作年…1917年

制作国…アメリカ

時間……22分

監督……チャールズ・チャップリン

出演……チャールズ・チャップリン／エドナ・パーヴィアンス／ヘンリー・バーグマン

〈作品解説〉

チャップリンはミューチュアル映画で12本作っているが、本作は最後の作品（通算62本目）で最も人気を得た。監獄から脱走したチャップリンは海で溺れているエドナ・パーヴィアンスとその母を助けるが、彼女の愛人の巨漢が絡んできてドタバタ喜劇となる。チャップリンは海に放り出されてしまうが、それを助けたのが日本人。この人は高野虎市といい、チャップリンの秘書を長年務めた人で映画に特別出演している。

チャップリンの『靈泉』『移民』『冒険』、面白いですね、みんな大好きな作品ですね。

『霊泉』と言いますか、何だろっと思いますけど、治療する温泉ですね。向こうは温泉のことを霊泉とか言うんですね。身体治すのですね。

弱いチャップリンが大きな男に、うまあく愛嬌たっぷりで騙しちゃう映画で、チャップリンのちょっと女形みたいな映画なんですね。

ポーズが全部、女形のポーズですね。チャップリンはかつて、1回だけ女になった映画あるんです、女装というのが。

あの時はチャップリン、ヒゲ取りました。綺麗な女になったんですよ。

チャップリン、どうもちょっとそういう女の気がありますね。

ポーズがいかにもね、誘惑的なポーズとりますね。

『霊泉』はそのチャップリンですね。

いかにもね、女らしいカッコしてね、相手の大きな男をやっつけちゃう映画なんですね。

それから、その他に『移民』がありますね。

『移民』は、チャップリンが、いよいよ本格的にアメリカ映画に入って行くような感じの見事な作品ですね。

『移民』というのは、みんなが金がなくてアメリカへ、アメリカへ行く話なんですね。

チャップリンはアメリカに行く時に金がなかったんだけど、その船の中の地下で博打やったんです。仲間みんなと、移民の仲間と。

チャップリン1人、ボロ儲けしちゃったんですね。

それで上がって来て、「良かった、俺は金持ちになった」思った時に、向こうでお母さんと娘が抱き合って寝てたんですね。お母さんもその娘さんも、いかにもかわいそうな顔してるんですね、お腹がすいたような顔してるんですね。

しかも抱き合ってるんですね、これは移民ですね。

当時移民はみんな金がなくて、アイルランドの移民はニューヨークへ、ニューヨークへ行くんですね。

そういう訳で、「ああ、このお母さんと娘もかわいそうなもんだな。俺、ここにいっぱい金持つとんな、少しやろうか」と思って、娘のポケットにその金入れたんですね。

チャップリン、全部入れちゃったんですね、ひとかたまりを全部。

考えたら、全部入れたら俺食えねえから思っちょろつと盗んだんですね。それをおまわりに見つけられて、甲板のおまわりに、「こら一つ」って怒られて、「なんだおまえはつ」って言った時に、目が覚めたその娘さんは、「いいいえ、これは私のお金じゃありません。このお方が私にめぐんでくださったお金です」言うので、チャップリン助かったんですね。

チャップリンがそういうふうな場面を見せるようになったのは、アメリカ行ってからですね。

チャップリンのその『移民』では、自由の国アメリカへ行くんだ、今度はアメリカに行くんだいうことになって、向こうの方に自由の女神の円形が映ってきたんですね。

「おーい、自由の女神だぞ、女神だぞ」、きゃあーと言ってみんな出て来て、甲板にもたれるから、船がちょっと傾いたんですね。

「馬鹿野郎っおまえら、何するんだ」言っって、みんなロープでキューツと元に戻されたんですね。自由の国、自由の

国の第一歩は、いかにも不自由な国だったんですね。

そういうところでチャップリンの皮肉がよく出てたんですね。

そういう訳で、チャップリンの『靈泉』も、チャップリン『移民』も、それから『冒険』も見事です。

『冒険』、これ特に面白いのは、親子が、お母さんと娘がおぼれそうになったのをチャップリンが見つけて、ばーんって飛び込んで、それでどっちを助ければいいか見るんですね。やっぱり娘の方がいいなって娘を助けてね。お母さんが「私も助けてよ、助けてよ」いうところが面白いんですけど、この映画で一番面白いのは、この映画に何でもない1カット、2カットぐらい出て来るんですけど、それが有名なチャップリンの番頭さんで、20年間一緒にずっとチャップリンと暮らしてきた、高野虎市さんなんですね。

高野虎市さんが運転手になって1カット出たんですね。

それで、奥さんが怒ったんですね。「何であんた、映画なんか出るんですか」「チャップリンが出ると言ったら出たんだ」「なんのためにそんな役者みたいな、そんなひもじい、そんな汚い、役やったんですか。あんたはちゃんと立派な、立派な日本人なのに」なんて言ったこと、チャップリンが僕に言いましたが、虎市の奥さんはそんな人だったんですね。

チャップリンと虎市さん、これはもう古い古い仲間で、僕は虎市さんに何度も会いましたが、虎市さんも立派な立派なチャップリンの最高の番頭さんでした。

その虎市さん自身が1カット出たというので、この作品は珍しいですよ。



【チャップリン】

犬の生活

A Dog's Life

(1918・アメリカ)

監督：チャールズ・チャップリン

出演：チャールズ・チャップリン／エドナ・パーヴィアンス／

チャック・ライスナー／ヘンリー・バーグマン



〈作品データ〉

制作年…1918年

制作国…アメリカ

時間……30分

監督……チャールズ・チャップリン

出演……チャールズ・チャップリン／エドナ・パーヴィアンス／チャック・ライスナー／ヘンリー・バーグマン／シド・チャップリン

〈作品解説〉

チャップリンがミュージカルからファースト・ナショナル社に移った第1回作品で通算63作目。これ以降チャップリンならではの本格的喜劇が生まれていく。放浪者チャップリンと野良犬の出会い。犬もチャップリンも貧しさに耐えて生きるが、やがて酒場の女（エドナ・パーヴィアンス）と愛が芽生え最後はめでたくハッピーエンド。笑いと涙を愛が包み込んだ映画史上に残る名作。

もう最も、最も最も好きなチャップリン、その『犬の生活』、この話しましょうね。

“A Dog's Life”で、『犬の生活』という題で出ましたが、『犬の生活』いうのはもう何ともかんともしれない苦勞の苦勞の悲しい悲しい生活を「犬の生活」と言ったんですね。“Dog's Life”と言ったんですね。

これはチャップリンが本当に小さい頃、苦しんだ苦しんだ苦しんだことが見事な美術、芸術になって現れている映画ですね。で、この映画ご覧になったらチャップリンのオリジナルがわかりますね。

チャップリンはお腹がすいたし仕事がないしふらふらしているけれど、そこに“男子1名入り用”と書いてあったので、喜んでチャップリンはそこに行ったら、後ろに15人並んでるんですね。不景気の頃ですね。そうして“男子1名入り用”の切符もらう時にチャップリンが手を出したら、後ろから5番目の大きな男がバーンとチャップリン蹴ってその権利のふだをとっちゃったんですね。

チャップリンはもうがっかりして、がっかりして、1人で歩いてある垣根の前で倒れて、そうして「ああ、ここで1人寝ようか」、けど、お腹がすいて眠れないんだね。ところが後ろに「ホットドッグ、ホットドッグ、ほやほやのホットドッグ」と売りに来たんですね。チャップリンその匂い嗅いでああ、ほしいなほしいな思っ「神様、神様、この1つのホットドッグ今盗みますけど、明日必ず返します」それで、そろーっと後ろへ行ってホットドッグ1つ盗んだんですね。ほやほやの。「ああ、これで昨日から何も食べてないからこれで助かったな」とチャップリン口開けてあーんと食べようと思ったらそこへ瘦せた瘦せた瘦せたかわいそうな犬がやって来たんですね。

チャップリン食べかけたけどやめて、その犬にやろうと思ってパッとやったら犬が喜んで、とろうと思ったら隣から大きなブルドッグやって来てボーンと蹴ってそのソーセージ持って逃げたんですね。考えたらおまえと俺とは同じだなあ、というのでチャップリンは自分のことも考えないでその犬を抱いて職業を探す話なんですね。それが『犬の生活』ですね。

いかにも奇麗な面白い映画でしたよ。チャップリンがこういう愛の生活を映画にし出したのはこの『犬の生活』からですね。



【チャップリン】

サニーサイド

Sunny Side

(1919・アメリカ)

監督：チャールズ・チャップリン

出演：チャールズ・チャップリン／エドナ・パーヴィアンス／
トム・ウィルソン



〈作品データ〉

制作年…1919年

制作国…アメリカ

時間……30分

監督……チャールズ・チャップリン

出演……チャールズ・チャップリン／エドナ・パーヴィアンス／トム・ウィルソン

〈作品解説〉

ファースト・ナショナル社での作品で通算66作目。「サニーサイド」とは日の当たる側。アメリカ西部の美しい水仙の花が丘の上に咲き競う田舎の村の物語だったため「田園喜劇」と呼ばれた。チャップリン扮するホテル兼雑貨店は1日中休む暇もない重労働。見どころはニジンスキーのバレエ『牧神の午後』を真似てチャップリンが踊るシーン。人生の皮肉を描くとともにチャップリンのカルノー一座で磨かれたダンスを見せる。

『サニーサイド』、“陽のあたる場所”、ですね。で、チャップリンが初めてアメリカへ来て、初めはカルノー一座でイギリスの芸人だったんですね。で、アメリカに来てそうして認められて、マック・セネット呼ばれて映画界入りしましたね。

で、初めは非常にイギリスくさい映画だったんですね。みんなに嫌がられたんですね。ところが『サニーサイド』辺りからだんだんだんだんアメリカのおいを持ち出したんですね。で、この『サニーサイド』、面白いのはもうこき使われてこき使われてホテルでこき使われて、ホテルというよりも、もう雑貨屋ですね。で、まあちょつと泊まる部屋もあるんですね。こき使われて「明日はおまえ夜明けの4時に起きなさいよ」言われて、チャップリンは自分の部屋に帰って目覚まし時計に4時をやろうと思ったら今4時なのね。寝る間ないんだね。そういうふうな凄い凄いチャップリンの重労働の働きを見せながらチャップリンがふらふらなって、ふらふらなって橋を渡ろうとした、陸の橋を。そうした時、後ろから牛の群れを運んで行くカウボーイがありまして、その牛がボーンとそのチャップリンをついたんですね。チャップリンは橋の下に落ちたんですね。落ちた所が草原でサボテンがあったんですね。その上に倒れちゃって今度は夢の中でチャップリンは綺麗な綺麗な女とダンスするところがあるんですね。そこがまた綺麗ですね。つまり『サニーサイド』は決して現実ではなかったけど夢の中では綺麗な綺麗な女と踊れるというところが凄いですね。

で、チャップリンが3人の女とダンスするところがあるんですね。そこでちらっとチャップリンがニジンスキーの真似をするんですね。ニジンスキーの『牧神の午後』の真似をするんですね。まあ面白いなと思って観た映画が『サニーサイド』でした。けれども後に後にずっとずっと後にチャップリンに私は、現実のチャップリンに会った時に「あんたは『サニーサイド』でニジンスキーの真似をしましたね」と言ったら「OH! YES! あんたわかりましたか?」と言われたことありましたけど、『サニーサイド』は私の思い出深い深い映画でしたよ。



【チャップリン】

キッド

The Kid

(1921・アメリカ)

監督：チャールズ・チャップリン

出演：チャールズ・チャップリン／ジャッキー・クーガン／
エドナ・パーヴィアンス



〈作品データ〉

制作年…1921年

制作国…アメリカ

時間……52分

監督……チャールズ・チャップリン

撮影……ロリー・トザロー

出演……チャールズ・チャップリン／ジャッキー・クーガン／エドナ・パーヴィアンス／カール・ミラー／チャック・ライスナー／トム・ウィルソン／ヘンリー・バーグマン／アルバート・オースティン／リタ・グレイ

〈作品解説〉

通算68作目は初の長編喜劇。ロンドンの下町、男に捨てられた若い娘（エドナ・パーヴィアンス）は赤ん坊を車の中に置き去りにするが、浮浪者チャップリンはその子を拾い育てる。5年後、成長した子どもキッド（ジャッキー・クーガン）とお互いに助け合いひとつ屋根の下で暮らす。クーガンのかわいさが観客の胸を打ち、愛すること、働くこと、食べることの大切さを教えてくれたまさに愛の名作。

チャールズ・チャップリン、見事な俳優ですね。見事な監督ですね。

この人の『犬の生活』、怖いけど悲しいけど良かったね。見事でしたね。このチャップリンがやがてファースト・ナショナルいう会社で『キッド』を作りましたね。「子ども」ですね、『キッド』。それが凄い、これ今ご覧になったらチャップリンという人がどういう人かわかりますね。つまり映画は目で見る物、映画は口でしゃべらなくても目で見るもの。それがこの映画観ていますと完全に本当に目でずーっとわかってきますね。

で、これはチャップリンの番頭さんの日本人の高野虎市という人がある日、日曜日に映画館に観に行ったら映画館で映画と映画の間に『ボードビル』、子どもが出て来てお父さんと一緒に踊ったり笑ったりするところがあるんですね。その子どもがあんまりかわいい、アンコールすると出て来てにつこり笑って両膝をうまく広げたりする。あんまりかわいいのでチャップリンに「いつべん見なさい、いつべん見なさい」と言ったんですね。チャップリンが「そんなの見たくない」と言うのを無理に連れて行ったらチャップリンが一目で気に入ったんですね。「あの子いいなあ。ジャッキー・クーガン、いいなあ」。そうしてその子いつべんに連れて帰って来て、まず最初に『一日の行楽』。おとつつあんが子どもを連れて公園に行つてへとへとになって帰ってくる短編物にその子どもを使つたんですね。「うん、この子どもは使える！ 使える！」それで『キッド』、一躍この子供を『キッド』の主演にしたんですね。それが見事なジャッキー・クーガンの見事なスタートでしたね。

という訳でこの映画はもうメロドラマ、いかにも美しいメロドラマ。で、チャップリン、エドナ・パーヴィアンス、その代表作品ですね。で、『キッド』をご覧になったら映画のコメディは、本当は悲しい中に笑いがある。それでこの笑いがいかにもいかにも悲しいこのストーリーの中に笑いがあるというところに笑いが生きてくるだということを言ってます。

で、この『キッド』観てますとこの子どもが見事なんだね。ガラス屋になって2人が一緒に出かけて行くんですね。チャップリンがガラス屋ですね。で、子どもが先に行つてパーンパーンとガラス割つて行く。その後からチャップリンが「えーガラス屋でござい、ガラス屋でござい」と言つて2人で商売するんだけど、チャップリンは昔、貧乏で貧乏で困つた時にやつと兄さんが帰つて来た、家出した兄さんがシドニー・チャップリン。で、2人で、7つか8つぐらいの2人でガラス屋に奉公したんですね。まずガラス屋で奉公してそれから金貯めてカルノー座に入ったんですね。そ

のガラス屋に入ってた、そのガラスの経験を『キッド』で活かしてるんですね。

で、この『キッド』で面白いことはこの時にチャップリンは、ミルドレッド・ハリスというエキストラ、その綺麗な女優に一目惚れして夢中になったんですね。夢中になってそうして結婚したんですね。『キッド』の時に結婚したんですけど、この16才の女のミルドレッド・ハリスは毎日毎日一緒にどこか遊びに行く。毎日毎日オペラ観に行く。毎晩毎晩何か豪華なパーティーに行く、それを楽しんで楽しんで来たのにチャップリンは撮影していると1日も2日も3日も帰って来ない、もうカンカンに怒ってチャップリンとは別れる、別れるって言ったら、お母さんが「チャップリンと別れなさい。その代わりチャップリンの持っているもの全部とりなさい」と言ったんですね。お母さんに言われてこのミルドレッド・ハリスが狙ったのは『キッド』のもう90%できているフィルムでしたね。「あれ、持って逃げろ、あれ持って逃げろ。それであれを3つに分けて短編にして売ろう」と言いました。そうしてチャップリンの『キッド』を狙ったんですね。それを高野さんが感づいたんですね。危ない危ない！いうんでチャップリン呼んでその『キッド』のフィルムを持ってテーツと逃げたんですね。そうして砂漠地帯に逃げて砂漠の一軒家行って、一軒家の中で『キッド』を編集したんですね。ミルドレッド・ハリスがそれをとろうとしたんですね。そういうような陰の話がありますが『キッド』は見事なチャップリンの運命的な作品ですね。



【チャップリン】

偽牧師

The Pilgrim

(1923・アメリカ)

監督：チャールズ・チャップリン

出演：チャールズ・チャップリン／エドナ・パーヴィアンス／

キティ・ブラッドバーン／マック・スウェイン



〈作品データ〉

制作年…1923年

制作国…アメリカ

時間……43分

監督……チャールズ・チャップリン

出演……チャールズ・チャップリン／エドナ・パーヴィアンス／キティ・ブラッドベリ／マック・スウェイン／
ディンキー・ディー／メイ・ウェルス／シド・チャップリン／チャック・ライスナー／トム・マーレイ

〈作品解説〉

通算71本目でファースト・ナショナル社最後の作品。監獄から出たチャップリンは牧師に間違えられたことで、偽牧師になりすましてしまう。両手を合わせて膝の間に入れ、帽子をかぶった牧師姿で腰をかけ両足を広げて曲げているポーズの面白さ。チャップリンは人生のめぐり逢い、運命のはかなさをドラマチックに展開して見せた。『犬の生活』『キッド』とともにファースト・ナショナル映画の名作。

私の最も愛しているチャップリンの代表作品の『偽牧師』、この話しましょうね。チャップリンの映画はドタバタ映画。面白い面白い、笑う笑う映画だけどいつでもチャップリンの映画にはメロドラマ、人間のドラマが入り込んでいるんですね。それがチャップリンの得意中の得意ですね。そうしてチャップリンは面白い面白いドタバタコメディには必ず背中合わせに悲劇が悲劇、何か悲しい物がついてこそ喜劇が面白いんだよ、と言ってました通り、このチャップリンの『偽牧師』は代表的な映画ですね。

チャップリンは脱獄者、そうしてある日海岸で泳いでいると牧師が泳いでいたので、その牧師の服を着て逃げたんですね。そうして汽車に乗ってある所に着いた時に、みんなは牧師さんを迎える一団がいたんですね。チャップリンを迎えたんですけど、チャップリンは本当は脱獄者ですね。それなのにみんなは牧師と間違ったんですね。で、チャップリンを連れて帰ったんですね。チャップリンはまたチャップリンで何でもしゃべるのがうまいから、その教会でのお話でもいろいろな見事な見事な、みんなをびっくりさせたんですね。チャップリンは有名なその町の牧師になったんですね。「まあ、あの方は立派だよ、あの方は立派だよ」。チャップリンはそれで安心したんですね。「これでわしも生活ができる」。ところがその牢獄で知り合った泥棒がチャップリン見たんですね。「おまえはあの時のあいつだよ」言われたんですね。

チャップリンはのためにどんなにゆすられるか、どんな怖い目にあうかというのがこの『偽牧師』ですね。これは面白い面白い滑稽だけど、ゆすられる映画で怖い映画でヒッチコックですね。それをチャップリンはコメディで見せたんですね。だからチャップリンの映画は非常に笑いで面白い面白い笑うけれど、その裏側には怖い怖い人間のドラマがありますね。



【チャップリン】

チャップリンの黄金狂時代

The Gold Rush

(1925・アメリカ)

監督：チャールズ・チャップリン

出演：チャールズ・チャップリン／ジョージア・ヘイル／
マック・スウェイン



〈作品データ〉

受賞歴…1926年キネマ旬報外国映画ベストテン第1位

制作年…1925年

制作国…アメリカ

時間……72分

監督……チャールズ・チャップリン

脚本……チャールズ・チャップリン

撮影……ロリー・トザロー

音楽……チャールズ・チャップリン

出演……チャールズ・チャップリン／ジョージア・ヘイル／マック・スウェイン／トム・マーレイ／ヘンリー・バーグマン／マルコム・ウェイト／ベティ・モリシー

〈作品解説〉

ファースト・ナショナルからユナイテに移って制作したこの73作目は、チャップリンの最高傑作だけでなく映画史に輝く名作。このときチャップリンは36才で人気絶頂。ゴールドラッシュにわくアラスカを舞台にした放浪者チャプリーの一攫千金の夢と恋物語。チャップリンが靴を食べるシーン、ロールパンのダンスシーンの至芸など名場面の連続。人間の運命、飢えの恐怖、愛の美しさをチャップリンは笑いと涙の中で見せた。

チャップリン最高の傑作『黄金狂時代』、このお話ししましょうね。

チャップリンの全部の映画の中で『黄金狂時代』は最高ですね。私はチャップリンの『黄金狂時代』を観た時に涙が出たと同時にぞっとしましたね。どんなぞっとしたか？ みなさんおわかりでしょう？ チャップリンはこの映画で靴を食べるんです。それで私は「しまった、そうか」と思ったんですね。それはチャップリンがずっと長い間履いていた靴、あの靴を片足食べちゃうということはこの映画でチャップリン時代は終わるんだという印だと思ったんですね。怖いと思ったんですね。

これでチャップリンはやめるというふうな暗号だと思ったんですね。だからびつくりした。

けれどもこれは本当に見事でしたね。どんなに見事だったか言いますと、チャップリンがダグラス・フェアバンクスの本当の親友だったんですね。それでクリスマスに遊びに行ったんですね。ダグラス・フェアバンクスの家に。そうして遊んで帰りにダグラス・フェアバンクスが「ちょっとこれ観ようか？ チャップリン観ないか？」と言ってスライド見せたんですね。10枚の。それはアラスカの金鉱発見の実写なんですね。実写というが実際の写真なんですね。山へどんどん雪の山へ登って途中で倒れて死ぬような所もあるんですね。その登る人が、このゴールドラッシュに行く人が、それを見た帰りにチャップリンが凄いなと思って車に乗って家に帰る道で、ちょうどクリスマスだから「蛍の光」の歌、歌ってたんですね。その声を聞いて「蛍の光」とさっきのスライドで、俺今度ああいう映画作ってやろう、ああいう映画作ってやろう、そうして作ったのが『黄金狂時代』でしたね。

私はこれ観て凄いなと思ったことは、チャップリンのこの映画観て、メロドラマをこんなにコメディで見せる人は初めてと思いましたね。人間劇ですね。自分の一緒に暮らしてる男を、だんだんだんだんその片つぼが飢えて飢えて飢えきったら、本当に飢えきったら相手を食いたくなってきたんですね。人間を。怖い怖いドラマですね。

この映画の一番最初に観てやっぱりチャップリンだなと思ったんです。一番最初に映ったら雪景色ですね。雪の崖ですね、アラスカの。そこへチャップリンがひょこひょこ歩いて行くんですね。崖つぶちの端を。チャップリンがど

んどんどん歩いて行くと後ろから大きな白クマがついて行ってるんです。熊が。白か、黒か忘れたけど。チャップリン知らないですね。後ろからついて来るんですね。チャップリンひと囁みですね。チャップリン知らないで歌いながら歩いて行くんです。そして曲がり角曲がった時にその熊は反対側行っちゃったんですね。だから助かったんですね。でもチャップリンはそんなこと知らないで行くんですね。そこに運命というもの。人間というものは後ろに怖いもの来とっても知らないで奇麗に行くという話もあるし、運命というものは怖いなと言うところから始まるところに『黄金狂時代』の、この人間ドラマのスタートからして怖いんですね。

という訳で私は今、今日までのいろんないろんな映画をずっと全部観て4才から今日まで映画観て、私何本観たかわからないですね。一番の映画何だと聞かれたら、『黄金狂時代』言いますね。



【ハロルド・ロイド】

豪勇ロイド

Grandma's Boy

(1922・アメリカ)

監督：フレッド・ニューメイヤー

出演：ハロルド・ロイド／ミルドレッド・デイヴィス



〈作品データ〉

制作年…1922年

制作国…アメリカ

時間……50分

監督……フレッド・ニューメイヤー

脚本……ハル・ローチ／サム・テイラー／ジーン・ハヴェッツ／ハロルド・ロイド

撮影……ウォルター・ランディン

出演……ハロルド・ロイド／ミルドレッド・デイヴィス／アンナ・タウンゼント／チャールズ・スティーヴンソン

〈作品解説〉

ハロルド・ロイドのトレードマークはロイド眼鏡。チャップリンやキートンと比べると都会派コメディを得意とした。本作は内気でイジメられっ子のロイドが、南北戦争の英雄である祖父のお守りを手に一念発起で大活躍する。この時期、ロイドは短編ドタバタ喜劇からの脱却を図り長編喜劇に挑戦した。この作品の成功によってその後のロイド喜劇の方向性が決定づけられた。

『豪勇ロイド』これはロイドでナンバーワン！ 一番立派な作品ですね。

たくさんたくさんロイドには名作あります。もう高所恐怖症が高い高いビルに上がって行く、それも見事なロイド。ロイドはたくさん良いのありますけど、この『豪勇ロイド』は勉強になるの。いかにも見事な『豪勇ロイド』は、映画の見事なロイドの代表作品ですよ。

『グランマ・ボーイ』、“おばあちゃん子”というのね。で、おばあちゃん子、みなさんもおばあちゃんにかわいがられたお坊ちゃんお嬢ちゃん、いらっやいますか？ その人たちは本当におとなしくておとなしくて、本当おとなしすぎるんですね。おばあちゃん子はそういうふうに、非常に時代遅れだけれどもかわいがられた、そのかわいがられた感じが見事に出るのね。おばあちゃんの子はかわいがられて。このロイドの『豪勇ロイド』のグランマ・ボーイ、おばあちゃん子、気が優しいんだけど内気内気。

おばあちゃんが「おまえ、どうしてそんなにね、めそめそしているの？ おまえのおじいちゃんは偉かったんだよ」なんてね写真持ってくるの。「お父ちゃんはね、おまえのおじいちゃんはね、南北戦争で勇士だったんだよ。見てごらん、勲章いっぱいつけているだろう？」「おじいちゃんそんなに偉かったの？」「当たり前よ、おじいちゃんは敵の中に飛んで行ったんだよ」「何でそんな勇氣あったの？」「誰にも言わない？ 内緒だよ」「うん」たんすの奥から何か筒の物持って来たの。で、風呂敷開けたの。「何それ？」木切れなのね。「内緒だよ。これを持っていたら誰にも負けないのよ。おじいちゃんこれ持っていたから、もうどんどんどん敵の弾のある所飛んで行ったの。これポケットに入れたらね、弾があたらないの」「へえ、そんな木切れか」「勇氣の木なの。さあお前今日からこれ持っていなさい」「ありがとう、おばあちゃんありがとう」ロイドがだんだんだんだん変わっていったのね。ロイドは胸張って「おはよう、さよなら」と言える様になったのね。「おばあちゃん、あの木はええな。よくやるな」と言うのでロイドがおばあちゃんに何度も何度もお礼言ったの。「おばあちゃん、これパラソルじゃないの？」「うん、パラソルの柄がないだろう」「うん、どうしたのこれ」「お前にやったあの木切れ、パラソルの柄なんだよ。あれお前に騙してやったんだよ。だから何にもおまえ、あれは勇氣の木でも何でもないんだよ。お前は勇氣と思ったからやれたんだよ。人間は何でもやろう！ 信じたらやれるんだよ」「おばあちゃん、そうかわいしな、本当にあれを信用したな。けど勇氣が本当に出てたな。おばあちゃんありがとう」いうところで終わるんだけど、ロイドの映画、あの頃のアメリカ映画はそういう映画多かったのね。“カム&ゲット・イット！”来てつかめ！ そういう映画多かったのね。

という訳でロイドの映画はそんなの多かった。アメリカの言葉でね“ドリーム カム トゥルー” っていうのあるでしょ。有名な言葉で“夢は必ず来る”。そういう訳であの頃のロイドの映画にかかわらず、アメリカ映画は随分僕に教育してくれましたよ。



【ハロルド・ロイド】

ロイドの要心無用

Safety Last!

(1923・アメリカ)

監督：サム・テイラー／フレッド・ニューメイヤー

出演：ハロルド・ロイド／ミルドレッド・デイヴィス



〈作品データ〉

制作年…1923年

制作国…アメリカ

時間……60分

監督……サム・テイラー／フレッド・ニューメイヤー

出演……ハロルド・ロイド／ミルドレッド・デイヴィス／ビル・ストローザー／ノア・ヤング／W・B・クラーク

〈作品解説〉

映画史上に輝くロイド喜劇の最高傑作だ。都会のデパートで働くロイドは、宣伝のためビルの1階から屋上まで群衆の前で名人に壁登りさせる企画を立てる。ところが当日、名人は逃げてしまい、ロイドが仕方なく1人で登るはめになる。まさにこの名シーンはハラハラドキドキのスリル満点。涙ぐましいアメリカ精神があふれている。本作はドタバタ性を排し、しっかりしたドラマ構成を構築し、しかもテンポも良くコメディのバイブルになっている。

ハロルド・ロイド、ご存知ですか？ ハロルド・ロイドの『ロイドの要心無用』のお話をしましょうね。

アメリカにはチャップリン、キートン、そうしてロイド、これがいたんですね。これがもう有名なコメディのスターですね。ところがキートンはぼんやりした男、チャップリンはホームレス、それでその頃のドタバタ喜劇はみんなホームレススタイルのボロボロの服を着た連中が主役しましたね。ところがハロルド・ロイドという人は初めから眼鏡をかけて出て来たんですね。眼鏡をかけるということは映画で一番いけないこと。眼鏡はガラスがあってピカピカ光るからライトに光られたら困るから、絶対にスターは眼鏡をかけませんでした。ところがロイドはそれを逆手にとって自分で眼鏡をかけて出て来たんですね。個性を持たせるために。ところがロイドはちゃんとガラスを入れませんでした。枠だけですけどお客にはそのガラスはわかりませんから本当にはまってると思いました。だからロイドは自由勝手に見るけれども反射しませんでした。そのロイド、眼鏡をかけたコメディアン、ドタバタ喜劇。

さあこれは眼鏡をかけているからホームレスとか、放浪していく役はダメですね。全部都会劇ですね。全部デパートとかモダンなモダンな社会の中のスターですね。それがまた売れたんですね。で、ロイドの映画みんな都会ですね。

田舎の話、あるいはドタバタの本当の西部の話が多いコメディの中で、このロイドだけは大都市の映画ですね。それが良いんですね。しかも相手役がみんな美人なんですね。それとロイドの映画は面白いんですけど一番大事なことはロイドもアメリカの本当のスピリット、精神、それをあぶらせる俳優ですから、ロイドの場合はいつでも“カム&ゲット・イット！” やったらやれる！ そういう役が多いんですね。で、ロイドの映画は全部それですから、この『ロイドの要心無用』はそれのかたまりですね。やったらやれるんだ！ だからもう1階から2階上がる時に怖がって恐がって高所恐怖症のロイドが、どうしてもどうしても6階の上まで上がらなくちゃならない。その1階、2階、3階、4階と上がるまでのその面白いスリル、サスペンス見事なもので1階ごとに見事にハラハラさせるんですね。この『ロイドの要心無用』これは見事なロイドの代表作品ですね。しかもロイドがいつも言ってることは“やったらやれる！ やればやれる！” これをいつも思わせるんですね。

ロイドの一番面白いのはこの『ロイドの要心無用』。これが一番良いですけど。ところでね、ロイドが日本に来たんですよ。で、私はロイドと会ったんです。ロイドは僕の名前を書いたサインをしてくれましたけど、その時にロイドに言っていかが悪いけど僕は本当に仲良しになった気持ちでして、「ロイドさん、あんたは右手か左手か知らないけど、中指が1本ないでしょ」と言ったら「オーライ」と言いました。つまり僕は素直に言ったから見せてあげると見せたんですね。指を。中指がひとつないんですね。あら！ と思いましたが、これはオープンでアクションやっている時に、そのセット係が間違って爆弾のある位置を間違ったからバーンと破裂して、自分はその中に転げ込んで指

1 本失ってたの。「だから僕の映画ご覧なさい。観たらいつでもポケットに手入れてるでしょ、片手を。あれはね俺の指を隠しているんですよ」。そういうことをはつきりロイド言ったんですけど、ロイドはいかにもやっぱり映画と同じようにサラリーマンで役者くさくなくて見事な見事な俳優でしたよ。



【バスター・キートン】

キートンの恋愛三代記

The Three Ages

(1923・アメリカ)

監督：バスター・キートン／エディ・クライン

出演：バスター・キートン／ウォーレス・ビアリー



〈作品データ〉

制作年…1923年

制作国…アメリカ

時間……47分

監督……バスター・キートン／エディ・クライン

出演……バスター・キートン／ウォレス・ビアリー／マーガレット・リーイー／ジョー・ロバーツ／リリアン・ローレンス

〈作品解説〉

バスター・キートンのトレードマークは絶対に笑わないその表情。本作はキートン初の本格的長編喜劇。D・W・グリフィス監督の『イントレランス』をパロディにして石器時代、ローマ帝国時代、現代に構成して恋のあれこれが描かれている。ローマ時代の戦車競走で犬ゾリのキートンが勝ってしまうあたりはセシル・B・デミルの『ベン・ハー』のパロディなど、全編キートンの遊び精神があふれていて面白い。

はい、バスター・キートン、ご存知ですね、『キートンの恋愛三代記』、これは、キートンの最もすばらしい代表作ですよ。

これ、面白いことは、三代の時代を、恋愛、恋愛、恋愛、見せて、その時代が実に面白いですね。

ローマ時代なんか凄いですね。ローマ時代は、『ベン・ハー』そっくりですね。もう凄いいあゝの戦車競走、それが出て来ます。

面白いのはパロディ、みんなパロディと言いまして、もじりですね、あの名作のもじり、それがキートンらしく面白いんですよ。

バスター・キートン、ご存知でしょう。バスター・キートンというのは、昔々でもないですけど、サイレントの頃からチャップリン、ハロルド・ロイド、ロスコー・アーバックル、デブ君、いろいろとコメディの人いましたけど、バスター・キートンは絶対笑わないコメディアン、これがまた面白いんですね。“ストーンフェイス”、そういうんですね。

ロイド、いかにも明るいチャップリン、ペイソス、デブ君いうのはもうドタバタ喜劇、その中でキートンは笑わない。で、笑わないキートンがどんな映画やってるかいうと、いろいろあるけどみんなすばらしい。

それで、川喜多和子さんがいたころ、「淀川さん、キートンばつかりのをね、10本ほどやろうか」と言う。「いいよ、キートンはフランス的だよ」と言ったことあるんですね。それは実行できなかったけれども、それぐらいにキートンは一番ハイカラだったの。モダンだったの。

という訳で、この『恋愛三代記』もご覧になったらそれぞれのパロディが、いかにも面白いですね。『キートンの恋愛三代記』は、面白くて、面白くて、みなさんご覧になったらお笑いになりますけど、パロディでその時代の面白さが入っているんですね。

バスター・キートン言いますと、どっちか言うフランス映画のなんですねえ、もうそのペイソスが。

で、私は、キートン大好きで、キートンがチャップリンと2人で、『ライムライト』で、1つの場面に出て来たんですね。キートンがピアノを弾いて、チャップリンがバイオリン弾いて、2人のデュエットですね、これ観た時、涙が出ましたね。

キートンをチャップリンが使ったこと、昔チャップリンが初めて映画に出た頃は、キートンの方が偉かったんですよ。そのキートンを使って、ちゃんとやってところがチャップリンの愛情ですね。

日本に、もうキートンが亡くなってから奥さんが来たことあるんです。

キートンの奥さんに「バスター・キートンさん、面白かったですよ」言ったら、「ありがとう、ありがとう」で言った。

「どんな人ですか？」って言ったら、「家でもあの調子なんですよ。もう、ぼさーつとしてますよ。近所の子どもが、『おじさん野球しよう』言ったら、『うん』言って野球するんですよ。もうのんきなおじさんだったんですよ。それで街の中でも、村の中でも評判良かったんですよ。もう決して役者くさくさなかったんですよ」。

そんなキートンは、本当にあの通りの人だったんですね。で、キートンは、パーティーなんか行っても、むっすりして、笑わないで、みんなの頭叩いていくんですね。パーティーでみんなが、「まあ、あきれたねキートンは」なんて言うぐらいで、面白い人だったんですね。

で、バスター・キートン、“バスター”いうたら、「この野郎、おい、やったぞ」と言うのが、“バスター”という意味ですね。キートンは1才前から舞台に出されたのね。生まれて間もなく、3ヵ月ぐらいでお父さんとお母さんが投げっこしたの、舞台で。で、警察に怒られたの、「そんなのしたらいかん」って。

それでキートンは、3つ頃になって舞台へ上がって4つ頃、舞台からはしごで上へ上がるところでカチャンと落ちちゃったんですね。

わーつとみんな、あの子泣くと思ったら、すーつとまっすぐ楽屋へ行っちゃったんですね、そのまま。

そうすると、そこにいた拳闘家が「おーい、バスター！」と言ったんです。

“バスター”言うのは「良くやった、馬鹿野郎、良くやった」、という意味なんですね、

それがバスターのネームになったんです。そういう人ですよ。



【バスター・キートン】

キートンの探偵学入門

Sherlock Jr.

(1924・アメリカ)

監督：バスター・キートン

出演：バスター・キートン／キャサリン・マクガイア



〈作品データ〉

制作年…1924年

制作国…アメリカ

時間……44分

監督……バスター・キートン

脚本……ジーン・ハヴェズ／ジョゼフ・ミッチェル／クライド・ブラックマン

出演……バスター・キートン／キャサリン・マクガイア

〈作品解説〉

『忍術キートン』の改題。映画でのみ可能なトリックを最大限に活かしたキートンギャグの傑作。名探偵に憧れている映写技師キートンは恋人の父から泥棒の濡れ衣を着せられるが、映写中に眠ってしまい分身がスクリーンの中へ入り込む。キートンは泥棒探しを始め、それに恋人や恋敵が絡む。このアイデアの面白いこと。後にウッディ・アレンは『カイロの紫のバラ』でこのギャグをパロディにしている。

『探偵学入門』。

これではちょっとおわかりになりませんね。

バスター・キートンの『探偵学入門』。

ああそうかと思ひ出したでしょう？ 後にウッディ・アレンが、この真似したね。

このバスター・キートン、バタバタ喜劇がたくさんある中、非常にハイクラスのセンスのある人なんですね。

で、この映画では映写技師なんですね。

映写技師が映画映してる最中に、夢の中で画面の中に入り込んでいったの。歩いて、歩いて、画面の中に入っちゃたのね。

そして、シャーロック・ホームズみたいな真似をして、自分と女との間の犯罪とか、そんなもの調べて、またもとに帰って来る、不思議な、不思議な映画なんですね。

映画の画面の中に映写技師が入るなんて考えられない頃に、キートンはそんなもの考えたんですね。キートンのコメディは、どこかフランス的なんですね。どこか粋なんですね。

キートン、非常に面白い人で、この『探偵学入門』、これを真似しているのがウッディ・アレンですね。ウッディ・アレンが、後にこれと同じようなことしましたね。画面の中に入って行くような。

そういうの、早くも、早くも、1924年にキートンがやっちゃってるんですね。

キートンの映画、みんな粋なんですね。

チャップリンは非常にわかりやすく見せる人間映画ですけど、キートンの方はどっちかいうとマンガですね。フランスの漫画みたいな感じがありますね。

後にキートンが亡くなってから、奥さんに会いましたの。日本に来たの、奥さんが。

「あら！ キートン。あんた、キートンの奥さんですか？」「そうですよ」

何にもスターぶらない、いばらない奥さんでしたよ。

キートンってどんな男でしたかって聞くと、

「ああ、キートンさん……あたしの主人……のんきな男でね、あの人は。とにかく、パーティーっていったら、みんな

なの頭を叩いたりするんですよ。面白い人でね。笑うんですよ。映画で、1回も笑いませんけど、笑うんですよ」。

「それでね、ごはん食べてるとね、隣近所の男の子がノックするんですよ。家のドアを。『はい、何ですか?』って言ったら、おじさん野球しようって言うんですよ。ごはん食べてる最中にね。キートンはごはんやめてね、その子供の野球の相手をやるんですよ。そういう人だったんです、あの人は。いい人だったんですよ、非常に」。

家でも外でも非常にいい人だったらいいですね。

一時は大きな大きな、もの凄い家をもっていたんですよ。ノーマ・タルマッジの妹のコンスタンス・タルマッジのそのまた妹の、ナタリー・タルマッジの旦那さんになったんですよ。大金持ちですね。だから、大きな、大きな家に住んだんですよ。

『ゴッドファーザー』でプロデューサーの家が映りますよね。あの、2階、3階ある、噴水のある大邸宅が映りますね。あれ実はバスター・キートンの住んでた家なんですよ。

バスター・キートンはチャップリン同様にすごく有名だったんですよ。

バスター・キートンは後にチャップリンと2人で演技をしましたね。『ライムライト』かなんかでね。

あれ観た時涙が出ましたね。懐かしい2人だなあと思って。

という訳で、バスター・キートンはやっぱり代表的な有名な俳優ですね。

この人は、お父さんもお母さんも俳優。

1才か2才のときに舞台に出てきて、1才の赤ちゃんの頃、お母さんがお父さんのほうへパーンと投げたんですよ。お父さん、またそのパーンと投げたんですよ、お母さんに。

警察に怒られたんですよ。生まれてまだ20日ぐらいの子をね、舞台上で投げたり受け取ったりしては駄目ですって。

それくらいに、もう生まれた時から舞台に出ていた人で、なんか知らないけど、はしごに登る時ひっくり返って落ちたんですよ。6才の頃、バチャーンと。

あつと思ったら、笑いもせず泣きもせず、すーっと楽屋の方に入って行ったんですよ。

そうすると1人の手品師が、バスター！ って言ったんですよ。

「おい！ やったぞっ！（バスター！）」と言ったんですよ。

“バスター”という名前が出たんですよ。これがちょうど芸名になったんですよ。



【バスター・キートン】

キートンのセブン・チャンス

Seven Chances

(1925・アメリカ)

監督：バスター・キートン

出演：バスター・キートン／T・ロイ・バーンズ



〈作品データ〉

制作年…1925年

制作国…アメリカ

時間……56分

監督……バスター・キートン

脚本……クライド・ブラックマン／ジーン・ハヴェズ／ジョゼフ・ミッチェル

出演……バスター・キートン／T・ロイ・バーンズ

〈作品解説〉

『キートンの枴麵棒』の改題。キートンはひょんなことから700万ドルの遺産を相続することになるが、その条件は27才の誕生日までに結婚すること。新聞に「花嫁募集」広告を出したとたん何百人もの女性が殺到してしまう。さあキートンが大勢の花嫁候補に追いかけられるシーン、無数の岩石が落ちてきて丘の急斜面を駆け抜けるシーンなど見どころがいっぱい。キートン絶頂期の傑作コメディだ。

バスター・キートンの『セブン・チャンス』、面白いですよ、これ。

で、キートン、ご存知ですか？ キートン。ご存知かなあ、チャップリンがバイオリン弾いて、キートンが伴奏した映画ありましたなあ、チャップリンの映画でね。あれ、なかなか面白かったね。キートンは、面白いサイレント時代の代表的なコメディアンでしたね。

キートン、チャップリン、ロイド、これが代表でしたね。3枚の切り札の1つですね。

そのキートン、どうしてキートン、バスター・キートン？ 本当の名前あるんですね、難しい名前が。何でバスター・キートン、そう言ったか？ このキートンの一家は、代々芸人だったの、舞台の、寄席の。

それでキートンが生まれて間もなく、そうですね、7ヵ月ぐらいの時に、お母さんとお父さんが舞台上でキートンを投げたんですね、2人が遊び半分に。

で、そういうことしたんで警察に怒られたんですね、「そんなことしてはいかん」と。

で、キートン、7つ、6つ、5つか、その頃にやっと舞台へ出たんですね。

そして出た時に、何か梯子の上の高い台の上に上がるような役だったんですね。

で、バスター・キートン……これまだバスター言わないんですよ、そのキートン、上から、つるんと落ちちゃったんですね。

ところがキートンは、笑いも泣きもしないでまっすぐに降りて、すーっと上手へ歩いて行ったんですね。そうするとそこにいた拳闘家の男が、「バスター！」と言ったんですね。

「バスター！」、やったぞ！ とそう言ったんですね。

それで、バスター・キートンという名前になったんですね、「バスター！」、よくやったぞ、という名前ね。

という訳で、キートンは笑わないの。いつでも面白いけど、笑わないの。笑わないのをこなす役。だから映画の中でも、いつまでもベソをかいて笑わないのがこの人の役だったのね、つまり劣等感ですね。だから、恋愛しても困るのね。相手の人を口説くようなこと、絶対できないのね。

でも、そういうキートンが『セブン・チャンス』では、何千、何千人といったぐらいの、女の人に追っかけられる映画なの。まあ、キートンはいつべんこんな役、演りたかったのね。

で、これは、何月何日の何時かに結婚したら何百万ドルとかもらう、ということになったの。

それが、みんなにわかったのね、新聞に出たかなんかでね。

そうすると、その時間に結婚したら何百万ドル、何千万ドル入るというので、たくさんの女がやって来て、キートンを追っかけるのね。

キートン、逃げるのね。逃げても、どんどん追っかけて来るのね、そういうふうなコメディーなんですけど、キートン知ってる人にしたら、もう腹がかえて笑うのね。キートンが女に追っかけられるいうことは、絶対にありえないのね。

それが、何百人もの花嫁候補が、どんどん、どんどん追っかけて、キートンが笑いも泣きもしない真面目な顔で、テューと逃げて行くのが、面白いのね。

という訳で、『セブン・チャンス』は、そんな映画ですけど、セブンというのはラッキーですね、ラッキーなチャンスですね、そういうふうにはキートンは自分自身を、映画の中でちゃんとキートンタイプを見せながら、私だつてうけるんだよ、私だつて女にこのとおり、うけるんだよ、ということをみなさんに笑いながら見せるような映画なんです。

で、セブンのチャンス、セブンは……みなさんご存知ですか？ どうして、セブンがラッキーか、7つがラッキーか？

それは、上と、下と、北と、南と、その4つが人間の一番恵まれてるもので、北の風、南の風、東の風、西の風、これがなかったら、人間死んでしまう、4つ、大事。その他に、空と土と海、そこから恵まれるもの。

それで、3つと4つで、7つ、これがなかったら人間死んでしまう、というところで、セブンというのあるのね。だから、外国の怖い映画、『第七の封印』なんていうのは、人間が死ぬ時ですね、死ぬ時。

というようなことで、『セブン・チャンス』のセブンは、そんな意味なんです。

けれども、キートンのコメディは、どっか、フランス的ですね。

ロイドはアメリカ中のアメリカ、チャップリンもアメリカ的、ペイソスとかいろいろいるけど、キートンはフランス的ですね、感覚がね。それでとっても面白い人でした。

バスター・キートンは、芸術家ですね。



【マルクス兄弟】

我輩はカモである

Duck Soup

(1933・アメリカ)

監督：レオ・マッケリー

出演：グルーチョ・マルクス／チコ・マルクス



〈作品データ〉

制作年…1933年

制作国…アメリカ

時間……69分

監督……レオ・マッケリー

脚本……バート・カルマー／ハリー・ルビー

撮影……ヘンリー・シャープ

出演……グルーチョ・マルクス／チコ・マルクス／ハーボ・マルクス／ゼッポ・マルクス／マーガレット・デュモン／ルイス・カルハーン

〈作品解説〉

チャップリン、キートン、ロイドに次ぐコメディアンとして愛されたのがマルクス兄弟だ。グルーチョを筆頭にハーボ、チコ、ゼッポ（5本で引退）の息の合ったギャグは喜劇映画史上に残る抱腹絶倒の面白さ。本作は全13本の中でも傑作と言われている。ヨーロッパの某国を舞台に金持ちの未亡人をタラシ込んで大統領になったグルーチョたちが大活躍。バカげた戦争が勃発し、ギャグの砲弾があっちこちに炸裂する。

『吾輩はカモである』面白い題名ですね。

『Duck Soup』最も上等なスープですね。そういう題名でどういう映画か？ 映画はサイレント、サイレント、サイレント。ところがトーキーになってきました。さあトーキーになったらハリウッドが慌てました。どうしよう、どうしよう、どうしようとう慌てました。だからニューヨークの芸人をどんどん迎えました。それも第一、ニューヨークの第一級の芸人をどんどん入れました。その中に『吾輩はカモである』の兄弟が入って来ました。これはトーキーでないと出て来ない映画の主役たちですね。

『吾輩はカモである』ユダヤ人の兄弟です。そのニューヨークに生まれたユダヤ人の兄弟。それが芸人になりました。みんなが見事だった。さあ誰が誰か。グルーチョ、ハーボ、まだ他にゼッポ、その兄弟たちがみんな芸人なんです。本当の兄弟ですよ。芸人になって出て来るんですけど、その凄いこと、面白いこと、みんなが本当の舞台の芸人ですね。

だから映画じゃないんです。映画じゃなくて舞台の会話、舞台の動作、それがそのまま映画になって出て来るのでこれがまたバラマウントの呼び物になりましたね。たとえばハーボ、これは全然物言わずですね。物言わずだけでも最高の演技見せるんですね。さあそういう訳でグルーチョはしゃべって、しゃべって、しゃべって、しゃべりまくるんですね。みんなそれぞれ芸持ってるんですね。その兄弟の芸が圧倒するほど見事なんです。けれどもこれは映画ではありません。これは舞台芸ですね。舞台芸だけれどもその頃にニューヨークのそういうバラエティ、そういう安芸人の面白い面白いコメディを観たことないから、いかにもみんなが喜んだんですね。

マルクス兄弟、しかもマルクス兄弟なんて言うからどんな怖いものかと思ったらもう滑稽もいいところなんです。そういう訳でこの連中の会話、動作がびっくり仰天させたんですね。で、そういう訳でたとえばその、グルーチョなんかおまして、その奇麗な奥さんとしゃべっているんですね。で、奇麗な奥さんはベアーのこと、熊のことを一生懸命に言ってるんですね。「あの熊はね、立派でしたね」ベアーって言うのはね、チャンピオン。拳闘のチャンピオンで「ベアー」って言うのがいるんですね。それで片つぽのグルーチョは「あいつはな、女に手が早いんだよ」「あら、あの熊そうなんですか」なんていうところから話がめっちゃめっちゃに変わっていくんですね。

そういうあたりがとつても面白くて奥さんは「まあ、あの人は立派な人ね」と言ったら「あれは恋人になったら危ないですよ」。奥さんはびっくり仰天するんですね。そういう会話がもうどんどん出て来て、ことにハーボなんておかしくておかしくて。頭にくちゃくちゃくちゃくちゃいっぱい毛があ、銀髪があるんですけど、それに鳥の巣を作るくらい面白いところがありまして、そうしていろいろありまして、「俺はね、コーヒー飲みたいな」なんて相手と言ったら「おう、出すよ」と言ってポケットからコーヒー出してお皿の上に温かいコーヒー出すんですね。「おまえ、コーヒー出るの?」「何でも出ますよ」「そしたらねおまえね、クジラ出せるか?」と言ったら「はい、クジラ出します」と言って大きなクジラ出そうとするので相手がひっくり返る、そういうふうなもう何とも知れん不思議な不思議なコメディですね。これはニューヨークの舞台でないと見られないそのコメディをどんどんどんどん見せて、パラマウントはマルクス兄弟で大変な評判になったんですね。

で、この他『Duck Soup』『吾輩はカモである』これを第一作にしてどんどんどんどん作りまして、もうお客さんはみんな笑って、で、グルーチョという人は最初舞台出る時に慌てて出た時に髭を落としたんですね。いつも髭つけてるのに。それで傍にあった筆でザッと墨で髭つけたんですね。それが評判になってグルーチョというのはもう映画の中でも、いつでも髭をつけて出てくるんです、描いた髭で。それで評判になって、グルーチョもハーボもゼッポもみんなそれぞれの芸持ってるんですね。それぞれの芸持ってしかもみんな本当の兄弟なんですね。で、それでいかにもこのユダヤ人兄弟にお客さんが大喝采した。その大喝采したニューヨークの大喝采した芸人をパラマウントは映画の中で紹介して、パラマウントらしい感覚でこのマルクス兄弟は有名になりましたね。

で、マルクス兄弟、これが好きだいう人は本当にいっぱいいらっしゃる。でもこれは映画のコメディではありませんよ。映画のコメディとして代表的な作品とおっしゃっていらっしゃるけどこれは舞台のコメディ。舞台の人ですね。そこらが面白いんですね。



【ローレル & ハーディ】

ローレル & ハーディの
天国二人道中

The Flying Deuces

(1939・アメリカ)

監督：A・エドワード・サザーランド

出演：スタン・ローレル／オリヴァー・ハーディ



〈作品データ〉

制作年…1939年

制作国…アメリカ

時間……65分

監督……A・エドワード・サザーランド

脚本……ラルフ・スペンス／アルフレッド・シラー／チャールズ・ロジャース／ハリー・ラングドン

撮影……アート・ロイド

出演……スタン・ローレル／オリヴァー・ハーディ／ジーン・パーカー

〈作品解説〉

ローレル&ハーディは通称「極楽コンビ」と呼ばれたコメディアン。本作はチビで気の弱いローレルとデブで気むずかし屋のハーディがパリのホテルでフランス娘に一目惚れ。彼女の尻を追ってんやわんやの大騒動を巻き起こす。さて勝利はどちらの頭上に？ ローレルとハーディのドタバタぶりはまさにスラップスティック喜劇。古き良きアメリカの笑いが全編に炸裂するあたり貴重な作品である。

スタン・ローレルとオリヴァー・ハーディーのコメディ、これは最近もうやりませんね。古い人だから。

オリヴァー・ハーディー、それからスタン・ローレルの有名なチームで、1人は太ってますね。

オリヴァー・ハーディーは太った男、そうしてスタン・ローレルは細い男、この2人が一緒になって演るところが、面白いんですね。

で、オリヴァー・ハーディーは太ってるけどね、かわいいかわいい顔してるんですね。もう、まるでパール・ホワイトみたいな顔してるんですね。

で、かたつぼのね、このスタン・ローレル、これは細くてね、ちょっと神経的なんですね。

この2人が共演してる、面白くて、面白くって、オリヴァー・ハーディーは、いつでもなんかこの、かわいいベビーフェイスなんですね。

で、この2人が共演してる映画、どれでも、どれでも、この2人の個性がよく出てるんですね。

たとえばどっちもが、太ったのと細いのが、いつも共演して、いつもあの、楽しくやってるんですけど、時々おかしいことあるんですね。

それは、何かでどっちもが、ズボンが喧嘩でめっちゃめっちゃになったんですね。

で、2人はそろーっとその家並の路地行って、2人がズボンにとって、困ったなこのズボン、なんてやってるところを上窓からおばさんがのぞいて、にやーっと笑うところあるんですね。

それはオリヴァー・ハーディーと、スタン・ローレルが、どうもホモくさいな、いう顔してたんですね。

そういうのがあったり、いろいろあって、ローレルとオリヴァー・ハーディーは、もう本当のコンビなんですね。

この2人の映画、どれ観てもおもしろいのは、いつでも太ってる方のオリヴァー・ハーディーが、もう失敗ばっかりするのを、スタン・ローレルがもう謝ってやったりするんですねえ。

そういうふうに、この2人のコンビは、もうやっぱりチャップリン、それからいろいろ、バスター・キートン、その中でもやっぱり仲間に入りたい2人ですね。

どうしてこの2人が、こんなにうまいか、それはどっちもが子役の頃から舞台出てて、お父さんもお母さんも芸人だった。

そういう関係で、早くから舞台で2人が演技の研究してた。だからただのドタバタやないんですね。ちゃんとどっちもが、舞台の経験者なんですね。

で、1人の方のお父さんもお母さんも芸人なんですね。

そういう訳で、もう早くから、6才、5才の頃から舞台で出てたということがやっぱりサイレント映画だけれども、評判になりましたね。

で、このオリヴァー・ハーディーとスタン・ローレルが終わる頃がサイレントの終わる頃ですね。そして、マルクス兄弟が出て来ましたね。

だから、スタン・ローレルとオリヴァー・ハーディーは、もう、サイレントの、ほんとの末期の有名な代表ですね。

けれども、スタン・ローレルもオリヴァー・ハーディーも、いつまでもいつまでも、頭に残る、やっぱりチャップリン、キートンに続く、やっぱり代表的なコメディアンですね。



【パール・ホワイト】

ポーリンの冒険

The Perils of Pauline

(1947・アメリカ)

監督：ジョージ・マーシャル

出演：ベティ・ハットン／ジョン・ランド



〈作品データ〉

制作年…1947年

制作国…アメリカ

時間……92分

監督……ジョージ・マーシャル

脚本……P・J・ウルフソン／フランク・バトラー

撮影……レイ・レナハン

出演……ベティ・ハットン／ジョン・ランド／ビリー・デ・ウルフ／コンスタンス・コリアー／チェスター・コンクリン／ウィリアム・ファーマン

〈作品解説〉

サイレント時代の連続活劇の女王パール・ホワイトの波瀾に富んだ生涯を描いた伝記喜劇。主演を演じたベティ・ハットンはブロードウェイの舞台から映画入りした当時の人気スター。がんじがらめに縛られて鉄道路線に寝かされ、列車が突進してくるハラハラドキドキのシーンなど、サイレント時代の冒険活劇のヒロインを熟演で見せる。さらに独特なダイナミックな歌声、ベティの魅力が100%発揮されている。

はい、『ポーリンの冒険』この話しましょうね。私この『ポーリンの冒険』とっても好きなの。パール・ホワイトなの。

パール・ホワイトは連続活劇の女王なのね。ベティ・ハットンが演りましたけどどんな女優か？ サイレントの頃、私が8つ、9つ、10、11、12、13、その頃はもう映画館全部連続大活劇。で、連続大活劇のスターはいっぱいたんですね。パール・ホワイトはトップワン。その他ルス・ローランド、プリシラ・レーン、エラ・ホール、いっぱいいましたね。だいたい女が主役ですね。やっぱり女優がスターだったんですね。そういう訳でパール・ホワイトのこの『ポーリンの冒険』いうのはもう連続ナンバー、映画のナンバーワンだったんですね。で、パール・ホワイト、この人を僕は本当に愛しましたね。僕は7つ、8つの頃の一番の愛人、私の最初のスイート・ハートはパール・ホワイトでしたね。

で、私はこのパール・ホワイトの映画観たらもううれしくてうれしくてしょうがなくて、学校行きまして、小学校の学校行きまして3年生、2年生の頃ですね。私がパール・ホワイトになるんですね。休憩時間に。そうして柱にくくってもらうんですね。そうして「あれー、あれー、助けてー助けてー」言うと、マンデイいうね相手役の男が飛んできて私からロープはずしてくれるんですね。で、私の学校のあだ名はパール・ホワイトだったんですね。『ポーリンの冒険』はそのパール・ホワイトの映画なんですね。

ところがうれしいことに、ジャン・ルノワール、あのフランスの有名な監督の幼年時代、少年時代のあだ名がパール・ホワイトなんですね。面白いね。という訳でパール・ホワイトは連続活劇のもう最高の女王。で、私はパール・ホワイトを愛して愛してももの凄く愛してパール・ホワイトのプロマイドを大事に大事に持って枕の下に入れて寝たんですね。

で、ある日パール・ホワイトがあんまり好きだから学校の先生の前で無理にそのパール・ホワイトのプロマイド落したんですね。先生が怒るかどうか思っ。て。そうしたら先生が拾って「おう、これ何だ？ ベっぴんだなあ」と言っ。たんで喜んだんですね。というようなことがあってパール・ホワイトは私の最初の愛人ですね。

パール・ホワイトの他にプリシラ・レーン、エラ・ホール、マリー・ウォールキャンプ、たくさんたくさんいます

けど連続活劇のもう大スターと言うのはみんな女優でしたね。そういうところがやっぱり女優という人の魅力言うのがどんなに映画館で大きな力持つてるかと言うのがわかりますね。という訳で、『ポーリンの冒険』これは連続活劇の最初のもう第一歩と言いたい題名ですね。『ポーリンの冒険』。さあ、これで、今日みなさんがこの映画ご覧になったらどんなどんな女優がおわかりになると思いますよ。



淀川長治
クラシック名画解説全集Ⅲ



名作文学

『じゃじゃ馬馴らし』『武器よさらば』他(全5話)

World Classic film Selection





じゃじゃ馬馴らし

The Taming of the Shrew

(1929・アメリカ)

監督：サム・テイラー

出演：メアリー・ピックフォード／ダグラス・フェアバンクス



〈作品データ〉

制作年…1929年

制作国…アメリカ

時間……66分

原作……ウィリアム・シェイクスピア

監督……サム・テイラー

脚本……サム・テイラー

撮影……カール・ストラス

出演……メアリー・ピックフォード／ダグラス・フェアバンクス

〈作品解説〉

ウィリアム・シェイクスピアの名戯曲の映画化。サム・テイラー監督は、“アメリカの恋人”と言われたメアリー・ピックフォードと2枚目アクションスターのダグラス・フェアバンクスを共演させ、シェイクスピアを活力あふれたエンタテインメントに蘇らせた。暴れ出すと手に負えないじゃじゃ馬娘キャサリンを、夫のベトルーシオが淑女に手なづけていくあたりが見どころで楽しい。ミュージカル『キス・ミー・ケイト』のもとになっている。

『じゃじゃ馬馴らし』のお話しましょうね。

これは、面白いことにダグラス・フェアバンクスとメアリー・ピックフォードの共演なんですね。

シェイクスピアの有名なお話で、一流の人はみんな『じゃじゃ馬馴らし』やるんですね。

で、これは男が女をいじめる映画なんです。男が女をむちゃくちゃにいじめる映画なんです。それでシェイクスピアの非常に面白い、大評判になった映画なんです。

どんな話かと言いますとね、もう生意気で、生意気で、手に負えない女がいるんですね。

その女を男がいじめるために、大事に、大事にしたように見せかけて、ごちそう並べて「さあ、おあがりなさい」と、その女に言うんですね。

女は、「まあうれしい。お腹すいたわ、いただきます」と思ったら、パーン！とそのごちそうみんな捨てちゃうんですね。

この娘に、こんな貧しいものを食べさせちゃだめだよ……と、また出すんですね。

これでいただける、思って食べようとしたら、またパーン！とやって、いくら出しても食べさせないで、もうその女が半泣きになるんですね。

お腹すいた、お腹すいた、今まで威張っていた女が泣くんですね。

それが『じゃじゃ馬馴らし』ですね。

それをダグラス・フェアバンクスとメアリー・ピックフォードがやったんですね。

ダグラス・フェアバンクスとメアリー・ピックフォードは夫婦ですね。

で、メアリー・ピックフォードとダグラスがどんな生活しているかということを、ちらつとのぞかせたようなブライベート映画なんですね。けれども2人が共演した映画で、こんなに面白い映画になって大当たりしましたよ。

一番面白いのは、生意気な女を男がどう馴らすかという面白さが、この映画の中でよく出てまして、シェイクスピアという人、何でも面白く書きますね。

で、この映画『じゃじゃ馬馴らし』は、有名な俳優が必ずいつぺんやるんですね。で、メアリー・ピックフォードとダグラス・フェアバンクスは、もう世界で有名なカップルなんですね。

2人は結婚して世界中回って、日本にも来たんですね。

メアリー・ピックフォードとダグラスは、もうすごい凄い人気で、この夫婦はどちらも人気トップワン。おまけに、大きな、大きなお屋敷。もうこんな立派な夫婦ないということになって、日本に来た時も日本の三味線、太鼓でダンス踊ったこともあるんです。

それくらいに仲良かったのに……2人は別れたんですね。

実際に、人間ってどんなに幸福でも自分で破壊するんですね。

ダグラス・フェアバンクスと、そのメアリー・ピックフォードが別れちゃったの。この『じゃじゃ馬馴らし』の後で。

そういう訳で、これは問題の作品ですね。で、私はどっちが悪いか知りませんよ。

けれども、メアリー・ピックフォードは、もう終わりの頃は、バディ・ロジャースという、かわいい、粹な、粹な年下の男の子が好きでその人と一緒になったんですね。

ダグラスは、またダグラスで別の年上の女と仲良くなったんですね。

そういうことがありましたけれども、そのバディ・ロジャースという年下の男の人は結婚してから、ずっと亡くなるまでメアリー・ピックフォードを大事に、大事にしましたね。

だから、割合にメアリー・ピックフォードは男運の良い女優でしたね。

世界で最高の男優、世界で最高の女優が結婚してハッピーエンドになるのに、別れるなんていうことは、やっぱり人間というものは、本当に怖いものですね。



武器よさらば

A Farewell to Arms

(1932・アメリカ)

監督：フランク・ボーゼージ

出演：ゲイリー・クーパー／ヘレン・ヘイズ



〈作品データ〉

製作年…1932年

制作国…アメリカ

時間……78分

原作……アーネスト・ヘミングウェイ

監督……フランク・ボーゼージ

撮影……チャールズ・ラング

出演……ゲイリー・クーパー／ヘレン・ヘイズ

〈作品解説〉

アーネスト・ヘミングウェイの反戦文学の映画化。第1次世界大戦中のイタリアを舞台に、人気スターのゲイリー・クーパーが扮するアメリカ人将校とヘレン・ヘイズ扮する看護婦が出会い恋に落ち彼女が妊娠、彼は軍を脱走する。悲恋物語をフランク・ボーゼージ監督が繊細なタッチで甘く切なく描く。公開時の題名は『戦場よさらば』だった。1957年にロック・ハドソンとジェニファー・ジョーンズで再映画化されているが、完成度は本作が上。『武器よさらば』、これはヘミングウェイの有名な名作のベストセラーですね。これが映画になりました。

サイレントの頃、映画になった時にこれを演ったのがヘレン・ヘイズ、有名な舞台女優。

ゲイリー・クーパー、有名なスターですね。この2人でこの映画見事だったですね。

アメリカの負傷兵、それが看護婦と仲良くなって本当に何とも知れん、いいロマンスですね。看護婦と兵隊、負傷兵、これが見事で僕はこれを昔夢中で読んだことあるんですけど、ちょっと忘れてしまった。けど今でも1行だけ覚えています。

というのは、2人が仲良くなって仲良くなって、とうとう2人でホテルへ行ったんですね。ヘレン・ヘイズの看護婦さんとゲイリー・クーパーのこの兵隊とが。

そうして帰りに翌朝何をしたか。買い物に行ったんですね、マーケットへ。

何買ったか、男のさるまた買いに行ったんですね。

ホテルに泊まったあくる日に兵隊は自分のさるまた買いに行った。そこが何とも知れん面白かった、ヘミングウェイの作品ですね。

でこれ、ゲイリー・クーパーとそれからヘレン・ヘイズ、これが見事だった。

『武器よさらば』言うんですけど、その頃、上映する時には『武器よさらば』の「武器」をさらばするのはいけないので『戦場よさらば』に名前変えさせられたんですね、軍部で怒られて。

そういうこともありますけど、あの『イングリッシュ・ペイシエント』は、どうもこのにおいをうんと盗んでますね。

そういう訳で、これは看護婦と兵隊のとっても綺麗な綺麗なロマンスでした。

で、これが、またも映画になったんですね。今度はロック・ハドソンとジェニファー・ジョーンズになったんですね。はいあ、と思ったんですね。で今度はセルズニックが、デビッド・O・セルズニックが制作したんですね。

悪いことはないけど、やっぱりゲイリー・クーパーとヘレン・ヘイズの清潔な綺麗な綺麗なロマンスいうのには及ばないんですね。

で、今度はチャールズ・ヴィダーが監督したんですね。それで、ふうーんと思ったことは、この頃、ジェニ

ファー・ジョーンズはこの大プロデューサーのセルズニックと仲良くなってたんですね。

で、「私はあんな映画作りたいなあ」という事がどうもあつたんですね。『武器よさらば』、これを映画にしたいな。『A Farewell to Arms』、こういうの演りたかった、そういう注文が出たんですね。それでおそらくセルズニックは、奥さんになるジェニファー・ジョーンズのためにこの映画を作った気がするんですね。

で、ジェニファー・ジョーンズ、ロック・ハドソン、やっぱり合いませんね。なんかどろどろしたね、色っぽさが出すぎてね。なんか、かわいい奇麗な奇麗なロマンスにならないんですね。

けれども、やっぱり2回映画になったこと、最初の映画、見事な映画、それをまたもやセルズニックがもう1回やったということで、これ面白いですね。

という訳で、みなさんは「戦場よさらば」、ゲイリー・クーパーとヘレン・ヘイズ、これご覧になったら、いいなあこのロマンス、奇麗だなあいうことがおわかりになると思いますね。



若草物語

Little Women

(1933・アメリカ)

監督：ジョージ・キューカー

出演：キャサリン・ヘップバーン／ジョーン・ベネット



〈作品データ〉

受賞歴…1932～33年アカデミー賞脚本賞／作品賞ノミネート／監督賞ノミネート

1934年ヴェネチア国際映画祭最優秀女優賞／監督賞ノミネート

制作年…1933年

制作国…アメリカ

時間……115分

原作……ルイザ・メイ・オルコット

監督……ジョージ・キューカー

脚本……サラ・Y・メイソン／ヴィクター・ヒアマン

出演……キャサリン・ヘプバーン／ジョン・ベネット／フランシス・ディー／ジーン・パーカー

〈作品解説〉

4人姉妹の青春を描いたルイザ・メイ・オルコットの原作を映画化。舞台はマサチューセッツ州コンコード。キャサリン・ヘプバーン扮する次女ジョーは、好きな青年ローリーにプロポーズされるも、それを断ってニューヨークに出て作家を目指す。失意のローリーは後に一番下の妹と結婚する。当時24才のヘプバーンはベネチア国際映画祭女優賞。後にジョー役にジューン・アリスンやウィノナ・ライダーが扮しているが、極め付きはキャサリン・ヘプバーン。

『若草物語』、もうこれはみなさん何度もお読みになったでしょう。オルコットの、日本でいう明治元年頃の小説ですね。もう当時の若い人はみんなこの『若草物語』を読みました。

私も愛読しました。『Little Women』、これ、楽しかったねえ。

で、これはキャサリン・ヘプバーンのジョーですね、これがいいんだねえ。このジョーがね、あの次女ですか、これがなかなかやり手なのね。チャンバラの真似したりするのね。

この『若草物語』は、若い女の人がこんな生活ができればいいのにな、こんな暮らしができて、こんな生活だったらいいのにな、という憧れの少女物語ですね。

キャサリン・ヘプバーンもなかなか良かった、うまかった。キャサリン・ヘプバーンは舞台で一流ですからね。舞台でレスリー・ハワードと喧嘩したことがあるぐらい。そういう人ですからね、もううまいんです。

この人はね、首筋を自分で怖がるの。と言うのはね、首筋に皺がよるの。

気に食わないのでいつもハイネックでね、いつもそうしてるの。

ベニスのロマンティックな映画あったでしょう、ゴンドラに乗るね。あれで皺が出て困ったけど、首筋をうまく隠してましたね。

という訳で、キャサリン・ヘプバーンの『若草』は、もう見事でした。

後に、ジューン・アリスンがまたこれ演りましたねえ。で、ジューン・アリスンがこれ演った時にも観ましたけれど、やっぱりヘプバーンの凄い、凄い、舞台的な演技にはジューン・アリスンは負けましたね。

けど、ジューン・アリスンいう女優、私がハリウッドでまだ最初の2日目に会ったんですね。その時ジューン・アリスンはね、僕全然初めて会ったから知らないですよ。

スタジオへ行って、MGMへ行って暗い中で本番中、静かに入って行ったんですね。したら、「カット、10分間休憩」言うなり、僕の方を向いて暗い中で、「Hello, Mr. Yodogawa.」言っぴつくりしたんですね。

何で私知ってるんだろうと思ったら、ちゃんと今日来ることを宣伝が伝えてたんですね、で、淀川という名前も覚えてたんですね。

そういう訳で、一流の俳優は、女優は、そんなに芸が細かいんですね。

という訳でジューン・アリスンの『若草物語』も凄かったけど、キャサリン・ヘプバーンの『若草物語』も立派だったなあ。

かわいい、かわいい姉妹があるんですけど、なにしろこれは、『若草物語』。若い青春の姿があふれるばかりでね、私はキャサリン・ヘプバーンの次女が凄かったなあ、良かったなあ。ジューン・アリスンはおとなしかったなあ。

今さら申すまでもないけど、みなさんはもうとっくにお読みになったでしょうけど、明治元年頃の小説で、こんな物語があったんだ、オルcottのこの作品は立派だなあと思われたら、改めてもういっぺん読んでご覧なさい。

このクラシックは、やっぱり名作ですねえ。

あ、ところで、このキャサリン・ヘプバーン、私と同年なんですね。

でね、西洋人だから割合に早くから皺が出たんですね。けど皺が出た理由がないこともないんですね。

この人、お風呂が好きなの。そいでね、1日に7回入った事あるのね、風呂にね。まあ風呂ばっかりみたいだね。

という訳で、風呂が好きだということがちょっと僕と似てるんですねえ。



ガリヴァー旅行記

Gulliver's Travel

(1939・アメリカ)

監督：デイヴ・フライシャー



〈作品データ〉

受賞歴…1940年アカデミー賞音楽賞ノミネート

制作年…1939年

制作国…アメリカ

時間……77分

原作……ジョナサン・スウィフト

監督……デイク・フライシャー／マックス・フライシャー

脚本……エドモンド・シュワード

撮影……チャールズ・シェトラー

〈作品解説〉

『ポパイ』や『ベティ・ブープ』など漫画シリーズで知られるマックス・フライシャー（製作）、デイク・フライシャー兄弟の長編冒険アニメーション。ガリヴァーは船が難破して、こびとの王国に漂着する。浜辺で眠るガリヴァーを台車に乗せ100頭の馬に引かせるシーンなど、巨人との絶妙な対比が見事に表現されている。この作品はウォルト・ディズニーの『白雪姫』の成功に刺激されて作られた。

もう、みなさんが小学校から中学校の頃にどんどんお読みになった、あの『ガリヴァー旅行記』。

これが動画、アニメになったんですね。

しかもそれがディズニーじゃなくてフライシャー兄弟がやったんですね。

フライシャー兄弟のアニメは『ベティ・ブープ』だとか『ポパイ』だとかいろいろありますが、この人ののはハイカラ、非常にモダンなんです。

ディズニーはどっつかいうと子ども向き。みんな家庭向きで、やさしい、よくわかって、しかも童話らしいアニメを作るんですね。

フライシャーは少し違うんですね。

ハイカラなんです。非常に何か、どっか都会的なんです。

人によっては、ディズニーは子ども向きだけどフライシャーは大人向きだ、なんてことが評判になったことがあるんですね。

フライシャーはなかなかいいんですね。

映画の中にジャズ音楽を入れたり、いろんなことで非常にモダンなんです。

モダン、ハイカラなんです。ハイクラスなんです。

そういう人が『ガリヴァー旅行記』作ったの。

ガリヴァーの大きさと、その土地の人たちの小ささを見事に、見事に描いて、ガリヴァーがどんな大きい男かいうことを見事に見せて、『ガリヴァー旅行記』はびっくり仰天の面白い映画になったんですね。

しかもそれが非常に都会的なんです。どう言ってもいいかわかんない、みんなが右往左往するところが面白いですね。そういう意味でこのフライシャーの映画は見事でした。

でもフライシャーはハイカラすぎて、いつもモダンすぎてディズニーに負けましたね。

ディズニーよりもずっとハイカラだったんです。

けど、そのハイカラさがかえって邪魔しましたね。都会すぎて。

というわけでフライシャー兄弟の、この『ガリヴァー旅行記』は本当にフライシャーの置き手紙ですね。

もう、フライシャー、いま出ていませんから、本当に懐かしい、懐かしい作品です。

この『ガリヴァー旅行記』を今ご覧になったら、どんなにこのフライシャー、この監督、アニメの作者がデリケートか、よくわかりになると思いますよ。



アナ・カレニナ

Anna Karenina

(1948・イギリス)

監督：ジュリアン・デュヴィヴィエ

出演：ヴィヴィアン・リー／ラルフ・リチャードソン



〈作品データ〉

制作年…1948年

制作国…イギリス

時間……116分

原作……レフ・トルストイ

監督……ジュリアン・デュヴィヴィエ

脚本……ジャン・アヌイ／ガイ・モーガン／ジュリアン・デュヴィヴィエ

撮影……アンリ・アルカン

出演……ヴィヴィアン・リー／ラルフ・リチャードソン／キロン・ムーア／サリー・アン・ハウズ／ニオール・マッギニス／マーティタ・ハント

〈作品解説〉

ロシアの文豪トルストイの長編小説をフランスのジュリアン・デュヴィヴィエ監督が渡英して映画化。政府高官と政略結婚した美貌のアンナ（ヴィヴィアン・リー）は愛のない生活の不安から貴公子ヴロンスキーと恋に落ちる。しかし夫への罪の意識に苛まれ鉄道自殺を図る。薄幸のアンナをリーが熱演。これまでにアンナはグレタ・ガルボ、タチアナ・サモイロワ、ソフィー・マルソーなどが演じ、それぞれの個性を出している。

『アンナ・カレニナ』トルストイの有名な作品ですね。これをみなさんはご存知だと思います。

けれども『アンナ・カレニナ』これをヴィヴィアン・リーが演っているんですね。ヴィヴィアン・リーが演ってジュリアン・デュヴィヴィエが監督してるんですね。やっぱりこれは最高ですね。このジュリアン・デュヴィヴィエの『アンナ・カレニナ』、これをご覧になったら本当にヴィヴィアン・リーのこの魅力がおわかりになると思います。

侯爵かなんかの嫁さんなのね。ところがこの嫁さん、いい嫁さんなのに貴公子の若いのが彼氏になったんですね。どうにもこうにも困っちゃったんですね。そういうふうなつまりスキャンダルですね。そういう映画ですけど観るといかに品があるのね。で、これは見事な作品ですけどこのヴィヴィアン・リーでいよいよ『アンナ・カレニナ』は活きたんですね。見事な作品です。

ご覧になったらおわかりでしょうけど、もうとつくに本をお読みでしょうけど、もういつべん映画でご覧になったらもういつべんトルストイの勉強してください。『アンナ・カレニナ』はトルストイの最も代表作品です。そうしてこの女がどんなに苦しんだか、どんなに困ったか、愛というものがどんなものか、それがもう身に迫るヴィヴィアン・リーの名演技でみなさんを魅力的に引きつけます。けれども最後はみなさんもご存じのように、この『アンナ・カレニナ』は汽車に飛び込んで死にますね。言うならばメロドラマです。けれどもメロドラマと言えないトルストイのこの愛の怖さ、厳しさが出て来ますね。もうこの時分からこういう不倫問題があったんですね。という訳でジュリアン・デュヴィヴィエの本当の代表作品です。

クラレンス・ブラウンがグレタ・ガルボで演ったことがあるんですね。それもなかなか良かったけどもやっぱりクラレンス・ブラウンというアメリカ人とグレタ・ガルボというスウェーデン人で演った『アンナ・カレニナ』はどうかにおいが違ったんですね。で、ヴィヴィアン・リーの、イギリス人の感じが『アンナ・カレニナ』がとっても合いましたね。という訳でこの『アンナ・カレニナ』はみなさんご覧になって、もういつべんトルストイを勉強しよう。あのトルストイはどんな人か、それがいよいよおわかりになってあの『復活』、『カチューシャ』も全ての作品もトルストイを勉強するのにもってこいの勇気を与えますね。

ヴィヴィアン・リーのこの作品はみなさんを本当に『アンナ・カレニナ』の世界に引きずり込むと思います。ところでこのヴィヴィアン・リーはみなさんもお存じのように、『風と共に去りぬ』あのスカーレット演りましたね。で、あの大役にヴィヴィアン・リーが当選しましたね。主役になりましたね。これは訳があるんですね。セルズニックという人は非常に宣伝の見事な上手い人で。あのアメリカ南部の女の人を探してみんなにみんなにテストしたんですね。で、みんなをテストしたくせにイギリス人のヴィヴィアン・リーを選んだところに、まあもうアメリカ人がびつくりしたんですね。

どうしてヴィヴィアン・リーがあのスカーレット・オハラ演ったかと言いますと、ローレンス・オリヴィエとヴィヴィアン・リーが非常に仲が良かったんですね。で、ローレンス・オリヴィエがアメリカに行ってるのでヴィヴィアン・リーが後から追っかけて行っただんですね。そうして2人で会ってさあ撮影前にローレンス・オリヴィエの撮影の前にいつぺん『風と共に去りぬ』のセットを2人で見に行っただんですね。そこで火事の場面を見てヴィヴィアン・リーが「まあ綺麗だね」と驚いたんですね。それを見てセルズニックが「スカーレット・オハラは彼女だ！ 彼女に決めた！」そう言ったんですね。面白いことにヴィヴィアン・リーはイギリス人ですけど、あのスカーレット・オハラを演っただんですね。



淀川長治
クラシック名画解説全集Ⅲ



歴史的名作

『男性と女性』『戦艦ポチヨムキン』他(全13話)

World Classic Selection





國民の創生

The Birth of a Nation

(1915・アメリカ)

監督：D・W・グリフィス

出演：リリアン・ギッシュ／メイ・マーシュ



〈作品データ〉

制作年…1915年

制作国…アメリカ

時間……152分

監督……D・W・グリフィス

脚本……D・W・グリフィス／フランク・E・ウッズ

撮影……ジョージ・W・ビッツァー

出演……リリアン・ギッシュ／メイ・マーシュ／ヘンリー・ウォルソール／ミリアム・クーパー

〈作品解説〉

“アメリカ映画の父”と言われたD・W・グリフィス監督の長編ロマン。南部の名家と北部の名家の青年は親友だったが、南北戦争により敵味方になって戦う。やがてリンカーン大統領の暗殺で南部は大混乱となり、解放された奴隷は粗暴になっていく。南北戦争を背景に南部と北部の人々の苦悩に満ちた運命が描かれている。黒人を差別したということで各地で上映禁止になったエピソードも残されている。

はい、デビッド・ワーク・グリフィス、D・W・グリフィスの『國民の創生』。

『イントレランス』、『散り行く花』、『東への道』、グリフィスはとっても有名ですね。

けれども『國民の創生』は、もっと古いですから、ご存知ない方があるかもしれませんから、ちょっとこの大事なグリフィスの名作の話をしましょうね。

で、『國民の創生』って何でしょう？ “The Birth of Nation”、『國民の創生』ですね。

これは、どんな話かと申しますと、南北戦争が始まる前に、南のお嬢ちゃんと北の坊ちゃんが仲良かったんですね、仲良かったけれども、南北戦争で2つに別れたんですね、この男女は生き別れになったんですね。

そういうような話なんですけれども、この映画で見事だったのは北軍と南軍の大戦争ですね。もの凄い戦争ですね。

これでもしも戦争が激しく、激しく、激しくなったら、アメリカは2つに別れなくちゃならなかったんですね。

さあ、そこでこういう言葉があるんですね、“House Divided”、「2軒に別れた家」、というような言葉がアメリカにあるんですね。それは南北戦争のことですね。

南北戦争がもし燃え上がって、燃え上がって、リンカーンが暗殺されなかったなら、この2つの国が生まれるんですね。

これは見事に治まったことで有名な話なんですけど、そこで初めて『國民の創生』、アメリカいうものができたんですけれども、この映画で何が凄かったかいうと、アメリカのこの歴史ですね、いかに、いかに、北軍が南部の黒人達を憎んだか、ということが見事に出てるんですね。

というのは、グリフィス自身が北軍の人なんです、北軍びいきなんです。

それで黒人を随分、随分いじめたんですね。

だからこの映画に初めて、K.K.K.というのが出て来るんですね。

クー・クラックス・クランとか言うんですね。

これは顔を隠して、白い服を着て、馬に乗って、何か木の棒を持って、ずーっと回り歩いて黒人見たら殺すんですね。

怖い、怖い連中、K.K.K.、今でもこのK.K.K.、アメリカにいますね。

黒人はみんな、みんな殴り殺すんですね。黒人の家を焼くんですね。なぜそんなことをするんだろう、いや、黒人は嫌なやつだ、黒人は悪いやつだ、顔がブラックで嫌だ、そういうような時代があったんですね。

この南軍北軍の物語、この映画の終わり、やっとアメリカが1つになった、アメリカが1つになった、タイトルが『國民の創生』ですね。

というような話なんですけれども、当時、本当にそのころ日本に北軍の歌が流れて来たんですね、“ダンダンダダンダダンダ……”と流れて来たんですね。

私が幼稚園の頃、日本に流れて来たんですね。で、日本の歌になったんですね。“アナタノアーイノ、ツユウケテ、キーノウハージメテ、ワラッテヨ” まあ、そんな歌になったんですね。

よく考えたら「あなたの愛の露受けて、昨日初めて笑ってよ」、いやらしい歌ですね、というようなことで、その時分にもうすでに北軍の行進曲が日本に入っただけ、それも面白いですけど、『國民の創生』は、その時代の話ですよ。



イントレランス

Intolerance

(1916・アメリカ)

監督：D・W・グリフィス

出演：リリアン・ギッシュ／メイ・マーシュ



〈作品データ〉

制作年…1916年

制作国…アメリカ

時間……162分

監督……D・W・グリフィス

脚本……D・W・グリフィス

撮影……ジョージ・W・ビッツァー

出演……リリアン・ギッシュ／メイ・マーシュ／ロバート・ハロン／コンスタンス・タルマッジ／アルフレッド・パジェット／エルマー・クリフトン／シーナ・オーウェン／ユージン・パレット／マージェリ・ウィルソン／ジョゼフィン・クロムウェル／ミルドレッド・ハリス／カーメル・マイヤース／ベッシー・ラヴ

〈作品解説〉

D・W・グリフィス監督が壮大な構想をもとに製作した歴史的大作。古代から現代に至る4つの時代を交錯させ、人間の「イントレランス」（不寛容）が生む悲劇を空前のスケールで描く。バビロンの巨大なセットをはじめ、当時考えられなかった映画技術を駆使しており、出演者もリリアン・ギッシュなど多彩。この脚本、構成と演出は後の映画界に大きな影響を与えている。

D・W・グリフィスの『イントレランス』、この話しましょうね。

これはいまだに、もう語りぐさ、アメリカで『イントレランス』言ったら知らない人はいませんね。日本でも『イントレランス』って知らない人いませんね。

というのは、『國民の創生』、あの名作、超大作を作ったグリフィスが次に『イントレランス』を作ったんですね。

これは凄い時間かけて、当時6巻ぐらいが普通だった頃に、14巻ぐらいの映画作ったんですねえ。『イントレランス』、どんな意味ですか？ 『イントレランス』。

これは、不寛容、許されないこと、許さないこと、人間はこういう根性持つてから、どんどん、どんどん、悲劇いうものが生まれたんだよ。戦争も、何もかも『イントレランス』なんだよ。

この映画、『イントレランス』はグリフィスの、愛の好きなグリフィスの、怒りの声ですね。

グリフィスという人はこの前に、『國民の創生』の前に、『ホーム・スイート・ホーム』いうの作ったんですね。それは、いいお家、貧しいお家、悪いお家、いろんなお家が、家庭が出て来るんですね。それは、今考えたらオムニバスなんですね。

当時オムニバスなんか考えてない頃に、グリフィスはそういう映画作ったんですね。映画作家だけど、映画の小説作家みたいな感じなんですね。

映画を作りながら、何か小説を書いているような人だったんですねえ。代替作家だったんですね。

それで『國民の創生』の次に作った『イントレランス』。

これは時代物、紀元前何年の頃、今、そしてフランスの時代、いろんな時代を4つか5つとか、ずーっと観せたんですね。

で、これを観た時、私は10才でしたけど、何だかよくわからなかったのね。けど考えたら、見事な作り方ですね、いかにもアメリカ式ですね。

今日の時代があると思うとバビロン時代がある、バビロン時代があると、フランスの時代がある、そういう映画だったんです。

で、この映画のどういうところが面白いのか。怒ること、許さないことが、どんな悲劇を起こすか、どんな悲劇を起こすか。

バビロン時代、そのバビロン時代のセットの凄いこと。びっくり仰天で、いまだに語りぐさですね。『イントレランス』のセット、バビロンのセット、凄いなあ。

どうしてグリフィスは、こんな立派な凄いもの作ったの？ 思った時に、グリフィスは言わなかったけれど、みんなはわかったの。

その2年前にイタリアが『カピリア』というの作ったのね。

『カピリア』というのは、凄いカピリアの宮殿、もう驚くような宮殿作ったんですね。

もう大理石の象、エレファントがずーっと並んでいるカピリアの宮殿。それをアメリカが観て、びっくりして、イタリアのアップルジオという会社がこんな凄い作品作ったのか！ とみんなが驚いた時に、グリフィスが、「『カピリア』以上のもの作ってやる、僕は『カピリア』以上のもの作ってやる」それで生まれたのが『イントレランス』ですね。

だから『イントレランス』は、バビロンの時代、現代の時代も出ますが、バビロンの時代にどんな宮殿造ったか？ さあ、それがもの凄くてびっくり仰天ですね。

そうしてそのバビロンの宮殿の、大きな大きなホールの真ん中の階段でみんなダンスする場面、その主人公がルース・セント・デニス。

もうアメリカ最高のバレリーナですね。それがサイレントだけダンスするんですね。それを撮っている場面の綺麗なこと。

ところがこれはどうしても俯瞰撮影、上から撮らないと全景撮れないんですね。困っちゃった、困っちゃった、どうしても撮れない。今ならヘリコプターがあるから完全に撮れるけど、当時はヘリコプターがないからどっから撮っていいかわからない。

それで気球を出してロープを使ってずーっと上げて、そのかごの中にカメラ置いて、ずーっと移動したんですね。

そういうような、難しい、難しい撮り方をしたこの『イントレランス』。このシーンだけでも凄い。しかも、3つ、4つ、5つの話が入り交じって、入り交じっていて、現代も出て来るんですね。

現代はどんなの出て来るかというと、金持ちの有力者がね、莫大な金をね、ある病院に寄付するんですね。で、えらい評判ですね、良かったんですね。けどその有力者、自分の工場の全部の工員の1週間分の中の給料を1割引いちゃったんですね。そうしてその金を寄付したんですね。

怒ったのは、工場の工員ですねえ。「なに、そんなばかなことあるか！」言って全部がストライキした。大ストライキ、大ストライキ、ニューヨーク、大騒ぎ。そうしてみんなが固まって、固まって、工場も閉鎖しようとしたんですね。

そこへニューヨークの警察が、どんどん、どんどん、銃を持って、ライフル銃を持って、ずーっとその連中を追っかけたんですね。その場面が、ほんとのニュース実写のように出たんですね。

『イントレランス』は現代のそんな景色、ニューヨークのそんなストライキの景色、そしてバビロンの時代、紀元前の時代、いろんなの出して、グリフィスがどんな作家かいうことをね、みんなが観てびつくり仰天した。『イントレランス』は、そんな歴史の作品ですよ。



散り行く花

Broken Blossoms

(1919・アメリカ)

監督：D・W・グリフィス

出演：リリアン・ギッシュ／リチャード・バーセルメス



〈作品データ〉

制作年…1919年

制作国…アメリカ

時間……74分

原作……トーマス・バーク

監督……D・W・グリフィス

脚本……D・W・グリフィス

撮影……G・W・ピッツァー

出演……リリアン・ギッシュ／リチャード・バーセルメス／Donald・クリスプ／アーサー・ハワード

〈作品解説〉

壮大な『イントレランス』とは好対照のD・W・グリフィス監督の涙の名作。ロンドンのスラム街に住む15才のルーシーは母の死後、ボクサー崩れの義父の暴力に耐えながら生きている。そんなとき僧の修業を積んだ心優しい中国青年と知り合い、束の間の平穏な日々を過ごすが、逆上した義父によって崩されていく。ルーシー役のリリアン・ギッシュの可憐な美しさと迫真の演技が胸を打つ。彼女はこの一作で不動のスターとなった。

D・W・グリフィス、デビッド・ワーク・グリフィス。アメリカの初期の有名な代表監督ですね。その監督の『散り行く花』、この話しましょうね。

グリフィス、この人は『イントレランス』で一躍有名になりました。凄い、凄いセット、バビルの宮殿なんかもの凄かった。

どうしてこんな凄い映画を作ったか言うと、イタリア映画の『カピリア』という映画を観てびっくり仰天して、それから2年目に『カピリア』に負けないようにというので、凄い、凄いバビロンの大宮殿を作り、そうして、もうこの人は一生払えないぐらいの借金を背負ったんですね。

けれども、あんまり超大作を作ったから、他の会社が嫌って使わなくなったらいけないので、今度作ったのが、本当のグリフィスらしい映画の『散り行く花』。

今度は小品ですね、小さな作品ですね。けれどグリフィス一生の中で一番の見事な映画は『散り行く花』でしたね、リリアン・ギッシュ、リチャード・バーセルメス。

ルーシーという、15才の女の子がいたんですね。その女の子がお父さんに殴る、蹴られる。むちゃくちゃなお父さんですね、義理のお父さんですね。自分がつまんだ女が、よその男とできた子どもを放り出していったんですね。しかたがないからその子どもを、ルーシーと言う子どもを、このお父つつあんは犬猫の代わりに使ったんですね。

そうしてお父つつあんが、帰って来て「メシっ」と言うと、その15才の女の子が慌てて飯作る。ところが怖いから、うつむいて、うつむいて飯出す、すると髪の毛引っぱって、「笑え、笑え、Smile, smile, smile」と怒るんですね。そうして子どもを殴るんですね、この子は、もういじけってるんですね。

そのルーシーという15才の女の子が、チェンハンのストアの前でびっくりしたんですね。あんな綺麗なものが、あんまり立派なものが一体あるのかしらんと思って、毎日、毎日、マーケットへ買いに行く帰りにそれを見て、ウィンドウに顔突っ込んでたんですね。

するとチェンハンが、今日もまた、水仙の花、水仙の精、それがやって来る、金髪の少女、青い目の少女、そうし

て、その水仙の精をじっと見るのが好きだったんですね。

そのうちに、3日、4日、5日、6日、10日、だんだん、だんだん、親しくなって、おいで、おいでと言ったんですね。

行ったらいけないんだけど、あんまり綺麗なものがある。しかもそのオルゴール、支那のオルゴール、チンコン、クリンコン、クリンコロ、クリンコン、サイレントだけどその音が感じるんですね。

そうしてその子の中へ入って行ったの。したら、あれも見なさい、これも見なさい、そこで一晩過ごしたために、その親方が探して探して、とうとうルーシーを見つけて引きずって帰るとこあるんですね。

その時にちょうどチェンハンは、ルーシーにおいしいもの食べさしてやろうと思って市場へ行ってたんですね。その留守に1人の男がやって来て、そのルーシーを引っぱって行くところが怖いんですね。

もうルーシーは半分気絶してるんですね。それを引きずって、引きずって、お父つつあんの前で「おったぞこいつ、この女」。で、お父つつあんなは鞭持って「このやろう、黄色と一緒にやがって」、鞭でパーッと殴ったんですね。

もう殺されると思ったから、この子はそばの大きな箱の中入って中から栓入れたんですね。

お父つつあんなはヒステリーになって「鞭で開かなかつたら、ここに斧があるぞ」って、台所から斧持って来てカーン、カーン、とやるのが、まるで音が聞こえるように怖いんですね。

そして女の子は、中で体、顔中汗いっぱい、よだれが出る、鼻水が出る、震え上がっているうちにパーッと明るくなるんです。破れたんですね、ドアが。

そうして、あーっと思ってる、お父つつあんなが首引きずってターッと出して、パーンと投げたんですね。ルーシーは死んじゃったんですね。さすがにびっくりましたんですね。

その時、表からチェンハンがやって来て、パーン、パーン、2発でお父つつあんなを殺したんですね。

そしてルーシーを抱いて、自分のチェンハンのストアへ連れて帰って綺麗に体ふいてやる。頭といてやって、中国の服着せて、ろうそく立てて、線香立てて、「水仙の精よ、おまえだけを黄泉の国へやらないよ、わしもおまえを守ってついて行く」、言ってベッドの下から銃刀出してきて、カーッと突いて、パターッと倒れる。この後追い心中、凄かったですよ。



東への道

Way Down East

(1920・アメリカ)

監督：D・W・グリフィス

出演：リリアン・ギッシュ／リチャード・バーセルメス



〈作品データ〉

制作年…1920年

制作国…アメリカ

時間……109分

監督……D・W・グリフィス

脚本……アンソニー・ポール・ケリー

出演……リリアン・ギッシュ／リチャード・バーセルメス／メリー・ヘイ／ノーマ・シアラー

〈作品解説〉

『国民の創生』『イントレランス』など、グリフィスの映画でおなじみリリアン・ギッシュが、本作でも主演を務めている。悪い男のために噂を立てられ町を出た少女は、東部の田舎町に安住の地を得る。やがて美青年と出会い恋に落ちるが……。リリアン・ギッシュの少女が氷河を流されるシーン、流水の上を渡るシーンなどスタントなしで本人が演じきった。凍死寸前だったというのがその女優根性はすごい。

はい、『東への道』、『Way Down East』。

私はこれを学生の頃観ました。学生の頃観まして、『Way Down East』ですか、これで、Eastが東、いうことを頭に染み込ませまして、それでやっとEastがよくわかったなんていう幼稚な観方しましたがけれど、この映画はグリフィス監督、『イントレランス』の監督が作りました。

『イントレランス』を作って、物凄い、物凄い超大作を作しまして、本当に借金が山盛りになったんですね。

それで慌てて昔のグリフィスに帰る。グリフィスはやっぱり愛の映画だということで『散り行く花』を作りました。『散り行く花』を作って、僕の映画は本当はこれだよ、そして『スージーの真心』とか、かわいい、かわいい映画を作りました。

そうして今度はメロドラマ。「おれはメロドラマがこんなにうまいんだよ」と作ったのが『東への道』ですね、『Way Down East』ですね。で、Eastで東ということを勉強したんですね。

何で『Way Down East』いうのか今でもわかりませんが、これはいかにも奇麗なリリアン・ギッシュ、リチャード・バーセルメス、あの『散り行く花』のコンビですね。

それにクライトン・ヘイルとか、いろいろ出てますが、これは『散り行く花』のような夢物語でなくて、本当にある村の豪農の話ですね。

大きな、大きなお屋敷があったんですね、田舎に。

そこに、召使にかわいい娘がやってきたんですね。

で、そこで一生懸命に働いたんですね。働いて、働いて、みんなにいい娘だな、いい娘だな。そしてその豪農のお家に、リチャード・バーセルメスの扮してる息子がいたんですね。その息子は、本当に立派な心がけの優しい女だから結婚しようと思ったんですね。

そこへ都会の男が一晩泊まりに来たんですね、その家へ。

その男が、その娘は確か子どもができて逃げて来たんだよ、そういうこと言ったので、かたいかたい豪農の家中がびつくりしたんですね。それを聞いて驚いたんですね。

で、リリアン・ギッシュのその娘は、もう私はとつてもたまらない言つて夜中に逃げて行ったんですね。どんどん、どんどん、雪の中を逃げたんですね。

そして死のう、死のうと思ったんですね。

逃げて、逃げて、道で倒れたんですね。でも、倒れたの道じゃなかったんですね。

河が氷結して、河が氷で固まっちゃってたんですね。で、雪が積もってたんです。

道かと思って行きながらそこにばったり倒れたんですね。

一方、豪農の家の息子は「そんな娘じゃない、そんな娘じゃない、あの娘は立派な娘だ」、後をどんどんと追っかけてたんですね。

追っかけて追っかけて「どこ行った、どこ行った」、探してほんと見たら、遠くの、あの河の上で倒れてるんですね。

あんな所で倒れてる、死んじゃうじゃないかって、慌てて飛んで降りて行って、「おーい、おーい」とつかもうとしたら、朝方でだんだん雪、氷が溶けてきて割れて、その女を乗せたまま流れて行くんですね。

たまったもんじゃない、向こうに行ったら滝がある、危ない、危ないとその割れた氷、それをピョンピョン、ピョンピョン、ピョンピョン飛びながら、もう、どんどん河が流れて行く、滝のそこへ行く、滝のそこへ行ったらもう女は死んじゃう、いうところで、パーッと助ける……これが傑作なんですね。

で、グリフィスは、そういう危機一髪がまた好きだったんですね。

『イントレランス』でも、死刑執行の瞬間に助けに行く場面がありますね。

リリアン・ギッシュ、パーセルメスのこの作品はその河で、助けるところが凄いですね。

そうして助けて、みんなを改めて迎えるんですね。

けれど、この映画で一番面白いのは、その氷の上ですね。

撮影は、本当に氷結している氷の上でリリアン・ギッシュは寝たんですね。

で、リリアン・ギッシュに後で聞いたら「私、もう1分間長いこと撮影されたら、死んじゃった」。片っぱの手は水に浸かってたんですね。

そうして横へ倒れて、本当の氷の上、雪の上ですね、こういう撮影を昔はしたんですね。

そうして本当にカメラを回したんですね。

で、リリアン・ギッシュはこの役を演じたんですね。

『東への道』は命がけのリリアン・ギッシュの作品ですね、何しろ見事な映画でした。

危機一髪を助ける瞬間の怖さ、それはグリフィスのもう大得意なシーンですね。

『東への道』は、メロドラマですけども、いかにも、いかにも、グリフィスの感覚があふれた愛の映画でしたね。



男性と女性

Male and Female

(1919・アメリカ)

監督：セシル・B・デミル

出演：グロリア・スワンソン／トーマス・ミーアン／
ライラ・リー



〈作品データ〉

製作年…1919年

制作国…アメリカ

時間……93分

原作……ジェイムズ・マシュー・バリー

監督……セシル・B・デミル

脚本……ジーニー・マクファーソン

撮影……アルヴィン・ワイコフ

出演……グロリア・スワンソン／トーマス・ミーアン／ライラ・リー

〈作品解説〉

娯楽映画の巨匠セシル・B・デミル監督がジェームズ・バリーの戯曲を映像化した歴史的名作。英国の貴族一家がヨット旅行中に難破し無人島に漂流。そこで金力だけで生きてきた貴族が実行力のある召使いにこき使われる。貴族令嬢にグロリア・スワンソンが扮し、以後デミル映画の看板女優となる。後年スワンソンは贅沢趣味をデミルから教わったと語っているが、本作でもデミルの豪華絢爛趣味がうかがえる。

これから『男性と女性』の話をします。

『男性と女性』。懐かしいなあ、本当に。

『男性と女性』を今お部屋でご覧になれば、どんなに良いでしょう。

大正8年、9年ころ、日本で封切りました、僕は10才の頃。

これ、セシル・B・デミルの代表作品ですね。

皆さんは『十誡』とか、ああいうのでデミルをご存じでしょうけど、デミルは社交界の面白い、面白いお話がいつも評判で、あのイタリアのフェデリコ・フェリーニ、あの人なんかデミルの真似してるんですよ。

というわけで、『男性と女性』。

ああ、これは思い出がいっぱいあって、どうしゃべっていいかわかりませんね。

私、11才の頃、これを活動写真館で1人で観たんですね。

あんまり面白いから、じっとしてられなくなって、すぐに事務所に飛んで下りて、2階の1等で観ていましたから、飛んで下りて事務所から電話かけました。

「お父さん、お母さん、お姉さん、お姉さん、この『男性と女性』凄いだよ。グロリア・スワンソン凄いだよ。観にいらっしゃい、観にいらっしゃい」。

それから半時間たったら5人来たんですね。

お父さん、お母さん、お姉さん2人、おばあちゃんと来たんです。そろそろ、そろそろ。

その間に、僕はちゃんと頼んで座布団を置いときましたから、2階の正面。

そこでもう1回、この『男性と女性』、観たんですね。

『男性と女性』。この主役はグロリア・スワンソンなんですね。

みなさん、グロリア・スワンソン、ご存じですか？『サンセット大通り』の主役ですね。

『サンセット大通り』が済んだ頃に、私はアメリカに行ったんですね。

そして、グロリア・スワンソン自身に会いましたのね。

で、「『男性と女性』よかったねえ。これは凄かったよ」と言ったら、「淀川さん、そんな古い話しないでくださ

いよ」と言われたくらいなのね。

これはご覧になったら、びっくりする面白い映画で、デミルとは何か、グロリア・スワンソンとは何かがわかる映画なんですね。

それをここでしゃべったら1時間半以上しゃべりますから、一言で言いますと、豪華船に大金持ちの凄い連中、お父さん、お母さん、お姉さん、召使い、それから執事、みんな乗って遊びに行っただけですね。

それがハリケーンで船がひっくり返って、みんな無人島へ着いちゃっただけですね。

みんなそこで、どうしよう、どうしようと思った時に、そのお嬢ちゃんだけが、グロリア・スワンソンだけがいらないのね。

どこ行っただろう？ グロリア・スワンソンは、船が傾いて、ひっくり返った時に、そのドアの所にピアノがひつついちゃって離れないから外に出られないんですね。

水がどんどん入って来て、お嬢ちゃん、首のあたりまで水になったんですね。

助けてくれるにも、人がいないんですね。

それを、その番頭さんが、「あつ！ あの方がいない！」というんで、飛び込んでいって助けるあたりが面白いんですけど、この映画の面白いことは、映画のスターが10人くらい、ずーっと出てるんです。

それが凄いです、みんな一流女優、男優なんですね。

そうして結局、みんな無人島に流れて来て何にもできない。

どうしたらいいか？ たき火ができない。

どうしたらよいか？ 困った時にその番頭が自分の腕時計を外して、太陽光線に当てて、火を出して、それからが原始生活。

今までの豪華生活が、原始生活になりまして、ロビンソン・クルーソーになりまして、そこでは執事、番頭さんが一番偉い人になったんですね。

番頭さんの恋人は女中さんですね、そののね。

ところがそのお嬢ちゃんが、番頭さん好きになってきたんですね。

いろいろ、いろいろ話があって、番頭さんと仲間、それからまた、お嬢ちゃんと女中さんと、いろいろ階級がそこでえらいことになってきて変わってくるんですね。

デミル一流の面白い映画。

この中で、このグロリア・スワンソンが木の実をとりに行くんですね。

木の実をとりに行ったら、そこに野獣がいたんですね。

その野獣が飛びかかってくるようなシーンがあるんですね。

びっくりしたら、その執事が、実はバビロンの時代にこんなことがあったんですよと話して、時代劇になるんですね。

バビロンの女が敵にとらえられて、敵の王様が俺の妾になれって言ったときにツバかけただけですね、その大将に。

こんな奴は許さない、ライオンの餌食にしてやる、と言うところからライオンの餌食になるシーンが出てくるんですね。

綺麗な綺麗な真っ白なレースの着物着せられて、頭の冠が白孔雀の冠なんですね。そして悠々、悠々とライオンの餌食になり、オリの中に入って行くところが凄いですね。

これをグロリア・スワンソンに言ったら、「あれはね、おかしかったのよ。ほんとにね、白い孔雀の冠なんていうのは縁起が悪いのでね、黒でするって言ったら、いや、白がいいですよって喧嘩したことがあるんですよ」。

そんなこと言われた『男性と女性』。本当にデミル、スワンソンの代表作品ですね。



愚なる妻

Foolish Wives

(1922・アメリカ)

監督：エーリッヒ・フォン・シュトロハイム

出演：エーリッヒ・フォン・シュトロハイム／ミス・デュボン



〈作品データ〉

制作年…1921年

制作国…アメリカ

時間……108分

監督……エリッヒ・フォン・シュトロハイム

脚本……エリッヒ・フォン・シュトロハイム

撮影……ベン・レイノルズ

出演……エリッヒ・フォン・シュトロハイム／ミス・デュボン／モード・ジョージ／メエ・ブッシュ／ルドルフ・クリスティアンズ

〈作品解説〉

1920年代のアメリカ映画に君臨したエリッヒ・フォン・シュトロハイム監督が自作自演した快作。ニセ伯爵はモンテカルロの豪華なホテルに2人の情婦と滞在し、そこに集まる富豪婦人から金品を巻き上げる。さらにその魔の手はアメリカ親善大使夫人へ。華やかな上流社会の裏側を舞台に強烈で執拗なリアリズム描写を駆使して、人間の本能と愚かさを鮮やかに描き出している。

エリッヒ・フォン・シュトロハイムご存知ですか？ エリッヒ・フォン・シュトロハイムこの人の『愚なる妻』この話しましょうね。

サイレント映画です。エリック・フォン・シュトロハイムご存知ですね。『サンセット大通り』のグロリア・スワンソンのノーマ・デスモンドの運転手、番頭さんになって出て来ましたね。このシュトロハイムの見事な名作の『愚なる妻』この話をしましょうね。で、エリック・フォン・シュトロハイム、ドイツの人です。けどドイツの誰かわからないの、八百屋さんだったのか何だったのかわからないの。それがアメリカに来てエリッヒ・フォン・シュトロハイムという名前作ったんですね。

フォンというのは爵位のある人ですね。だから立派な立派な人が来たなとハリウッドの人はびっくり仰天してエリッヒ・フォン・シュトロハイムに一目置いたんですね。けど怪しんだ。本当にフォンという名前持っているかどうか怪しんだ。不思議な男だ。顔はものすごく怖い顔しているんです。カミソリの刃みたいな顔をしているんです。怖いんです。これが最初は『イントレランス』とかグリフィスの映画にエキストラで出ていたんです。それまで何していたかわからない。この男がとうとう自分で映画を監督する時が来たんです。そうしてやがてこのエリッヒ・フォン・シュトロハイムは、本当にシュトロハイムの映画をとうとう登場させたのが『愚なる妻』でした。

『愚なる妻』は、サイレントのこの時代では最もタブーの言うてはいけない題名だったんですね。アメリカで愚かなる女、愚かなる妻なんていうのは絶対に言ったらいけないんですね。それに堂々と『愚なる妻』という題したんですね。

これでエリッヒ・フォン・シュトロハイムは有名になったんですけど、本当はこの映画は4時間かかる映画だったんです。4時間で上映できないので3時間にし2時間半にして封切ったんですけどこの映画でユニバーサルはもう会社がつぶれそうになったんですね。もの凄いセット作って、サイレントなのにどのホテルの部屋も部屋も全部電話がかけられるようにしてももの凄いセット作ったので、ユニバーサルはもう破産する、あの男を追い出せ！って追い出したんですね。けれども後にこの『愚なる妻』は見事に成功して大成功にヒットしたんですけど、シュトロハイムは追い出されたんですね。そうしてシュトロハイムは困っているところをサミュエル・ゴールドウィンが救って、『グリード』というもつと怖い映画を作らせたんですね。シュトロハイムはそういうふうな凄いアメリカにはない凄いも

のを作った注目の監督ですね。



グリード

Greed

(1924・アメリカ)

監督：エーリッヒ・フォン・シュトロハイム

出演：ギブソン・ゴードン／ザス・ピッツ



〈作品データ〉

制作年…1924年

制作国…アメリカ

時間……100分

原作……フランク・ノリス

監督……エリッヒ・フォン・シュトロハイム

脚本……エリッヒ・フォン・シュトロハイム／ジューン・メイシス

撮影……ベン・レイノルズ／ウィリアム・H・ダニエルズ

出演……ギブソン・ゴーランド／ザス・ピッツ／ジーン・ハーショルト／チェスター・コンクリン

〈作品解説〉

完全主義者シュトロハイム監督がフランク・ノリスの小説を映画化した破天荒なりアリズム大作。サンフランシスコのニセ歯医者友人の恋人に心奪われ結婚。しかし宝くじで大金を手にした女は貪欲な悪妻に変貌していく。「グリード」（貪欲）に支配された男と女の末路。ラストシーンの砂嵐はまさに息を飲む凄さ。完成当時は9時間以上もあったが、それを縮小編集して公開されたという。

エリッヒ・フォン・シュトロハイム『愚なる妻』。あの問題の監督がユニバーサルを放り出された。あんまり凄いかけたから。これで困っていたところがサミュエル・ゴールドウィンが拾ってMGMへ呼んで「お前の好きなもの作れ」と言ったんですね。

さあシュトロハイムは好きなもの作れ言われたんで、いつべんに喜んだんですね。それが『グリード』、『貪欲』、さあ怖い映画ですよ。マクティーク、この男の話なんですね。で、これは簡単に話を申しますと、マクティークという炭鉱夫のごつ男がいたんですね。ところがその村に巡回の歯医者が来ました。アメリカ昔、昔はそういう医者が巡回で来るんですね。テント張って。それに、俺はもう炭鉱夫やめてあの人の弟子になろう。「金いらんからどうか使って下さい」。家出してその歯医者弟子になりました。そうしてずっとアメリカ中回りました。ひと月、ふた月、み月、1年、そのうちマクティークは歯の治療を覚えました。そうして歯のいろんな入れ歯から何から何まで勉強してマクティークは、これなら歯医者になれると思いました。それでサンフランシスコ行った時に、そいつらと別れてその歯医者とは別れて自分で1人で小さな部屋借りて、そこで歯医者をやりました。それがマクティークの歯医者の始まりですね。

ところが友達できました。マーカスと言う友達が出来ました。それで2人で仲良くなって一緒に酒飲んだりしているうちに、そのマーカスがマクティークに言ったんですね。「俺ちょっと相談があるんだ」「何だ?」「俺、トリーナという女と結婚するんだ」そうしてトリーナはそのマクティークの歯医者行っただんですね。トリーナは妙な顔した女、綺麗じゃないんですね。妙な顔した女、小柄の。ところがどこかに肉欲的な、どこかに男を誘惑するようなムードがあるんですね。そうして女を知らない、何にも知らない、本当に野暮のかたまりのマクティーク。炭鉱夫上りのマクティークが歯医者で治療しているうちに、この女の方は純朴な純朴な女知らずの男にだんだんだんだん参っていくんですね。そうして3日、4日、5日行こうちにだんだんだんだんマクティークの歯医者に寄っていったんです。口を、口をどんどん寄っていったんです。とうとう2人は接吻しちゃったんですね。接吻した時にこのマクティーク、女知らずのマクティークはいつべんにトリーナに夢中になったんですね。もうトリーナがいたら俺は命がいらん言うくらいにこの女に惚れ込んじゃったんですね。そうしてマーカスに打ち明けたんですね。「俺に出来ないか?」って。

マーカスは驚いたんですね。「俺の女だよ。俺結婚するんだよ」「わかってる、わかってる、けど俺はどうし

でもあの女がほしいんだ」マーカスは考えた。男気でした。「よし、やるよ」と言ったんです。「いいよ、やるよ」それで、マクティークは喜んでトリーナと結婚したんですね。トリーナは誰とでも良いんだ、金さえあつたら良いんだ、そういう女ですね。一緒になった、その時にマーカスは2人に富くじ1枚やったんですね。「これが俺のお祝いだ、あばよ」と言ったんですね。男気出して。ところがその富くじが200万円当たったんですね。びっくり仰天した。200万円の金が入った、びっくりした。トリーナは自分の金です、と言ったんです。「あたいのあの男から持って来たんだからあたいの金だ」と。マクティークは「どうだっていいよ、お前の金でいいよ」と言ったんですね。そうして結婚の晩からもうセックスなんかどうでもいいの。金ばっかり握って勘定するのが好きなのね。マクティークはあくびして、「おい、早く寝ろよ」言っても女寝ないんですね。で、女はその金を銀行持って行って金貨と換えてきたんですね。チャラチャラチャラチャラいっぱい持って。そうして亭主が歯医者やっている間ベッドでずっと金、並べるんですね。もう病気ですね。マクティークはそんな事知らないからいつもの飯食って教会に行っても「ねえ、あんた私、細かいの無いのよ。あんた払っておいて」そんな女になってきたんですね。自分のハンドバック見たら細かいのあるのに細かい金までも渡さないようになってきたの。だんだんだんだん貪欲、貪欲、貪欲になってきたんですね。ところが片つばのマーカス、「女はやるわ、金やったその富くじが金あつたわ、俺何のためにこんなことになったんだろう？ 何のために俺はこんなことになったんだろう」だんだん嫉妬、嫉妬、嫉妬で……。

怖い映画でした、『グリード』、『貪欲』、見事なシュトロハイムの傑作ですよ。



鉄路の白薔薇

La Roue

(1922・フランス)

監督：アベル・ガンス

出演：セヴラン・マルス／ガブリエル・ド・グラヴォンヌ



〈作品データ〉

受賞歴…1926年キネマ旬報外国映画ベストテン第5位

制作年…1922年

制作国…フランス

時間……196分

監督……アベル・ガンス

脚本……アベル・ガンス

撮影……マルク・ビュジュアル／アルベール・デュヴェルジェ／レオンス＝アンリ・ビュレル

出演……セヴラン・マルス／ガブリエル・ド・グラヴォンヌ／アイヴィ・クロウス／ピエール・マニエ

〈作品解説〉

アベル・ガンスが監督したフランス無声映画の傑作。妻を亡くして田舎に住む機関士は、ある日、大列車事故に遭遇し、事故で孤児となった少女を養女として実の息子とともに育てる。やがて少女は美しい娘に成長し、機関士も息子も彼女を愛するようになり深い苦悩に苛まれる。その卓越した映像美は見事だ。若き日の黒沢明監督はこの作品を観て、映画監督を志したという。

『鉄路の白薔薇』これはフランスを愛する人、フランス映画を愛する人は絶対に知ってらっしゃる名作ですね。しかもこれは本当にもう今観ても見事です。で、これはアベル・ガンスという人が監督しましたね。アベル・ガンス、この人は映画詩人ですね。後にこの人は『ナポレオン』作りましたね、アベル・ガンス。それは画面を3つに分けて3つの場面でいろんな色の進行見せましたね。とにかく映画で無いとできない感覚を見せる人でした。このアベル・ガンスのこれは見事な名作です。

この作品は長いんですね。最初の方は「黒のシンフォニー」というんですね、第1部。第2部は「白のシンフォニー」というんですね。そういうふうに分けて私をびつくりさせましたね。「黒のシンフォニー」、いったい何だろうと思いましたね。しかもこれが機関士の話で、だからまず汽車が出て来ますね。汽車が出て来ますね。汽車、これは映画の魂ですね。もう汽車が走って来ただけでも映画は凄いですね。その機関士の話でね。この機関士の話だけで、この機関士の男が昔倒れた、車が転覆した。その死んだ中に生きていた女の子を助けて自分の養女にしたんですね。それが第1部ですね。黒の時代ですね。そうして、子どもは大きくなっていったんですね。で、その子どもは男と女の子、仲良くなっていったんですね。お父さんもこの娘好きになってきたんですね。で、次は「白の交響楽」になってくるんですね。さあこういう映画ですね。「黒のシンフォニー」「白のシンフォニー」いったいどうなるか？

その子ども2人が大きくなってお父さんと三角関係になっていくんですね。怖い話ですね。という訳で話をご覧下さい。けどこれで面白いのは汽車というもの、機関士というもの、そうしてこの愛というもの、そうして三角関係というもの、そうしてどうということになっていくか、この話がどうということになっていくか、それがまるで小説のメロドラマのように大きな分厚い長編小説のようにアベル・ガンスのこの手法で圧倒的に見事に流れていくんですね。で、この『鉄路の白薔薇』はフランス映画の好きな人は教科書ですね。もうかつてこんな映画あったんだよ、フランスにはこんな映画あったんだという見事な見事な教科書ですよ。『鉄路の白薔薇』これ、今ご覧になったらみなさんはフランス映画にこんな濃厚な映画あったのかと思われてびつくりなさるでしょう。けれどもメロドラマと言えない芸術品ですね。これこそ、本当のフランス映画の魂ですね。で、みなさんご覧になって目の見えなくなったこの老機関士、それと息子、娘、この娘と息子が仲良くなっていく、けどこの老機関士もその娘が愛してた。そういうような愛の世界、しかも愛の世界が残酷だ。そういうことがあふれて、この映画は目で見える見事な小説ですね。身に沁み込む小説ですね。アベル・ガンスはそういう監督でした。

アベル・ガンスのこの名作はどうか見逃さないで、みなさん大事に心に抱いてくださいよ。



戦艦ポチョムキン

Броненосец «Потёмкин»

(1925・ソ連)

監督：セルゲイ・エイゼンシュテイン

出演：アレクサンドル・アントーノフ／

グレゴリー・アレクサンドロフ



〈作品データ〉

制作年…1925年

制作国…ソ連

時間……74分

監督……セルゲイ・エイゼンシュテイン

脚本……セルゲイ・エイゼンシュテイン

出演……アレクサンドル・アントーノフ／グレゴリー・アレクサンドロフ

〈作品解説〉

セルゲイ・エイゼンシュテイン監督はこの作品でモンタージュ技法の理論を確立し、一躍世界最高の映画作家になった。1905年の夏、ロシア艦隊の巡洋艦ボチョムキンで、日頃不当な扱いを受けていた水兵たちが戦艦を占拠。オデッサ港に市民が続々と結集するが、そこにコサック軍隊が行進してくる。オデッサ階段の虐殺シーンはあまりにも有名。まさにエイゼンシュテインの最高傑作、映画の教科書だ。

『戦艦ボチョムキン』、面白い題名ね。

ボチョムキン、これロシアの映画。

セルゲ・エイゼンシュテイン。映画の歴史で1、2、3の中に入る有名な監督ですね。

私はみなさんからよくアンケート、頼まれるんですね。

「淀川さんが生まれてから今日までで一番良かった映画は何ですか」。

私はたちまち、その場でチャップリンの『黄金狂時代』、それを言うんですね。

で、これと同格に『戦艦ボチョムキン』言うんですね。

そうですか、ヒッチコックだとかいろんなのあるのに、淀川さん、ジョン・フォードもあるのにボチョムキンですか、と問われますけど、やっぱり映画の本当の魂持ってたのは『戦艦ボチョムキン』ですね。

どうしてそんなに良かったのか、それはセルゲイ・エイゼンシュテインという人が、本当に映画いうのを知ってたんですね。

この人は『戦艦ボチョムキン』の前に、『ストライキ』いうの作ったんですね。

第1回作品、私幸いにもその『ストライキ』観たんですね。

それ観た時にエイゼンシュテインがこんな人かということがいつべんにわかったんですね。

エイゼンシュテインが難しい、難しい人だと思って論文がいろいろありますけれども、その論文以外に、私は生にその第1回作品の『ストライキ』観た時にびつくりしたんですね。

大きな工場、どんどん、どんどん機械が回ってますね、どんどん働いてますね。

ところがその連中がストライキしたんですね。次のカットでは全部止まっちゃったんですね、工場のベルトコンベアーも何もかも、全部止まっちゃったんですね。

あの時のね、静かになった怖さ、びつくりですね。

そこを猫がすーっと1匹走ったんですね。それだけだけど、工場の静かになったところが凄くって、それと同時に交代、交代、交代のカメラで家庭が映ったんですね。

家庭がごはんが食べられなくて、お母さんが台所で泣いている場面が出て来たりするんですね。

そういうストライキのそういう前後の場面が、まるでレビューと言ったらおかしいですけど、本当に映画の流れで

すね、タンタンタンタンタン、もう見事に息つくぐらいに綺麗に流れるんですね。

そうか、エイゼンシュテインはこんなにカメラを綺麗に動かすのか。

まるでダンス、映画のカメラのダンスだな。

そういうふうに『ストライキ』観てびっくりしたんですけど、その人が次に作ったのが『戦艦ポチョムキン』ですね。

さあ、これが凄いだ。映画で初めて兵隊のストライキいうものを見せたんですね。世界中でなかったことですね。そういうものをこの監督は、あえて作ったんですね。

『戦艦ポチョムキン』いう船があったんですね、戦艦ですね。そのごはんがあんまりにもひどいんですね。

で、みんながあんまりひどい、スープの中にウジがいるんですね、あんまりだと台所へみんなで押しかけて行ったら、まあ、パンにも肉にもウジがいっぱいいついてるんですね。

「こんなもの食わすのか、あんまりだ！」いうのでみんながストライキしたんですね、大騒ぎだね。

戦艦ポチョムキン、それで大騒ぎになって、みんながもう、「陸へ上がるぞ、こんな船に乗ってたらだめだ！」いうことになってポチョムキンの上で「バーン」、大砲を撃ったんですね。

さあ、それでその街、オデッサの街がびっくりしたんですね。

びっくりして、「えらいことになってきたぞ、戦争かもわかんないぞ」言って、みんなが街から逃げたんですね。

でも逃げるとこないんですね。港街オデッサの大きな石の階段がず一つとある所を、もうみんな群衆がなだれ落ちて来るんですね、怖がつて、怖がつて、怖がつて。

お母さんが子どもを乳母車に乗せて走って来たところ、乳母車の手が離れるんですね。乳母車の中に子どももいるんですよ。「おぎゃあ、おぎゃあ」言ってる子ども、群衆と一緒にタッタッタッタターンと階段を落ちて行くんですね。

あのあたり、この『ポチョムキン』の監督ですね。エイゼンシュテイン監督の凄さにびっくり。

後にこの階段は、どれだけパロディで使われたかわかりませんね。

エイゼンシュテインは本当に映画、よく作りました。立派でした。

この人はロシアのストライキでパリへ逃げてたんですね。

お金持ちだったんですね、一家中が全部フランス語使ってたんですね。

ロシアの上流階級は昔フランス語使ってたんですね。

そういう感じですから、あのエイゼンシュテインの一家もパリに移ったんですね。

パリでこの人は育ったんですね。だからなんか映画にそういう何かがあるんですね、芸術性が。ロシアでない、芸術性があるんですね。

で、この人が『イワン雷帝』いうの作ったんですね、それから後。

さあ、そのクラシック、そのロシアいう国の雷帝、『イワン雷帝』のクラシック、凄いね、大歌舞伎ですね。イワン雷帝の即位式に2人の若人が、大きな、大きなごに金貨いっぱい入れて、上からザラザラザラッと金貨の雨をその王子にかけるんですね。

そのあたりのクラシックはすごく日本の歌舞伎みたいだな、思ってたエイゼンシュテインは日本が好きで、日本語勉強して歌舞伎観たいと思ったことがあるんですね、行かずじまいけど。

という訳で、『イワン雷帝』はまるで歌舞伎でしたね。エイゼンシュテインはいろいろ作って、みんなびつくりでしたけど、しまいにはメキシコ行って『メキシコ万歳』作りましたが、このメキシコがまた凄いだねえ。メキシコの景色、風景、もう本当の映画美術でしたね。

エイゼンシュテインはルノアールとともに有名な有名な、感覚、目で見せる美術の芸術家でしたね。この人を私はただただロシアの革命の監督と思ったら、大間違い。もう映画の魂ですね、それ持ってたんですね。

そういう訳で、セルゲイ・エイゼンシュテイン、それをまず勉強なさるには『ポチョムキン』ですね。これが代表作品ですね。



西部戦線異状なし

All Quiet on the Western Front

(1930・アメリカ)

監督：ルイス・マイルストン

出演：リュー・エアーズ／ウィリアム・ベイクウエル



〈作品データ〉

受賞歴…1929～30年アカデミー賞作品賞／監督賞／脚本賞／ミネート／撮影賞／ミネート

1930年キネマ旬報外国映画ベストテン第1位

制作年…1930年

制作国…アメリカ

時間……100分

原作……エリッヒ・マリア・レマルク

監督……ルイス・マイルストン

脚本……マックスウェル・アンダーソン／デル・アンドリュース／ジョージ・アボット

撮影……アーサー・エディソン

出演……リュー・エアーズ／ウィリアム・ベイクウェル／ラッセル・グリーソン／ルイス・ウォルハイム／スリム・サマーヴィル／ジョン・レイ／ウォルター・ブラウン・ロジャース／レイモンド・グリフィス／ベリル・マーサー

〈作品解説〉

第1次世界大戦に従軍したレマルクのベストセラー小説の映画化。ドイツの田舎町。愛国心に燃える若者ポール（リュー・エアーズ）は軍隊を志願し戦場へ向かうが、現実の戦場は甘いものではなかった。ポールは塹壕に止まっている蝶に手を出したとき敵の狙撃兵に撃たれ死ぬが、その日の報告は「西部戦線異状なし」。この強烈なラストシーン。戦争の愚かさ、残酷さを描いた反戦映画の傑作である。

『西部戦線異状なし』お読みになりましたか？ レマルクの有名な小説ですね。これ映画になりました。ドイツの作家が作りました。話、反戦映画ですね。それをドイツが描いたんですね。よく通りましたね。

で、この『西部戦線異状なし』これはルイス・マイルストンと言う監督、もう後に有名な有名になりましたね。その監督が作りまして、監督しまして一躍有名になりました。

で、『西部戦線異状なし』はとっても反戦映画なんですね。青年が戦争に行け、戦争に行け、戦争に行ったら本当の国を守る人になるんだ、立派な立派な戦士になるんだということをね、もう教会の牧師も言うし学校の先生も言うので、その若い青年がリュー・エアーズ扮する青年が勇み勇んで参加したんですね。ところが中身は凄く残酷な世界で何たる世界か、思ったくらいの苦しい苦しい兵隊の話なんですね。そうして今度はちょっと休暇に帰って来て、若い者、若い者、絶対に戦争に行くなよ、行くなよなんて言うようなこともあるんですね。

で、反戦映画なんですね。それをドイツの作家が作ったんですね。小説家が作ったんですね。そうしてこれは色々いろいろありますけれども、塹壕の中の苦しい生活、戦争の辛い辛い思い出の中にそのドイツの兵隊がどんどんどんどん行つて或る塹壕の穴があったんです。そこへ滑り込んだ時にそこへフランスの兵隊が逃げ込んで来たんですね。思わず逃げ込んで来たらパンパンと撃っちゃったんですね、思わず。兵隊だと思って、撃つたらその男がバツリ倒れたんですね。目を空に向けて、死んじやったんですね。この若い兵隊は初めて人を殺したんです、真正面で。びっくりしたんですね。殺しちゃった、殺しちゃった、俺は人殺したんだ思ったんですね。そうするとそのフランスの兵隊のポケットからバラバラと写真が落ちて来たんですね。見たら奥さんと子どもの写真なんですね。びっくりした。目の前に死んで半分目を開いているその兵隊がいるんですね。これをレイモンド・グリフィスという有名な俳優が演りました。で、こっちの若いのはリュー・エアーズ、これはまだ若い若い役者ですがびっくりして震えて、えらいことした、えらいことした言うところが凄かったですよ。そういうふうにはこれは反戦映画、人間と人間がなぜこんな殺し合いをするのかいう。

そうしていよいよ激しい激しい戦争があつて一時休止。そういうことがあつたんですね。昔々の第1次大戦の時は。そうしてシーンとしたんですね。もう戦場がシーンとしたんですね。一時休止。もう大砲の音もしなければ、もう銃も飛んで来ない。それで、ホッとした。ところがその若い兵隊がちょっと上覗いたんです、塹壕から。スーツと1匹のちょうちょが飛んで来て目の前止まったんですね。「かわいいちょうちょだな、ああかわいい」。この若い青年がそれつまんでとつたんですね。とつた思ったらこの手が塹壕の上に出たんですね。それで向こうの敵のがバーンと撃ったらこの人にあたって死んじやったんですね。かわいそうに。このリユー・エアーズの若い兵隊はお母さんが待っているのに戦場で死んじやったんですね。けどその日の報告、毎日、毎日、報告する、その報告には「西部戦線異状なし」、何にも変わったことありません、いう通知が出たんですね。いかにもかわいそうな映画ですね。という訳でこの映画はユニバーサルのもう代表的な戦争映画の第1号ですね。

で、この映画出たリユー・エアーズ、若い若い若い青年ですね。初めて世間に出て行く青年ですね。それがとっても良かった。ところが面白いことにグレッタ・ガルボがこの映画観て「私はリユー・エアーズ大好きです」言つたんですね。ガルボは絶対男好かないんですね。ガルボは女が好きだけど男好きにならないんですね。で、有名な有名な音楽家が結婚申し込んでもNO! NO! 絶対結婚しない人。それがリユー・エアーズ見て「あの人かわいいわね」。それがえらい評判で、リユー・エアーズはガルボに惚れられたというのが評判になった、それぐらいにリユー・エアーズはかわいい青年でしたね。で、『西部戦線異状なし』はそういうものが裏でありますけど、観ていると本当の戦争映画でこれほど見事な戦争映画なかった。見事なユニバーサルの超大作ですね。



グランド・ホテル

Grand Hotel

(1932・アメリカ)

監督：エドマンド・グールディング

出演：グレタ・ガルボ／ジョン・バリモア



〈作品データ〉

受賞歴…1931～32年アカデミー賞作品賞

制作年…1932年

制作国…アメリカ

時間……113分

原作……ヴィッキー・バウム

監督……エドマンド・グールドینگ

脚本……ウィリアム・A・ドレイク

撮影……ウィリアム・H・ダニエルズ

出演……グレタ・ガルボ／ジョン・バリモア／ジョーン・クロフォード／ウォーレス・ピアリー／ライオネル・バリモア

〈作品解説〉

ベルリンの一流ホテルに泊まり合わせた人間の交錯を描いた名作。人気が落ちたバレリーナと宝石泥棒の恋。会社が不況の重役と女速記者、妻を裏切った会計係など様々な悲喜劇が展開される。当時のMGMの大スターのグレタ・ガルボ、ジョーン・クロフォード、ジョン・バリモアたちの競演が見もの。作劇法の「グランド・ホテル形式」はこの映画から生まれた。

これから、『グランド・ホテル』のお話をしましょう。

『グランド・ホテル』、これはドイツのヴィッキー・バウムの、女の人の小説ですね。

これは群衆劇、もう『グランド・ホテル』言いますと、いろんな、いろんな人の話が1つの小説の中に集まっているんですね。

グランド・ホテル形式と言いましてね、後にそういう群衆劇が流行りまして、その群衆劇をみんな「グランド・ホテル・スタイル」と言ったんですね。

で、これで1番面白いのはグレタ・ガルボ。偉いですねえ、MGMの最高のスターですね。それとジョーン・クロフォード。これもMGMの最高のスターですね。

この2人を顔合わせするというえらいことになったんですね。

ジョーン・クロフォードは絶対にガルボと共演したくない人。ガルボは、「ジョーン・クロフォードと私が出るんですか？」って笑う人。そういう2人を一緒にするとともに、この作品の最高の興味があつたんですね。

それでみんなは、2人が一緒に共演するだろうか心配したんですね。

そういう意味でも、この『グランド・ホテル』、MGMのこの作品は、大きな、大きな話題を投げかけたんですね。

最初、いよいよ始まる時、『グランド・ホテル』のロビーのセットができました。

セットのちよっと1段上にもうガルボは来て待っておりました。

ところが、そこへ向こうからジョーン・クロフォードがやって来ました。

2人は、初めて……スタジオで1回も顔合わせません、初めて会ったんですね。

ガルボは平気でしたけど、ジョーン・クロフォードはちょっと胸いっぱいでした。

ツカ、ツカ、ツカとガルボの傍へ行って「おはようございます」と言ったのね。

で、ガルボはどう言ったでしょう？「ご苦労さん」と言ったんですね。

さあ、それでカンカンに怒ったんですね、ジョーン・クロフォード。

「ご苦労さん」？ あんまりだ。それで、「この映画に、出ません」と言ったんですね。

そういうこと言われてもMGMは、もうガルボとジョーン・クロフォードの共演でポスターも全部作ってますから、困って困って大騒ぎした話があるんですね。

「ガルボの出番はどんな出番ですか？」とジョーン・クロフォードは聞いてたんですね。

有名なバレダンサーが、もう人気もなくなって貧乏になってホテルにくすぶってる役です。

「ああ、そうですか。衣装は？」

衣装は1つだけです。

「ああ、そうですか、あたしの衣装はどんなの？」

重役の二号さんだから、12着ぐらいのイブニングドレスがあって綺麗な靴もあります。

「それなら出ます」

ジョーン・クロフォードはそう言ってたんですね。

そして2人が初めて顔を会わせた時に、ガルボが「ご苦労さん」と言ったんですね。

自分と同じ位置のスターだ思ってたのに、頭から「ご苦労さん」と言ったので、かんかに怒ったんですね。

それで大騒ぎになって、ガルボは「何でジョーン・クロフォードさんは怒ったの？」と言ったのね。ジョーン・クロフォードは、カンカンに怒ってもう出ません。

それでこの『グランド・ホテル』は、なんとワンシーンも2人が一緒の場面がなかったの、えらい問題でした。

そしてジョーン・クロフォードは、サミュエル・ゴールドウィンという有名なプロデューサーのとこに行って、「私はあんな人と一緒に絶対出たくない。私にあの人に負けないような良い役をください」と泣きついたんですね、MGMからユナイトに移って。

それならと言って、『雨』サディ・トンブソン、あれをあげよう言ったらジョーン・クロフォードが「わーっ」と喜んで泣いた、そういう因縁が『グランド・ホテル』の裏側にあるんですね。

この『グランド・ホテル』のガルボの役は、バレリーナがもう人気がなくなってホテルにおりますと、そこへ宝石泥棒がやってくるんですねえ。

で、宝石泥棒がガルボの鏡台の宝石を盗った時に、ガルボが帰って来るんですね。

机の上見たら、自分のブレスレットがなくなってるんですね、イヤリングが。

どうしたんだろうと思ってるカーテンの裾に男の靴の先が出るんですね。

「あんた」と呼んだら、見つかったかと出て来たんですね。

泥棒です、けど泥棒と言えないから、「私はあんたの大ファンで、あんたの各国での上演をみんな観ております。私はあなたのたった1つの宝石、それを一生大事に持とうと思ひまして、悪いけど盗みました」。

そう言ったら、「ああ、そうですか」と言って、「もういつべん言ってごらん」、「私はあなたの大ファンです」、「はい、それ1つあげましょう。もういつべん言ってごらん」、「僕はあなたの大ファンです」、「はい、これあげましょう」。

そして4個の奇麗な宝石をあげて帰らした、そういうのがガルボの役ですね。

ジョーン・クロフォードは、もう何とも知れん、夜会の花形になって出て来る役ですね。

『グランド・ホテル』は、ガルボとジョーン・クロフォード、この2人の顔合わせで、もう世界中評判になった作品

ですよ。

ですよ。



民族の祭典

Olympia I
(1938・ドイツ)

監督：レニ・リーフェンシュタール



〈作品データ〉

受賞歴…1938年ヴェネチア国際映画祭作品賞

1941年キネマ旬報外国映画ベストテン第1位

制作年…1938年

制作国…ドイツ

時間……110分

監督……レニ・リーフェンシュタール

撮影……ハンス・エルトル／ワルター・フレンツ／グツィ・ランチェナー／クルト・ノイバート／ハンス・シャイブ 他

音楽……ヘルベルト・ヴィント／ヴァルター・グロノスタイ

〈作品解説〉

1936年の第11回ベルリン・オリンピックの記録映画第1部。ギリシャ古代遺跡での聖火リレー、開会式、陸上競技が収められている。三段跳びの田島、金メダル、1万メートルの村社、棒高跳びの西田と大江の死闘は印象的。当時最高の技術とスタッフが投入され、単なる競技記録にとどまらず、映像芸術の域に達している。監督は元女優のレニ・リーフェンシュタール。

『民族の祭典』これは本当に今考えてもぞっとするぐらい立派でしたね。そのオリンピック、ベルリン・オリンピックの実写ですけど実写、それと言えないね。これが本当のニュースと言えないぐらいに劇的なんですね。凄いんですね。

これもう『美の祭典』という続編作りましたけれど見事なんですね。で、これ観てますと勝負、勝ち負けの勝負どころかスリル、サスペンス以上にカメラ、カメラが凄い。カメラが40台あったんですね。そうしてこのカメラがもう見事に見事にその瞬間撮ったんですね。そうしてもっと凄いのは運動場に穴開けて地下から上向けて撮ったりしたんですね。だから走って行く男の脚、パーツと上がる脚も全部撮ったんですね。遠くから来る男、それが目の前で飛び越していくんですね。そういう凄い凄い場面撮って映画のシンフォニー、まさに映画のカメラが本当にシンフォニー。カメラだけで目がくらむくらいに良かったですね。

しかもこの映画、何と面白いことに日本の選手が出て、日本sの選手が勝った時には日本の旗がスーッと上に上がっていくところをちゃんとつけ加えたんですね。そういう訳でこの映画は驚くべき、驚くべく、どう言うんでしょうか、実写の最高芸術だったんですね。で、この映画なんて立派だと思ったら、レニ・リーフェンシュタールという人が、女の監督がこれを総指揮したんですね。で、レニ・リーフェンシュタールというのはダンサーなんですね。で、昔『青の光』だとかいろんな出まして、そうしていかにも奇麗な美人だったんです。それがいつのまにかやめて映画の監督になったんですね。

それでこの『民族の祭典』と続く『美の祭典』は本当に美しい美しいカメラ、映画の芸術ですね。ところがこれをこんなにまで立派に仕上げたのは、誰がこれを応援したか？ ヒットラーだったんですね。ヒットラーがもうレニ・リーフェンシュタールのためなら何でもしてやると言ったんですね。で、レニ・リーフェンシュタールはもう思う存分ヒットラーの命令であらゆることしたんですね。だからこの『民族の祭典』観た日本人は本当にドイツに酔っぱらったんですね。ドイツはこんなに美しいのか思ってびっくりした。これはドイツに傾いた見事に映画が本当に国民を動かしたくらいの作品ですね。

で、この『民族の祭典』出た頃、『美の祭典』が出た頃、日本人は全部ドイツに傾いちゃったんですね。「ドイツは偉い国だ！ ドイツは立派な国だ！ ドイツはええな」というのでみんなドイツ語流行ったんですね。という訳で映

画の力は怖いですね。で、これはこの映画観た後で日本はドイツと組みましたね、戦争で。日本人はそれは当たり前
と思いましたね。それぐらいドイツに惚れ込みましたね。レニ・リーフェンシュタールの力は凄いですね。で、私は
これ観て驚いてなんていうカメラは凄いか思いましたが、後で、レニ・リーフェンシュタールという人とヒット
ラーという人がこれを作ったと思いますと少し嫌気がさしましたね。けれども嫌気をのけて、この映画の美しさ、映画
の美は、本当にこれこそ映画でしたね。



美の祭典

Olympia II
(1938・ドイツ)

監督：レニ・リーフェンシュタール



〈作品データ〉

受賞歴…1938年ヴェネチア国際映画祭作品賞

制作年…1938年

制作国…ドイツ

時間……89分

監督……レニ・リーフェンシュタール

撮影……ハンス・エルトル／ワルター・フレンツ／グツィ・ランチェナー／クルト・ノイバート／ハンス・シャイブ 他

音楽……ヘルベルト・ヴィント／ヴァルター・グロノスタイ

〈作品解説〉

1936年の第11回ベルリン・オリンピックの記録映画第2部。陸上競技以外の水泳、ヨット、 Polo、自転車、馬術、ボート、オリンピック村や閉会式の模様が収められている。ドイツはこの作品を国家の威信をかけて作った。ヒトラー政府の「ナチのプロパガンダ」という時代的批判もあったが、記録映画としては第1級であり、今見ても感動を与えずにはおかない。東京オリンピックの記録映画はこの作品を参考にして作られた。

この『美の祭典』これは『民族の祭典』に続いて映画になりましたね。

けれども私が思い出すのに、これは東和商事いう会社が全力をかけて20名の宣伝委員を集めて『美の祭典』『民族の祭典』を封切りましたね。で、『美の祭典』の頃、本当に日本中が全部『民族の祭典』『美の祭典』を映画の宝としましたね。

で、私はその時ちょうどかわいそうに『駅馬車』の宣伝だったんですね。『駅馬車』封切りの時に『民族の祭典』が出て来るんですね。もう『美の祭典』が出て来るんですね。私は辛かったね。辛かったかな、かわいそうだったね。で、私はこの映画を憎んだんですね。ところがこの映画のポスターが出たんです。ポスターが出た時にこのポスターどんなポスターかという、男と女が全裸で向こう向いてるんですね。太陽光線の方向いて、つまり美の祭典だね、肉体の。それをポスターにしたんですね。ところが日本の当局にえらい怒られたんです。「何だ全裸の奴が後ろ向きやがって、お前たちはこれを見て本当に本気に喜んでいるのか」なんて怒られてポスター変えたんですね。それを秘かに喜んだくらいこの作品を憎んだんですね。もう競争で、競争で。

で、私がタクシーに乗って、ちょうど『美の祭典』している頃「良い映画でしたな」、『民族の祭典』している頃「あれはなかなか良いでしたね。どっちも良いですね」言うので、憎らしくて憎らしくて。「おまえ『駅馬車』知ってるか？」って言ったら「そんな映画知りません」で言うので、そういうので腹が立って腹が立ってもうあらゆるタクシーに乗って「君、『民族の祭典』知ってるか？」「良い映画でしたね」「『駅馬車』知ってるか？」「知りません」もう腹が立って腹が立ってもう何回タクシー乗って怒ったかわからない。しまいにととうやつと「『駅馬車』って良いですね」っていうことでホッとしたんですけど、この『駅馬車』の宣伝に困っちゃったんですね。私は1人きりです。

向こうは東和商事は20人ですよ、これに。だからこれはとつてもたまん思つて私はこの『駅馬車』の宣伝を頼みに東和行つたんですね。敵のライバルの所へ。そこに野口君っていうのがいたんですね。そいつに「『駅馬車』助けてよ、僕1人なんですよ」と言ったら「よし、俺手伝つてやる」てね、その東和のライバルの会社が僕のユナイテッドの『駅馬車』の宣伝を手伝ってくれてポスターに絵を描いてくれて、おまけに予告編まで作ってくれたんですね。どこで作ったかという東和で東和商事作つたんですね。内緒で隠れて鍵かけて、あの映写技師に頼んで。という訳

でこの『美の祭典』『民族の祭典』は私の最も嫌いな敵ですけれども、これを助けてくれた東和商事の野口君、これ今思い出しても「ああ、あの頃は一生懸命やったな、一生懸命やったな」と思いまして、この『美の祭典』『民族の祭典』を私は改めて観て綺麗な映画だな、見事だなと思いましたよ。

そうしてずっと後に市川崑が、日本のオリンピックの映画を作るんでどうしようかと言ったんですね。で、市川くんに聞いたんですね。「あんた『美の祭典』『民族の祭典』観たんでしょ」「観た、観た」。で、「ああいう映画作る」「ちょっと無理だな」。で、「あんたね運動してる？」「全然運動知らん」「運動知らないのがオリンピックできるのか？ 日本の」って言ったら「うん、俺も困ってるんだよ」「そういうのだったら選手のね、手の平だとか足の裏映しなさいよ。で、選手らのお便所行くところ映しなさい」って言ったら「おう、そうする」なんて言ってましたけれども、この『民族の祭典』と『美の祭典』は見事なもう今日までのスポーツ映画の最高ですね。

で、日本に日本の旗を掲げるところを入れてるなんていうのはいかにもヒットラーでしたね。という訳でこの映画でどんなに日本人が全部ドイツびいきになった、それだけでも怖いと思いましたよ。

淀川長治とチャップリン映画

映像作家 岡田喜一郎

淀川さんは89才で亡くなるまでの11年間、東京赤坂の全日空ホテル（現：ANAインターコンチネンタルホテル東京）のスイートルームに滞在していた。私はしばしば訪れたが、寝室の大きなダブルベッドの上に、チャップリンの似顔画のクッションがいつも置いてあった。

「これ、知り合いの子が作ってくれたの。うれしいな。いつも抱いて寝るようにしているのね」

と話していたが、このクッションは淀川さんの宝物の1つだった。

淀川さんにとってチャップリンは映画の神様、いや人生の神様だったからだ。チャップリンは全生涯で『成功争ひ』（1914）から始まり『伯爵夫人』（1967）まで81本の映画を残している。

淀川さんは少年時代からチャップリン映画に興味を持ち、全作品を観ている。それもほとんどがリアルタイムで観ているのだからすごい。

「チャップリンのこと、全部覚えていますよ。何でもしゃべりますよ」と常々言っていたが、特にサイレント時代の作品についてたずねると、まるで昨日観ていたかのようにストーリー展開やギャグの面白さについて話してくれる。その記憶力は半端ではなかった。

かつて、私が構成・演出して淀川さんのテレビ特別番組を作ったことがあった。その中で、『黄金狂時代』（1925）でチャップリンが登場する冒頭シーンを、フィルムを観ずにカメラに向かってしゃべってもらった。その冒頭シーン。

「チャップリンはリュックサックを持って崖のところを通っています。雪の中を。下は断崖絶壁。そこをチャップリンがユーコンからクロンダイクへ。山の中をずっと1人で行きおる。後ろの景色。前見ていません。面白いファーストシーンですね。……」このシーンは5カットで構成され40秒である。あとで淀川さんのおしゃべりとフィルムを合わせてみたらびつたりで1秒の狂いもなかった。くどいようだが、フィルムを観てしゃべったのではない。偶然の一致だと思われるかもしれないが決してそうではない。私は番組を作りながらそんなことを何回も経験したことがあったのだ。驚くべき記憶力である。

さて、淀川さんはなぜチャップリンに惹かれ尊敬したのだろうか。

「チャップリン映画は愛すること、働くこと、食べること、夢を持つこと、勇気を持つことを教えてくれましたね。チャップリンぐらい人間の幸福を求めてつかんだ映画作家は他にいません。その一筋。その執念がすごいね」。

これが淀川さんのチャップリン観である。

4歳から映画を観はじめ生涯現役を貫いた淀川さんの生き方は“映画愛”を大切に守り、軸が少しもぶれていなかった。映画一筋に生き抜いたチャップリンの生きざまと共通しており、淀川さんはそこから自らの映画人生を学びつつなのである。

とは言っても淀川さんは、初めからチャップリンが好きではなかった。チャップリンの初期短編時代は、どちらかと言えば暗くって、残酷な笑いが目立ったが、淀川さんはそれを嫌った。心酔し始めたのは、チャップリンが人間愛を真正面から描き出した『チャップリンの移民』（1917）や『犬の生活』（1918）、『キッド』（1921）あたりからである。その中で淀川さんが生涯のベストワンと推したのが、『黄金狂時代』であった。

というわけで、淀川さんは愛のない人、思いやりのない人、なまけ者、ユーモア感覚のない人、笑わない人を嫌い軽蔑し、そんな人間と会うと一喝した。私はこんな場面を何回となく見ているが、それは淀川さんがチャップリン映画から学んだことを若者たちに少しでも伝えたいという愛のムチだったのだ。

淀川さんとチャップリンのこととなると、話の種は尽きないが、淀川さんがチャップリンと2度会ったことも良い思い出となっている。1回目は昭和11年（1936）6月のこと。当時、ユナイト大阪支社の宣伝部員だった27歳の淀川さんは新聞記事でチャップリンがポーレット・ゴダートとの新婚旅行の帰りに神戸に立ち寄ったことを知る。神戸港に

停泊中のクーリッジ号に駆けつけ、チャップリンと船室で単独会見した。淀川さんはチャップリンの映画は全部観ていると話し、『チャップリンの消防夫』（1916）や『チャップリンの番頭』（1916）などを身振り手振りで真似してみせ、映画の神様を感動させた。ゴダートが波止場の真珠屋に行きたいと言うので案内もした。2回目はそれから15年後の昭和26年（1951）、淀川さんがハリウッドに行き、『ライムライト』（1952）の撮影中のセットでチャップリンと再会。チャップリンは神戸のことを覚えていた。サイレントの大スターがマイクの前で台詞を言う姿を見て、淀川さんは時代の流れを感じ涙した。さらにロサンゼルスでかつてチャップリンの秘書をしていた高野虎市と知り合い、チャップリンの秘話を聞いている。ちなみに高野は『チャップリンの冒険』（1917）に運転手役で特別出演している。

私はこのチャップリン会見記を何回も聞かせてもらっているし、講演でもよくしゃべっている。そのときのニュアンスは自慢話ではない。一挙一動、その場の情景が伝わってくる。いかにチャップリンが偉大であり、淀川さんが愛していたのかがわかる。だから何回聞いていても飽きない。

淀川さんは優れた表現力を持った一流の文筆家であり映画評論家、と同時に稀代の話し手であった。みごとな話芸である。おそらくこういう人は二度と現れないだろう。特にクラシック名作を語らせたら独壇場だ。

そういった意味でも、この解説全集は、淀川さんの世界が満喫できる貴重なDVD映像である。

※このあとがきは、DVD『淀川長治クラシック名作映画全集□』（発売元：株式会社アイ・ヴィー・シー）の引用です。

本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。

本作品の内容を無断で改変、改ざん等を行うことも禁止します。

また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

映画好きなら一度は観ておきたい！

淀川長治総監修 クラシック名画解説全集（☐、☐、☐合本版）

発行日 平成24年3月23日

監 修 淀川長治

発行者 小早川幸一郎

発 行 [株式会社クロスメディア・パブリッシング](http://www.cm-publishing.co.jp)

〒150-0001 東京都渋谷区千駄ヶ谷4-20-3
東栄神宮外苑ビル

<http://www.cm-publishing.co.jp>

（本の内容に関するお問い合わせ先）

TEL 03-5413-3140

FAX 03-5413-3141

発 売 株式会社インプレスコミュニケーションズ

〒102-0075 東京都千代田区三番町20

(C) IVC, Ltd. All rights Reserved.